

## 目次

第1章 はじめに.....	4
1.1 研究背景.....	4
1.2 本研究における研究課題.....	6
1.3 論文の構成.....	8
第2章 日本語オノマトペの概要及び本研究の日本語オノマトペの判定基準.....	9
2.1 日本語オノマトペの定義と多様な名称.....	9
2.2 日本語オノマトペの形態的特徴.....	12
2.3 日本語オノマトペの用法.....	15
2.4 日本語オノマトペの語彙性とオノマトペ度.....	17
2.5 日本語オノマトペの「語彙化」と「境界オノマトペ」.....	19
2.6 日本語オノマトペの音象徴性.....	20
2.7 日本語オノマトペの判定基準.....	22
第3章 ベトナム語オノマトペ及び中国語オノマトペの概要.....	24
3.1 ベトナム語オノマトペの概要.....	25
3.1.1 ベトナム語オノマトペの定義.....	25
3.1.2 ベトナム語オノマトペの形態的特徴.....	27
3.1.3 ベトナム語オノマトペの用法.....	30
3.1.4 ベトナム語オノマトペの音象徴性.....	31
3.2 中国語オノマトペの概要.....	34
3.2.1 中国語オノマトペの定義.....	34
3.2.2 中国語オノマトペの形態的特徴.....	36
3.2.3 中国語オノマトペの用法.....	37
3.2.4 中国語オノマトペの音象徴性.....	38
3.3 第3章のまとめ.....	42
第4章 先行研究の概観と本研究の位置づけ.....	44
4.1 日本語オノマトペの指導に関する先行研究.....	45
4.1.1 日本語オノマトペの指導に関する2つの考え方.....	45
4.1.2 日本語教育におけるオノマトペの位置づけとオノマトペ指導の現状.....	46
4.1.3 日本語オノマトペの指導に関する問題点.....	47
4.1.4 オノマトペ基本語彙の選定.....	48
4.1.5 オノマトペ指導法に関する提案.....	50
4.2 日本語オノマトペの学習に関する先行研究.....	53
4.2.1 学習者にとってオノマトペの学習が困難である理由.....	53

4.2.2	学習者のオノマトペ習得状況などの実証研究.....	54
4.2.3	日本語オノマトペの学習支援・教材開発の動向.....	56
4.3	先行研究の問題点と本研究の位置づけ.....	57
4.3.1	先行研究の問題点.....	57
4.3.2	本研究の位置づけ.....	59
第5章	本研究における調査の概要.....	61
5.1	調査対象とした21語のオノマトペの選定に至る経緯.....	61
5.2	調査対象の21語のオノマトペとそれを再生するアニメーション.....	64
5.3	調査協力者.....	68
5.4	調査の手順.....	72
第6章	アンケート調査の結果.....	76
6.1	両国の学習者のアンケート調査の結果.....	76
6.2	両国の学習者による日本語オノマトペについての学習意識.....	78
6.3	学習者の日本語オノマトペの学習方法.....	83
第7章	ベトナム人学習者と中国人学習者による日本語オノマトペの正答率.....	86
7.1	日本語母語話者の回答及び本研究における正答の判断基準について.....	86
7.1.1	日本語母語話者の回答について.....	86
7.1.2	本研究における正答の判断基準.....	88
7.2	ベトナム人学習者による日本語オノマトペの正答率.....	89
7.3	中国人学習者による日本語オノマトペの正答率.....	92
7.4	第7章のまとめ.....	96
第8章	ベトナム人学習者と中国人学習者の日本語オノマトペの産出に見られる傾向及び各母語の転移.....	97
8.1	ベトナム人学習者による日本語オノマトペの産出に見られる傾向と母語の転移....	97
8.1.1	知っている語の語基を反復させ造語する.....	100
8.1.2	物事の状態を擬音的に捉え日本語オノマトペを産出する.....	103
8.1.3	意味の近い日本語オノマトペとの混同.....	106
8.1.4	発音の近い日本語オノマトペとの混同.....	109
8.2	中国人学習者による日本語オノマトペの産出に見られる傾向と母語の転移.....	110
8.2.1	知っている語の語基を反復させ造語する.....	112
8.2.2	物事の状態を擬音的に捉え日本語オノマトペを産出する.....	115
8.2.3	意味の近い日本語オノマトペとの混同による誤用.....	116
8.2.4	発音が近い日本語オノマトペとの混同.....	120
8.3	第8章のまとめ.....	121
9章	ベトナム人学習者と中国人学習者による各母語での描写.....	123
9.1	ベトナム人学習者によるベトナム語でのオノマトペの描写.....	125

日本語学習者の日本語オノマトペ産出の実証的研究  
—ベトナム語母語話者と中国語母語話者を比較して—

9.1.1	ベトナム人学習者によるベトナム語での描写のデータについて .....	125
9.1.2	ベトナム人学習者によるベトナム語での描写のデータの考察 .....	128
9.2	中国人学習者による中国語での描写 .....	135
9.2.1	中国人学習者による中国語での描写のデータ .....	135
9.2.2	中国人学習者による中国語での描写データの考察 .....	140
9.3	第9章のまとめ .....	146
第10章	おわりに .....	147
10.1	まとめ .....	147
10.2	今後の課題 .....	157
参考文献	.....	159

## 第1章 はじめに

本章では、本研究のテーマを設定するに至った研究背景を説明してから、本研究における研究課題と論文の構成について述べる。

### 1.1 研究背景

日本語には「ぴかぴか」「くるくる」などのようなオノマトペが豊富に存在すると言われている。日本語オノマトペは文学作品、雑誌などの書き言葉だけではなく、日常生活においても頻繁に用いられている。日本語オノマトペ、いわゆる擬音語・擬態語は音を似せた言葉や物事の様子を模倣する感性的な言葉であるため、ほかの語彙よりも、生き生きとした臨場感があり、微妙なニュアンスを表すことができるのである。例として、日常生活でよく出てくる「痛さ」と「おいしさ」表現する例を取り上げたい（一部の例文とオノマトペの意味の解釈は石黒（2017）から引用する）。

まず、「痛さ」を訴える例として、①「頭が痛い。」と②「頭がががんとしている。」③「頭がかーっとする。」がある。この3つの例は、どちらでも「頭が痛い」という様子を表す点では共通している。しかし、①は、ただ「頭が痛い」という痛さが伝わりきれないごく普通の痛さの言い方であるのに対し、②と③はオノマトペを使うことにより痛さが読み（聴き）手にすぐに伝わるというところで異なる。具体的には、②の「ががんと」というオノマトペは「頭で大きな音が響くような激しい痛み」を、③の「かーっと」というオノマトペは「頭に血が上るような高熱を伴う痛み」を表すことができる。

次に、「おいしさ」を表す例として、④「天ぷらはおいしいので好きだ」と⑤「天ぷらはサクサクで好きだ。」⑥「エビはぷりぷりで好きだ。」がある。④⑤⑥の3つの例文とも「おいしさ」を表す点では同じである。しかし、④は一般の形容詞の「おいしい」だけでは、食べ物のおいしさが十分に伝わりきれない。⑤の「サクサク」は、「ほどよく水分が抜けて、口の中で心地よい歯ごたえで切れていく快感」で、⑥の「ぷりぷり」は、「歯に抵抗しながらも、すっきり切れていく弾力感により生み出される食感」を表すことでその食べ物が好きだということを伝えている。

このように、オノマトペは、日本語母語話者の言語生活において、表現効果を高めるといふ点では極めて重要な役割を果たしている。石黒（2016）は日本語オノマトペが侮れない理由として「リアルな状況を想像させ、話を盛り上げる力」「人目を惹く力」「気持ちを伝える力」の3つを取り上げ、日本語オノマトペの力を主張している。つまり、外国人日本語学習者（以降、学習者と呼ぶ）が日本語オノマトペを使いこなすことで、日本での生活の中で出会う日本語の表現の微妙なニュアンスを理解でき、日本人との意思疎通や自分の表現力を向上させることができると考えられる。

日本語母語話者は、ほとんどだれもがそれぞれの場面に応じたオノマトペの使い分けができるが、学習者の場合、上級学習者でさえ、オノマトペが表す意味が理解できなかつたり、意味が似ているオノマトペを使い分けできなかつたりするため、日本語母語話者との会話

などの中で、オノマトペをほとんど使えなかったりするのが実状である。故に、日本語オノマトペは学習者にとって習得が困難な項目の一つであることが多くの先行研究で指摘されている（張 1989、金 1989、彭 2007、有賀 2007 等）。

習得が困難とされる要因はいくつかあると思われるが、一つ目の要因として、「オノマトペはきわめて感覚的で、理屈では割り切れないものであるため、日本語の言語体系の環境で育たない人にとってはなかなか理解できにくい・覚えにくいのではないか」（張 1989 : 29）という指摘がある。当たり前のことであるが、日本語の習得に関して、日本語母語話者と学習者が体験している過程は異なる。日本語母語話者なら、子どものころから、周りの人との日常会話や子ども用の歌、童話などを通して、数多くのオノマトペと接触しているため、自然に頭に入ってくるのである。例えば、子どもはトイレに行きたい時に、「おなかがむずむずする」と言い、歯が抜けそうな時に「歯がぐらぐらする」と言い、お腹が空いた時には、「おなかぺこぺこだ」と言うだけで通じるため、オノマトペはとても便利で、描写をする場合の語彙は、子どもの段階で習得しているかなりの割合をオノマトペが占めると言っても過言ではないだろう。これに対して、日本語学習者の場合は母語をしっかりと習得してから日本語を第二（または第三）言語として学習していくことがほとんどであるため、日常生活において最低限必要な表現で構成されている初級レベルから日本語の学習が始まる。特に滞日経験がない学習者の学習は日本語教科書に依存せざるを得ない。日本語学習者用の日本語教科書に日本語オノマトペがどのように取り上げられているかについては第 4 章で後述するが、十分に導入されていないのが現状である。これに関して、三上（2007a）では、「日本語教育ではオノマトペが積極的に指導の対象となっていない」（三上 2007a : 36）と述べているが、これが学習者の日本語オノマトペの学習を困難にさせている二つ目の要因だと思われる。このため、学習者は中上級に進学し、生教材に多く出てくるオノマトペに出会う時に戸惑ってしまうことが多い。

一方、学習者はオノマトペを含む、知らない言葉に出会うたびに、辞書を理解の助けにすることが多いが、オノマトペの辞書のほとんどの例文は、文学作品からの引用に偏っており、循環的な説明が多いため、辞書での説明を読んでもなかなか理解できないことがしばしばある。辞書におけるオノマトペの意味の説明については第 4 章で後述するが、これが日本語学習者の日本語オノマトペ学習を困難にさせている三つ目の要因であると思われる。

上述の通り、日本語オノマトペは日本語学習者にとって学習しにくいと考えられる。しかし、日本語学習者が実際日本語オノマトペをどの程度使用できているかという実証研究はまだ限られている（中石ほか 2011、吉永 2011、飯田ほか 2012、吉永 2017）。これらの研究の対象者は、今まで日本語学習者数のトップを走っている中国語を母語とする日本語学習者（以降、中国人学習者）にとどまっていることが多い。これらの研究を通して、中国人学習者は日本語オノマトペをなかなか使えず、中国人学習者にとって日本語オノマトペの習得の難しいことが裏付けられている。これは、上述した要因のほか、中国語にはオノマトペ

(特に擬態語)が少ないことと、中国語では擬態語によって様々な状況を表し分ける言語習慣がない(吉永 2017)ことが要因だと考えられる。

大関(2010)は「私たちは母語知識を持っているからこそ、外国語を効率よく学習できるのです。」と述べている。このように、日本語学習者は日本語を学習している中で、母語の知識を生かしながら学習している。世界言語にはオノマトペが豊富な言語とそうではない言語があるため、学習者による日本語オノマトペの習得状況を調べるためには、母語にオノマトペが多い言語とそうではない言語を母語とする学習者を調査対象者にする必要がある。

Hoàng Văn Hành (1995)によると、筆者の母語であるベトナム語は、中国語と違って、「*từ tượng thanh* (擬音語/象声詞)」「*từ tượng hình* (擬態語/象形詞)」という日本語オノマトペに相当する語群が数多く存在している。また、グエン(2017)では、ベトナム語にはオノマトペが数多く存在し、日常生活で頻繁に使用されているため、ベトナム語を母語とする日本語学習者(以降、ベトナム人学習者と呼ぶ)は、オノマトペに対する親しみがあり、日本語オノマトペを学習していく上で強みを持っていることが述べられている。このことから、ベトナム人学習者による日本語オノマトペの使用実態には中国人学習者と異なることが予想される。

大関(2010)が述べているように、外国語の学習には母語の知識が影響を与えているが、それが全てではない。例えば、日本語オノマトペに対する学習意識、学習方法など個人差の影響もあると考えられる。しかし、これについて言及している研究は、三上(2007b)<sup>1</sup>以外には管見の限りない。

## 1.2 本研究における研究課題

1.1 で述べてきた研究背景で、以下のことが明らかになった。

- (1) 日本語オノマトペは日本語学習者にとって習得が難しいと指摘されているが、日本語学習者が実際、日本語オノマトペをどの程度使用できているかという実証研究はまだ限られている。
- (2) 学習者は母語の知識を生かしながら外国語を学習していく、つまり、学習者は母語の影響を受けながら外国語を学習していくと言われている。しかし、これまでの研究の調査対象者は母語にオノマトペが少ない中国語を母語とする学習者が多く、日本語と同じような母語にオノマトペが豊富に存在する言語を母語とする学習者が調査対象者であることはほとんどない。
- (3) 学習者の母語におけるオノマトペの使用実態はあまり言及されていない。
- (4) 日本語オノマトペに対する学習意識、学習方法などについてもあまり言及されていない。

---

<sup>1</sup> 三上(2007b)は日本語オノマトペ学習と指導に関して、日本語教師と日本語学習者に対する意識アンケートを実施した。

そこで、本研究は、オノマトペが豊富に存在するベトナム語を母語とする学習者と、オノマトペが少ない言語である中国語<sup>2</sup>を母語とする学習者が、日本語オノマトペに対してどのような意識を持っているか、どのような方法で学習していくのかということを確認にした上で、ベトナム人学習者と中国人学習者が日本語オノマトペをどの程度、適切に使用できているか、知らないオノマトペをどうやって産出しているかということを検討すると同時に、ベトナム語と中国語それぞれの母語におけるオノマトペの使用実態も調査し、それが日本語オノマトペの使用実態にどのように影響しているかということも考察する。具体的な研究課題は以下の通りである。

#### 【研究課題 1】

ベトナム人学習者と中国人学習者は、日本語オノマトペとその学習に対してどのような意識を持っており、日本語オノマトペをどのような方法で学習しているか。

#### 【研究課題 2】

ベトナム人学習者と中国人学習者は、日本語オノマトペをどの程度、適切に使用できているか。言い換えれば、両国の学習者による日本語オノマトペの正答率はどの程度であるか。そして、日本語オノマトペの正答率は、日本語能力及び滞日経験の有無によってどのように異なるかという点も考察する<sup>3</sup>。

#### 【研究課題 3】

ベトナム人学習者と中国人学習者が当該のオノマトペがわからない場合、どのように日本語オノマトペを産出するか。言い換えれば、両国の学習者が産出した日本語オノマトペにどのような傾向が見られるか。

---

<sup>2</sup> 野間（1998）によると、世界言語の中で、最もオノマトペが豊富に持つ言語は朝鮮語で、日本語は第2位である。実際、小野（2007）を見ると、日本語オノマトペが4500語収録されている。一方、ベトナム語には擬音語・擬態語、いわゆるオノマトペという語群が数多く存在し、その中で疊語の形を持っているものとそうではない物が両方あるが、Hoàng Văn Hành (1995)の『ベトナム反復語辞典』では反復の形をしているオノマトペだけで5000語が収録されているため、ベトナム語はオノマトペを豊富に持つ言語だと考えられる。これに対して、中国語には、擬音語に相当する「象声詞」という語群しか存在しない。彭（2007）によると、中国語に擬態語に相当する表現は相当あるが擬態語という術語はなく、形容詞に分類されている（彭2007：54）ということである。野口（1995）の『中国語擬音語辞典』には中国語の擬音語425語しか収録されていないため、中国語にはオノマトペが豊富には存在しないと考えられる。

<sup>3</sup> ベトナム人学習者は、ベトナムにいる学部「1年生」「2年生」「3年生」、日本に滞在中の「留学生」のグループの日本語オノマトペの正答率を考察することにより、日本語能力及び留学経験の有無によって日本語オノマトペの正答率の違いについて論じるつもりである。しかし、中国人学習者の場合、中国にいる3年生のグループに対してしか調査を実施できなかったため、この違いについて論じることができない。今後の課題としたい。

#### 【研究課題 4】

ベトナム人学習者と中国人学習者のそれぞれの母語におけるオノマトペの使用実態はどうなっているか。これが日本語オノマトペの使用実態にどのように影響をしているか。

上記の研究課題を解明することにより、ベトナム人学習者と中国人学習者による日本語オノマトペの使用実態を明らかにすることができるだけでなく、それぞれの母語におけるオノマトペの使用実態と日本語オノマトペの学習意識、学習方法を通して、日本語オノマトペの学習におけるそれぞれの有利な点、不利な点もわかるようになり、ベトナム人学習者と中国人学習者のために、日本語オノマトペ教育の有益な示唆を提案することが期待できる。

### 1.3 論文の構成

本論文は以下の通りの章立てから構成される。

- 第1章 はじめに
- 第2章 日本語オノマトペの概要及び本研究の日本語オノマトペの判定基準
- 第3章 ベトナム語オノマトペ及び中国語オノマトペの概要
- 第4章 先行研究の概観と本研究の位置づけ
- 第5章 本研究における調査の概要
- 第6章 アンケート調査の結果
- 第7章 ベトナム人学習者と中国人学習者による日本語オノマトペの正答率
- 第8章 ベトナム人学習者と中国人学習者の日本語オノマトペの産出に見られる傾向及び各母語の転移
- 第9章 ベトナム人学習者と中国人学習者による各母語での描写
- 第10章 おわりに
- 参考文献

## 第2章 日本語オノマトペの概要及び本研究の日本語オノマトペの判定基準

日本語オノマトペは、現在のところ、研究者によって定義が様々で、統一された見解がないように見受けられる。本章では、日本語オノマトペがどのように定義されているか、また、オノマトペの分類、形態や統語的特徴などについて先行研究を整理し、日本語オノマトペに関する概要を述べた後、本研究におけるオノマトペの判定基準を述べる。

### 2.1 日本語オノマトペの定義と多様な名称

#### 【日本語オノマトペの定義】

オノマトペは現在のところ、学者や研究者によって呼び方が異なり、いまだに統一した呼び名が管見では見当たらない。以下ではオノマトペに関する先行研究をいくつか取り上げ、日本語オノマトペの定義を見ていく。

田守 (2002) の『オノマトペ 擬音・擬態語をたのしむ』では、オノマトペという語の由来について、「オノマトペは、フランス語の *Onomatopée* から借用した外来語であり、英語では *Onomatopoeia* という。いずれも「命名する」というギリシア語 *Onomatopoiia* (*onoma* “name”+ *poiein* “to make”) に由来する。」と述べている (田守 2002 : 4)

しかし、この定義だと、オノマトペが何を表すかがあまりはっきりしていないと思われる。オックスフォード英語辞典によると、英語の *Onomatopoeia* は「音の模倣によって物事や動作を命名したり、それによって言葉を作ったりすること」、あるいは「このような方法によって作られたことば」と定義されている。

この定義からすると、オノマトペは動物の鳴き声や人間の声を模倣して作られた「めーめー (羊の鳴き声)」や「げらげら (～笑う)」といった擬声語と「とんとん (～ドアをノックする)」といった擬音語などを示すように考えられるが、実際には「べとべと」「いらいら」などといった物事の状態・人の心理状態などを象徴的 (共感覚比喩) に表す擬態語も含めて考えるのが普通である。

また、牧野ほか (1995) の『日本語文法辞典』においては、擬声語・擬態語は、概要次のようにまとめることができる。「擬声語」は「擬音語」ともいい、「擬態語」は「擬容語」ともいう。両者合わせて「象徴詞」ということがある。「象徴詞」はまた、「音象徴」または「オノマトペ」ともいう。擬声語は生物の声や無生物の音など、外界の音を音節の組み合わせで表すものである。これは、外界の現実音の直接的な写音をいうのではなく、我々が共通的なものとして認識している語形言語化したものをさす。外界の音を写した言語音と意味との間には直接的なつながり (有縁性) があり、音声が直接に表現価値を有するものである。

一方、小池・川原 (2005) において、擬音語と擬態語は以下のように定義されている。「擬音語は音 (人の声、動物の鳴き声、物音など) をうつすことばである。擬態語は状態 (ものの状態、出来事の状態、人の心の状態) を音になぞらえることばである。擬音語は聴覚心

象を類似した音韻の構成で表す。擬態語は諸感覚心象を共感覚比喩（「きらきら」聴覚→視覚、「ぷんぷん」聴覚→臭覚、「べとべと」聴覚→触覚）で表すが、むしろ、ことばそのものの持つ聴覚性（音感）を用いている。」（小池・河原 2005：98）

【日本語オノマトペの様々な名称】

金田一（1978）は日本語オノマトペのことを擬音語・擬態語という呼び方を採用し、以下の通り、さらに下位分類をしている。

表 2.1 金田一（1978：7-8）による擬音語・擬態語の下位分類

分類	下位分類	(作例)
擬音語： 外界の音を写した言葉。	擬音語： 無生物の音をあらわすもの。	とんとんドアをノック。
	擬声語： 生物の声を表すもの。	羊がめーめーと鳴く。
擬態語： 音を立てないものを音によって象徴的に表す言葉。	擬態語： 無生物の状態を表すもの。	星がきらきら光る。
	擬容語： 生物の状態を表すもの。	蝶がひらひら飛んでいる。
	擬情語： 人間の心の状態を表すようなもの。	バスがなかなか来ないのでいらいらしている。

金田一（1978）は、表 2.1 のようにオノマトペを 5 類（擬音語、擬声語、擬態語、擬容語、擬情語）に分けている。これはこれまでの研究の中で最も細分化された分類である。しかし、実際には、以下の例のように、上記の分類が適用困難な場合がある。

例 1: ヒップはぴっちり、ほかはだぶだぶというズボンが流行している。（金田一 1978:177）

例 2: どうも、水を飲みすぎたらしい。おなかがだぶだぶする。（金田一 1978：77）

例 1 は衣類が大きすぎて、体にぴったり合わない様子を表すので「だぶだぶ」は擬態語と分類すべき例文である。これに対して、例 2 は何か容器の中に入っているかなりの量の液体が揺れ動いて出る音を表すので「だぶだぶ」は擬音語と分類すべきである。つまり、一つの言葉が二つ以上の意味を表す場合に、上記の分類方法が困難な場合があることがわかる。

金田一（1978）の分類より簡単な分類を試みた研究もある。例えば、音や声を表す語群を「擬音語・擬声語」、物事や人の様子を表す語群を「擬態語」と 2 つの種類に分け、全体を示すときは「擬音語・擬態語」と呼ぶ学者としては天沼（1974）、浅野（1978）、飛田・浅田

(2002) などである。天沼 (1974) によると、擬音語とは人間の笑い声、唾を吐いたり、物を飲んだり、平手で叩いたりするときなどに発する音、または人間以外の生物の発する声や音、自然界で起こる音、無生物が自然に、または外力の作用を受けて発する音を音声で表現した言葉である一方、擬態語とは人間を含む生物、無生物、自然界の物事の有様・現象・変化・動き・成長などの状態・様子を描写的・象徴的に音声で表現した言葉であるという (天沼 1974 : 7)。

庵 (2001) では、「ヒトの言葉では記号とその名前との間に何らかの必然的な関係はありません。一般に、言語記号はそれを表す音声的側面 (指すもの *signifiant*) とそれが指示する対象 (指されるもの *signifie*) を持っていますが、両者の間には必然的な関係はありません」

(庵 2001 : 10) と述べている。しかし、オノマトペの場合 (少なくとも、擬音語・擬声語の場合)、「指されるもの」と「指すもの」の間には何らかの形で関連があることを否定する学者は少ないだろう。このように、オノマトペは音と意味の間に何らかのつながりがあるという特殊な性格を備えているのである。こうした性格は音象徴性と呼ばれる (石黒 2008 : 25)。この特徴に注目して、オノマトペ (擬音語・擬態語・擬情語) のことを音象徴語と呼ぶ学者も見られる。玉村 (1989) および羽佐田 (2005) がその例である。

しかし、西洋諸言語からすると、*Onomatopoeia* は、主に「擬音語」や「擬声語」を指し、西洋諸言語には擬態語に当たる言葉の語群が少ないことから、上記のように、日本語の音象徴全体をオノマトペとするのは違和感があるという意見も見られる。このことから、Chang (1990) はこの語群を *Onomatopoeia* (擬音語・擬声語) と *Mimeses* (擬態語) に分けている。そして、Hamano (1986) は音や声を模倣したものを *Onomatopoeia* (擬音語・擬声語)、ものや人の様子・動き・状態などを表すものを *Mimesis/Mimetic Words* (擬態語) と区分し、総称して示す場合は *Sound-Symbolism/Sound-Symbolic Words* (音象徴語) と英語で称している。日本語の擬音語・擬態語、いわゆるオノマトペは英語ではどのような呼び方をしているかについて、2016年12月に国立国語研究所で開催された『日本語と世界言語のオノマトペ *Mimetics in Japanese and Other Languages of the World*』という国際シンポジウムにおける発表のタイトルを見ると、16件の発表のうち、「オノマトペ」という概念を取り扱っているのが15件で、残りの1件は「音象徴」という概念を採用している。当該の英文タイトルでは、日本語オノマトペの英訳として、「*mimetics*」と「*ideophones*」がそれぞれ6回使われ、「*sound symbolism*」「*onomatopoeia*」「*expressives*」「*mimetic expression*」がそれぞれ1回使われている。このように、「*mimetics*」という概念が日本語オノマトペに相当する英語の専門用語として広く使われている。

このように、擬音語・擬態語の定義と呼び方は研究者によって様々で、英語での呼び方も様々であるが、本研究では、擬音語・擬態語を総称して日本語オノマトペという呼び方を採用する。

## 2.2 日本語オノマトペの形態的特徴

日本語オノマトペの形態においても、様々な分類が見られる。例えば、天沼（1974）、田守ほか（1999）、泉（1976）などがある。

本節では、先行研究で見られたいくつかの形態の分類の仕方を紹介する。

天沼（1974）は、拍を基本単位とし、日本語オノマトペを1拍から8拍までのものを表2.2の通りの47種に分類した（天沼 1974 : 35-53）。

表 2.2 天沼（1974）による日本語オノマトペの形態の分類

番号	拍数	形態	例
1	1拍	X型	つと立ち上がる。
2	2拍	XY型	すい、ぷい
3		Xt型	がっ、きゅっ
4		Xn型	がたん、ばたん
5	3拍	XYt型	ガリッ、ケロッ
6		XYr型	けろり、さらり
7		XYn型	がたん、ばたん
8		XtX型	かっか、さっさ
9		XY:型	スイー、フラー
10		X:Y型	スーイ、コーン
11		X:t型	カーッ、キューッ
12	4拍	XYXY型	いらいら、かーかー
13		XYZY型	あたふた、うろちよろ
14		XYXZ型	きんきら、ドンドコ
15		XYZW-1型	かさこそ、がたごと
16		XYZW-2型	ちょこまか
17		XYZW-3型	ガタピシ
18		XYZW-4型	スタコラ
19		XYZW-5型	ゴタクサ、ノロクサ
20		XYZW-6型	ほんわか、わんさか
21		4拍	XYrt型
22	XYrn型		カラリン、クルリン
23	XtYZ型		うっすら、くっくら
24	XtYr型		うっかり、ぐっすり
25	XtYn型		ゴットン、スットン
26	XnYr型		うんざり、げんなり

27		XY:r 型	すらーり、とろーり
28		XY:t 型	ジワーッ、フワーッ
29		XY:n 型	がらーん、ストーン
30		X:Yr 型	ふーわり、ゆーらり
31		X:Y:型	ガーガー、ザーザー
32	5 拍	XNXYn	カラカラッ
33		XYXYn	ゴロゴロン
34		XtY:n	ドッカーン、ドッスーン
35		その他	コテンパン、ドンピシャリ
36	6 拍	XYZXYZ	うつらうつら、ずいこずいこ
37		XYnZYn	どたんばたん
38		XYXYXY	かんかんかん、ずるずるずる
39		XYXYZn	ガラガラポン
40		XYXYZ:	チンチンゴー
41	7 拍	XYXYXYt	キラキラキラッ
42		XYXYXYr	くるくるくるり
43		XYXYXYn	ゴロゴロゴロン
44		XYXYX:Y	ポンポンポーン
45		その他	ガラガラピシン、ガラガラピシャン
46	8 拍	XYXYABAB	かたかたことこと
47		XYXYXYXY	カタコトカタコト

また、田守ほか（1999）はモーラを単位として日本語オノマトペを 26 種類に分類している。田守ほか（1999）によると、日本語オノマトペは多様な音韻形態を持つように見えるが、基本的には 1 モーラか 2 モーラに分類できると主張している。次ページの表 2.3 は田守ほか（1999）の分類の仕方を紹介する。表 2.3 に示した C は子音、V は母音、Q は促音、N は撥音を意味する。

表 2.3 田守ほか（1999）による日本語オノマトペの形態の分類

番号	基本形の モーラの数	形態	例
1		CV	ふ（と）、つ（と）

2	1 モーラ	CVQ	ちゅっ、ふっ、はっ、かっ、きゅっ
3		CVN	ぼん、ぼん、ちょん、こん、にゃん
4		CVV	がー、ぐー、ぎゃーきゅー。きゃー
5		CVVQ	ばーっ、ふーっ、ばーっ、すーっ
6		CVVN	ばーん、がーん、きーん、かーん
7		CVQCVQ	くっくっ、きゃっきゃっ、しゅっしゅっ
8		CVNVCVN	ばんばん、ぼんぼん、かんかん
9		CVVCVV	がーがー、ぎゃーぎゃー、かーかー
10		2 モーラ	CVCV
11	CVCVQ		ばたっ、ばさっ、ぐさっ、ぼきっ
12	CVCVり		ばたり、ばさり、ぐさり、ぼきり
13	CVCVN		ばたん、ぼとん、ころん、ごつん
14	CVQCV		どっか、はっし、すっく
15	CVNVCV		むんず、ざんぶ
16	CVQCVり		ぼっさり、ばったり、がっくり
17	CVNVCVり		ぼんやり、ふんわり、こんがり
18	CVCVの反復		ばさばさ、ばたばた、ごろごろ
19	反復形の変種 1		がさごそ、がたごと、かさこそ
20	反復形の変種 2		ちらほら、どぎまぎ、のらくら
21	異なる 2 モーラの 組み合わせ		ちょこまか、がたびし、すたこら
22	CVCVりの反復		ばたりばたり、ぐさりぐさり
23	CVCVNの反復		ばたん、ころん、ぼとん
24	19 の変種		がたんごとん、からんころん
25	20 の変種		がたりごとり、ちらりほらり
26	特殊な形態		こけこっこう、すっからかん

しかし、これらの研究はいずれにしても日本語オノマトペの形態分類が細かすぎて、学習者には複雑になりすぎているように見えると思われる。

これに対して、泉（1976）はオノマトペの異形に注目しながら、表 2.4 の通り、日本語オノマトペは 1 つの音節の基本から変化する多くのバリエーションを持っていると主張している（泉 1976 : 24-30）。

表 2.4 泉（1976）による日本語オノマトペの形態の分類（「カラ」を例とする）

番号	オノマトペの形態	例
----	----------	---

1	ツメル音	カラッ
2	ハネル音	カラン
3	引く音	カラー
4	リ音	カラリ
5	繰り返し	カラカラ
6	音の一部交換	カラコリ
7	清濁音の対立	「カラカラ」と「ガラガラ」

泉（1976）の分類において、三上（2003）は1番から5番までの形態がオノマトペの代表的な形態として挙げている。

上述したように、オノマトペは実際に使われる際に、多様なバリエーションがあり、基本形から実際に作り出されたオノマトペは無限に広がるような印象を受ける。この特徴が、外国人学習者がオノマトペを覚えられず、使えるようにならない原因の一つではないかと考えられる。

### 2.3 日本語オノマトペの用法

オノマトペの用法であるが、一つのオノマトペが同時に2つ以上の統語的な機能を持つことがオノマトペの特徴の一つとして知られている<sup>4</sup>。田守ほか（1999）は日本語オノマトペの用法について網羅的に記述している。具体的には、オノマトペは副詞（様態副詞、結果副詞、程度副詞）、形容詞、名詞（単独名詞、複合名詞）として働くことができると指摘し、またオノマトペから派生した動詞の例を取り上げている。以下、日本語オノマトペの用法について、田守ほか（1999）の考え方をまとめる。

#### <副詞用法>

・様態副詞：

「後ろから肩をぽんと叩かれた。(作例)」

・結果副詞：

「今日は一日移動してきたので、くたくたに疲れた。(作例)」

・程度副詞：

「塾に通ってから成績がどんどん上がった。(作例)」

・頻度副詞：

「あの店は安くて、ちよくちよく行っています。(作例)」

<sup>4</sup> 田守ほか（1999）は、日本語オノマトペの特徴として、①「音象徴性」があること、②反復形、促音、-ri、母音の長音化のいずれかの「オノマトペ標識」を持つこと、③「語基と異形の存在」があること、④複数の品詞として働けるといいう「統語的な特徴」を持つことを挙げている。

<動詞用法>

- ・「～する動詞」:

例: 「じっとする」「しんとする」

- ・「～つく動詞」:

例: 「いらつく」「べとつく」

- ・その他:

例: 「きらめく」「とろける」「ちびる」

<名詞用法>

- ・単独名詞:

「今年はひらひらのついたスカートが流行している。(作例)」

- ・複合名詞:

「あつあつあんかけチャーハン (名大会話コーパスの実例)」

<形容詞・形容動詞用法>

例:

「ぴかぴかの靴」「靴がぴかぴかだ。」(田守ほか 1999: 63)

<引用用法>

例: 「きゃー」という叫び声 (田守ほか 1999: 75)

<文外独立用法>

例: ぴんぼーん! ドアのベルが鳴った。(作例)

<動詞省略用法> (オノマトペ文末文ともいう)

例: 社長は売り上げ増ににんまり。(田守ほか 1999: 88)

石黒 (2007) は次のように述べている。日本語は SOV という語順をとる言語の宿命として、文末が単調になりやすい、押しつけがましくなるという 2 つの課題が常につきまとう。この 2 つの課題を克服するのに、点描文体という文体を考えることが有力な手がかりとなる。点描文体とは、文末の省略が非常に多く、点と点を読者が主体的に結び付けていく必要がある、いわば文末切りつめ文体である (石黒 2007: 173-174)。石黒 (2007) で取り上げられている点描文体の効果はいくつかあるが、「文末に余計な要素がついていないために、文末の重要な要素がダイレクトに読者の心に届く」という効果が「オノマトペ文末文」にぴったりすると思われる。日本語は SOV の構造であるため、文末には情報が焦点化されやすく、

生き生きとしたオノマトペで文を終わらせることにより文の表現効果が読み手にダイレクトに届き、文全体の印象が深まると思われる。

## 2.4 日本語オノマトペの語彙性とオノマトペ度

田守ほか（1999）は、オノマトペの範疇化に関して「語彙性（Lexicality）」および「オノマトペ度（Mimeticity）」という2つの概念を取り上げている。具体的にいうと、「語彙性」とはオノマトペと推測される語が言語の中でどれほど完全に語として機能しているかという程度を指し、「オノマトペ度」とは、ある語が話者によって直接的な模倣として認識される程度、すなわち、その語がそれによって指示される音、様態、状態の非恣意的な表れとして認識される程度を指すと述べている（田守ほか 1999：189）。そして、両者は上で定義した意味において正反対の関係にあると仮定される。すなわち、語彙性の最も低いオノマトペはもっとも具体的な描写力に富み、類像的で、直接的で生き生きとした臨場感がある等、つまりもっともオノマトペ的である。一方、語彙性の最も高いものはその逆である。この語彙性、オノマトペ度というものを判定するために、以下の a～h の8つの基準が挙げられている（田守ほか 1999：200-201）。これらの基準を多く満たすものが「オノマトペ度」が高く、「語彙度」が低いとみなされるということである。

- a. 音を表す
- b. 「と」を義務的に伴う
- c. 引用的に用いることができる
- d. 文外で独立して用いることができる
- e. 「X という Y」構造に用いることができる
- f. 具体的な描写力がある
- g. 漫画にラベルとして起こる
- h. 「と」の代わりに「て」を伴うことができる

これらの8つの基準を具体的な語に当てはめたものが、次ページの表 2.5 である。

表 2.5 語の「オノマトペ度」（田守ほか 1999：201）

	a	b	c	d	e	f	g	h
ドッカーン	○	○	○	○	○	○	○	○
がさがさっ	○	○	○	○	○	○	○	○
ぼきっ	○	○	○	○	○	○	○	○
がさがさ	○	×	○	??	○	○	○	×

にやっ	×	○	○	??	○	○	○	?
くるくる	×	×	??	×	×	○	○	×
こそっ	×	○	??	×	×	×	○	?
いらいら	×	×	×	×	×	○	○	×
がっぷり	×	×	×	×	×	○	?	×
ゆっくり	×	×	×	×	×	×	×	×
めきめき	×	×	×	×	×	×	×	×

上記の表 2.5 を見ると、「ドッカーン」「がさがさっ」「ぼきっ」というオノマトペがすべての基準を満たしている、つまり、オノマトペ度がもっとも高いといえる。これに対して、「ゆっくり」「めきめき」はどの基準も満たさないため、もっともオノマトペ度が低い、もっともオノマトペからは離れていると言えるのである。ただし、この基準はある語のオノマトペ度が低いか高いかを判断するためのもので、その語がオノマトペという語彙層に属するか属さないかという答えにはならない。

そこで、田守ほか (1999) は日本語オノマトペの語彙的独自性 (一般語彙から区別できるかどうかということ) を立証するため、オノマトペの統語的・形態的独自性、音韻的独自性という観点から考察を行った結果、伝統的なオノマトペの語彙独自性として、12 の要因を挙げている。そのうち、音韻的な特徴が 5 つ、形態に関する特徴が 6 つ、統語論としては 1 つの要因が挙げられている。これらの 12 特徴のうち、ある語がオノマトペであるかどうか、日本語教育の観点から考えると、以下の 7 特徴が重要であると三上 (2007b) は指摘している (三上 2007b : 63-64)。

- ・ 2 モーラ反復形の様態副詞的なオノマトペの多くが促音の語末付加を受けるが、この種の接辞付加はあるいは拡張は、反復形を持っている一般語彙と漢語にはけっして見られない。
- ・ 2 モーラ反復形の結果副詞的なオノマトペの語中に促音が挿入されるが、この種の接辞挿入はあるいは拡張は、反復形を持っている一般語彙と漢語にはけっして見られない。
- ・ 「り」の語末付加はオノマトペに限られる。
- ・ 促音の語末付加はオノマトペに限られる。
- ・ 撥音の語末付加もオノマトペに限られる。
- ・ 反復形を持つオノマトペは語基をさらに反復してその形態を拡張することができるが、このようなことは本来語や漢語にはけっして起こらない。
- ・ 2 モーラ反復系の様態副詞的なオノマトペは「と」を随時的に伴うが、本来語の反復形は「と」を伴うのが普通であり、漢語の反復形は「と」を義務的に伴う。

## 2.5 日本語オノマトペの「語彙化」と「境界オノマトペ」

この節では、角岡（2004）が取り扱う「語彙化」と「境界オノマトペ」の概念を紹介する。

### 【日本語オノマトペの語彙化について】

ここで扱う「語彙化」は、前節で取り上げた「語彙性」と意味するところは同じである。つまり、「語彙性」の高いオノマトペは「語彙化」の程度も高く、一般語彙に紛れているということである。角岡（2004）は「日本語母語話者がどの程度語源を意識しているかという尺度と関連付けるために」、「語彙化」の枠組みを援用している。以下、角岡（2004：16-18）に記述されている内容を簡単にまとめる。

**レベル1**：いわゆる流行語や特定の作家によるまったく新しい臨時語である。例として、「ほしがぺかぺか光る。」（宮沢賢治）

**レベル2**：助詞の「と」を義務的に伴う語で、多くの日本語オノマトペはこれに該当する。このレベルにおいては、オノマトペは「と」を伴わないと非文になってしまう。例として、「どーんと大きな爆発音がした」。

**レベル3**：副詞として用いられる際に「と」の付随が任意であるもの（例：ぐるぐる（と）回る）、「に」を義務的に伴うもの（例：がりがりにやせる）、「と」を伴わないもの（例：病気がすっかり治る）などがこのレベルに該当する。

**レベル4**：オノマトペ語彙に基づく各種の派生語である。例えば「がっかりする」、「びっくりする」のような「～する」動詞、「～つく」動詞（べとつく）、「～めく」動詞（ゆらめく）、「～ける」動詞（いじける）などがある。

上記の4つのレベルのうち、レベル1は語彙化の程度が最も低いもので、レベル4は語彙化の程度が最も高いものである。

### 【境界オノマトペについて】

「境界オノマトペ」というのは「音形がオノマトペ語彙のパターンと同じであるか、または近似していることによって、一見オノマトペのように思われる語」である。また、形容詞や形容動詞の語幹を反復しているような場合は、「反復」がオノマトペの標識であるため、語感としてオノマトペと感じられるような語も「境界オノマトペ」であると角岡（2004）は述べている（角岡2004：19）。そして、角岡（2004）は「境界オノマトペ」の例として48語を取り上げている（例：「あべこべ」「のびのび」「おろおろ」「つくづく」など）。

実際、ある言葉は時間が経ち、オノマトペと認定されるようになり、逆に、最初はオノマトペとして認定されたものが普通の語（一般的な副詞）として認定されていくものもある。例えば、大野（1974）は以下の例を取り上げている。

「雪やこんこん、あられやこんこん」

この例はある歌の中の歌詞であるが、雪や霰が降る状態が「こんこん」という擬態語で表される。この「こんこん」という言葉は現在、オノマトペとして認定されているが、この語は元来「来む（古来は『来なさい』の模倣動詞であった）」という動詞から由来したものであるとその語源を記している（大野 1974 : 90）。

一方、もともと動詞であったものが少し変形して繰り返すことにより、オノマトペとなった例もみられる。例えば、

「しみじみ ←しみる」

「わくわく ←沸く」

「いそいそ ←急ぐ」

また、最初はオノマトペとして捉えられたもので、時間が経つにつれてオノマトペとはまったく感じられなくなったものもある。

## 2.6 日本語オノマトペの音象徴性

日本語オノマトペの音象徴に関する研究が多く見られているが、その中でも網羅的に記述しているものとして、Hamano (1986) の基本的な考えを紹介する。具体的には以下の表 2.6 の通りである。例も Hamano (1986) から引用している。「音声的特徴」のところは筆者が国際音声記号を見て、それぞれが象徴している意味と関連があると思われる特性だけを抜き出す。

表 2.6 Hamano (1986) による日本語オノマトペの音象徴

表記	音声的特徴	象徴的な意味	例
/i/	発音する時に、舌が高い位置にある。	線、ないし一直線に延びたもの。または甲高い音を表す。	「布をぴんと張る」 「ぴっと笛を吹く」

日本語学習者の日本語オノマトペ産出の実証的研究  
 —ベトナム語母語話者と中国語母語話者を比較して—

/a/	発音する時に、舌が低い位置にある。	平べったさ、大きな表面に影響を与える出来事、広がり、あるいは目立った出来事といった様々な意味と関連がある。	「ぼん」「ぱりぱり」「ばたばた」
/o/	円唇母音	丸いもの、小さい出来事あるいは小さい部分にしか影響を与えない出来事、目立たないもしくは控えめな出来事と関連している。	「ぼっ」「ぼたぼた」「ちょん」
/u/	円唇母音	口や鼻のような小さい丸い穴と関係のある出来事や突出と関連している。	「ぶん」「ぶっ」「ぶんぶん」「しゅっ」「ちゅっ」
/e/	非円唇母音	動作の不適切さないし下品さを表す。	「げえげえ」「ぺらぺら」「ぺとぺと」
/p,b/	閉鎖音の子音	物体に打ち当たったり、破裂したりするような、急で爆発的な動作や出来事ないしは突然性や力強さを表す。特に/p/は活発さや活動的な動作と関連している。	「ぴーん」「ぼんぼん」「ぼんぼん」「ぼーん」「ぼうーっ」
/t,d/	閉鎖音の子音	打撃と関連している。	「とんとん」「どんどん」「どん」
/k,g/	閉鎖音の子音	金属のような硬い表面との接触を表す。さらに、母音/i/とともに甲高い音を表す。	「きいきい」「くうくう」「こんこん」「ごーん」
/s,z/	摩擦音の子音	滑らかさ、動作が急でないことを表す。2 モーラのオノマトペの場合、軽い接触、摩擦、小粒の動き、流動する液体、スマートしている状態や冷静さなどを表す。	「さっくり」「さらさら」「すべすべ」「ざらざら」「せっせ」「そよそよ」「すたすた」
/h/	無声音の子音	語頭の/h/は息ないし息の吐き出しを表す。	「ふっ」「ふうふう」「ほっ」「ほほほ」
/m/	両唇の子音	語頭の/m/ははっきりしない状態という意味を象徴し、2 次的には落ち着きのなさ、ないしは理性のなさを表す。	「もやもや」「まごまご」「もたもた」

/w/	軟口蓋の接近音の語頭子音	1 モーラを基本形を持つオノマトペの場合、/w/が語頭子音としてつく動物や人間の発する音・声を表す。	「わあ」「わあわあ」「わんわん」「わいわい」
/N/	語末の鼻音の子音	共鳴を表す。	「がたん」「ごとん」「ぼとん」「ぼつん」

表 2.6 からわかるように、Hamano (1986) の主張は詳細で、日本語オノマトペの音象徴をほぼカバーしているが、その一方で、細かすぎて複雑であるために一般性を欠くという批判もある。しかし、日本語オノマトペはその形態と意味との間で関連性があるということは誰も否定していない。田守ほか (1999)、野間 (2001)、田守 (2002) とも、日本語オノマトペは、音象徴語と呼ぶほど、オノマトペの意味はある程度音象徴性によって限定されていると主張している。このような音象徴性は細かく、学習者にとって覚えにくいと思われるかもしれないが、この知識を習得しておく、当該の場面にふさわしいオノマトペを選ぶことができ、日本人とのコミュニケーションの中で出会うオノマトペの意味やニュアンスを理解できるようになるのではないかと考えられる。

## 2.7 日本語オノマトペの判定基準

2.1 では、日本語オノマトペの様々な定義と名称を概観した後、2.2 では日本語オノマトペの形態、2.3 では日本語オノマトペの用法を取り上げた。日本語オノマトペは特別な語群であるため、ある語がオノマトペであるかどうかの判定が難しい場合がある。そこで、2.4 ではその語彙性とオノマトペという概念を紹介し、2.5 では日本語オノマトペの「語彙化」と「境界オノマトペ」という概念を紹介した。2.6 では、日本語オノマトペの表記とそれが象徴する意味、いわゆる日本語オノマトペの音象徴について簡単に紹介した。

このように、日本語オノマトペは定義と呼び方が様々で、語彙性とオノマトペ度という概念もあるため、ある語がオノマトペであるかどうかということについての見解はまだ統一されていない。特に、日本語母語話者にとってオノマトペとしての認識が薄いと考えられる語についてのオノマトペ判定はばらばらである。

そこで、この 2.7 節では、オノマトペであるかどうか判定が一致しないと考えられる語を紹介した後、本研究におけるオノマトペの判定基準を述べる。

まず、日本語母語話者がオノマトペとしての認定が薄いと考えられる語が各種のオノマトペ辞典でオノマトペとして採用されるかどうかを見してみる。

表 2.7 一般の副詞と思われやすい語のオノマトペ辞典での収録状況

	浅野 (1978)	小野 (2007)	飛田・浅田 (2002)	山口 (2003)
きっと	△	○	△	○
ずっと	×	○	△	○

だんだん	×	×	△	×
ちよつと	×	×	△	×
もっと	×	×	×	×
やつと	×	×	×	×

表2.7は、広く使われているオノマトペの辞典4冊において、一般の副詞と思われがちな「きつと」「ずっと」「だんだん」「ちよつと」「もっと」「やつと」という6つの語がオノマトペとして収録されているかどうかを調査したものである。表2.7に記載されている「○」はオノマトペとしての記述あり。「×」は記述なし。「△」は特定の意味に限定するなどの条件付きで記述ありという意味である。

表2.7からわかるように、「きつと」は4つの辞書に見出し語として収録されている。そのうち、小野（2007）では、「きつと守ります」「きつとそうだろう」の例文が記載してあり、意志や決意がかたいさまを表す（小野2007：66）。山口（2003）では、「きつと口を結ぶ」（ここの「きつと」は頭高アクセントで発音される）の用法でのみ解説があり、いわゆる「必ず」という意味では擬態語として認めないということがわかる。また、山口（2003）において、「明日きつと行く」のような場合の「必ず」という意味に使われる「きつと」は擬態語ではないという解説がある（山口2003：92）。「もっと」「やつと」はいずれの辞書においても記述がない。「ずっと」は3つの辞書に収録されている。小野（2007）では、「ものごとをいっそう推しすすめて行くさま。その範囲が、ある範囲のすべてに及ぶさま」「ある状態が長い間続くさま。はじめから終わりまで。」と解説されている（小野2007：206）。山口（2003）では「動作・状態の継続」「にじり寄る様子」「動作の勢いのよさ」の3つの意味を記述している（山口2003：253）。この2つの辞書で共通している「ずっと」の意味はいわゆる時間的または空間的「継続」のアスペクトを表す用法である。一方、飛田・浅田（2002）は「椅子を後ろにずっと引いて立ち上がった。」のように、重いものを一回引きずる時に出る音を表すと書いてある（飛田2002：227）。「今度の映画のほうがずっと出来がよい。」「三日前からずっと雨が降り続けている。」「こっちへずっとお入んなさい。」の意味に関しては解説されておらず、『現代副詞用法辞典』を参照するようにと書かれている。飛田・浅田（1994）では、擬音語・擬態語は除くという方針をとっている。つまり、「ずっと」が「程度の比較」「状態の継続」「動作の勢いのよさ」の意味で使われる際は「一般の副詞」と認定しているわけである。同じように、「きつと」についても、「必ず」という意味で使われる用例は載せてあるものの、解説は『現代副詞用法辞典』を参照という扱いになっている。「だんだん」「ちよつと」の場合であるが、見出し語として収録したのは飛田・浅田（2002）のみである。「だんだん」は、「遠くでダンダンと銃声があった」という用例があり、「父の病状はだんだんよくなっている」という用例の意味に関しては「ずっと」の場合と同様に、飛田・浅田（2002）『現代副詞用法辞典』を参照という扱いになっている（飛田2002：268）。「ちよつと」の場合も、「ちよつ、あんないたずらしなきゃよかったな」という舌打ちの音を表す用例があり、

「チーズケーキをちょっとだけ食べたいな」「ちょっと待ってね」などの用例の意味に関してはやはり、『現代副詞用法辞典』を参照という扱いになっている（飛田2002：285）。以上の結果、本研究では、表2.7に書いてある6語のいずれもオノマトペではないという結論に至った。

次に、本研究におけるオノマトペの判定基準について述べる。

上記のように、オノマトペは特別な語群であるため、その定義が様々で、判定基準は研究者によっても各種オノマトペ辞典によっても統一されていないことがわかった。しかし、よく観察すると、辞書、あるいは日本語母語話者によって判定がばらばらなのは、先ほど取り上げた一般的な副詞に見えるような語で、しかも、その数は僅かとなっている。

本研究では、その複雑さを最大軽減するために、各種のオノマトペ辞典で収録されているかどうかということと日本語母語話者の認識を組み合わせ、オノマトペであるかどうかの判断を行う。

判定基準となる辞書としては、オノマトペとしてよく使われている以下の4冊である。

- ① 浅野鶴子（編）・金田一解説（1978）『擬音語・擬態語辞典』角川書店
- ② 小野正弘（2007）『日本語オノマトペ辞典：擬音語擬態語 4500』小学館
- ③ 飛田良文・浅田秀子（2002）『現代日本語擬音語擬態語用法辞典』東京堂出版
- ④ 山口仲美（2003）『暮らしのことば 擬音・擬態語辞典』講談社

- ・判定基準1：上記の4冊のうち、2冊以上の辞典に記載されている語をオノマトペとして取り扱う。そのため、「ちゃん（と）」「どんどん」など、一般に副詞と思われそうな語も調査対象となる。
- ・判定基準2：正確を期すため、日本語教育学を専攻する日本語の母語話者7名により、4名以上に認定された語をオノマトペとする。

### 第3章 ベトナム語オノマトペ及び中国語オノマトペの概要

第2章では、日本語オノマトペに関する概要と本研究における日本語オノマトペの判定基準について述べた。具体的には、日本語オノマトペの様々な定義を紹介してから、日本語

オノマトペの形態的・統語的・音象徴の特徴についての先行研究を紹介した後、本研究における日本語オノマトペの判定基準を述べた。本研究では、ベトナム語母語話者と中国語母語話者がそれぞれの母語であるベトナム語と中国語におけるオノマトペの使用実態を調査することが研究課題の一部であるため、ベトナム語と中国語に存在する日本語オノマトペに相当すると思われる語群（以降、それぞれベトナム語オノマトペと中国語オノマトペと呼ぶ）に関する概要が必要である。本章では、ベトナム語オノマトペと中国語オノマトペについて簡単にイメージできるように、それぞれの定義、形態的・統語的特徴、及び音象徴についての先行研究を整理し、まとめる。

### 3.1 ベトナム語オノマトペの概要

#### 3.1.1 ベトナム語オノマトペの定義

ベトナム語には、日本語の擬音語・擬態語（オノマトペ）に当たる語として「*từ tượng thanh*（擬音語／象声詞）」「*từ tượng hình*（擬態語／象形詞）」という語群があり、豊富な体系を有している。

Hoàng Phê（2011）によると、「*từ tượng thanh*」「*từ tượng hình*」は次のように定義されている。「*Từ tượng thanh là từ mô phỏng, gọi tả âm thanh trong thực tế. Ví dụ “róc rách”, “tích tắc”.*（擬音語は自然界の音を描写・または模倣する言葉である。例えば：“*róc rách*”（ロックライク）[水が流れている音]，“*tích tắc*”（チクタク）[時計の針が回っている時の音]）である。

「*Từ tượng hình là từ có tác dụng gọi lên những hình ảnh, dáng vẽ cụ thể. Ví dụ “lom khom”, “khăng khiu”*（擬態語は具体的な状態・様子をイメージさせる言葉である。例えば、“*lom khom*”（ロムコム）[背中を丸めながら歩く様子]，“*khăng khiu*”（カンキュウ）[枝だけで葉っぱがない様子、あるいは骨しかないに見えるほど人がげっそりしている様子]（Hoàng Phê 2011:1678）。

Nguyễn Như Ý（1998）では、「*Từ tượng thanh là từ mô phỏng âm thanh trong tự nhiên, từ tượng hình là từ mô phỏng hình ảnh, dáng vẽ của sự vật hoặc khiến ta hình dung, liên tưởng đến sự vật sự việc cụ thể nào đó.*（擬音語は自然の音を模倣して表す語で、擬態語は物事のイメージ、姿を模倣して表す語、ある様子をイメージさせ、具体的な出来事を連想させる語である。）」（Nguyễn Như Ý 1998:1770）と記述されている。

また、中学3年生の国語教科書では次のように定義されている。

「*Từ tượng thanh là từ mô phỏng âm thanh của tự nhiên, của con người.*（擬音語は自然界、または人間の音声を模倣する言葉である）」（Nguyễn Khắc Phi 2014 : 49）

「*Từ tượng hình là từ gọi tả hình ảnh, dáng vẽ, trạng thái của sự vật.*（擬態語は物事の状態・様子をイメージさせる言葉である。）」（Nguyễn Khắc Phi 2014 : 49）

このように、ベトナム語における擬音語、擬態語の定義はほぼ統一していることがわかる。この基本的な定義から見れば、「*từ tượng thanh*」は、日本語における擬音語に相当し、「*từ tượng hình*」は、日本語における擬態語に相当すると言えよう。

一方、学校の国語教育において「*từ tượng thanh* (擬音語)」「*từ tượng hình* (擬態語)」という項目は、言及されており、文学作品を分析する際に描写性が豊かであることが重要な分析ポイントとされている。例えば、中学3年生の国語の練習問題として、以下のような問題がある。

「Em hãy tìm 5 từ tượng hình gợi tả dáng đi của người trong đoạn văn sau (以下の文章の中から、人の歩き方を表す擬態語を5つ見つけなさい。)」(Nguyễn Khắc Phi 2014 : 50)

一方、ベトナム語においては、擬音語・擬態語と同じく、描写性に優れている「*từ láy*」(反復語<sup>5</sup>)という語群が数多く存在している。Hoàng Phê (2011)によると、「*từ láy* (反復語)」は「*Từ láy là từ đa tiết, trong đó một hoặc hai âm tiết có hình thức là láy âm của âm tiết kia. Ví dụ “lạnh lùng”, “sạch sành sanh”, “nham nham nhờ nhờ”.* (反復語は複数の音節の言葉で、そのうちの1音節あるいは2音節が残りの音節の反復形である。例えば、「*lạnh lùng*», 「*sạch sành sanh*», 「*nham nham nhờ nhờ*」がその例である。)」と定義されている。

このように、ベトナム語における擬音語・擬態語の定義と「*từ láy* (反復語)」の定義を見ると、描写性に富むというところで共通していることがわかった。実際に、ベトナム語の擬音語・擬態語と反復語の境界線ははっきりしていないようである。Hoàng Anh Thi (2005)は日本語における擬音語・擬態語について論じているが、ベトナム語における擬音語・擬態語についても言及している。Hoàng Anh Thi (2005)は、「ベトナム語の擬音語・擬態語の大部分は「*từ láy* (反復語)」であり、擬音語・擬態語の例と言えば、まずは反復形の言葉を思い出すのである。」と述べている。ベトナム語の擬音語・擬態語の中では、1音節からなる語も含まれているが数が少なく、ほとんどは2音節、または2音節以上から構成され、それらが何らかの形で反復形を持つ(反復語)と言われている。Phi Tuyết Hinh (1990)は「*Với tiếng Việt, từ láy là loại từ rất giàu giá trị tượng thanh, tượng hình và biểu cảm.* (ベトナム語における反復語は擬音性、擬態性、描写性に富んでいる)」と述べている(Phi Tuyết Hinh 1990:16)。Hoàng Văn Hành (1995)は「*từ láy* (反復語)は語の中の音節内の要素の音声のハーモニーであるため、意味の象徴化の役割がある」と述べている。

このように、擬音語・擬態語は反復語と同一概念であるかははっきりと言及されていないが、ベトナム語の「*từ láy* (反復語)」の性質の中には、擬音語・擬態語の性質が組み込まれていると考えられる。実際に、例として挙げられる擬音語・擬態語は反復語であることが非常に多い<sup>6</sup>。

<sup>5</sup> 五味 (2015) の『*Từ điển Việt- Nhật* 学習者用ベトナム語辞典』では「*từ láy*」の日本語訳として「豊語」という言い方を採用しているが、本研究では、「*từ láy*」の反復造語法を主張するため「反復語」という言い方をする。

<sup>6</sup> 反復の形を持つ語の中で、学者によっては「*từ láy*」(反復語)ではないと判定することがある。その中で、擬音語・擬態語と思われる語が含まれる。例えば、「*tep nhẹp*」「*bập*

しかし、言語学的な研究では、擬音語・擬態語を取り上げるより、「tù láy (反復語)」の造語法とその擬音・擬態の効果等に着眼した研究のほうが盛んである。つまり、ベトナム語では、擬音語・擬態語そのものより、擬音・擬態効果が優れている「tù láy (反復語)」の反復規則とその音象徴性についての研究のほうが盛んである。そして、ベトナム語には擬音語・擬態語の辞書が存在していないのに対し、「tù láy (反復語)」の辞書が何冊も存在している。

ベトナム語におけるオノマトペと「tù láy (反復語)」の関係の図 3.1 の通りである。

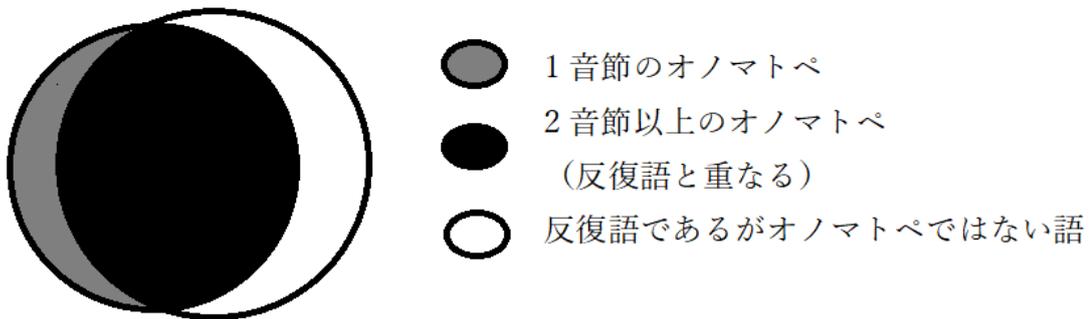


図 3.1 ベトナム語におけるオノマトペと「tù láy (反復語)」の関係

### 3.1.2 ベトナム語オノマトペの形態的特徴

まず、ベトナム語の構造を紹介する。日本語はモーラを単位としているのに対し、ベトナム語は音節を基本的な単位とし、音節の最後にも子音が来ることができ、閉音節言語である。ベトナム語の音節構成は図 3.2 の通りである。

(頭子音) + 母音 (短母音、二重母音) + (語末子音)

図 3.2 ベトナム語の音節構成

この3つの要素の中で、場合によって、最初の子音、あるいは最後の子音が見つからない場合があるが、真ん中にある母音 (一つ、または一つ以上の母音) は必須要素となっている。

例えば : ngon =ng+ o +n (おいしい)  
 hò =h + ò (湖)  
 ông =ô + ng (おじいさん)

bùng」「thênh thang」(Phi Tuyét Hinh 1990:19)。つまり、ベトナム語では、反復の形が「tù láy」(反復語)であるかどうかの判定も、日本語オノマトペの判定と同じように、様々である。本研究では、この判定についての基準を設けることを目的としているのではないため、ベトナム語における擬音語・擬態語・反復語の定義とその関係についてイメージできる範囲での簡単な紹介にとどめている。

また、中国語と同様に、ベトナム語には異なる声調がつくことによって意味が異なる。

例えば：Ngon → 【おいしい】の意

Ngón → 【指】の意

次に、ベトナム語オノマトペの形態を紹介する。

ベトナム語オノマトペは1音節からなるものと2音節以上からなるものがある。その中で、2音節からなるものは反復語と重なっている。

### 1 音節からなるオノマトペ

ベトナム語オノマトペの中で、1音節からなるものは少ない。しかも、そのほとんどが擬音語である。

- (1) Cánh cửa đồ rầm một cái. (ドアがガチャンと倒れた。)
- (2) Chẳng kịp suy nghĩ, anh ta đứng phất dậy nhường ghế cho cụ già.  
(考えることなく、彼はすつと立ち、年寄に席を譲った。)
- (3) Đột nhiên anh tát bốp một cái thật mạnh vào má cô ta.  
(突然、彼は「ポップ」(打つ時の音)と彼女の頬を強く打った。)

例(1)(2)(3)の中のおノマトペは1音節からなっている。特に、例(1)と例(3)のような、1音節の擬音語が文中で使われる時は「một cái (～という音を立てて)」という言葉と共起することが多い。

### 2 音節からなるオノマトペ

2音節からなるベトナム語オノマトペはほぼ「từ láy (反復語)」と重なっている。Đỗ Hữu Châu (1999)によると、ベトナム語の「từ láy (反復語)」は様々の反復造語法があるが、主な反復造語法は以下の通りである。

#### ① 完全反復 (ここでは、AAの形と名付ける)

第2の音節以降が第一の音節をそのまま反復する(イントネーションだけが異なる場合がある)。

- (4) Chong chóng quay vù vù. (風車がヴーヴー(回っている時の音)と回っている。)
- (5) Đôi giày này vừa khít khít. (この靴はちょうぴったりしている。)
- (6) Miếng thịt sờ vào thấy nhèo nhèo thế này chắc không còn tươi nữa.  
(触るとこんなに弾力性がない肉だから、もう新鮮じゃないでしょうね。)

例 (4) (5) (6) の中のオノマトペは2音節からなるが、第2音節が第1音節をそのまま反復するか、あるいは、第2音節の声調だけが異なる。

## ② 頭子音が反復される

- (7) Sách đã được xếp ngay ngắn trên giá sách.  
(本棚に本がきちんとと並べてある。)
- (8) Cô ấy ngồi thần thờ một mình nhìn ra xa.  
(彼女はちょこんと座り、遠くを眺めている。)
- (9) Bọn trẻ con chạy rầm rập ngoài hành lang.  
(子どもたちが玄関をバタバタと走っている。)

例 (7) (8) (9) のオノマトペは2音節からなっているが、第2音節の最初の子音が第1音節の最初の子音と同じである。

## ③ 音韻の部分が反復される。

- (10) Mẹ đi chợ về bé lon ton chạy ra đón mẹ.  
(お母さんが買い物から帰ってきたので、子どもがとことこと出て迎えた。)
- (11) Cụ già chống gậy bước lom khom.  
(年寄が杖を持って、背中を丸めながらとぼとぼと歩いていた。)
- (12) Trên bếp củi nỏ lép lép (暖炉でまきがばちばちと燃えている。)

例 (10) (11) (12) の中のオノマトペも2音節からなるが、第2音節の音韻（最初の子音以外の部分）が第1音節の音韻と同じである。

## 3音節、または4音節からなるオノマトペ

ベトナム語オノマトペの中にも、3音節または4音節からなるものがあるが数は多くない。この場合、元になるAA型のものをもう一回反復することにより意味を強化することができると思われる。3音節のオノマトペの場合、真ん中にある2音節目の形が少し変わることがある。

- (13) Nhẽo nhèo nhèo ← nhẽo nhèo (柔らかく弾力性がない感じ)
- (14) Sát sàn sát ← sát sát (場所がすぐ隣、あるいは、時間がちょうぎりぎりな様子)
- (15) Khít khìn khịt ← khít khịt (とてもびったりしている様子)
- (16) Lơ thưa lơ thơ ← lơ thơ (髪の毛が薄く、数が少ない様子)
- (17) Đu đưa đu đưa ← đu đưa (ゆらゆらしている)
- (18) Lơ ma lơ mơ ← lơ mơ (しっかりと理解できず、ぼうっとしている様子)

例 (13) (14) (15) は3音節からなるベトナム語オノマトペの例で、その中で第2音節は残りの2音節と同じ時があれば、音韻だけが異なる時もある。例 (16) (17) (18) は4音節からなるベトナム語オノマトペであるが、もともとの2音節のものよりリズム感が響き、意味が強調されると思われる。もともとの2音節がAB型とすれば、4音節はACABという形になる。そして、Cの子音はBの子音と同じであるが、Cの音韻が/a/になる。

### 3.1.3 ベトナム語オノマトペの用法

ベトナム語の「*từ láy* (反復語)」の辞書を見ると、形容詞、動詞、副詞として働いていることがわかる。

#### ① 形容詞用法

- (19) Đến giờ rồi mà cô giáo chưa đến nên học sinh cứ nháo nhào hết cả lên.  
(時間になったのに先生がまだ来ないので、学生がどたばたしている。)
- (20) Cô ta không phải nuôi con nhỏ mà lúc nào trông cũng tắt bật.  
(彼女は小さい子どもがいないのに、いつもぼたぼたしているように見える。)
- (21) thằng bé ăn xin mặc bộ quần áo rách rưới.  
(物乞いの男はぼろぼろの服を着ている。)

#### ② 動詞用法

- (22) Đề nghị từng người nói một chữ đừng nhao nhao lên như thế.  
(全員で一斉に言わないで、一人ずつ言ってください。)
- (23) Đã tặng quà để xin lỗi nhưng ngúng nguẩy mãi cô ấy mới chịu nhận lời.  
(お詫びの印にプレゼントをしたら、彼女は少しすねた後、やっと認めてくれた。)
- (24) Đừng lo, rồi cô ấy sẽ sớm ngươi ngoai thôi.  
(彼女は少しずつ忘れていくから心配しないで。)

#### ③ 副詞用法

- (25) Lén lút lấy trộm tiền khỏi ví của bố.  
(パパの財布からこっそりとお金を盗み出した。)
- (26) Người say rượu bước đi loang choang trên đường.  
(酔っぱらった人が道をふらふら歩いていた。)
- (27) Con bé nhìn chằm chằm vào người đàn ông có vẻ tinh nghi đó.  
(女の子は不審者をじっと見ている。)

### 3.1.4 ベトナム語オノマトペの音象徴性

ベトナム語オノマトペ（正確に言えば「tù láy」）の音象徴に関する研究は日本語オノマトペ程盛んになっていない。本項では、Phi Tuyết Hinh (1990) を参考に、ベトナム語の「tù láy（反復語）」の音象徴について、明らかになっている内容を簡単に紹介する。

Phi Tuyết Hinh (1990) は、反復語の音節を構成する母音、あるいは音韻はそれぞれの音声的な特徴（調音方法、調音器官）から特有の意味を象徴していると主張している。

母音は言語によって様々であるが、ベトナム語における母音は図 3.3 において、○で囲まれているものである。それぞれの母音は口の開ける度合いが異なることによって、発音する時の音量の違いによって、象徴する意味が異なるということである。ベトナム語における母音は日本語の母音より数が多いが、ここでは、すべてではなく、母音（または音韻）と意味の関連性がはっきり表れているものだけを取り上げる。

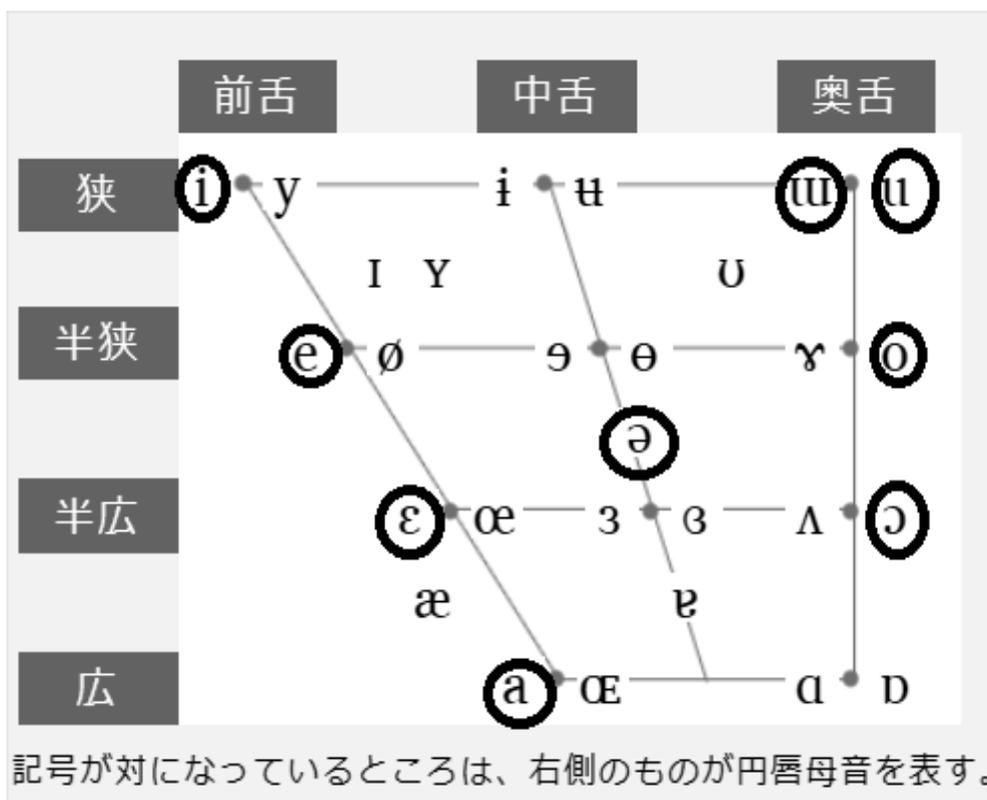


図 3.3 母音の国際音声記号（松村 1995 : 1880）

（○は、ベトナム語にある母音として筆者がつけたものである）

#### ① /i/という母音の音象徴

母音/i/は図 3.3 からわかるように、口の開ける度合いは最も狭く、音量も最も小さい母音であるため、/i/が中心となっているオノマトペは、音量が「小さい」、「空間が狭い」「小さい、細かいところまで」という意味合いをイメージさせる。以下の例で確認する。

Lí nhí : 話し声が口の中から出てこないように小さいさま。ぶつぶつ言うさま。

Mắt tí hí : 目がとても小さいさま。

Nhỏ li tí : 物事がとても小さいさま。

Nước chảy ri ri : 水が少しずつ小さく流れるさま。

Chi li : お金に細かい性格。

Tỉ mỉ : 細かいところまで気をつけながら物事を進めるさま。きちんとしているさま。

Khóc tí tí : 鳴き声が連続的で小さいさま。

## ② /iu/という音韻の音象徴

/iu/という音韻は母音 /i/と母音 /u/の組み合わせであるが、母音/i/も母音/u/も口の開ける度合いが最も狭いため、何となく「小さい」という意味合いを連想させる。しかも、母音/u/は円唇母音なので、母音/i/のもともとの音色が少し緩和され、何となく「寂しい」「じーんとなる」イメージを連想させるということである。このため、/iu/という音韻から構成されているオノマトペは「小さい」または「寂しい」という意味合いを感じさせる。以下の例で確認する。

Lửa cháy riu riu : 火がすごく弱く燃えているさま（弱火）。

Khung cảnh ðiu hiu : 悲しく寂しく風景。

Íu xiú : 何か寂しいことがあり、顔つきがしょんぼりしているさま。

## ③ /it/という音韻の音象徴

/it/という音韻は、口の開ける度合いが最も狭い母音/i/と、破裂音の/t/が語末子音となっている組み合わせである。つまり、この音韻を発音する際に、空気が狭いところを流れた後、突き当りに入っているような感じがするため、何となく「詰まっている感じ、ぎっしりしている感じ」を連想させる。以下の例で確認する。

Tịt mít : ある問題について手がかりがまったくなく、考えが突き当りにぶつかる様子。

Khít khít : 隙間がないほど、物がまんべんなく入っている状態。

Sít sít : 隙間がないほど、物がまんべんなく入っている状態。→Khít khít と置換可能

## ④ /u/という母音の音象徴

母音/u/は母音/i/と同じように、口の開ける度合いが最も狭いため、「小さい」という意味を連想させる。また、母音/u/は円唇母音かつ後舌の母音であるため、母音の中で最も音色が「暗い」と思われ、「暗い」「はっきりしていない」という意味も連想させるとされる。次の例で確認する。

Tù mù : 灯りが弱く、暗いさま。あるいは、ある分野にあまり詳しくないさま。

Lù dù : 行動は遅く、頭が明るくないさま。

Lù khù : 行動は遅く、頭が明るくないさま。→lù dù と置換可能

#### ⑤ /ung/という音韻の音象徴

/ung/という音韻は、母音/u/と語末子音のŋ/の組み合わせである。この音韻を発音する際に、口の中の体積が普通より大きく、両方の頬っぺたが膨らみ、両唇が閉じているため、「広い」または「閉じこまれている」意味合いを象徴している。以下の例で確認する。

Lùng thụng, lụng thụng : 洋服などが大きくだぶだぶしているさま。

Bùng nhúng, lúng búng : 多くのものが絡み合っ、もやもやしている状態でなかなかそこから出られないさま。

Lúng búng trong miệng : 口の中でもごもご言うさま。

#### ⑥ /a/という母音の音象徴

母音/a/は口の開ける度合いが最も大きいため、「音量が大きい」「音の強度が大きい」という意味合いを連想させる。特に、大きな笑い方を模倣する擬音語は、母音/a/で構成されることが多い。以下の例で確認する。

Ha ha, ha há, khà khà, hà hà : 大きな笑い方を表す擬音語。

Mắng ra rá, mắng sa sả : 音声の強度が大きいさま。

#### ⑦ /ə/という母音の音象徴

図 3.3 からわかるように、母音/ə/は母音の台形の真ん中にあり、口の開ける度合いも、音量も真ん中にあるため、「中途半端」あるいは「どちらにも寄らないではっきりしていないさま」を連想させる。以下の例で確認する。

Ổm ờ : 半分事実半分冗談で真面目ではない話し方。

Lơ lơ : 意識がはっきりしておらず、ぼうっとしているさま。

Lờ mờ : 灯りが弱くはっきりしていないさま。あるいは、根拠がはっきりしていないさま。

#### ⑧ /ɛ/という母音の音象徴

母音/ɛ/は非円唇母音で、発音する際に、唇が両方に広がり、口の形が平らにするため、「はっきりしない」という意味を連想させる。以下の例で確認する。

Lè nhè: 酔っぱらった時の声のように声ははっきりしていないさま。

Lè tè: 地面と近く、はっきり見えないほど低いさま。

Rè rè: 雑音が混じってはっきりしていない音。

### ⑨ /e/という母音の音象徴

母音/e/は非円唇母音で、音がかなり高い母音である。そして、母音/ε/と同じように、発音する際に、唇が両方に広がるから何となく「はっきりしない」、言い換えると「長引く」という意味合いを連想させる。以下の例で確認する。

Khệ nệ: 重い荷物を持つため、歩き方などが重そうに見えるさま。

Rè rè: 見る人がいらいらしてしまうほど、動作の進度が遅すぎるさま。

Lê thê: 物がどこまでも続くように見えるほど長すぎるさま。ずらりと～。

### ⑩ /o/という母音の音象徴

母音/o/を発音する際に、唇を丸めているため、「丸める」「曲がっている」という意味合いを連想させる。以下の例で確認する。

Co ro: 寒さのせいで、体を丸めて、じっとしているさま。

Lò mò: 暗い中で、背中を丸めながら少しずつ歩き回すさま。

### ⑪ /ãm/という音韻の音象徴

/ãm/という音韻は口の開ける度合いが広い/ã/と両唇音である/m/の組み合わせである。この音韻を発音する際に、唇が急に閉じ、口の中がしっかりと閉じ込めるため、「集中している」という意味を連想させる。以下の例で確認する。

Nhìn chằm chằm: じっと見ているさま。

Nhìn đăm đăm: 夢中しているようにあるもの、人から目が離れていないさま。

Phăm phăm: 途中に支障されることなく、動作を早く集中的に行うようす。

## 3.2 中国語オノマトペの概要

### 3.2.1 中国語オノマトペの定義

日本語では、音象徴の言葉として擬音語と擬態語の両方の語群が存在している。これに対し、中国語では、擬音語に相当する語群としての「象声詞」しか扱われておらず、擬態語という概念が存在していない（金 1989、彭 2007）。

中国語の象声詞は、現代汉语大词典编委会（2010）の『現代汉语大词典』において、「模仿声音的词（音声をまねた言葉）」と定義されている。

また、『辞海』という辞典において、象声詞は以下のように定義されている。

「象声詞即拟声詞, 模仿自然声音构成的詞。如模仿流水声的“潺潺”, 布谷鸟声的“布谷” (象声詞、すなわち擬声語は自然の音声を写し取った言葉である。水の流れる音を模倣する「潺潺」、カッコウの鳴き声をまねた「布谷」はその例である。)

さらに、『現代汉语词典 (第5版)』において、以下のように定義されている。

「模拟事物的声音的詞, 如“哗、轰、乒乓、叮咚、扑哧”。也叫拟声詞。」(物事の音をまねする言葉である。例えば、“哗、轰、乒乓、叮咚、扑哧”などである。擬声語ともいう。)

このように、中国語における象声詞の定義は、辞書によって大きな違いはないように思われる。これは日本語における擬音語、ベトナム語における「từ tượng thanh」(象声詞) の概念に共通している。

Bitex という中国語を教えるウェブで中国語の象声詞の定義と例を調べると、以下のような例が出てくる。「言語学の世界では、擬声語、擬態語を一つの類として一括してオノマトペと呼んでおり、中国語文法の世界では、普通一括して「象声詞」と呼ぶ。」

そして、日常生活によく使われる象声詞の例は以下の通りである。

哈哈 呵呵 嘿嘿 嘻嘻 格格→笑い声

哇哇→子どもの泣き声

汪汪→犬の鳴き声

呱呱→蛙の鳴き声

咚咚→ドアや太鼓を叩く音

哗哗→水の流れる音

呼呼→風の音

(出典: [https://bitex-cn.com/?m=Material&a=grammardetail&pageno=1\\_11\\_2](https://bitex-cn.com/?m=Material&a=grammardetail&pageno=1_11_2)) (2018年1月31日閲覧)

中国語における象声詞の数であるが、野口(1995)の『中国語擬音語辞典』には約425語が収録されている。そうすると、日本語の擬音語・擬態語、ベトナム語の擬音語・擬態語より遥かに少ない。理由として、瀬戸口(1984)は次のように述べている。中国語の動詞は日本語の動詞より動作を細かく表すことが多い。例えば、中国語では、「見る」に関する動詞は「看」(見る)「瞪」(じろっと見る)「盯」(まじまじ見る)「瞟」(じろじろ見る)「瞥」(横目でちらっと見る)「瞭」(さっと見る)など、多くの動詞が使われている。

このように、辞書に収録されている中国語の象声詞の数は少なく見えるが、中国語において象声詞の数は本当に少ないのだろうか。鈴木(1988)は、このことについて「日文との対訳を見ると、中文では副詞・形容詞・動詞或いは成語などに置き換えられることが多い。しかし、これは必ずしも中文の擬声・擬態語の絶対量の不足を意味しないであろう。口語では実に豊富な擬声擬態語表現を聴くことができるが、一旦文字化されると、文章語としての体

裁を整えるために削られたり、他品詞に改められたりする」と述べている。かなり最近の研究であるが、張（2010）は書き言葉における中国語オノマトペが少ない原因として、漢字で表せない音声・状態が多くあると、鈴木（1988）と同じ解釈をしている。

### 3.2.2 中国語オノマトペの形態的特徴

3.2.1 で見たように、中国語の象声詞は日本語の擬音語に相当し、日本語の擬態語の存在が無視されているように思われる。しかし、中国語には擬音語と擬態語の性質を持つ語群が両方存在している。しかも、言語学者の間では「擬態語」の性質を持つ語群の存在がはっきりと認識されている。例えば、張（2010）では、日本語オノマトペの中国語訳の類型について分析した結果、日本語オノマトペが中国語に訳される際に「中国語の擬態語に」「擬音語から転じた擬態語の意識」「同語異訳」「異語同（類語）訳」「四字熟語に」「文脈から意識」という6つの類型に訳されると指摘し、中国語における「擬態語」の語群をはっきりと取り上げている（張 2010 : 36）。

瀬戸口（1984）は日本語と中国語における擬音語・擬態語の対照研究をした結果、中国語における擬音語と状態を表す語の形を次のようにまとめた。

- ① 擬音語は主に「A 地」、「A 地一下」、「AB」、「AA」、「ABAB」、「ABCD」という形をしている。
- ② 状態を表す語は主に「AABB」、「ABB」、「AA」の形及び、成語、内容語、副詞、及び擬音語から由来したものである。

このように、瀬戸口（1984）は中国語オノマトペにおいて、形の違いによって、それが擬音語か、あるいは状態を表す語であるかある程度区別ができると主張している。

また、曹（2016）では、中国語における擬音語と擬態語の性質を持つものを一括して、中国語オノマトペという概念を取り扱い、その形態を以下の8パターンにまとめている。

- ① A 型（嘯，噤，噲，潺，哧，嗒，当）
- ② AA 型（隆隆，喃喃，簌簌，淅淅，嘎嘎）
- ③ AB 型（叮当，叮咚，咕咚，扑哧，哧溜，啪嚓，当啷）
- ④ ABB 型（滴溜溜，骨碌碌，呼啦啦，香喷喷，胖乎乎，矮墩墩，气冲冲，笑眯眯）
- ⑤ AABB 型（噼噼噼噼，叮叮当当，吱吱嘎嘎，抽抽搭搭，哭哭啼啼，絮絮叨叨）
- ⑥ ABAB 型（吧嗒吧嗒，嘀嗒嘀嗒，哗啦哗啦，咯吱咯吱，咕嘟咕嘟，呱嗒呱嗒）
- ⑦ ACAB 型（冒里冒失，秀里秀气，糊里糊涂，傻里傻气，象模象样，傻模傻样）
- ⑧ ABCD 型（丁零当啷，噼里啪啦，稀里哗啦，唏哩呼噜，稀里糊涂）

上記の 8 パターンの中で、パターン①と②は完全な擬音語で、パターン③から⑧は擬音語と擬態語の両方の性質を持っていると曹 (2016) では主張している。

このように、中国語オノマトペの形態の分類について、曹 (2016) の分類と瀬戸口 (1984) の分類との間に、相違点が見られるが、「A」「AB」「AA」「ABAB」「ABCD」「AABB」「ABB」といった形態は共通している。そして、中国語オノマトペの形態は日本語オノマトペほど複雑ではないことがわかる。

また、上記の⑧パターンのうち、パターン②④⑤⑥⑦ (「AA」「ABB」「AABB」「ABAB」「ACAB」) は何らかの形で反復形が現れることがわかる。

一方、「AA」「AABB」「ACAB」はベトナム語オノマトペにも共通して見られる反復形である。

### 3.2.3 中国語オノマトペの用法

日本語オノマトペは書き言葉的なジャンルだけではなく、話し言葉においても頻繁に使われている。これに対して、中国語オノマトペは日常会話にあまり出てこないようである。張 (2010) は中国語にもオノマトペが存在しているが、漢字で表現しにくい音声・状態が多いため、数的には日本語ほど多くない。そして、その使用は子どもじみていて、文化的レベルが低いと思われるため、書物にはもちろんのこと、大人の会話にさえ使用を避けている傾向があると述べている。

砂岡 (1990) は中国語オノマトペの用法を以下の通り取り上げている。(以下に挙げている例は、中国語母語話者で日本語教育を専攻している大学院生に作例・日本語訳をつけてもらった。)

#### (1) 独立用法

話し言葉や講談、漫才など口語に多く、強い語気に支えられる。

例：轻轻一推，嘎吱 (gazhi)，门开了。(軽く押したら、ぎいっと、ドアが開いた。)

#### (2) 連用修飾用法

口語は多く助詞が必要。オノマトペの型ごとに常伴の動量詞、動詞、副詞が見られ、音、様態の長短や単調か乱雑かなどの音声上の特徴に従い修飾語も決まった組み合わせがある。

例：除夕夜，院子里鞭炮声噼里啪啦 (pilipala) 直响，好不热闹。(大晦日の夜、庭で爆竹の音がぱちぱち響いていて、とても賑やかだった。)

### (3) 連体修飾用法

書面語は助詞の“的”（～の）なしで直接修飾できるが、口語は必要。

例：潺潺（chanchan）的溪水汇入江河。（さらさらと流れる谷川は大きな川に注ぎ込んだ。）

### (4) 述語用法

通常“的”や数量詞が必要。

例：胎动总是扑通（putong）一下。（胎動がよくどきっとしている。）

### (5) 補語用法

多く“的”や“～声”などを伴うが、重ね型はそのまま補語になる。

例：小猫喵（miao）的叫了一声。（子猫がニャーと鳴いた。）

### (6) その他特殊用法

稀に目的語や主語に立つが限定語を伴う。

例：闹钟的铃铃把他叫醒了。（「（目覚ましの）リンリンで彼は目を覚ました。」）

#### 3.2.4 中国語オノマトペの音象徴性

野口（1977）によると、中国語にも音象徴があるが、日本語のような清音と濁音の対立しているものではなく、有声音・無声音 **b・p/d・t/g・k** などのものがあり、二音節からなる擬声語の子音の対応において、同じようなものが選ばれる傾向がある（例えば、「buleng」と「puleng」のように、**b** も **p** も共に **l** を選び、各々二音節語となり、意味的側面においても、日本語の清音「batabata」と濁音「patapata」のような対立は見られないということである。

鈴木（1988）によると、中国語の象声詞の反復形は具体的にどんな状態の違いを表すかについての記述がないと述べている。そのため、鈴木（1988）は各種の辞書から例文を収集し、象声詞が使われている場面に注目しながら、その描写特徴、いわゆる中国語オノマトペの音象徴<sup>7</sup>を検討している。その一方で、日本語オノマトペとベトナム語オノマトペの音象徴については、1980年代の終わりごろに、研究が（日本語に関して Hamano（1986）、ベトナム語に関しては Phi Tuyét Hinh（1990）がその代表である）のに対し、中国語オノマトペの音

<sup>7</sup> 音象徴に関して、日本語の場合は、主な母音、子音とそれが象徴している意味について言及している。ベトナム語の場合も、音と意味の関係がはっきりしている母音と音韻の音象徴について言及している。中国語の場合、具体的な母音、音韻の音象徴を言及しているより、反復形がない時とある時の表現効果に着目している。

象徴はあまり重視されていないと言えよう。この理由は、中国語母語話者にとって、オノマトペが口語的で、文化的レベルが低いという偏見によるものだと考えられる。

本項では、中国語オノマトペの音象徴について、瀬戸口（1982）と鈴木（1988）が取り上げた内容をまとめる。（以下に挙げている例は瀬戸口（1982）か、日本語と中国語対照研究会編（1978）の『日本語・中国語対応表現用例集：2』（以下、用例集と省略する）か、または作例である。（ ）の中にある日本語訳は日本語教育を専攻している中国語母語話者の大学院生につけてもらった。

### ① 「A パターン」

A パターンは、「一声」「一刀」「一鞭子」などの数量詞を伴うものが多く、短かい音声・状態を描写する。

例：「嘎一」的一声巨响，大部分乘客从座位摔到了车板上（瀬戸口 1982：93）  
（「がーん」というすごい衝突音と共に乗客のほとんどが座席から投げ出された。）

A パターンのもう一つの特長として、「忽地...起来」「忽然...起来」「一 悚...了」などの副詞と共に起る時に、突然発生した音、または様子を描写する。

例：由三忽然哇地一声哭了起来（用例集：p.169）  
（由三は急にワッと泣き出した。）

### ② A パターンの重畳

実際に発生した音声そのまま反復しても、A パターンの単純な重畳型だと考えられる。継続時間はA パターンのものより長いものの、その緊迫感はA パターンと共通する。

例：小鸟啾啾啾地在枝头啼叫。  
（鳥が梢でちちちちとさえずっている。）

### ③ AA パターンの描写特色

現代中国語で単音節の重ね型は、名詞量詞、形容詞、動詞、副詞などにも最もよく見られるタイプである。象声詞も古代から AA パターンが一般的で、単音節に分けられず、「然」などの語尾が不要なことから、原初から AA パターンであったと考えられる。これら古代より授用される象声詞は、現代語のそれのように声調が弱化することもなく、固有の音声と漢字をもち、代表する擬音、擬態も限定された「定型象声詞」である。「疾言為一」「徐言為二」といわれるように、古くから AA パターンの象声詞は、redundancy を表現する手段として用いられていた。原則として一語一漢字が形、音、義 の三情報を荷う経済性を重視する漢語

にあつて、二音節重複という繁鎖の生み出すゆとりと冗長は、現代語の AA パターンの中にも生きている（鈴木 1988 : 127-128）。

- 例：淙淙水声（さらさらと流れる水の音）  
潺潺流水（小川がさらさらと流れていく）  
喃喃自語（ぶつぶつ独り言を言う）  
颯颯秋风（秋風がさわさわと吹く）  
簌簌流泪（涙がぼろぼろと流れ落ちる）

#### ④ AB パターン

AB パターンが使われる場面は A 式と似ている。「開始相」の「起...」、「忽然」「只...」「一...就」などで切迫感を持つ副詞と一緒に結びつき、「一声」などの数量詞が頻繁に用いられる。

- 例：只听到外面乒乒一声，似乎是什么东西被打破了。  
（外でがちゃんと音がして、何かが碎かれたようだ。）

この AB パターンは、A 式と大きな違いは見られないが、「緊密につながった一つの音」を描写する。

#### ⑤ ABB パターン

使用される場面は、A パターン、AB パターンと同様、継続を表す成分と共起し、「一声」「一陣」などの数量詞もつく。A パターン、AB パターンと同様、短かい音を表わすことがわかるが、AB パターンとの差異は BB となった分だけ余韻が長い点である。しかし ABB でまとまった音声であるため、ABAB パターンに比べ緊迫した音、間隙を入れない連続した音である。次の 2 例を比較するとよくわかるだろう。

- 例 a：砂石从山上哗啦哗啦地流了下来。  
（土砂が山の上からざあつと流れ落ちてきた。）  
例 b：大雨哗啦啦地落了下来。  
（大雨がざあざあ降った。）

同様に「轰隆轰隆」よりは「轰隆隆」のほうが近くで鳴る音を表す。『現代漢語詞典』は、ABAB パターンと ABB パターンを替き換え可能性とする記述が多いが、両者の音声描写の特徴は厳密に言えば異なる。

#### ⑥ ABAB パターン

ABAB パターンは継続音にゆったりしたひびきがある。

例：他一边跑，一边哼哧哼哧地喘着粗气。  
(彼はふうふうと喘ぎながら走っている。)

ABAB パターンの反復性、弱化性を示している。従って概念化の強い「暖喋」「昵喃」「唧啾」などはこの型をとれないものが多く、AABB パターンとなる。

#### ⑦ AABB パターン

ABAB パターンが概念語化した語彙を排除するのに対し、AABB パターンは反対に象声詞の聴覚映喩効果を高める時に実詞化する。従って、純粹の擬音語は AB パターンから AABB パターンが不成立のものがある。また、AB パターンがなく AABB パターンのみ成立する語には次のものがある。

例：醉汉在路上摇摇晃晃地走。(道でよっぱらった人がふらふら歩いている。)

#### ⑧ AAB パターン

AAB パターンの BB が余韻を引くのに対し、AAB パターンの AA は B とのコントラストの強調により、意外で破格な音を表わしている。

例：叮叮当，叮叮当，铃儿响叮当。  
(かちん、かちん、ベルが鳴る。)

#### ⑨ ABBB パターン

現代語のみ、しかも非定型の擬音語のみにみられるタイプである。

例：他哇哈哈哈哈的一阵狂笑。  
(彼はははははと爆笑した。)

#### ⑩ ABCD パターン (および A 里 CD、ABCD、A 里 AB パターンなど)

「ABCD 式」には「丁零当啷」「兵零兵郎」「丁玲奈琉」「喊吃咋噤」「噤里啪啦」「叽里呱啦」などがある。これらの音の組み合わせをみると「ABCD 式」は B、D 或いは A、C が双声疊音の関係を成している場合が多く、全く異質の音の羅列ではない。更にこれが B がわたり音の「里」になれば A 里 CD 式に AC が同音ならば A 里 AB 式になるし B、D が同音であれば ABCB 式となる。以下で描写特徴を確認する。

例：脑袋被爸爸噤里啪啦地敲打了几下。

(頭はぼかぼかと父に叩かれた。)

### 3.3 第3章のまとめ

以上、ベトナム語オノマトペと中国語オノマトペの概要について見てきた。まとめると、以下の通りになる。

ベトナム語においても中国語においてもオノマトペという語群が存在している。具体的に、ベトナム語においては「*từ tượng thanh*」(象声詞)・「*từ tượng hình*」(象形詞)という日本語の擬音語、擬態語に相当する語群が存在している。これに対して、中国語においては、「象声詞」という日本語の擬音語に相当する語群しか存在せず、日本語の擬態語に相当する語群も存在しているが、ほとんどの場合、形容詞として認識されているようである。

擬音語、擬態語についての定義と呼び方であるが、ベトナム語においても中国語においてもオノマトペの定義と呼び方が統一しているように思われる。

オノマトペの数量であるが、ベトナム語オノマトペは数多く存在し、オノマトペが豊富で頻繁に使われている。これに対し、中国語の場合、辞書に収録されているのは擬音語だけで、しかも、数がベトナム語に比べて非常に少ない。中国語に代替の言い方があることと擬態語が収録されていないことが原因だと思われる。

オノマトペの形態であるが、ベトナム語オノマトペには1音節のものと2音節以上のものがある。そして、2音節以上のものの中では、何らかの形の反復形を持っている語が圧倒的に多い。また、ベトナム語において、「*từ láy* (反復語)」という語群が数多く存在している。ベトナム語の「*từ láy* (反復語)」のすべてがオノマトペではないが、ベトナム語オノマトペの大多数が「*từ láy* (反復語)」である。ベトナム語は音節で区切られ、「語頭子音+母音+語末子音」という構造を持っている。反復形の種類として、音節をそのまま反復させるか、語頭子音の反復か、音韻のところの反復がどれかの形をとっている。このような反復造語法による擬音・擬態効果についての研究が進んでいる。

一方、中国語オノマトペも1音節からのものと2音節以上のものがある。そして、形態によって擬音語か擬態語か区別することができるようである。中国語オノマトペの中でも何らかの形の反復のものがある。中国語において、反復によって「物事の状態が強化される」ということは研究されているが、これについては後述する。

オノマトペの用法であるが、ベトナム語オノマトペは「形容詞」「動詞」「副詞」として働くほかに単独で使うこともできる。中国語オノマトペは「連用修飾」「連体修飾」「述語」「補語」として働く他に、単独で使うこともできる。

オノマトペの形態とその意味との関連性であるが、ベトナム語オノマトペの場合、いくつかの母音、音韻とそれが表す意味との間で関連性がはっきりしている。中国語オノマトペにおいて、オノマトペ全体の形態によって意味合いがどう変わるかという程度の研究はあるが、具体的な音象徴の研究は、管見の限りではないように思われる。

日本語学習者の日本語オノマトペ産出の実証的研究  
—ベトナム語母語話者と中国語母語話者を比較して—

## 第4章 先行研究の概観と本研究の位置づけ

本研究は、ベトナム語母語話者と中国語母語話者を比較して行う日本語学習者の日本語オノマトペ産出の実証的研究である。日本語オノマトペは一般に外国人学習者にとって習得が難しいと言われている。世界の言語には日本語のようにオノマトペが豊富に存在している言語とそうではない言語があり、母語別の日本語学習者は、それぞれの母語の影響を受けながら、日本語オノマトペを学習していくため、それぞれの学習過程が異なると思われる。本研究は、母語にオノマトペが豊富な言語の一つであるベトナム語を母語とするベトナム人学習者と、母語にオノマトペが少ない言語の一つである中国語を母語とする中国人学習者のそれぞれが、日本語オノマトペをどの程度適切に使用できているかという日本語オノマトペの使用実態、そして、未知の日本語オノマトペをどのように創作するかという産出に見られる傾向を明らかにした上で、それぞれの母語における母語のオノマトペ使用実態を調査し、日本語オノマトペの学習と産出における母語の転移について探る。最後に、ベトナム人学習者と中国人学習者の日本語オノマトペ教育のために有益な示唆の提案を考える。つまり、本研究は日本語学習者による日本語オノマトペの使用実態・産出実態、それぞれの母語におけるオノマトペの使用実態を明確にした上で、日本語オノマトペの教育に有益な示唆を提案することを目的としている。そのため、本章では、先行研究として、日本語オノマトペの教育に関する研究を紹介した上で本研究の位置づけについて述べる<sup>8</sup>。

まず、日本語オノマトペの教育という考え方であるが、

$$\boxed{\text{「教育」} = \text{「指導」} + \text{「学習」}}$$

という三上（2007b）の考え方と同じ捉え方を採る。本章では、日本語オノマトペの指導と学習の両方に関する研究の流れを概観する。具体的には、表4.1の通りである。

表4.1 日本語オノマトペの教育に関する先行研究の概要

日本語オノマトペの教育	
指導	学習
・オノマトペ指導に関する考え方	・学習が困難である原因
・オノマトペ指導の現状	・習得状況に関する実証研究
・指導における問題点	・学習支援・教材開発
・基本語彙選定	
・指導法の提案	

<sup>8</sup> 日本語オノマトペの形態的・統語的特徴、音象徴に関する先行研究は第2章で、ベトナム語と中国語におけるオノマトペの形態的・統語的特徴、音象徴に関する研究は第3章で紹介しているため、本章では触れないことにする。

#### 4.1 日本語オノマトペの指導に関する先行研究

##### 4.1.1 日本語オノマトペの指導に関する2つの考え方

本項では、日本語オノマトペ指導に関する2つの考え方とそれぞれの考え方の問題点について言及する。秋元(2007)は「日本語教育におけるオノマトペの位置づけ」について論じている。秋元(2007)は、日本語オノマトペの指導の考え方として、以下の通り指摘している。

一つ目は初級レベルから基本的なオノマトペを導入していくべきであるという考え方である。そうすれば、学習者が中・上級レベルになってもオノマトペに戸惑うことはなく対応できるようになるため、教師は積極的にオノマトペ学習の支援に取り組むべきである。中・上級になったら、初級で学習したオノマトペを整理し、体系化して学習者のオノマトペ習得を支援すべきである。

もう一つは、日本語は他の言語に比べて語彙が多く、語彙の習得にかける学習者の負担も大きいのに、数も多い上に、付随的な要素であるオノマトペを学習させる必要はない、特に、初級レベルでは、基本語彙を適切に文型の中で使えるような学習を優先させるべきであるという考え方である。この理由として、オノマトペは感覚的であるため、学習者が微妙なニュアンスの違いまで理解し、使用できるようになるのは難しい。それにオノマトペを用いなくても表現できることが多いのだから、中・上級レベルで教材に出てきた時に学習し、最低限必要なオノマトペだけが理解でき、使用できるようになればよい(秋元 2007: 30)ということが挙げられている。

このように、オノマトペを日本語教育に導入すべきかどうかについて二つの考え方がある。確かに、オノマトペはショックを表すのに「が一ん。」だけでも通じるため、初級から導入すると、文型の練習を怠けてしまう心配もある。しかし、オノマトペは、感覚を伝えるのに優れた音象徴語で、大事な語群であり、表現効果が非常に高い語群であるため、早いタイミングから、学習者に親しんでもらい、興味を持たせておけば、中・上級の段階になっても、生教材にオノマトペが数多く出てきても面倒くさいと思っただけで学習を怠ることはある程度予防できるのではないかと考える。なぜなら、初級日本語学習者は、新しい語彙に対する感度が高く、吸収が速いと思われるからである。オノマトペのような音象徴の語彙は音的に印象が深いものであるため、早い段階から導入すると、興味を持たせられ、楽しい学習につながるとされる。これに関して、生越(1989)は日本語の音に親しむという点から、さらに初級の段階で日本人の会話を聞くことに重点を置くなら、もう少し初級の段階でいくつかの擬音語を取り上げてみてもいいのではないかと指摘しているが、オノマトペは、他の語彙と異なり、リズムが印象的な言葉であるため、この「日本語の音に親しむ」というのは、日本語オノマトペに興味を持たせるために大事な点であると思われる。

日本語教育にオノマトペを積極的に導入するという三上(2007b)の主張は次のようにまとめることができる(三上 2007b: 193)。

- ① 学習者が日本語学習の早い段階からオノマトペに親しむことができるよう、初級の後半からオノマトペ学習を意識的に取り入れていく。
- ② はじめから音と意味または、イメージの関連性を意識させる。
- ③ 様々なメディアを通して、オノマトペに触れる機会を作り、オノマトペの存在を知らせるとともに興味を持たせるようにする。
- ④ 使用している教科書や教材にオノマトペが出てきたら、意味や使用場面、使用の対象等で関連すると思われるオノマトペを2, 3紹介する。
- ⑤ オノマトペのうち、特に「わくわく」「がっかり」「ぼんやり」「うっかり」など金田一(1978)のいうところの「擬情語」は、ほかの語による言い換えが難しく、人の感情や感覚を表現する上で必須である。これらの語の重要性に注目させ、早い段階から学習の機会を設けるようにする。

このように、三上(2007b)もオノマトペを日本語教育の早い段階から取り入れるべきであると提言している。筆者も、ベトナム国内の日本語教育の現場で教師として働いていた経験があり、その立場からオノマトペを日本語教育に積極的に導入すべきだと考えている。

#### 4.1.2 日本語教育におけるオノマトペの位置づけとオノマトペ指導の現状

まず、オノマトペが日本語教育にどのように位置づけられているか見てみる。日本語教育学会編(2005)の『新版日本語教育辞典』(2005)では、「語の分類」の中で、「和語」「漢語」「外来語」「混種語」「文法」「数字」「数助詞」と並び「音象徴」(オノマトペ)が入っている。また、日本語教育関係者ならだれでも持っている日本語教育学会編(1990)の『日本語教育ハンドブック』では、日本語の語彙を教育するに当たり重要と考えられる11項目が挙げられるが、その5番目は「擬音語・擬態語に富み、特に後者が多いこと。」という内容である。

このように、オノマトペは日本語教育、特に語彙教育において重要な項目となっている。しかし、これまでの日本語教育におけるオノマトペの研究は、オノマトペの言語的な特徴、あるいは形態・統語的特徴、または日本語と学習者の母語におけるオノマトペ特徴の対照研究が主に行われたきたようである。本格的なオノマトペの教育に関する研究は、ここ十数年注目されつつあるものの、まだ不十分(西村2009:98)であり、オノマトペが積極的な対象となっていないようである。

阿刀田・星野(1989)は、日本語オノマトペの教育現状について「日本語指導の現状においては初級段階では音象徴は指導要領の枠組みに位置付けられていないように思う。たまたま取り上げられる場合にもその特殊性というより遊戯性を強調したり演出したりして紹介されることが多く、教材としての本格的な取り組みがおろそかにされているきらいがある。音象徴語が副用語としてきわめて端的に具体的な機能を備えていることをふまえ、ひとまとまりの文の構成にどんな役割を果たすかという観点からこれの指導を工夫すれば日本

語の理解に有効かと考える。」と述べている(阿刀田・星野 1989: 30)。これは、重要な語群である日本語オノマトペが日本語教育において積極的に指導されていないという三上(2007a)の考えと同様である。

実際、日本語オノマトペが日本語教育において重視されているかどうかについては、日本語の教科書においてオノマトペがどのように取り上げられているかを調べることにより明らかにすることができる。生越(1989)は、日本語教科書におけるオノマトペの取り扱い状況を調査し、初級の教科書に例として取り上げられているのは「しっかり」「だんだん」「どんだん」「はっきり」「ゆっくり」の5つの語だけで、しかも、これらの語は学習者にとってオノマトペというより、一般の副詞に見える語であるということ指摘している。そして、その要因について、「初級の段階では大体どのテキストもまず学習すべき必要な表現があって、語彙はそれに付随する。意志の伝達に必要な最低限に近いものを学習者は学ぶことになる。従って、擬音・擬態語という、感覚的・心情的な表現を表すものはそこから除外されやすいのであろう。」(生越 1989: 75)と述べている。

同様に、日本語教科書においてオノマトペの取り上げられている状況を調べている研究として、渡邊(1997)が挙げられる。渡邊(1997)は、12種類の初級教科書、9種類の中級教科書を調査材料とし、オノマトペがどのような説明の仕方で導入されているかを分析している。その中でオノマトペが積極的に取り扱われているのは、初級レベルでは『JAPANESE FOR TODAY』の1冊、中級レベルでは『現代日本語コース中級 I,II』『日本語会話中級 I&II』『中級の日本語』の3冊で、合計で4種類だけであることを明らかにしている。これは、日本語教育、中でも初級と中級においてオノマトペが重視されていない証拠であり、学習者がオノマトペをなかなか理解できない、使用できないということにつながっていると考えられる。

#### 4.1.3 日本語オノマトペの指導に関する問題点

日本語オノマトペ指導に関する問題点として、オノマトペの概念の不統一、日本語教科書に取り上げられる時の問題点、学習者に教える時の問題点がある。

まず、オノマトペという概念の不統一であるが、オノマトペという概念が統一されていない。辞書によって、研究者によって見解が統一されていないように思われる。特に、「ちょっと」「だんだん」「やっ」と「きっと」「ゆっくり」「しっかり」など一般的な副詞に思われやすいものに関する認定は日本語母語話者によってまちまちである。しかし、よく考えれば、このような認定が不一致のオノマトペは一般的な副詞に思われる語がほとんどで、つまり、一般の語との境界に近い語だけで、それほど多数ではない。

次に、日本語教科書に取り上げられる時の問題点であるが、4.1.1 からわかるように、現在においても、各種日本語教科書にオノマトペが積極的に取り上げられていないのが現状である。しかも、阿刀田・星野(1989)が「オノマトペが日本語教科書に取り上げられる場合もだいたい短文に区切られているために全体的様相の想定がしにくく、その音象徴語

がそこに位置づけられている必然性が理解できぬままに機械的に意味だけを承知させられて終わる結果になりやすい。」と指摘している（阿刀田・星野 1989 : 32）が、まさにその通りだと考える。

この問題点の改善方法として、阿刀田・星野（1989）は「ある程度の長さの流れのある叙述文中で音象徴語をとらえさせ、前後の関係を見定めながら理解に導くのが妥当だと考えられる。」と述べている（阿刀田・星野 1989 : 32）が、これは生越（1989）の主張と同様である。

三つ目は、学習者にオノマトペを教える時の問題点であるが、生越（1989）は、朝鮮語を母語とする学習者を教える教育現場の経験から、朝鮮語も日本語と同様、オノマトペが豊富な言語であるが、「それぞれお互いに複雑であればあるほどずれも生じうる」と述べている（生越 1989 : 71）。このように、朝鮮語のようなオノマトペが豊富に存在する言語を母語とする学習者は、日本語オノマトペを習得する際に、必ず有利であるとは限らない。確かに、母語においてもオノマトペが豊富に存在する言語を母語とする学習者は日本語オノマトペを学習する時に一見有利であると感じがちであるが、実際に生越（1989）が指摘しているように「多対多」という複雑さから習得を妨げる可能性は十分ありうる。しかし、母語にオノマトペが豊富に存在していることこそ、学習者はオノマトペに対する親しみをもち、しかも、日本語オノマトペと意味がある程度対応する語や言い回しが多ければ多いほど、日本語オノマトペの学習に強みを持っているのではないかと筆者は考える。

#### 4.1.4 オノマトペ基本語彙の選定

4.1.1 では、日本語オノマトペ指導に関する考え方として、「初級から積極的に指導すべき」という考え方と「初級では指導すべきではなく、中・上級になって教材に出てきた時に最低限必要なオノマトペを理解できるように指導すればいい」という日本語教師の間での 2 つの考え方を紹介した。いずれにせよ、中・上級になってもオノマトペを指導することは避けられない。しかし、日本語オノマトペは数が多く、バリエーションも多いため、日本語能力試験にある基本語彙のようにすべて指導することは不可能である。そうすると、学習者に教える際には、どのようなオノマトペを優先的に教えるべきかを考える必要がある。つまり、日本語教育のためのオノマトペの基本語彙を選定しなければならないわけである。オノマトペの中で、多くのジャンルの言語資料を調査し、使用頻度に着目し、使用頻度が上位のオノマトペを日本語教育に優先的に取り入れるべき語として提案している研究の流れがある。使用頻度のこのオノマトペの基本語彙選定に取り組んでいる研究として、玉村（1989）、三上（2007a）、陳（2007）、西村（2009）、獅々見（2016）、Nguyen（2012）などが挙げられている。

玉村（1989）は、国立国語研究所報告 78『日本語教育のための基本語彙調査』（1984 年秀英出版）から日本語教育において重要なオノマトペとして 60 語を抽出し、18 語を最重要語、42 語を重要語としている。しかし、60 語の中には、「ちょうど」「もつと」「ちよつと」

「やっと」「ようやく」といった、母語話者にとっても学習者にとってもオノマトペとして認識されにくいものがいくつか含まれている。

三上 (2007a) は、日本語教育において、数多くある日本語のオノマトペの中で、どのようなオノマトペを教えるべきかという問いをきっかけとして、日本語教育における基本語彙を選定した 8 種の文献の中で 3 文献以上に出現したオノマトペをピックアップし、中級までに学習対象となるオノマトペがどのくらいあるかを調べている。その上で、いくつかの基準によって絞り込み、日本語教育のための基本の 70 語のオノマトペ選定を行っている。三上 (2007a) が選定した 70 語のリストにも「ちゃんと」「しっかり」「すっかり」「ゆっくり」のような一般的な副詞に思われやすい語が入っている。そして、これらの語はあくまでも学習者と教師のためのリソース型教材を作成する目的のために選定したものであって、中級までにすべて学習しなければならないという性格のものではないと述べている (三上 2007a: 39)。確かに、このリストは幅広い言語資料から選出された語で、日本語母語話者に広く頻繁に使用されている語であるため、理解し・使用できるようになれば日本人とのコミュニケーションに役に立つことは間違いないが、いつのタイミングに導入すべきかという具体的な導入段階がはっきりしていない。

陳 (2007) は、日本語教育において擬声語・擬態語を提出する順序を提案することを目的としている。陳 (2007) は、2005 年の国立国語研究所によって公開された「2005 年現代雑誌 200 万字言語調査語彙表」から副詞用法の擬声語・擬態語を抽出し、改めて語彙表を作ることにより、オノマトペ教育に適した語彙を高度、中度、低度使用層の 3 段階に分け、それぞれの語彙を日本語教育の初級、中級、上級の順に提出できるようリストを提案し、それぞれの使用層の特徴を検討している。具体的には、「高度使用層」は「しっかり」「ずっと」「はっきり」などといった語で、使用頻度が 13~135 で、見出し語が 39 語である。「中度使用層」は「すすく」「にっこり」「びしゃり」などといった語で、使用頻度が 2~12 で、見出し語が 218 語である。「低度使用層」は「びりびり」「わんさか」「びゅんびゅん」などといった語で、使用頻度が 1 で、見出し語が 237 語である。このように、陳 (2007) は、日本語教育に提案すべきオノマトペとして、初級・中級・上級の段階を明確に指摘しており、貴重なデータであるが、各層のオノマトペを見ると、オノマトペの頻度の幅が広く、しかも、中級と上級へ提案しているオノマトペの数が多すぎて、導入しきれぬか疑問の余地がある。

上記の先行研究は、いずれも多く言語資料や辞書を用いた量的なアプローチの研究である。また、これらの研究は書き言葉中心であり、実際の日常生活に出てくる話し言葉はほとんど入っていない。学習者が日本での生活、あるいは日本人とのコミュニケーションにすぐに役に立つ点を考慮すれば、日本語母語話者同士の日常会話を調査し、そこに頻出するオノマトペを選出する必要があると思われる。

西村 (2009) は、「BTS (Basic Transcript System) による多言語話し言葉コーパス 日本語会話 (1、2) 2007 年度版」を対象に、4 つの会話パターン (友人同士 (母語話者同士、母語話者と非母語話者)、初対面 (母語話者同士、母語話者と非母語話者)) における出現頻度が

高いオノマトペ上位 10 語を抽出した上で、日本語母語話者と学習者のオノマトペの使用状況を明らかにしている。しかし、対話の時間とテーマが限られるため、母語話者と非母語話者のオノマトペの使用状況はある程度明確になったものの、出現するオノマトペの述べ語数と異なり語数が少なく、実際の日常会話におけるオノマトペの使用状況を反映しているかということについては疑問の余地がある。

Nguyen (2012) は、日本人の日常会話に頻出するオノマトペを理解し、使えるようになれば日本人との日常会話にすぐに役に立つという観点から、日本人の日常会話を収録する名大会話コーパスを調査し、その中で、オノマトペの代表的な用法である副詞用法のオノマトペを抽出し、上位 60 語のオノマトペを初級日本語教育に取り入れるべきオノマトペとして提案している。日本語母語話者の日常会話のデータを収録しているため、実用性があり、学習者にすぐ役に立つようなオノマトペのリストは貴重なデータとして評価できる。しかし、これらのオノマトペは日本語母語話者の日常の雑談に頻出する語であり、海外に住んでいる学習者は、これらのオノマトペを学習しても、使うチャンスがあるかどうかは明確に判定できないところがある。

獅々見 (2016) もオノマトペの選定という面では上記の先行研究と共通しているが、これまでのオノマトペ選定を行う研究では出現頻度だけに注目しているのに対し、獅々見 (2016) はオノマトペの会話教材を提案することを目標に、前段階として不可欠である会話におけるオノマトペの基本語彙選定を行っている。選定の基準として、出現頻度調査に加えて、「親密度調査」も行い、両方のデータを統合させる手法を採っている点で評価できる。獅々見 (2016) が採用する「親密度」という尺度であるが、金庭ほか (2006) において既に言及されている。金庭ほか (2006) では、ある語に対して馴染みがあるかどうか 18 歳以上の日本語母語話者 40 名が 7 段階で評価を行った結果の平均値を計算し、高いものを「親密度の高い単語」として基本的な語彙であると述べている。

以上のように、どのようなオノマトペを優先的に導入すべきかというオノマトペの基本語彙選定の研究動向を紹介してきた。しかし、選定できた語を学習のどの段階に、どう教えるかということについてはまだ明確には検討されていない。

#### 4.1.5 オノマトペ指導法に関する提案

これまで、オノマトペは学習者にとって習得が難しいことがしばしば指摘されているが、その中で、少ないながら、オノマトペの指導方法の提案が見られる。

玉村 (1989) は日本語教育の初級・中級に必要な音象徴 60 語を示した上で、次のように、音象徴語の指導方法を提案している。

- ①「こってり」は「味・色・程度」、「とぼとぼ」は「歩く・落胆・元気でない」と一緒に教えるなど、音象徴語と共起する語を教えることが重要である。
- ②語義範疇を指示する際に、第一義をまず考えるべきである。

- ③音象徴語の音と意味の関連性についての指導をすることが有効である。
- ④選定できた音象徴語の中で、最重要語が 18 語、重要語が 42 語、合計 60 語が日本語教育において扱われるべきである。

生越 (1989) は、母語にオノマトペが豊富に存在している朝鮮語を母語とする学習者にオノマトペを教える時の問題点を指摘すると同時に、その指導法の提案もしている。具体的には、何よりオノマトペが音的印象を重要視する語彙であるため、指導するには単に朝鮮語の単語と置き換えるのではなく、意味論・語彙論の観点から体系的に教える必要があると述べている。言い換えれば、日本語オノマトペを学習者に教える際に、学習者の母語に置き換えるという従来の直説法を用いるのではなく、当該のオノマトペの意味・用法がわかるような状況・場面的な情報を提供する必要があるということであるが、筆者はこの考え方に強く賛成する立場にある。

金 (1989) は、中国人学習者に対するオノマトペ教育の現状を分析した上で、次の 2 つの教育方法を提案している。一つ目は、特別講座あるいは選択科目を設ける。講義の内容として、擬音語・擬態語・擬情語などに分けて講義し、この方面の語彙が多いことを強調し、認識させ、ほかの単語と同じように暗記させる。文法の面からも講義する。二つ目は、ゼミナールのような形でディスカッション、演習、実践を行う。方法としては、テーマを出し、学生にそれぞれ準備をさせて討論させる。それから日本語を中国語に訳したり、中国語を日本語に訳させて理解させる。また、擬音語・擬態語を使った句と使っていない句を比べさせながら理解させる。

彭 (2007) は、大学学部時代、通訳の仕事をしていた際に、最も困惑したのは日本語オノマトペであるという経験から、以下の通り、外国人学習者向けの有効なオノマトペの指導法を提案している。(彭 2007 : 49-52)

- ①意味上、類似するオノマトペ、意味的に近いオノマトペをセットで教えることが効果的である。意味上の違いがあれば、丁寧に説明することも必要である。例えば、誉め言葉として、「日本語がすらすらですね。」「日本語がぺらぺらですね。」のどちらでも言えるが、「言っははいけないことをぺらぺらしゃべってしまった。」のような「ぺらぺら」は別の意味であるということも付け加えて説明しておく必要がある。
- ②混合しやすいオノマトペをセットで教えることが効果的である。例えば、「げっそり」と「ほっそり」、「ぺらぺら」と「べらべら」、「じろじろ見る」と「まじまじ見る」などがその例である。
- ③清濁の語をセットで教えることが効果的である。「汗がたらたら流れる」と「汗がだらだら流れる」、「風がびゅうびゅう吹く」と「風邪がびゅうびゅう吹く」の場合、清濁音のセットは強調関係を示すので説明しやすい。

- ④中国語のオノマトペと異なる意味、あるいは中国語に当てはまらないオノマトペを重点的に教えることが重要である。例えば、擬音語で、日中の違いがある例としてよく取り上げられるのは、鶏の鳴き声「コケッコウ」である。中国語では「喔喔喔—」（オオオ—）という。
- ⑤オノマトペを用いる文と省略に注意を喚起する必要がある。「漫画にべったり」「勉強さっぱり」「取材がっちり」のような簡潔な表現が要求されている新聞のタイトルの例である。
- ⑥ 使用頻度の高いオノマトペを重点的に指導すべきである。

彭（2007）においても使用頻度の高いオノマトペの指導を提案しているが、これは 4.1.4 で述べた主張と同じであるため、これ以上言及しないことにする。

葛西（2007）はオノマトペが多く取り入れられた授業の実践報告を行っている。授業の目的とは、「日本語のレベルが上がると同時に、より豊かに自分の気持ちを伝えたり状況を詳しく説明できる力を身につけてほしい」（葛西 2007：183）である。実際の授業では、イラストを用い、動物の鳴き声、人の様子、体の様子を表すオノマトペを取り上げ、オノマトペを用いて、身近なものを説明して豊かな表現が使えるという実感をさせたいということであるが、結果として、授業の目標が「達成しきれていない」（葛西 2007：189）と述べている。改善案として、オノマトペを日本文化の 1 つとして紹介したり、学習した表現が実際に使用されている例を学生に示すためには生の教材がよく、オノマトペの必要性を実感してもらってから興味を持たせるという方法がよいとしている。三上（2007b）は従来の語彙の指導法をそれぞれ、オノマトペの指導法にどれが有効かについて論じている。具体的には、一般の語彙の指導法として実施されてきた 7 種類の指導法（三上 2007b：185）の中で、オノマトペの指導に適切なのは、教師の動きの活用、絵・イラスト・写真などの実物の使用、既習の語や文型を用いてオノマトペの意味を説明すること、媒介語を用いて説明する方法、多義語の意味をネットワークで示すことなどである。このように、三上（2007b）はオノマトペの指導法を考える時に、従来の語彙教育の方法論を網羅的に検討し、その中からオノマトペ指導に適切と思われるような方法を提案している。

以上、日本語オノマトペの指導に関する先行研究を概観した。具体的には、日本語オノマトペ指導に関する日本語教師の間の考え方を紹介した後、オノマトペ指導の現状を述べ、オノマトペ指導における具体的な問題点を挙げた後、どのようなオノマトペを優先的に教えるべきかというオノマトペ基本語彙選定に関する研究を紹介し、最後に、オノマトペの指導改善案を主張しているいくつかの先行研究を紹介した。

## 4.2 日本語オノマトペの学習に関する先行研究

### 4.2.1 学習者にとってオノマトペの学習が困難である理由

オノマトペは、日本人の言語生活の中で非常に頻繁に使用されており、適切に使えると、繊細な感情やニュアンスまで描写することができ、非常に便利で大事な語群であることは言うまでもない。しかし、日本語オノマトペは学習者にとって難しいことが多くの先行研究で指摘されている。玉村（1987）、金（1989）、張（1989）、彭（2007）、有賀（2007）などがその例である。学習者によるオノマトペの習得を早い段階から研究している研究者として、玉村（1987）は、ほとんどの日本語学習者が習得困難な項目として「文字表記の体系」「敬語の使い方」「擬音語・擬態語（オノマトペ）」であると主張している。その後の研究も玉村（1987）の主張を引き継ぎ、オノマトペは「中国人学習者にとって非常に難しい」（金 1989：84）、「学習者にとって助詞や敬語の使い方といった文法的な問題以上に難しい」（張 1989：128）、「感性的に訴えるため漢字圏の国からきた外国人には日本語を学習する際の最難関の1つとも言える」（彭 2007：48）のような指摘がなされている。

オノマトペは外国人学習者にとって習得が難しい理由として、いくつか考えられる。

一つ目の理由として、オノマトペはきわめて感覚的で、理屈では割り切れないものであるため、日本語の言語体系の環境で育たない人にとってはなかなか理解しにくく覚えにくいのではないかと張（1989）は指摘しているが、まさにその通りだと考える。日本語の環境で育ったら、子どもから大人まで日常会話から頻繁に多くのオノマトペを耳にしているため、自然習得が簡単にできてしまうのである。特に、小さい子供の場合、きちんとした日本語の文を言えなくても、オノマトペだけでも意思疎通はできるため、子ども用の歌、絵本、童話、昔話などにオノマトペが頻出している。

二つ目の理由であるが、4.1.2 からわかるように、オノマトペは現在においても日本語教育では積極的に取り上げられていないことが考えられる。もちろん、学習者が中・上級になって、日本人との会話と生教材に豊富に出てくるオノマトペに多く接触すると、ある程度の自然習得ができるかもしれないが、筆者が4.1.1で主張しているように、早い段階からオノマトペの音に親しんでもらい、興味を持たせておかないと学習者の頭がまだ新鮮な時期を見逃す可能性が高い。

三つ目の理由であるが、オノマトペ辞書の記述の不整備が考えられる。学習者はオノマトペを含む、外国語の知らない言葉に出会うたびに、辞書を理解の助けにすることが多いが、三上（2007a）はオノマトペ辞書の問題点として次のように述べている。①語の意味の説明や用例に、難しい語句や文型が使用されている、②語の意味をその同義語または類義語をもって説明しているため、説明文中の語を引くと、またはじめに引いた語に戻るという「循環定義」に陥っている、③用例が短く、文脈が示されていないため、実際どのような場面や状況でその語を使うのかがわからない、④類義語の微妙な意味の違いが説明されていない、等の問題である（三上 2007a：39）。三上（2007a）と同じ考えとして、有賀（2007）では、既

存のオノマトペ辞書の記述について「オノマトペの意味を過不足なく説明するのは難しい。」と述べている（有賀 2007 : 69）。

#### 4.2.2 学習者のオノマトペ習得状況などの実証研究

これまで、オノマトペは学習者にとって習得が困難であることは多く指摘されているが、学習者が実際、日本語オノマトペをどの程度使用できているか、どのように習得しているかという実証研究は思った以上に限られている。ここ数年、やっと見られるようになった。中石ほか（2011）、飯田ほか（2012）、吉永（2011、2017）がその例である。

学習者が実際に日本語オノマトペをどの程度使用できているか、知らないオノマトペを産出する際に、どのような傾向が見られるかという実証研究は、管見の限りでは、中石ほか（2011）及び吉永（2011、2017）ぐらいである。

中石ほか（2011）は、二つの課題を設定し、中国語母語話者が日本語のオノマトペをどのぐらい使用できるかを調べたものである。一つ目の課題はアニメーションにより使用文脈を呈示してオノマトペの使用を誘出する産出課題で、二つ目の課題はオノマトペを呈示して使用文脈を想起できるかを探る作文課題である。二つの課題では同一の 39 語のオノマトペを実験項目としている。対象は日本在住の中国語を母語とする上級日本語学習者 10 人で、統制群として、母語話者の 22 人にアニメーション課題を実施している。その結果、上級学習者で日本に住んでいるにもかかわらず、いずれの課題も中国語母語話者の正答率は低く、平均 24.4% で、オノマトペの習得の難しさが裏付けられている。一方、多くの誤用があったことが述べられているが、その誤用の原因は明らかにされていない。作文の課題では、それぞれのオノマトペを用いた 1 文を作ってもらい、補助課題としてそれぞれの語の意味を説明してもらい、その産出力を測定している。貴重な研究ではあるが、データが日本在住の中国語を母語とする日本語学習者 10 名に限られており、人数を増やし、学習者のレベルをそろえる必要があろう。また、オノマトペは日常生活で学ぶことが多いため、海外での習得状況や、中国語以外を母語とする学習者の研究も今後重要となると思われる。

中石ほか（2011）の研究から、日本在住の上級中国語母語話者でもあまり日常会話における日本語オノマトペを使用できておらず、オノマトペの習得の難しさがさらに裏付けられたといえる。ただ、中国語にはオノマトペ（擬音語・擬態語）に相当する語群の数が少なく、その影響で中国語母語話者が日本語オノマトペを苦手としている可能性も考えられる。

飯田ほか（2012）は中国華北地域の大学で 1 年から 2 年にわたり日本語を学習している中国語を母語とする学習者 117 名（女性 94 名、男性 23 名）に対して日本語オノマトペの「意味理解課題」と「長文の日本語読解テスト」を実施した。両方の課題とも時間を設定せず、読解テストが終わった時点で意味理解課題を行った。そのうち、読解テストの問題は、大部分を日本語能力試験から借用し、3 つのテキストがあり、1 つのテキストについて 4 つの質問があるので合計 12 問の 12 点満点となる。オノマトペの意味理解課題の質問紙には、オノマトペ 30 語の各語に対して正しい意味を選ぶという四者択一問題が含まれている。読

解課題の得点によって上・中・下位群別に分けて、この3群の平均得点を使ってオノマトペの理解に関する4つのクラスタ分析を行った。結果として、以下のことがわかったと述べている。

- ① 上・中・下位群の3群とも正答率がすべて高かったクラスタⅡに含まれたような単義オノマトペの意味理解は多義オノマトペよりやさしかった。
- ② 学習者の上位群と中位群で正答率が高かったクラスタⅠのオノマトペは単義も多義もクラスタⅡと同じ程度に意味を理解しやすかった。その理由は、中国語には類似のオノマトペが存在するからである。
- ③ クラスタⅣでは読み方が近いが、中国語にはない意味用法を表すオノマトペを取り上げて、両国のオノマトペの間でイメージのずれについて分析している。例えば、日本語の「ドンドン」と類似した語として、中国語には「咚咚」という語があるが、学習者の回答に、「ドンドン叩く」のほかに「ドンドン感心する」という誤った選択肢も多く見られている。この原因は、「学習者が日本語の音象徴語について誤ったイメージ・スキーマを形成している」（飯田 2012 : 51）ためである。
- ④ クラスタⅢでは、3つの群とも正答率が低かったが、原因として、対象のオノマトペの意味が捉えにくいことと、学習者が経験的・直感的な習得に頼っていることにある。

このように、中国語に類似した音象徴語があったとしても、日本語学習者が各音象徴語の意味や用法を正しく理解するのは困難な場合があることを明らかにした。さらに、日本語学習者が経験的・直感的に音象徴語を学ぶことによって、音象徴語の意味を誤解してしまうことも示唆された。このため、飯田ほか（2012）は、音象徴語が自然に習得される可能性は低く、むしろ、音象徴語は特定言語の特定語彙として意識的に学んでいく必要があると主張している。

吉永（2017）は「ずきずきする」「ぺこぺこだ」のような心身の状況を表す擬態語を調査材料とし、在中国の中国語母語話者（上級 23 名、中級 22 名、初級 29 名）を対象とした3種類のアンケートをもとに習得状況を観察すると共に、語彙的特徴と習得がどのように関わるのかについて考察し、オノマトペの教育効果を改善するための示唆をいくつか提案している。

その中のアンケート①では擬態語文の文末「だ／する」を選択させるアンケートであるが、結果として「ぞっとだ」「ずきずきだ」「からからする」「ぺこぺこする」の誤用が全レベルで多く、これは動詞、形容詞、副詞の用法や品詞分類の知識がないための誤用であると吉永（2017）は主張している。

アンケート②では、心身状況を表す擬態語を作って文を作成させる全文作文課題を実施した。その結果、文末選択の課題（アンケート①）で誤用率の高いものは全文作文課題でも誤用率が高いことがわかった。この誤用傾向から、擬態語の習得と品詞分類の知識の関連が

推測され、誤用を減らすためには語彙導入時の品詞の理解も必要であると言える（吉永 2017）は述べている。

心身状態を表す擬態語はそれぞれ身体の特定位に使用が限定される物が多いため、アンケート③では、特定位に対応する擬態語を選択する部分作文を実施した。その結果、アンケート②で正答率が低いものとアンケート③で正答率の低いものがおおよそ一致し、関連性が見られた。

吉永（2011）では初級、中級、上級の中国人母語話者を対象に擬態語を含む心身表現の誤用を調べたが、誤用が多く、上級者でも様々な誤用が見られた。これらの原因は両言語の心身表現の対応の複雑さ、人称制限や格助詞、品詞などの表現差によるものと吉永（2011）は判断している。

吉永（2011、2017）では中国語母語話者にとってオノマトペの学習困難の要因が統語的な面と母語である中国語の特徴にあると指摘しているが、筆者のこれからの考察と分析の論点に参考にしたいと考える。

中国語母語話者にとって日本語オノマトペの習得が困難であることは上記の研究から明らかになった。その原因として中国語にはオノマトペ（特に擬態語）が少ないことと、中国語では擬態語によって様々な状況を表現し分ける言語習慣がない（吉永 2017）ことが挙げられている。

しかし、母語が定着してから外国語を勉強する際に、母語を頼りにしながら外国語を習得していくという成人型の学習では、母語の影響を無視してはいけない。そのため、母語にオノマトペが豊富に存在し、母語にもオノマトペを頻繁に使う習慣がある学習者による日本語オノマトペの使用実態、習得状況に関して、異なる結果が予想される。

#### 4.2.3 日本語オノマトペの学習支援・教材開発の動向

先行研究を概観した中で、学習者にとって日本語オノマトペは習得が難しいことが何回も確認された。それにも関わらず、オノマトペは日本語教育において十分に重視されておらず、日本語教科書にもあまり取り上げられていないのが実状である。この現状の改善を目的に、既述の通りの日本語オノマトペ指導法に関する提案のほかに、オノマトペの学習支援・教材開発の動きが見られる。

羅・杉浦（2001）は、これまで、日本語教材において、オノマトペが取り上げられても「音や動き、間接的に文字や静止画で表す」という実状から、視覚と聴覚に基づいたオノマトペの学習に、ハイパーメディア教材を使うことにより、学習が促進されるのではないかと（羅・杉浦：30）」と主張しており、オノマトペの学習におけるハイパーメディア教材の効果を確かめる早い段階からのオノマトペ学習支援の研究を行っている。実際に、オノマトペが 20 語取り上げられている『擬音語・擬態語のレストラン』という教材を作成し、その学習効果を検討した。結果として、学習機会があまりないオノマトペも、その動きや音をアニメーションと音声で提示し、ハイパーメディア教材を使用することによって短期間で効率よく学習できることが実証されている。

このように、羅・杉浦（2001）は、伝統的な教材と異なり、視覚と聴覚に基づいたハイパーメディア教材でオノマトペ学習が効果的であることを実証しており、オノマトペ学習支援においては興味深く貴重な研究である。しかし、いくつかの問題点があるように思われる。羅・杉浦（2001）における実験では、同じオノマトペを使ったプリテストとポストテストを実施したため、それが学習効果に影響している可能性がある。しかも、調査した時点は学習したばかりのタイミングであるため、学習者ができていても一時記憶の可能性も十分ありうる。正確な学習効果を測定するには、一定の時間をおき、縦断研究で検討する必要があるだろう。

杉浦・岩崎（2003）は、これらの問題点を克服するために、再び『擬音語・擬態語のレストラン』という教材を使用し、再度実験を行った。目的は、羅・杉浦（2001）ではプリテストとポストテストの両方で同じ問題を使っているが、それが学習に影響を与えるかどうか、そして、学習効果が持続するかどうかを分析することにより、この教材の問題点を明らかにし、改善案を提案している。

杉浦・岩崎（2003）は被験者がオノマトペを学習する前も学習した後もアンケートを実施し、アンケートの回答結果及び学習結果から『擬音語・擬態語のレストラン』という教材の問題点・改善点を指摘している。結果として、本教材を用いた学習には学習効果の持続性があることが明らかになった。同時に、被験者がよく学習できなかった語を通して『擬音語・擬態語のレストラン』という教材について「類似した語を見比べることができない」「動画で表される情報の過不足」「類似した語であるにもかかわらず、使われている語彙や例文に統一性がない」「実際の会話で応用できない」という問題点が指摘されている。

このように、マルチメディア教材と実験、アンケートに非常に工夫していても、学習しづらいところがあり、オノマトペの学習の難しさが改めて確認された。今後は実験対象のオノマトペの数を増やし、視覚や聴覚だけでなく、もう少し実際の生活に近い形でオノマトペの学習支援教材とその学習効果の実証研究を行うことが望まれる。

このように、オノマトペの学習を支援する教材開発やその学習効果を確かめる研究はここ数年増えつつあるが、取り扱うオノマトペの数が少なく、しかも、非常に手間と経費がかかり、一般の学習者にはまだアクセスしにくい状況にある。小型の ICT 端末が普及するようになったこともあり、近い将来、スマートフォン等でアクセスできるオノマトペの学習支援のアプリが開発されるとすれば大変望ましい。

### 4.3 先行研究の問題点と本研究の位置づけ

#### 4.3.1 先行研究の問題点

以上、日本語オノマトペの教育をオノマトペの指導とオノマトペ学習という2面から、先行研究を概観してきた。これまでの紹介からわかるように、オノマトペの教育に関する研究はオノマトペの形態・統語的特徴、言語学的な特徴についての研究より遥かに数が少なく、十分とは言えない。

これらの研究を通して、オノマトペが日本語教育に十分に重視されていない現状の中で、日本語オノマトペは学習者にとって習得が困難であることが明らかになった。この現状認識からオノマトペの指導の面においても学習の面においても、改善を図ろうとする動きが見られる。まず、オノマトペの指導の面において、日本語教育にどのようなオノマトペを優先的に導入すべきかというオノマトペの基本語彙選定の研究がかなり進み、オノマトペ指導法に関する提案も多く見られる。一方、オノマトペ学習の面において、ここ数年、学習者が実際日本語オノマトペをどの程度使用できているかを検討する実証的な研究がようやく登場した（中石ほか 2011、飯田ほか 2011 など）。オノマトペの学習を支援するための研究・教材開発の動きもここ数年注目されるようになったが、未だに際立った成果は見られない。これらの先行研究は本研究にとって参考にできるところが多く、貴重なデータとなっているが、以下の通りの問題点があると思われる。

- ① オノマトペの指導の改善案が多く提案されているが、実際に、具体的な教育カリキュラムのどの部分に取り入れるか、どのように取り入れるか、母語別の学習者用の総括的なオノマトペ教育計画が未だに策定されていない。当然のことながら、これを実現するためには幅広い日本語教育機関の連携、教師の意欲が必要とされ、一日も早い実現が望まれる。
- ② オノマトペの学習に関して、ここ数年、学習者の日本語オノマトペの使用実態や学習支援に関する研究がようやく登場したが、まだ不十分で、対照の偏りが大きい。具体的には、学習者の日本語オノマトペの使用実態を検討している研究では対象者がすべて中国人学習者である。中国人学習者にとって日本語オノマトペの習得が困難であることは何度も指摘されている。大人になってから外国語を学習する成人型学習では母語が大きく影響していると思われるため、中国人学習者は日本語オノマトペをあまり使用できていないのは、中国語の母語に、オノマトペ（特に擬態語）が少ないことが一つの要因であろう。これに対して、母語にオノマトペが豊富に存在する言語を母語とする学習者の場合は違う傾向が予想されている。学習者の日本語オノマトペ学習を高めるためには、指導の改善とともに、学習者のオノマトペに関する学習意欲、母語におけるオノマトペの使用実態、日本語オノマトペの使用実態を明らかにした上で、オノマトペ学習に影響している要因を総合的に評価することが必要であると思われる。

オノマトペ学習を支援する立場からの研究は近年注目されつつであるが、まだ小規模で、試験的なもので、しかも、研究成果にアクセスしやすいとは言えないため、実際に効果があるか確認できているとは言いがたい。

#### 4.3.2 本研究の位置づけ

以上、先行研究の問題点をまとめた。本項では、それを踏まえつつ、本研究の位置づけについて述べる。

日本語オノマトペは一般に外国人学習者にとって習得が難しいと言われているが、世界の言語の中でオノマトペが豊富な言語とそうでない言語があり、それぞれ、母語にあるオノマトペ（に相当する語群）の特徴に影響を受けながら日本語オノマトペの学習が行われると考えられる。そこで、母語にオノマトペが豊富に存在する学習者の場合は異なる傾向が予想される。渡邊（1997）は、多様化する学習者に対して理想的な一つのシラバスを作ることは非現実的であると主張しているが、本稿も同様の立場をとる。学習者の日本語オノマトペ学習効果を高めるためには、母語別の学習者の母語におけるオノマトペの使用実態、日本語オノマトペの使用実態、オノマトペに対する認識、学習意識、学習方法を調査することが必要である。特に、日本語オノマトペの使用実態を調査する際に、その学習過程と誤用の傾向の把握も重要であると考えられる。

4.3.1 からわかるように、これまでの研究は、母語にオノマトペが少ない中国語を母語とする学習者だけを対象にしたものであり、しかも、学習者のオノマトペに対する認識、学習意識、学習方法、母語におけるオノマトペの使用状況などについての研究はほとんど見られない。

本研究は、従来の先行研究にない調査を設定することにより、先行研究でこれまで検討されていないことを検討する。具体的には以下の通りである。

まず、オノマトペの産出を誘出する同じ調査材料を用い、日本語と母語の両方で描写させることにより、日本語オノマトペと学習者の母語におけるオノマトペの使用実態を両方検討することができる。同じ調査材料を採用するため、同じ場面において、日本語オノマトペでの描写と学習者の母語での描写を両方観察でき、日本語オノマトペの学習に母語の転移があるかどうかを見ることが期待できる。

次に、日本語オノマトペで描写する際に、当該のオノマトペを知らなくても、自分の知識と語感を生かしオノマトペを積極的に産出してもらうことにより、学習者はそれぞれの場面において日本語オノマトペを適切に使用できるかどうかが見られるだけでなく、個人差のある産出の例を通して、オノマトペをどのように学習しているか、母語の転移はどのように表れるかも見ることができる。

また、調査の補助課題として、日本語オノマトペに対する認識、学習意識、学習方法、母語におけるオノマトペの使用状況などを記入してもらうことによって、学習者の日本語オノマトペの学習過程をより詳しく見ることができる。

最後に、母語にオノマトペが豊富に存在するベトナム語を母語とする学習者と母語にオノマトペが少ない中国語を母語とする学習者の日本語オノマトペの使用実態と産出傾向の分析を通して、それぞれの日本語オノマトペの学習過程を見ることができる。

即ち、調査協力者はこれまでのように、中国人学習者だけに偏らず、最近、日本語学習者数が増加しているベトナム人学習者も対象にしている。日本語オノマトペの誘出場面における学習者の母語によるオノマトペの使用実態の調査、そして母語にオノマトペが豊富

に存在するベトナム語を母語とする学習者および母語にオノマトペが豊富ではない中国語を母語とする学習者のオノマトペの使用実態と産出傾向を比較する、これまでにない研究である。

その意味で、本調査は、ベトナム人学習者と中国人学習者が日本語オノマトペをどの程度使用できているかという使用実態を解明するだけでなく、学習者の産出の例を通して、オノマトペの学習過程及びそれぞれの母語の転移についても明らかにし、ベトナム人学習者と中国人学習者のための日本語教育に有益な示唆を得ることが期待できるものである。

## 第5章 本研究における調査の概要

本章では、本研究の研究課題を解決するために実施した調査の概要について述べる。5.1では、本調査の調査対象となる21語のオノマトペの選定に至る経緯を述べ、5.2では、調査対象の21語とそれを再生するアニメーションについて触れ、5.3と5.4では、調査協力者及び調査手続きについて述べる。

### 5.1 調査対象とした21語のオノマトペの選定に至る経緯

日本語にはオノマトペが数多く存在し、しかも、文学作品など書き言葉のジャンルだけではなく、日常会話においても頻繁に使われている。そして、日本語オノマトペは、表現に生き生きとした臨場感を与え、微妙なニュアンスまで伝えることは言うまでもない。日本語学習者が日本語オノマトペを適切に使えるようになれば、日本語の理解力・表現力が高まり、日本語母語話者とのコミュニケーションにおいて、自信がより膨らむことが期待できる。しかし、文学作品や新聞、雑誌などにおける、いわゆる書き言葉における日本語オノマトペの数は非常に多く、日本語母語話者と同様の感覚を持っていない学習者にとって、すべてのジャンルのオノマトペを理解・使用するのは不可能である。一方、日本語学習者が、日本語母語話者の日常会話に頻出するオノマトペに限定して理解・使用できるようになれば、日本語母語話者とのコミュニケーションにすぐに役に立つと思われる。

こうした考えを出発点として、筆者は、日本語母語話者の日常会話を収録した名大会話コーパスを調査し、そこに頻出するオノマトペを選定した。そして、選定できたオノマトペを初級日本語教育に取り入れるべきオノマトペとして提案している (Nguyen 2012)。

なぜ、「名大会話コーパス」を日本語母語話者の日常会話の調査材料にするかという理由は次の通りである。名大会話コーパスは、科学研究費基盤研究(B)(2)「日本語学習辞書編纂に向けた電子化コーパス利用によるコロケーション研究」(平成13年度～15年度)の一環として作成されたもので、約100時間分の雑談を文字化したコーパスである。研究代表者は姫路獨協大学外国語学部の大曾美恵子氏である。会話参加者は全部で198名おり、その内訳は男性37名、女性161名である。2名から4名のグループの日本語母語話者による雑談を収録し、文字化したデータである。以下は、参加者の年齢と参加者同士の関係、会話の時間である。名大会話コーパスの詳細情報は以下の通りである。

表 5.1 名大会話コーパスの参加者の年齢

年齢	人数	年齢	人数
10代	15	60代	15
20代	89	70代	2
30代	27	80代	1
40代	24	90代	3
50代	22	合計	198

表 5.2 会話参加者同士の関係

会話参加者の関係	会話数	会話参加者の関係	会話数
アルバイトの友人同士	2	同僚同士	5
外国語語教室のクラスメート同士	4	夫婦同士	3
会社の元同僚	2	友人同士	10
家族の人同士や親戚の人同士	12	科研費による研究の共同研究者同士	1
近隣の人同士	1	元指導教員と元大学院生	1
恋人同士	2	高校の友人同士	2
高校からの友人	1	小学校の同級生同士と一人の中学 ・高校時代の友人。	1
高校の同級生同士	4	専門学校と同級生同士	1
サークルの仲間同士	2	大学の同級生とその先輩	2
仕事上の知人同士	1	大学の同僚同士	1
姉妹とその交際相手	1	大学院の先輩と後輩	3
職場の同僚同士	2	大学院の同級生同士とその後輩	1
初対面の人同士	5	大学院同士とその先輩	1
大学院の同級生同士	21	中学の同級生とその母親	1
大学院の友人同士	3	中学校の同級生同士	2
大学時代の後輩と先輩	2	同じマンションの住人同士	1
大学時代の友人同士	3	日本語教育の授業の同級生同士	1
大学の同級生同士	15	父親同士が友人で日舞の稽古友達	1
大学の友人同士	5	恋人同士と大学院の先輩	1
知人同士	2	<b>合計</b>	<b>129</b>

表 5.3 名大会話コーパスに収録されている会話の時間

会話の時間	会話の本数
30 分以下	12
31 分～45 分	56
46 分～60 分	44
61 分～	17
会話：129 本、会話の平均時間＝46.5 分	

表 5.1 から表 5.3 までにもあるように、名大会話コーパスの参加者は年齢が様々であり、参加者同士の関係も様々で、会話の時間も比較的長いため、社交的なあいさつだけで終わるのではなく、内容のある談話があると予想される。石黒（2008）は、オノマトペはジャンル

的な偏りがあって、現実の生活場面に密着した知覚や感情を表すのによく使われること、日常生活においては「子育て」「料理」「天気」などの場面でオノマトペがよく使われていることを指摘している。そこから考えると、生活を表現する日常会話は、オノマトペが多用される可能性が高いと考えられる。故に、名大会話コーパスは、日本語母語話者の日常会話におけるオノマトペの使用実態を調査するために適切な材料と言えるだろう。

実際に名大会話コーパスを調査した結果、オノマトペの述べ語数は 3,279 語、異なり語数は 482 語であり、オノマトペの種類は 380 種が抽出された<sup>9</sup>。最初は手作業で 129 本の会話に出現するオノマトペをすべて抽出し、その形態と用法の分類を行った。その後、形態素解析「茶まめ」を使用し、抽出したオノマトペの見出し語とその頻度を確認した。その結果、日本語母語話者の日常会話に頻出する上位 63 語のオノマトペを抽出した<sup>10</sup>。

一方、オノマトペを積極的に日本語教育に導入すべきであるという筆者と同様の主張を持つ研究の一つとして三上 (2007a) が挙げられる。三上 (2007a) は、日本語教育に導入すべきオノマトペとして、次の 8 つの言語資料から 70 語の基本オノマトペを選定している。

- (1) 国立国語研究所(1984)『国立国語研究所報告 78 日本語教育のための基本語彙調査』(秀英出版)
- (2) 文化庁文化語部国語課(1983)『外国人に対する日本語教育の振興に関する報告集』(京和工業)
- (3) 玉村文郎(1987)「日本語教育基本 2570 語」(『日本語教師養成通信講座 日本語の語彙・意味 1.2』アルク)
- (4) 国際交流基金・日本国際協会編 (2002)『日本語能力試験 出願基準【改訂版】』(凡人社)
- (5) 玉村文郎(2003)「中級用語彙—基本 4000 語」『日本語教育』116 号
- (6) 文化庁(1990)『外国人のための基本用例辞典 (第三版)』(大蔵省印刷局)
- (7) 専門教育出版『日本語学力テスト運営委員会』編(1998)『改定 品詞別・A~D レベル別 1 万語語彙分類集』(専門教育出版)
- (8) 工藤真由美(1999)『児童生徒に対する日本語教育のための基本語彙調査』(ひつじ書房)

<sup>9</sup> オノマトペの種類については、同じ語基を有する語は 1 つの種類と数えた。例えば、「がばがば」「がばっ」「がばがばっ」は、それぞれ「反復形」「CVCVQ」「反復形の変形」の 3 つの異なる形態であり、述べ語数 (頻度) は 3 と数えるが、同一の「がば」種に属するとした (C: Consonant, V: Vowel)。そして、同じ語が 2 度、3 度繰り返しの場合は 1 種 2 語、1 種 3 語と数えた。

<sup>10</sup> 日本語オノマトペは副詞、動詞、形容詞、名詞など多くの用法があるが、その中で圧倒的に多いのは副詞としての用法である。Nguyen (2012) では、初級日本語教育に取り入れるべき日本語オノマトペを提案するために、名大会話コーパスからオノマトペの最も代表的な用法である副詞的用法のオノマトペを抽出し、上位の 60 語のオノマトペを初級日本語教育に取り入れるべき語として提案している。本研究は、同じく、名大会話コーパスを調査対象としているが、副詞だけではなく、129 本の会話に出てくるすべてのオノマトペを抽出し、日本語母語話者同士の日常会話に頻出する上位 63 語のオノマトペを選定している。そのため、Nguyen (2012) が提案している語と多少ずれがある。

筆者自身は 63 語のオノマトペを初級日本語教育に取り入れるべきオノマトペとして提案しているが、選定材料は名大会話コーパスという話し言葉コーパスが中心となっている。これに対して、三上 (2007a) は、70 語のオノマトペを日本語教育に取り入れるべきオノマトペとして主張しているが、選定材料となっているが上記のような書き言葉的なものを中心となっている。

本研究の大きな目的の一つがベトナム人学習者と中国人学習者による日本語オノマトペの使用実態を明らかにすることであるが、調査材料として最も理想的なのは、話し言葉に頻出する筆者が選定したリストと、書き言葉の幅広いジャンルに頻出する三上 (2007a) が選定したリストの組み合わせであると思われる。しかし、そうすると、調査時間も非常にかかるし、調査協力者には大変大きな負担をかける恐れがある。そのため、筆者が選定できた 63 語のオノマトペのリストと三上 (2007a) が選定できた 70 語のオノマトペのリストに共通して出てくる語を今回の調査材料とする。つまり、今回の調査材料となっているのは、書き言葉においても話し言葉においても頻出し、日本語母語話者の言語生活に最も密着しているオノマトペである。

一方、筆者の選定リスト及び三上 (2007a) の選定リストの中には、一般の副詞に思われるような語が入っている。そのため、調査材料の最終フィルターとして、2つのリストに共通して出てくる語の中で、日本語教育を専攻としている日本語母語話者の大学院生 7 名にオノマトペかどうか判定してもらい、4名以上に認定してもらった語を調査材料のオノマトペとした。結果として、次のページに掲げた表 5.4 の 21 語のオノマトペが調査対象として定まった。

## 5.2 調査対象の 21 語のオノマトペとそれを再生するアニメーション

5.1 では、今回の調査対象である 21 語のオノマトペの選定に至る経緯について述べた。本節では、筆者が選定した話し言葉のオノマトペのリストと、三上 (2007a) が選定した書き言葉のオノマトペのリストの組み合わせた結果に、日本語母語話者に最終チェックをしてもらった調査対象の 21 語のオノマトペについて詳述する。

次のページにある表 5.4 は 21 語のオノマトペの詳細である。太文字書いてある語は、2つのリストに共通して出てくるが、日本語母語話者による最終チェックを通らなかった語で、今回の調査対象から外れた語である。灰色でマークされているのは、2つのリストに共通して出現したオノマトペで、しかも、日本語母語話者による最終チェックを通過し、今回の調査対象となっている 21 語のオノマトペである。

表 5.4 オノマトペの選定リスト

No.	筆者のリスト	No.	三上 (2007a) のリスト	No.	筆者のリスト	No.	三上 (2007a) のリスト
1	あっさり	1	あっさり	36	ばーっ (と)	36	ずらり
2	うろうろ	2	いらいら	37	はあはあ	37	そっ (と)
3	かーっ (と)	3	うっかり	38	ばたばた	38	そっくり
4	がーっ (と)	4	うろうろ	39	ぼっ (と)	39	そろそろ
5	がんがん	5	うんざり	40	はっきり	40	ぞろぞろ
6	きちん (と)	6	がたがた	41	ばっちり	41	たっぶり
7	きっちり	7	がっかり	42	ばっちり	42	ちゃん (と)
8	きゅっ (と)	8	がやがや	43	ばらばら	43	どきどき
9	ぎりぎり	9	からから	44	ばりばり	44	どっ (と)
10	ぐっ (と)	10	がんがん	45	ばんばん	45	どんどん
11	くるくる	11	きちん (と)	46	びかびか	46	にこにこ
12	ぐるぐる	12	ぎっしり	47	びっくり	47	のろのろ
13	ごくごく	13	きらきら	48	びったり	48	のんびり
14	ごそごそ	14	ぎりぎり	49	ひょっ (と)	49	ばたばた
15	こっこっ	15	ぐっ (と)	50	ふ (と)	50	はっ (と)
16	ころころ	16	ぐっすり	51	ふっ (と)	51	ぼっ (と)
17	さっぱり	17	くるくる	52	ふらふら	52	はっきり
18	さらさら	18	ぐるぐる	53	べったり	53	ぼったり
19	じっ (と)	19	げらげら	54	べらべら	54	はらはら
20	しっかり	20	こっそり	55	ぼうっ (と)	55	ばらばら
21	しゅっ	21	ごろごろ	56	ぼっ	56	びかびか
22	すっ (と)	22	ざあざあ	57	ほっ (と)	57	びっくり
23	すっかり	23	さっ (と)	58	ぼつぼつ	58	びったり
24	すっきり	24	ざっ (と)	59	ぼん (と)	59	ふ (と)
25	そこそこ	25	さっさ (と)	60	めちやくちや	60	ふらふら
26	たっぶり	26	さっぱり	61	めちやめちや	61	ぶらぶら
27	だらだら	27	さらさら	62	ゆっくり	62	ぶるぶる
28	ちゃん (と)	28	じっ (と)	63	わいわい	63	ぺこぺこ
29	ちょこちょこ	29	しっかり			64	ぺらぺら
30	ちょん	30	じっくり			65	ぼうっ (と)
31	ちらちら	31	じろじろ			66	ほっ (と)
32	つるつる	32	すっ (と)			67	ぼんやり
33	どんどん	33	すっかり			68	めちやくちや
34	にこにこ	34	すっきり			69	ゆっくり
35	のんびり	35	すらすら			70	わくわく

表 5.4 から、わかる通り、今回の調査対象となるのは「あっさり」「うろうろ」「がんがん」「ぐっ」「くるくる」「ぐるぐる」「さらさら」「すっ」「たぷり」「ちゃん」「どんどん」「にこにこ」「ばたばた」「ぱっ」「ばらばら」「ぴかぴか」「ぴったり」「ふ」「ふらふら」「ぼうっ」「ほっ」という 21 語のオノマトペである。

調査では、この 21 語のオノマトペを描写する描写文について、できるだけ日本語母語話者が普段使っている場面と同じような作例になるように努め、これらの描写文を再生する 21 シーンからなるアニメーションを独自に制作した（表 5.5 参照）。アニメーションの各シーンは当該のオノマトペを一義的に再現できるよう、日本語母語話者を対象にパイロット調査を 3 度行い、アニメーションに修正を施した。各描写文は、それぞれのシーンの画面下に字幕として表示されるが、オノマトペが入る部分は下線で示している。調査の際に調査協力者に配布する解答用紙には、画面に表示されている描写文と同じ内容が記載されている。

アニメーションの上映時間は 10 分 34 秒である。最初の画面は、アニメーションの簡単な紹介及び調査のステップ 1 (5.4 調査の手順で後述) のやり方についての案内で、その後、各シーンでアニメーションを 2 回上映し、描写文が完全に映された後、15 秒のカウントが表示され、時間が切れたら次のシーンが上映される。

表 5.5 21 語のオノマトペとその描写文

順番	オノマトペ	オノマトペの描写文
1	くるくる	風車 (かざぐるま) が風で <u>      </u> 回っている。
2	うろうろ	今日は学校が早く終わって、することなかったので、学校の前を <u>      </u> していた。
3	がんがん	昨日はお酒を飲みすぎたせいで、頭が <u>      </u> する。
4	ほっ (と)	難しい仕事を無事に終えて、 <u>      </u> 一息ついた。
5	ぐっ (と)	名曲 (めいきょく) を聞いていて、 <u>      </u> と心に来た。
6	あっさり	日本料理は油をあまり使わず、 <u>      </u> していて体にいい。
7	ぐるぐる	目が <u>      </u> 回る。
8	さらさら	彼女はかみの毛が <u>      </u> で、きれいだ。
9	すっ (と)	{電車の中で} 若者が <u>      </u> と立って、お年寄りに席を譲 (ゆず) った。
10	たっぷり	お昼は野菜 <u>      </u> のカレーを食べた。
11	ちゃん (と)	子供は、歯磨きが <u>      </u> とできたね、とママに褒 (ほ) められて喜 (よろこ) んだ。
12	どんどん	お母さんのおなかが <u>      </u> 大きくなってきた。
13	にこにこ	この子はいつも <u>      </u> している。
14	ばたばた	最近仕事がとても忙しくて、 <u>      </u> している。
15	ぱっ (と)	友達と話している時に、 <u>      </u> といいアイデアが思い浮かんだ。
16	ばらばら	ロボットの体が <u>      </u> になっている。
17	ぴかぴか	くつを <u>      </u> に磨 (みが) いた。
18	ぴったり	このくつはサイズが <u>      </u> だ。
19	ふ (と)	夜道を一人とぼとぼ歩いていた。 <u>      </u> と空を見上げると、お月様が私に笑いかけてくれ、元気が出た。
20	ふらふら	道で酔 (よ) っぱらった人が <u>      </u> 歩いている。
21	ぼうっ (と)	今日は寝不足で頭が <u>      </u> としていて集中できない。

日本語学習者の日本語オノマトペ産出の実証的研究  
 —ベトナム語母語話者と中国語母語話者を比較して—



図 5.1 アニメーションの画面のキャプチャー-5.3 調査協力者

### 5.3 調査協力者

本研究における調査協力者はベトナム人学習者及び中国人学習者である。今回、調査に協力してもらったのは日本在住のベトナム人留学生、ベトナム国内の大学に在籍する日本語学科の1年生、2年生、3年生、中国国内の大学の日本語学科に在籍する3年生である。統制群として、年齢、出身と職業・専門が様々な日本語母語話者 20 名に協力してもらった。以下、それぞれのグループの属性を紹介する。

【統制群】 統制群は、日本語母語話者 20 名である<sup>11</sup>。調査に協力してもらった日本語母語話者の年齢は 19 歳から 69 歳まで、職種と出身は様々である。表 5.6 はその詳細である。

表 5.6 統制群 20 名の年齢・出身・職種

調査協力者 ID	性別	年齢	出身	職業・専門	追加情報
J1	男	54	静岡	内装スタッフ	静岡は 18 歳の時まで。それ以来川崎に在住
J2	男	69	長崎	銀行員	出生以来、長崎で生活
J3	男	40	長崎	銀行員	J2 さんの息子出生以来、長崎で生活
J4	女	69	大分	主婦	大分は 18 歳の時まで。それ以来は長崎に在住
J5	男	50	三重	美容師	三重は 7 歳の時まで。現在は静岡に在住
J6	男	58	和歌山	金融機関のスタッフ	和歌山は 18 歳の時まで。現在は神戸に在住
J7	男	50	東京	マーケティングの担当者	出生以来、東京で生活
J8	女	40	東京	社会学の大学院生	出生以来、東京で生活
J9	女	30	神奈川	会社員	出生以来、神奈川で生活
J10	女	19	神奈川	言語学専攻の大学生	出生以来、神奈川で生活
J11	女	19	東京	言語学専攻の大学生	出生以来、東京で生活
J12	男	19	広島	言語学専攻の大学生	広島は 18 歳の時まで。現在は東京に在住
J13	女	19	埼玉	言語学専攻の大学生	出生以来、埼玉で生活
J14	女	20	埼玉	言語学専攻の大学生	出生以来、埼玉で生活
J15	女	19	東京	言語学専攻の大学生	出生以来、東京で生活
J16	男	21	埼玉	言語学専攻の大学生	出生以来、埼玉で生活
J17	男	20	東京	言語学専攻の大学生	出生以来、東京で生活
J18	男	48	大阪	経済学の大学院生	大阪は 26 歳の時まで。現在は東京に在住
J19	女	39	東京	社会学の大学院生	出生以来、東京で生活
J20	男	26	静岡	社会学の大学院生	静岡は 18 歳まで。それ以来は東京に在住

<sup>11</sup> 統制群の 20 名の母語話者の中にパイロット調査の協力者は含まれていない。

次に、ベトナム人学習者の各グループを紹介する。ベトナムに在住中の学習者は全員、同じ大学の日本語学科の学生である。以下、年齢と大学で取り扱う教科書、日本語学習時間<sup>12</sup>、日本語能力<sup>13</sup>を紹介する。人数としては、「1年生グループ」が12名、「2年生グループ」が33名、「3年生グループ」が19名、「留学生グループ」8名である。

【ベトナム人学習者の1年生】(12名)

表 5.7 ベトナムに在住する1年生のグループ

調査協力者 ID	年齢	性別	日本語能力	調査協力者 ID	年齢	性別	日本語能力
VN0101	18	女	N4	VN0107	18	女	N3
VN0102	18	女	N4	VN0108	18	女	N4
VN0103	19	女	N3	VN0109	18	男	N4
VN0104	18	女	N4	VN0110	19	男	N3
VN0105	19	女	N3	VN0111	19	女	N4
VN0106	20	女	N3	VN0112	19	女	N4

- ・大学で取り扱うメインの教科書：

『初級日本語・上』東京外国語大学(2011) 凡人社

『初級日本語・会話』東京外国語大学(2011) 凡人社

『初級日本語・さくぶん』東京外国語大学(2011) 凡人社

『毎日の聞き取り』宮城幸枝他(2010) 凡人社

『楽しく聞こう I』文化外国語専門学校(1992) 凡人社

『楽しく聞こう II』文化外国語専門学校(2002) 文化外国語専門学校

- ・日本語学習時間(調査時点まで)：おおよそ 200 時間

【ベトナム人学習者の2年生】(33名)

- ・大学で取り扱うメインの教科書：

『初級日本語・下』東京外国語大学(2011) 凡人社

『中級日本語・上』東京外国語大学(2011) 凡人社

『初級日本語・会話』(1年生の続き) 東京外国語大学(2011) 凡人社

『初級日本語・さくぶん』(1年生の続き) 東京外国語大学(2011) 凡人社

『みんなの日本語初級 1.2 初級で読めるトピック 25』牧野昭子他(2000) スリーエーネットワーク

- ・日本語学習時間(調査時点まで)：おおよそ 400 時間

<sup>12</sup> 当学科の学習要領から、調査の時点までに、日本語学習時間をおおよそで計算した。

<sup>13</sup> 日本語能力については学習者各自で記入してもらった。

表 5.8 ベトナムに在住する 2 年生のグループ

調査協力者 ID	年齢	性別	日本語能力	調査協力者 ID	年齢	性別	日本語能力
VN0201	19	男	N3	VN0218	19	女	N2
VN0202	19	女	N3	VN0219	19	女	N3
VN0203	19	女	N3	VN0220	21	女	N3
VN0204	19	女	N2	VN0221	19	女	N3
VN0205	20	女	N3	VN0222	19	女	N2
VN0206	20	女	N3	VN0223	19	女	N3
VN0207	19	女	N3	VN0224	20	女	N3
VN0208	21	女	N3	VN0225	19	女	N3
VN0209	20	女	N2	VN0226	19	女	N3
VN0210	19	女	N3	VN0227	19	女	N3
VN0211	19	女	N3	VN0228	19	女	N3
VN0212	19	女	N3	VN0229	19	女	N3
VN0213	19	女	N3	VN0230	19	女	N3
VN0214	20	男	N2	VN0231	19	女	N3
VN0215	19	女	N3	VN0232	19	女	N3
VN0216	19	女	N2	VN0233	19	女	N3
VN0217	19	男	N3				

【ベトナム人学習者の 3 年生】 (19 名)

表 5.9 ベトナムに在住する 3 年生のグループ

調査協力者 ID	年齢	性別	日本語能力	調査協力者 ID	年齢	性別	日本語能力
VN0301	20	女	N2	VN0311	20	女	N2
VN0302	20	女	N2	VN0312	21	女	N2
VN0303	20	女	N3	VN0313	21	男	N2
VN0304	21	女	N2	VN0314	20	女	N2
VN0305	20	女	N3	VN0315	20	女	N2
VN0306	20	女	N3	VN0316	20	女	N2
VN0307	20	女	N2	VN0317	20	女	N2
VN0308	21	女	N2	VN0318	20	男	N2
VN0309	20	女	N2	VN0319	20	女	N2
VN0310	20	女	N2				

- ・大学で取り扱うメインの教科書：
  - 『中級日本語・上』（2年生の続き）東京外国語大学（2011）凡人社
  - 『中級日本語・下』東京外国語大学（2011）凡人社
  - 『新日本語の中級』海外技術者研修協会（2000）スリーエーネットワーク
  - 『ニューアプローチ中級日本語・基礎編』日本語研究社、教材開発室（2000）  
日本語研究社教材開発室
- ・日本語学習時間（調査時点まで）：おおよそ 600 時間

【日本に在住する留学生グループ】（8名<sup>14</sup>）

今回の調査に協力してもらったベトナム人留学生は全員、日本語能力試験N1資格を有し、日本在住期間は3年から12年である。具体的には、表 5.10 の通りである。

表 5.10 日本に在住する留学生グループ

調査協力者 ID	年齢	性別	専門	日本在住期間	日本語能力
VJ01	20代	女	日本語教育	6年	N1
VJ02	20代	男	社会学	5年	N1
VJ03	20代	女	日本語教育	3年	N1
VJ04	20代	女	経済学	10年	N1
VJ05	20代	女	日本語教育	3年	N1
VJ06	20代	男	技術	12年	N1
VJ07	20代	女	マーケティング	7年	N1
VJ08	20代	女	マーケティング	3年	N1

<sup>14</sup> 日本に在住中の留学生 10 名に対して調査を実施したが、そのうちの 2 名は来日したばかりであったため、留学生グループの調査協力者から外した。グエン（2017）は、ベトナム人学習者によるベトナム語のオノマトペの使用実態を見るため、10 名全員のデータを採用しているが、本研究は、留学経験による日本語オノマトペの使用実態の違いを見るため、留学期間が 3 年以上の 8 名に絞ったデータを採用した。

【中国に在住中の3年生グループ】(20名)

調査に協力してもらったのは、中国の同じ大学の日本語学科3年生の20名である。年齢は20歳から23歳で、全員、日本語能力試験N2資格を有している。

表 5.11 中国に在住中の3年生グループ

調査協力者 ID	年齢	性別	日本語能力	調査協力者 ID	年齢	性別	日本語能力
C1	21	女	N2	C11	20	女	N2
C2	20	女	N2	C12	20	女	N2
C3	20	女	N2	C13	20	女	N2
C4	21	女	N2	C14	23	女	N2
C5	20	女	N2	C15	20	女	N2
C6	20	女	N2	C16	21	女	N2
C7	21	女	N2	C17	20	女	N2
C8	22	女	N2	C18	20	女	N2
C9	20	女	N2	C19	20	女	N2
C10	20	女	N2	C20	22	女	N2

- ・大学で取り扱うメインの教科書<sup>15</sup>：

『新編日語（新編日語）』修訂版1-4、周平、陳小芬編著（2009）、上海外語教育出版社（1年生と2年生の時に使う）

『日語総合教程（日語総合教程）』第五冊、陸静華（2011）上海外語教育出版社（3年生の時に使う）

- ・日本語学習時間（調査時点まで）：おおよそ600時間

#### 5.4 調査の手順

調査は3つのステップからなる。その中で、統制群である日本語母語話者にはステップ1だけに協力してもらった。各ステップの詳細については以下の通りである。

##### 【ステップ1】

ステップ1は、アニメーションを見て、解答用紙にふさわしいと思われるオノマトペを記入してもらう。アニメーションの最初の画面はステップ1のやり方の案内である。

<sup>15</sup> ベトナムに在住する学習者が大学で取り扱っているメインの日本語教科書に関して、1年生から3年生の物が各グループのところに載せている。中国人学習者の場合、3年生しかいないため、1年生から3年生まで取り扱うメインの日本語教科書を載せている。

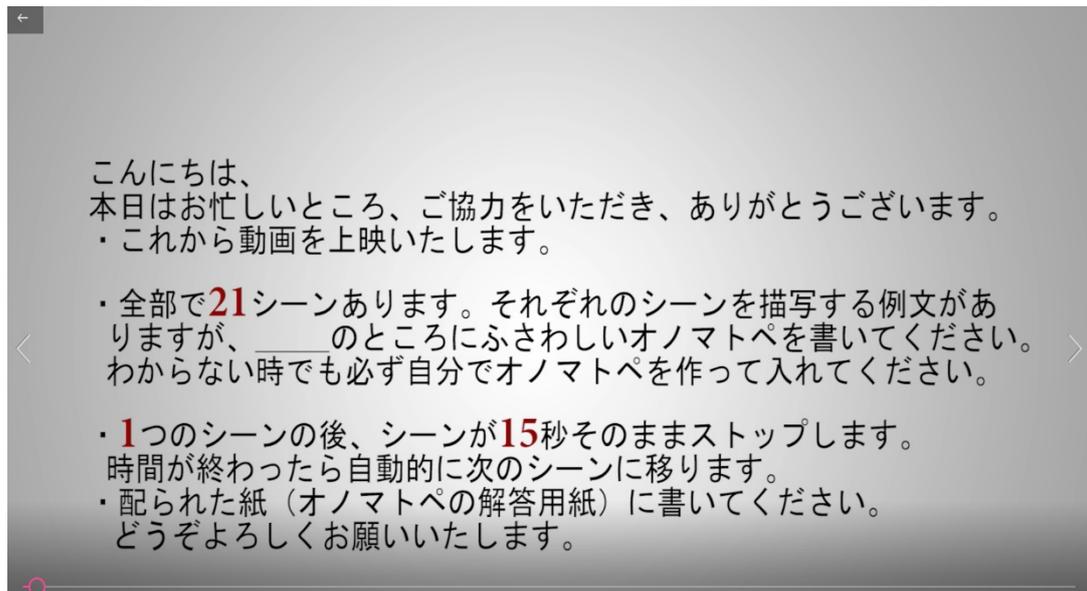


図 5.2 アニメーションの最初の画面のキャプチャー

本研究で筆者が調査対象としているのは、日本語オノマトペであるが、「オノマトペ」という概念がわかりづらく、イメージしにくい恐れがあるため、調査協力者には詳細に説明した。具体的には、日本語母語話者の場合、上記の画面に目を通してもらった後、オノマトペの概念を「擬音語」「擬態語」と言い換え、筆者が調査したい語彙対象をはっきりさせた。ただし、擬音語と擬態語の定義については特に何も説明しなかった。ベトナム人学習者と中国人学習者に対しては、少し時間を与えて、画面で表示してある内容に目を通してもらってから、それぞれの母語で説明し、調査対象以外のオノマトペの例を挙げ、調査内容とその対象をはっきりと理解させた。

各シーンでは、当該のオノマトペの映像と描写文が完全に映し出された後、画面が 15 秒間静止している<sup>16</sup>。この間に、「描写文の下線のところに適切と思われる日本語オノマトペを解答用紙に記入してください。」という指示を与えた。しかし、口頭では「わからない場合、自分なりにオノマトペを産出してきてください。どうしてもできない場合は無回答にしてもいい」と説明を加えた。

調査協力者がステップ 1 のやり方についてはっきりと理解していることが確認された後、解答用紙を配布して、それぞれの個人情報を入力してもらった後、アニメーションを流して調査を行った。その後、アニメーションが終わり次第、ステップ 1 の解答用紙をすぐ回収し、休憩に入った。

<sup>16</sup> 回答を考えるための時間（15 秒）については、今回の調査協力者とは別の日本語学習者（2 名）にパイロット調査を行った結果得られた適切だと思われる時間である。

### 【ステップ2】

10分程度の休憩のあと、日本語学習歴などに関するフェイスシート及びオノマトペ習得などに関するアンケートに記入してもらった。フェイスシートとアンケート用紙への記入が終わった後、再度休憩してもらった。ベトナムに在住中の学習者に対しては、学習者がフェイスシートに記入してもらっている間に、ステップ1終了後の解答用紙に目を通した。その際、気になる回答を出した一部の調査協力者に対し、フォローアップ・インタビューを実施した。

### 【ステップ3】

ステップ1で見たアニメーションを再度流し、別の解答用紙にそれぞれの母語で描写してもらった。このステップ3は、ステップ1と同じアニメーションを見て、それぞれの母語で描写する作業である。この調査を行った理由は、ベトナム人日本語学習者及び中国人日本語学習者の日本語オノマトペの習得において、それぞれの母語の転移について検討するためであった。

ただし、ベトナム語と中国語のオノマトペの種類と使用習慣は異なるため、ベトナム人日本語学習者と中国人日本語学習者に対する指示は異なる指示を出した。ベトナム語には、オノマトペが数多く存在し、オノマトペが多用される。そのため、ベトナム人日本語学習者に対しては、同じ場面でどのような語を使って表現するかを観察するため、解答用紙には日本語の描写文と同じような構文のベトナム語訳を載せ、「……………」で示したブランクのところにできるだけベトナム語のオノマトペを使用して生き生きと描写するように指示した。なお、協力者が違う構文で描写したい場合も許可した。

一方、中国語は、ベトナム語と比べオノマトペの数は多くなく、オノマトペを積極的に使用する習慣がないと言われているため、中国人学習者に対しては、日本語の描写文の中国語訳を入れず、できるだけ生き生きと描写するよう指示した上で、自由回答式で描写してもらった。

日本国外で日本語を学ぶベトナム人日本語学習者及び中国人日本語学習者に対する調査は、各大学の教室で一斉に行った。調査中は私語を許さず、各ステップ終了後、当該のステップの解答用紙とアンケート用紙をすぐに回収した。日本語母語話者と日本に留学中のベトナム人日本語学習者は所属がばらばらであるため、個別に調査を行った。

ベトナムにいる日本語学習者に対する調査は2016年6月～8月に実施した。なお、ベトナムでは新しい学年は9月に始まるため、今回調査した日本語学習者はそれぞれ1年次、2年次、3年次終了時の学習者である。中国でも新しい学年は9月に始まるということであるため、今回調査した中国人学習者の3年生も、ベトナム人学習者の3年生と同様で、3年次終了時の学習者で、日本語学習時間も同様で、おおよそ600時間である。残念ながら、調査では、調査当日の日本語能力測定テストは実施できなかった。しかし、当該学科の学習要領を考慮すると、学習者の日本語能力はおおむね1年生は初中級、2年生は中級、3年生（ベ

トナム人学習者と中国人学習者の両方とも)は中級後半の段階に当たると考えられる。フェイスシートでは、ベトナム人学習者の1年生の41.7%がN4資格、58.3%がN3資格を取得済みで、2年生の24.2%がN2資格、75.8%がN3資格を取得済みで、3年生の84.2%がN2資格を取得済みで、N3資格の保有者はわずか15.8%であった。中国人学習者3年生は既に述べた通り、全員N2資格を有している。

中国人学習者に対する調査は2016年11月に実施し、日本に留学中のベトナム人留学生及び日本語母語話者に対する調査は2016年6月から9月にかけて実施した。

## 第6章 アンケート調査の結果

本調査のステップ2では、日本語オノマトペについての学習意識とその学習方法について、学習者にアンケートを行った。本章に続く第7章では、ベトナム人日本語学習者と中国人日本語学習者がそれぞれ日本語オノマトペをどのぐらい適切に使用できているかについて考察し、さらに第8章では、両国の学習者が産出した日本語オノマトペに見られる傾向及びそれぞれの母語の転移について考察する予定であるが、その前に、両国の学習者が日本語オノマトペについてどのような学習意識を持っているか、日本語オノマトペをどのように学習していくかという学習方法について言及しないといけない。そこで、本章では、まず6.1で、調査のステップ2のアンケートの回答結果を取り上げる。6.2では、両国の学習者の日本語オノマトペの学習意識について述べる。6.3では、両国の学習者の日本語オノマトペの学習方法について紹介する。

### 6.1 両国の学習者のアンケート調査の結果

本節では、ベトナム人学習者と中国人学習者のアンケート調査の結果を紹介する。アンケートには、選択式と自由回答式が含まれる。選択式の結果を割合(%)で表したものが表6.1である。自由回答のところは考察の箇所の詳細に述べる。

表 6.1 学習者のアンケート回答の結果 (%)

質問	質問内容	ベトナム人	ベトナム人	ベトナム人	ベトナム人	ベトナム人	中国人学習者
		1年生	2年生	3年生	留学生	ム人学習者計	
1	日本語にはオノマトペ (擬音語・擬態語) という語群があることを知っていますか。						
	・知っている	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	60.0
	・知らない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	40.0
2	日本語オノマトペは難しいと思いますか。						
	・はい、そう思う	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	95.0
	・いいえ、そう思わない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	・どちらとも言えない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	5.0
3	(質問2に「はい、そう思う」と答えた人にお聞きします) どうして日本語オノマトペは難しいと思いますか。 →後述						
4	日本語オノマトペは面白いと思いますか。						
	・はい、強くそう思う	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	20.0
	・少し、そう思う	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	60.0
	・あまり思わない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	20.0
	・まったく、そう思わない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	10.0

日本語学習者の日本語オノマトペ産出の実証的研究  
 —ベトナム語母語話者と中国語母語話者を比較して—

5	どうして、日本語オノマトペは面白いと思いますか。→後述						
	・リズム感があるから	83.3	96.8	84.2	100.0	91.7	80.0
	・その他の理由（自由回答）→後述	16.7	3.2	15.8	0.0	8.3	20.0
6	あなたが知っている日本語オノマトペで、すぐ思い浮かぶものを5つほど取り上げてください。→後述						
7	日本語オノマトペをもっと覚えたいと思いますか。						
	・はい、そう思う	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	80.0
	・いいえ、そう思わない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	20.0
8	（質問7に「はい、そう思う」と答えた人にお聞きします）どうして、日本語オノマトペをもっと覚えたいと思いますか。→後述						
9	（質問7に「いいえ、そう思わない」と答えた人にお聞きします）どうして、日本語オノマトペをもっと覚えたくないと思いますか。→後述						
10	母語で話す時に、母語のオノマトペをよく使いますか。						
	・よく使っている。	0.0	21.2	15.8	50.0	19.4	20.0
	・時々使う	100.0	75.8	63.2	50.0	73.6	40.0
	・あまり使わない	0.0	3.0	21.0	0.0	7.0	40.0
	・まったく使わない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
11	日本語の漫画をよく読んでいますか。						
	・よく読んでいる	25.0	0.0	26.3	37.5	15.3	15.0
	・時々読んでいる	25.0	30.3	26.3	37.5	29.2	30.0
	・あまり読んでいない	0.0	15.2	0.0	0.0	6.9	25.0
	・まったく読んでいない	50.0	54.5	47.4	25.0	48.6	30.0
12	日本語の文学作品をよく読んでいますか。						
	・よく読んでいる	8.3	0.0	0.0	0.0	1.4	0.0
	・時々読んでいる	0.0	15.2	26.3	25.0	16.7	30.0
	・あまり読んでいない	25.0	30.3	0.0	25.0	20.8	55.0
	・まったく読んでいない	66.7	54.5	73.7	50.0	61.1	15.0
13	日本語の歌をよく聞いたり歌ったりしていますか。						
	・よくしている	33.3	18.2	26.3	25.0	23.6	20.0
	・時々している	33.3	45.5	52.6	50.0	45.8	50.0
	・あまりしていない	33.4	30.3	21.1	25.0	27.8	20.0
	・まったくしない	0.0	6.0	0.0	0.0	2.8	10.0
14	日本人と日本語で話す時に、できるだけオノマトペを使おうとしていますか。						
	・できるだけ使おうとしている	16.7	15.2	15.8	62.5	20.8	0.0
	・時々使っている	25.0	24.2	26.3	25.0	25.0	15.0
	・あまり使っていない	25.0	30.3	15.8	12.5	23.6	70.0
	・まったく使わない	33.3	30.3	42.1	0.0	30.6	15.0

日本語学習者の日本語オノマトペ産出の実証的研究  
 —ベトナム語母語話者と中国語母語話者を比較して—

15	今回の調査対象となっている 21 語のオノマトペに対して、それぞれ「知っていますか」「オノマトペだと思いますか」について聞いた。						
16	調査対象の 21 語のうち、知っているものをどこで勉強したか、覚えている限り、番号で書きなさい。教科書で覚えた ②アニメや動画で覚えた ③歌で覚えた ④日本人との日常会話で覚えた ⑤その他						
17	日本語の会話などで知らないオノマトペに出会う時、どうしますか。(複数選択可能)						
	・無視して、話を進める	16.7	24.2	52.6	75.0	36.1	35.0
	・一緒に使われる動詞をもとにその意味を判断する	66.7	54.5	63.2	100.0	63.9	60.0
	・その意味を説明してもらうように願う	16.7	21.2	26.3	50.0	25.0	25.0
	・その他 (自由回答) →後述						
18	文書などで知らないオノマトペに出会う時、どうしますか。(複数選択可能)						
	・無視して文書を読み続ける	16.7	39.4	52.6	75.0	43.1	60.0
	・一緒に使われる動詞をもとに、意味を判断する	25.0	51.5	63.1	100.0	55.5	50.0
	・同じような部分を持つ言葉と連想し、オノマトペの意味を判断する	41.7	30.3	26.3	37.5	31.9	35.0
	・辞書でオノマトペの意味を調べる	83.3	51.2	42.1	25.0	51.4	25.0
	・その他 (自由回答式) →後述						
19	あるオノマトペを覚えようとする時に、どのような方法を使いますか。(複数選択可能)						
	・意味を母語に訳して暗記する	58.3	78.1	52.6	62.5	63.8	15.0
	・同じような部分を持つ言葉と連想して暗記する。	50.0	28.1	68.4	62.5	44.4	45.0
	・一緒に使われる動詞とセットで用法まで覚える。	16.7	28.1	52.6	100.0	40.2	40.0
	・何回も口に出して発音して覚える	50.0	31.3	42.1	0.0	33.3	35.0
	・発音しながら体の動きで覚える	33.3	12.5	36.8	0.0	20.8	25.0
	・その他 (自由回答式) →後述						
20	母語のオノマトペ知識は日本語オノマトペを勉強する時に有利だと思いますか。						
	・有利だと思う	58.3	52.4	68.4	100	62.5	30.0
	・あまり有利ではない	25.0	9.0	5.2	0.0	9.7	55.0
	・全然役に立たない	0.0	0.0	0.0	0.0	27.8	15.0
	・無回答	16.7	38.6	26.4	0.0	0.0	0.0

## 6.2 両国の学習者による日本語オノマトペについての学習意識

まず、日本語オノマトペについて、ベトナム人学習者と中国人学習者がどのような意識を持っているかを見てみたい。

質問 1「日本語にはオノマトペ (擬音語・擬態語) という語群があることを知っていますか。」に対して、ベトナム人学習者 4 つグループの 100%が「知っている」と回答した。これは、ベトナム人学習者がオノマトペの概念を既に知っていることだけを意味しているの

ではなく、日本語を学習している上で、オノマトペがその一部分であることを認識しているということであろう。これに対して、中国人学習者のうち、「知っている」と回答したのは60%で、残りの40%は「知らない」と回答した。「知らない」と回答した中国人学習者の場合、おそらく、本当に知らないというより、この語群をあまり意識していないのだと思われる。その原因として、中国語にはオノマトペ（特に擬態語）が少なく、一部の中国人学習者にとってオノマトペという語群に対する認識は希薄であると考えられる。

質問2「日本語オノマトペは難しいと思いますか」に対して、中国人学習者の1人の学習者を除き、全員が「はい、そう思う」と回答した。また、質問3では、その理由について学習者に聞いた。学習者の回答を確認したところ、ベトナム人学習者も中国人学習者も同じような理由を挙げている。例えば、「数が多すぎてなかなか覚えられない」「オノマトペは形が多く、覚えにくい」「オノマトペは意味が複雑だから難しい」「意味が複雑で分かりにくい」「似ているものが多く間違いやすい」などといった理由である。要するに、日本語オノマトペは数が多く、意味が似たものが多いため、学習者の習得を妨げているのである。

質問4は「日本語オノマトペは面白いと思いますか」という日本語オノマトペについての感想であるが、ベトナム人学習者は全員が「はい、強くそう思う」と回答した。これに対して、日本語オノマトペが面白いと強く思っている中国人は20%しかおらず、「少し、そう思う」が60%、「あまり思わない」が20%、残りの10%は「面白くない」という結果であった。このように、ベトナム人学習者は中国人学習者より、日本語オノマトペという語群についてははっきり認識し、興味を持っていると言える。

質問5では、学習者に日本語オノマトペがおもしろいと思っている理由について聞いた。結果として、ベトナム人学習者の91.7%と中国人学習者の80%が「リズム感があるから」という内容を選択した。つまり、ほとんどの学習者にとって、日本語オノマトペはリズム感を感じさせる言葉であり、これこそが、日本語オノマトペの面白さを感じさせる一つの特徴であると言えよう。リズム感のほかに、日本語オノマトペの面白さとして両国の学習者が共通して述べているのは「直感的に面白いと思う」であった。また、ベトナム人だけの感想として「実際の音に似ているものが多い」「聞いてうれしく感じる」といったことが挙げられていた。このように、意味がわかりづらいものが多いにもかかわらず、両国の学習者が「直感的におもしろいと思う」と述べているのは、おそらくオノマトペの典型的な標識であるABAB型か「AっBり」の音的な効果によるリズム感のお蔭であろう。そして、「聞いてうれしく感じる」という感想であるが、これも日本語オノマトペがもたらすリズム感の効果である。ちなみに、ベトナム語と中国語には「反復」という造語法<sup>17</sup>があるため、両国の学習者にはリズム感を持つ日本語オノマトペを受け入れる土台が存在していると考えられる。

<sup>17</sup> ベトナム語には「tù láy」（反復語）という語群が数多く存在し、その中の多くがオノマトペの役割をしている。中国語には、強調する機能を持っているABB、ABBの形をしている語が存在しているため、日本語オノマトペの反復形には馴染みがあると思われる。

質問 6 では、学習者が知っている日本語オノマトペのうち、すぐに思い浮かぶものを 5 つ挙げてもらった。結果として、ベトナム人学習者が書いた 360 語 (4 グループの 72 人×5 語=360 語) のうち、355 語 (98.6%) が「ぴかぴか」「どきどき」「ふわふわ」などと言った ABAB の形をしているオノマトペである。これに対して、中国人学習者が書いた 100 語 (20 人×5 語=100 語) のうち、ABAB の形をしているのが 7 語 (70%) で、「すっきり」「びっくり」のような「A っ B り」をしている語が 23 語 (23%) で、残りの 3 語 (3%) は「じっ」「ほっ」といった「A っ」の形をしている語である。このように、学習者にとって、日本語オノマトペという概念は、ABAB という反復形を持っている語群であるイメージが強いことがわかった。特に、ベトナム人学習者の場合、日本語オノマトペは ABAB の形をしている言葉として捉えていると考えられる。

質問 7 「日本語オノマトペをもっと覚えたいと思いますか。」に対して、ベトナム人学習者は全員「はい、そう思う」と回答した。これは、日本語オノマトペ学習に対する強いモチベーションを示している。中国人学習者の場合、「日本語オノマトペをもっと覚えたい」と答えたのは 80% で、残りの 20% (4 人) が「日本語オノマトペをもう覚えたくない」と答えている。質問 8 で日本語オノマトペをもっと覚えたい理由について聞いた結果、両国の学習者が共通の回答を出している。それは「日常生活に多く使われ、うまく使うと日本人らしく話すことができる」「使えると、表現力が豊富になり、文がきれいになる」「表現力を高めることができるから」「会話に役に立つ」「日本語が自然になる」「漫画の理解に役に立つ」といった理由である。このように、学習者は日本人の言語生活にオノマトペの大切さとその表現効果を十分に認識していることがわかった。これに対して、質問 9 では、日本語オノマトペをもっと覚えたくない理由について聞いた。その結果、中国人学習者の 4 人がそれぞれ「いいえ」「今の単語が足りないからもっと覚えるのは大変だ」「難しいから」「難しいから興味がない」と回答しており、日本語オノマトペに対する興味は示されていなかった。

一方、ベトナム語または中国語という自分の母語で話す時、母語にあるオノマトペの使用実態はどうであるかを聞いた結果、ベトナム人学習者の 19.4%、中国人学習者の 20% が母語で話す時も、オノマトペをよく使っていることが明らかになった。質問 10 の回答の内訳を見ると、「母語で話す時、母語におけるオノマトペを時々使う」割合が圧倒的に多く、ベトナム人学習者の 73.6% と中国人の 40% を占めている。母語で話す時も、オノマトペを使う習慣（「よく使っている」と「時々使う」の合計）を持っているのはベトナム人学習者が 93% で、中国人学習者の 60% よりかなり高い。言い換えれば、ほぼすべてのベトナム人学習者は母語で話す時も母語でのオノマトペを使用する習慣を持っている。ちなみに、両国の学習者の中で、母語でオノマトペを全く使わないと回答した人はいない。

日本語オノマトペは現在のところ、日本語教科書にまだ積極的に導入されていないのが実状である。しかし、オノマトペは日本に住んでいなくても、日本語の漫画、文学作品、歌などからも自然に学習できるものである。質問 11、質問 12、質問 13 ではそれぞれ、日本語の漫画、文学作品、歌に接する度合いについて聞いた。その結果、質問 13 の回答で、ベト

ナム人学習者の 69.4% (よく歌っているの 23.6%+時々歌っているの 45.8%) と中国人学習者の 70% (よく歌っているの 20%+時々歌っているの 50%) がしばしば日本語の歌と接触していると言える。ベトナムでは、現在は日本のブームと言ってもいいほど、日本からの文化が積極的に受け入れられている。特に、若者の中では K ポップとともに J ポップが人気である。次に多いのが日本語の漫画で、ベトナム人学習者の 44.5% (15.3%+29.2%) と中国人学習者の 45% (15%+30%) がよく、または時々日本語の漫画を読んでいると答えている。これに対して、日本語の文学作品をよく読んでいる学習者はほとんどいなかった。時々読んでいるのはベトナム人学習者の 16.7%、中国人学習者の 30% である。このように、どちらの国の学習者も、日本の文学作品より日本語の歌と漫画に興味を示している。

次に、学習者が日本語オノマトペを使う意欲についてであるが、質問 14 「日本人と日本語で話す時に、できるだけ日本語オノマトペを使おうとしていますか。」に対して、「できるだけ使おうとしている」と「時々使っている」と回答した人は、ベトナム人学習者が 45.8% で、「あまり使っていない」と「全く使っていない」と回答した人は 54.2%、それぞれ半数前後を占めている。これに対して、中国人学習者のほうは、「あまり使っていない」と「全く使っていない」と回答した人が 85% で圧倒的に多く、「時々使う」人は 15% しかおらず、「できるだけ使おうとしている」と回答した人はいなかった。このように、日本人と話す時に、ベトナム人学習者のほうが、中国人学習者より日本語オノマトペを積極的に使う意欲が高い。ベトナム人学習者の 4 つのグループを見ると、日本語オノマトペを積極的に使おうとしている意欲は「1 年生グループ」「2 年生グループ」「3 年生グループ」は大きな差がなく、15% 前後の程度であるが、留学生のグループになると、62.5% と高い。このようなオノマトペの使用意欲の高まりは、日本での生活に慣れてきたことで、日本語オノマトペも自然に耳に入り、理解・使用できるようになるためではないかと考えられる。

質問 15 では、今回の調査対象となっている 21 語のオノマトペに対して、それぞれ「知っていますか」「オノマトペだと思いますか」について聞いた。そのうち、それぞれの語を知っているかどうかについては、第 7 章に述べる。ここでは、調査対象となっている 21 語がそれぞれオノマトペであるかどうかという学習者の認識についてのみ述べる。第 2 章で述べた通り、一般の語彙とオノマトペの境界線がはっきりしていない場合があり、ある語がオノマトペであるかどうかについて、日本語母語話者と学学習者中では見解が一致していないところがある。今回、調査した結果、21 語のうち、ほとんどの学習者がオノマトペとして認識しているのが「ふらふら」「あっさり」「びったり」「ぴかぴか」「ばらばら」「ばたばた」「にこにこ」「さらさら」「ぐるぐる」「くるくる」「がんがん」「うろうろ」という語であった。質問 6 の回答結果からわかるように、学習者にとって日本語オノマトペは ABAB または「A っ B り」というイメージが強い。先ほどの認識結果は、おそらく、ABAB と「A っ B り」が日本語オノマトペの典型的な標識として認識されているからだと考えられる。その一方で、半分以上の学習者がオノマトペと認識していない語は「ほっ(と)」「どどん」「ちゃん(と)」「すっ(と)」「ふ(と)」「ぼうっ(と)」「ぱっ(と)」「たっぷり」「ぐっ(と)」

であった。これらの語はオノマトペの典型的な標識を持っていない、あるいは「どんどん」「たっぷり」のように、オノマトペの典型的な標識を持っているが、意味から考えると、一般の副詞と思われることが多いものであった。

質問 16 は、「21 語のオノマトペの中で、知っているものをどこで勉強したか、覚えているかぎり、番号を書きなさい。①教科書で覚えた ②アニメや動画で覚えた ③歌で覚えた ④日本人との日常会話で覚えた ⑤その他」という学習の元となっているところを問う質問である。学習者が知っている語が 21 語の中の一部に過ぎず、しかも、どこで勉強したかということについても、記憶によって記述されたものであるため、信頼性が疑われそうである。しかし、表 6.1 見てわかるのは「どんどん」「ちゃん(と)」「たっぷり」「がんがん」「ほっ(と)」「びったり」「にこにこ」「たっぷり」といった語は「①教科書で覚えた」の記述が圧倒的に多く、残りの 13 語は「②アニメか動画で覚えた」、「③歌で覚えた」、「⑤その他」の記述が目立っている。学習者の記憶であるため、正確に覚えていない可能性はあるかもしれないが、日本語オノマトペの学習は日本語の教科書より、クラスの環境外で学ぶことが多いように思われる。

上記の質問 1 から質問 16 までは、日本語オノマトペについての意識及びオノマトペの使用に関する意欲についての質問項目であった。その結果、ベトナム人学習者全員と中国人学習者の 60%が日本語オノマトペという語群の存在を認識していた。また、ベトナム人学習者全員と中国人学習者の 80%がオノマトペを面白く感じ、もっと覚えたいと希望している学習者が多かった。そして、ベトナム人学習者は、母語で話す時も日本語で話す時も、オノマトペを使おうとしている意欲が中国人学習者より高いことを示していた。

質問 17「日本語の会話などで知らないオノマトペに出会う時、どうしますか」という質問に対して、オノマトペを「無視して話を進める」と回答したのはベトナム人学習者の 36.1%、中国人学習者の 35%で、大体 3 分の 1 を占めている。特に、ベトナム人学習者の場合、会話に知らないオノマトペの存在を無視している学習者の割合は 1 年生グループが 16.7%、2 年生グループが 24.2%、3 年生グループが 52.6%、留学生グループが 75%というように、日本語学習歴が長いほど、そして、滞日経験のある学習者のほうが高くなっている傾向にある。これは、日本語学習歴の長い人と滞日経験のある人ほど、学習意欲が落ちることを意味するのではなく、高学年の学習者と留学生の場合、日本語はある程度できているため、会話の中から多くの要素を判断の手がかりとして活用することができるからだと思われる。一方、「一緒に使われる動詞をもとにその意味を判断する」と回答したのはベトナム人学習者全体の 63.9%、中国人学習者は 60%を占めている。つまり、半分以上の学習者がオノマトペの意味を判断する際に、共起する動詞を手がかりにしているのである。確かに、オノマトペが多くの場合、副詞として、動詞を修飾することが一般的である。ただ、同じ動詞でも、物事をどのようなニュアンスを描写するかによって、様々なオノマトペを使うことができるため、このような動詞を手がかりにしてオノマトペの意味を判断するのは具体的なニュアンスの理解に物足りない。そして、「オノマトペの意味を説明してもらおうようお願いする」

と選択したのがベトナム人学習者と中国人学習者ともに 25%を占めている。「その他」の部分には「話し手が親しければ、意味を説明してもらおうが、そうじゃなければ、恥ずかしい。」(VJ03) という例が見られた。

### 6.3 学習者の日本語オノマトペの学習方法

質問 17 では、コミュニケーションの場面において、未知のオノマトペが出てくる場合の対応について聞いたが、質問 18 では「文書などで知らないオノマトペに出会う時、どうしますか」という書き言葉の場面において、未知のオノマトペが出てくる場合の対応について聞いた。その結果、先ほどと同じように、「オノマトペを無視して、文書を読み続ける」割合は中国人学習者が 60%で、ベトナム人学習者全体の 43.1%よりはるかに高かった。これは、中国人が日本語の文書を読む時に、漢字で書かれている文字を十分に頼ることができるため、ひらがな、またはカタカナで書いているオノマトペを無視しても文章の大意は把握できているため、ベトナム人学習者よりオノマトペを無視する傾向が強いのだろう。そして、「共起する動詞をもとにオノマトペの意味を判断する」と回答した学習者の割合はベトナム人学習者全体が 55.5%、中国人学習者が 50%であった。ベトナム人 1 年生のグループを除けば、どちらのグループにおいても半数以上の学習者はこのストラテジーをしっかりと理解していたと言える。文章は会話よりもじっくりと考える時間があるため、「同じような部分を持つ言葉と連想し、オノマトペの意味を判断する」という選択もあったが、ベトナム人学習者全体と中国人学習者の約 3 分の 1 がこの回答を選択していた。最後に「辞書でオノマトペの意味を調べる」という方法であるが、これを選択している中国人学習者は 25%であるのに対して、ベトナム人学習者全体の 51.4%が辞書を頼りにしていることがわかった。その原因として、中国人学習者は漢字に精通しているため、文書を読むときには漢字だけを頼りしても、文書の大意が理解できていると思っているためであろう。辞書を頼りにする割合を見れば、ベトナム人 1 年生グループが 83.3%で最も高く、学年が上がれば上がるほどこの割合が低くなり、留学生グループになると、25%にまで減少した。筆者個人の経験を思い出すと、確かに日本語の勉強を始めたばかりの時に知らない言葉に出会ったら、辞書ですぐその意味を調べるが多かった。学習するにつれて、既知の言葉が多くなるとともに言葉に対する新鮮感が薄れて、辞書を頼りにする意識も薄れていくのではないかと考えられる。

質問 17 と質問 18 の学習者に日本語オノマトペの理解に関する方法を聞いた 2 つの質問を観察したところ、ベトナム人学習者と中国人学習者の間に、辞書を頼りにする意欲の違いを除けば、他の方法に関してはさほどの差がなかった。特に、ベトナム人の 4 つのグループの回答の内訳を見ると、日本語学習歴が長い人ほど、滞日経験がある人ほど、未知のオノマトペを無視する傾向が多くなるとともに、辞書を頼りにする傾向が薄れていく様子が見受けられた。

次に、学習者は日本語オノマトペを覚えようとする時、どのような方法を採用しているか見てみる。質問 19 では日本語オノマトペの学習方法について複数選択可能な方式で選択してもらった。選択肢には「意味を母語に訳して暗記する」「同じような部分を持つ言葉と連想して暗記する」「一緒に使われる動詞とセットして用法まで覚える」「何回も口に出して発音して覚える」「発音しながら体の動きで覚える」が選択肢として与えられる。まず、「意味を母語に訳し暗記する」と回答した学習者の内訳を見ると、ベトナム人学習者の、一年生 58.3%、二年生 78.1%、三年生 52.6%、留学生 62.5%、平均 63.8%であった。つまり、ベトナム人学習者の約 3 分の 2 は日本語オノマトペを学習する際に、母語と対応させて覚えているのである。成人してから第二言語を学習する場合、母語と対応させながら学習する姿が見られるが、ベトナム人学習者の場合、日本語オノマトペの学習は、まさに成人型外国語学習のスタイルとなっている。これに対して、日本語オノマトペを覚えようとする時に、「母語に訳して暗記する」と回答した中国人学習者の割合は 15%しか占めていない。このように、中国人学習者は、母語で話す時、母語でのオノマトペを使う習慣がある割合は 60%だけで（ベトナム人学習者の該当する割合が 93%）、日本語オノマトペの学習において母語に訳して暗記するという母語を頼りにする割合も 15%と低く、日本語オノマトペの学習に母語の転移が出にくいだろうと予想される。

次に、「同じような部分を持つ言葉と連想して暗記する」という学習方法であるが、ベトナム人学習者全体と中国人学習者の割合がそれぞれ 44.4%と 45%で、ほぼ同じである。確かに、日本語オノマトペの中には、「いらいら」のように、「いらだつ」という動詞から由来すると思われるものが存在しているが、日本語オノマトペの辞書を見る限りでは、このようなオノマトペの数はそれほど多くない。というのは、どのオノマトペでも、元となる動詞、あるいは形容詞が存在しているわけではないため、このような学習方法はさほど効果的ではないと思われる。

もう一つのオノマトペの学習方法として、「一緒に使われる動詞とセットで用法まで覚える」というのがあるが、この回答を選択したのは、ベトナム人学習者と中国人学習者、それぞれ 40.2%と 40%で、ほぼ同じとなっている。日本語では、オノマトペは数多く存在し、意味が似ているものがたくさんある。質問 3「どうして日本語オノマトペが難しいと思いますか」に対して、両国の学習者は、「数が多すぎてなかなか覚えられない」「オノマトペは形が多く、覚えにくい」「オノマトペは意味が複雑だから難しい」「意味が複雑で分かりにくい」「似ているものが多く間違いやすい」といった理由を述べている。このように、似た意味合いを持っている日本語オノマトペが多く、それぞれの意味・用法をしっかりと把握しないと誤用が起きやすいと思われる。例えば、「表面に凸凹がなく滑らかなさま」を表すオノマトペとして「すべすべ」も「つるつる」も考えられる。しかし、「すべすべ」は、肌のように、もっばら柔らかいものに対して用いられるが、「つるつる」は、氷や板、金属のように硬いものに用いられることが多い。この場合、もし、「すべすべのお肌」「つるつるの金属板」のように、一緒に使われる語とセットで覚えると、誤用が起きにくく、日本語オノマトペを適

切に使えるために効果的であると思われる。質問 19 の回答の内訳を見ると、この学習方法を採用しているベトナム人学習者の 1 年生グループが 16.7%、2 年生グループが 28.1% と低かった。3 年生になると、52.6% がこの学習方法を採用し、留学生の場合、100% がこの学習方法を採用していることがわかった。つまり、日本語能力が高くなるにつれ、この学習方法を愛用する傾向にある。

また、「何回も口に出して発音して覚える」という練習方法であるが、ベトナム人学習者全体と中国人学習者の回答率はそれぞれ 33.3% と 35% でほぼ同じで、おおよそ全体の 3 分の 1 を占めていた。また、「発音しながら体の動きで覚える」という練習方法の場合、ベトナム人学習者全体と中国人学習者の回答率がそれぞれ 20.8% と 25% で、それぞれ全体の 5 分の 1 と 4 分の 1 しか占めていない。特に、留学生の場合、この二つの発音練習の方法の回答率はどちらも 0% となっている。つまり、学習者は日本語オノマトペの発音の練習にあまり力を入れていないことを示している。

最後に、質問 20 では「母語のオノマトペ知識が日本語オノマトペを勉強する時に有利だと思いますか」と学習者に質問したところ、「有利だと思う」と回答した中国人学習者の割合は 30% にとどまっているのに対して、ベトナム人学習者全体の割合は 62.5% と、中国人学習者の割合の 2 倍強となっている。そして、母語のオノマトペの知識が「あまり役に立たない」と「全然役に立たない」の割合はベトナム人学習者が 35.5% であるのに対し、中国人学習者の回答率が 70% で、全体の 3 分の 2 を占めている。言い換えれば、ベトナム人学習者の約 3 分の 2 は、母語のオノマトペの知識が日本語オノマトペを勉強する時に有利だと感じているのに対して、中国人学習者の 3 分の 2 が母語のオノマトペの知識が日本語オノマトペを勉強する時に「あまり役に立たない」あるいは「全然役に立たない」と感じているのである。特に、日本在住中のベトナム人留学生の 100% が「有利だと思う」という回答をしている。留学生は毎日、日本人の生活や生の日本語の環境に恵まれ、ベトナムで学ぶ学習者より日本語オノマトペに接するチャンスが多くあるが、新しい日本語オノマトペを覚えようとする中で母語を頼りにする姿が伺えた。そのほかに、自由回答が 1 例あった。それは、「オノマトペに興味を持っている。会話などで未知の日本語オノマトペに出会う時に、最初はその場面を手がかりにして意味を判断しようとしている。どうしてもわからない時は、相手に説明してもらおう。そして、それが使われる場面を暗記し、次回、同じような場面において、かならず、そのオノマトペを使うように心がけている (VJ02)」という日本語オノマトペの学習に積極的な態度を持っている留学生の回答例であった。ちなみに、この学習者は、今回調査対象となっている 21 語のオノマトペの中で、19 語が正答という、最も優秀な学習者であった。

## 第7章 ベトナム人学習者と中国人学習者による日本語オノマトペの正答率

本章では、調査結果を分析した上で、ベトナム人日本語学習者及び中国人日本語学習者が日本語オノマトペをどの程度適切に使用できているかという研究課題 1 を解決するため、日本語オノマトペの正答率を考察する。具体的にはまず、7.1 では、統制群である母語話者グループが各シーンで産出したオノマトペの種類とその一致の割合（一致率）を分析し、本研究におけるオノマトペの基準を挙げる。次に、7.2 と 7.3 では、ベトナム人学習者と中国人学習者による日本語オノマトペの正答率をもとに分析する。最後に 7.4 では、本章のまとめた上で結果を考察する。

### 7.1 日本語母語話者の回答及び本研究における正答の判断基準について

#### 7.1.1 日本語母語話者の回答について

本節では、日本語母語話者が記入した回答の内訳を紹介する。次ページの表 7.1 は、シーン別による日本語母語話者の回答例と一致率を計算したものである。表内の一致率は、各シーンにおいて、最も多く産出されたオノマトペの人数を母数 (N=20) で割ることで計算した割合 (%) である。

なお、オノマトペの右に※がついている語は、本研究におけるオノマトペの判定基準を満たしていないため、考察の対象外としたものである。

表 7.1 からわかるように、同じシーンに対して、日本語母語話者が全員同じ回答を出す場合もあれば、回答が一つ以上の場合もある。筆者が設定した 21 語のオノマトペは、それぞれの回答の一番上の行に太文字で表示しているものである。ほとんどのシーンにおいて、筆者が設定した 21 語と同じ語を回答した人数が 3 分の 2 以上を占めていた (72%) が、描写文 5 と 6 だけは、筆者が設定したオノマトペではなく、他のオノマトペの回答が多かった。

【描写文 5】「名曲（めいきょく）を聞いて、\_\_\_\_\_と心に來た。」

この描写文では、筆者が意図した回答は「ぐっ」というオノマトペである。母語話者 20 名のうち、「ぐっ」と回答した人が 4 名、「じーん」と回答をした人が 14 名であった。（なお、その他の答えとしては、「しんみり」と回答した人が 2 名いた。）これら全てのオノマトペは、本研究におけるオノマトペの基準を満たしているため、3 つの語とも正答と言える。もともと筆者が設定していたオノマトペは「ぐっ」というオノマトペであるが、この場合、母語話者の回答の一致率は、最も回答数が多い「じーん」のグループの割合で、20 名のうちの 14 名、70%であった。

表 7.1 日本語母語話者の回答の内訳

番号	オノマトペ	一致率	番号	オノマトペ	一致率	番号	オノマトペ	一致率
1	くるくる (14) ぐるぐる (5) ゆったり (1)	70%	8	さらさら (17) つやつや (2) まっすぐ (1) ※	85%	15	ぱっ (12) ぴん (4) ふ (2) ふっ (2)	60%
2	うろうろ (11) ぶらぶら (5) うろちょろ (3) ゆったり (1)	55%	9	すっ (12) さっ (5) すくっ (2) ぱっ (1)	60%	16	ばらばら (20)	100%
3	がんがん (13) ずきずき (4) きんきん (2) ぐらぐら (1)	65%	10	たっぶり (15) もりもり (3) どっさり (1) 入り (1) ※	75%	17	ぴかぴか (18) きれいに (1) ※ ていねいに (1) ※	90%
4	ほっ (18) はっ (1) やれやれ (1)	90%	11	ちゃん (9) きちん (5) さっ (2) ぱっちり (2) ごしごし (1) すらすら (1)	45%	18	ぴったり (18) きちきち (1) 小さい (1) ※	90%
5	ぐっ (4) じーん (14) しんみり (2)	70%	12	どんどん (13) だんだん (4) 日に日に (2) ※ ふっくら (1) ※	65%	19	ふ (と) (16) ぱっ (2) ひょい (1) は (1)	80%
6	あっさり (8) さっぱり (10) さらっ (2)	50%	13	にこにこ (20)	100%	20	ふらふら (14) よろよろ (4) ちゃらちゃら (1) 千鳥足 (1) ※	70%
7	ぐるぐる (14) くるくる (6)	70%	14	ばたばた (8) いらいら (8) せかせか (3) ぐったり (1)	40%	21	ぼうっ (18) くらくら (1) ぐらぐら (1)	90%
日本語母語話者の平均回答一致率=72.4%								

【描写文 6】「日本料理は油をあまり使わず、\_\_\_\_していて体にいい。」

この描写文は筆者が意図した回答は「あっさり」というオノマトペであるが、日本語母語話者の回答の中で、同じような意味を持っている「さっぱり」の回答者が10名で、「あっさり」の回答者の8名を上回った。「あっさり」も「さっぱり」も本研究におけるオノマトペの基準を満たしているため、両方とも正答としている。しかも、この場合、母語話者の回答の一致率は、最も回答数が多い「さっぱり」と答えた人数で、20名のうちの10名で、50%であった。

日本語母語話者の回答の一致率は72%であった。オノマトペは感覚的な言葉であるため、個人差があるということは先述したが、同じ場面において日本語母語話者10人中7人以上が同じオノマトペを使って表現しているということは、ある物事に対して共通する感覚を持っていると言ってよいだろう。中石ほか(2011)では、他のオノマトペを調査材料として実験調査を実施しているが、「ちょきちょき」「ぎこぎこ」「ぷかぷか」「きよろきよろ」「ばいばい」「にこにこ」という6語のアニメーションに対して、日本語母語話者の回答の一致率が80%以上であったと報告している(中石2011:49)。これは、日本語母語話者がオノマトペを用いて事態を把握するときの感覚の一致度が高いためであると思われる。

#### 7.1.2 本研究における正答の判断基準

7.1.1 からわかるように、オノマトペは感覚的な言葉であるため、同じ場面においても、人によって使われるオノマトペは異なることがある。そのため、本調査で使用するアニメーションの作成のために、日本語母語話者を対象にパイロット調査を3度行い、スライドの一致率が高まるように努めた。

学習者の回答については、日本語教師の経験がある日本語母語話者1名に協力してもらい、上述した日本語母語話者の回答から設定した正答(表7.1の※以外のオノマトペ)以外に、日本語教師経験のある日本語母語話者が適切と判断した語も正答とした。今回の調査は、学習者による日本語オノマトペの使用実態を調査することを目的としている。言い換えれば、学習者は、日常会話に頻出するオノマトペを理解できているか(理解の面)、同じ場面において、オノマトペを使って表現できているかどうか(産出の面)を見るのが目的の一つである。そのため、学習者の回答のうち、筆者が調査したいオノマトペと違ったオノマトペを回答したとしても、日常会話においてその場面の雰囲気が伝わると日本語教師経験がある日本語母語話者に判断された場合、正答とした。例えば、描写文8である「彼女はかみの毛が\_\_\_\_\_で、きれいだ。」という質問において、筆者が設定した正答は「さらさら」であったが、学習者の中には「ふわふわ」と回答した人が72名のうち、23名いた。「さらさら」と「ふわふわ」が表すニュアンスは同じではないが、この場合、「女の子の髪の毛の美しさを表している」点では共通している。例えば、学習者と日本人との会話の中で、知っている女性の髪の毛の美しさについて描写する場面ではそれぞれ「彼女は髪の毛がさらさらできれいですね。」「彼女は髪の毛がふわふわできれいですね。」のどちらでも適切な表現で

ある。本研究では、日常会話でオノマトペが使用されている場面の意思疎通を重視する。そのため、オノマトペの意味だけを重視し、統語的な誤用もまた考察の対象外とした。

この方法による正答の判断では、アニメーションに曖昧性が生じ、筆者が調査したい 21 語のオノマトペを的確に調査できない恐れがある。しかし、本研究で調査対象として選出した 21 語のオノマトペは、日本語母語話者の言語生活によく出ている場面において使用されている語であるため、アニメーションによる曖昧性や個人差により答えが多少違っていても、日常会話によく出てくる場面においてよく使われている語ということは変わらないと考えられる。

実際の調査データを見ると、筆者が設定した 21 語のオノマトペと同じ回答をした日本語母語話者の割合は比較的多かったため、本研究の調査対象であるオノマトペの使用実態を明らかにするという点では、研究の目的から逸脱していないと考える。

## 7.2 ベトナム人学習者による日本語オノマトペの正答率

本節では、ベトナム人日本語学習者が日本語オノマトペをどの程度適切に使用できているか考察する。また、それと同時に、日本語能力と滞日経験の差による日本語オノマトペの正答率の違いも考察する。本節はグエン (2018b) をもとにして執筆したものである。

まず、ベトナム人学習者の各グループの調査結果を見てみる。次ページの表 7.2 は各グループの正答率・既知率・無回答率の詳細を表す。この表 7.2 からわかるように、ベトナム人学習者 4 つのグループの平均正答率は 45.7% である。この結果は、中国人日本語学習者に対して類似の実験を行った中石ほか (2011) の結果 (24.5%) と比べ、2 倍弱の正答率である。中石ほか (2011) で扱っているオノマトペは本研究で使用したオノマトペと異なるため、正確な比較はできないが、今回のベトナム人日本語学習者の結果は、決して低い正答率ではないと言えよう。しかし、対象とする 21 語のオノマトペは日常生活に頻出する言葉であることを考えれば、決して高い正答率とも言えない。日常生活に頻出するオノマトペを半数以下の学習者が正しく使用できないのは、日本語のオノマトペ習得の難しさを裏付けていると考えられる。

以下では、日本語オノマトペの正答率が日本語能力の違いにより、どのように異なるかを見ていく。今回、調査に協力してくれたのはベトナムで勉強中の 1 年生、2 年生、3 年生の学生及び日本に留学中のベトナム人留学生である。

表 7.2 ベトナム人日本語学習者の正答率・既知率・無回答率 (%)

日本語学習者の日本語オノマトペ産出の実証的研究  
 —ベトナム語母語話者と中国語母語話者を比較して—

オノマトペ	留学生			3年生			2年生			1年生		
	正答率	既知率	無回答率									
くるくる	75	100	0	47.3	31.6	5.2	48.5	39.4	18.2	16.7	25	33.3
うろうろ	75	75	25	68.4	73.7	10.5	9.1	39.4	33.3	33.3	75	33.3
がんがん	75	100	12.5	52.6	42.1	10.5	63.6	60.6	3	66.7	91.7	25
ほっ(と)	62.5	75	0	63.1	84.2	15.8	51.5	69.7	12.1	41.7	75	8.3
ぐっ(と)	25	25	50	0	36.8	26.3	3	42.4	42.4	0	33.3	50
あっさり	75	87.5	25	73.6	89.5	5.2	60.6	63.6	24.2	16.7	41.7	50
ぐるぐる	87.5	87.5	0	36.8	42.1	5.2	9.1	60.6	42.4	0	58.3	33.3
さらさら	62.5	75	12.5	68.4	47.4	0	6.1	30.3	18.2	0	41.7	33.3
すっ(と)	75	75	25	21.1	36.8	26.3	3	27.3	27.3	8.3	58.3	50
たっぷり	87.5	100	12.5	84.2	89.5	0	12.1	48.5	36.4	25	91.7	16.7
ちゃん(と)	62.5	100	25	52.6	94.7	0	15.1	93.9	3	25	100	16.7
どんどん	87.5	100	12.5	84.2	100	5.2	51.5	100	18.2	100	100	8.3
にこにこ	75	100	25	94.7	100	0	69.7	100	15.1	58.3	100	25
ばたばた	75	75	25	15.7	52.6	31.6	9.1	27.3	54.5	8.3	41.7	41.7
ぱっ(と)	50	75	12.5	63.1	21.1	5.2	42.4	15.2	27.3	16.7	0	41.7
ばらばら	100	100	0	84.2	89.5	5.2	81.8	78.8	9.1	25	83.3	41.7
ぴかぴか	75	100	25	68.4	100	0	78.8	97	6.1	16.7	91.7	25
ぴったり	87.5	100	0	73.6	100	10.5	72.7	84.8	18.1	58.3	91.7	25
ふ(と)	37.5	50	37.5	26.3	26.3	42.1	6.1	6.1	33.3	0	33.3	66.7
ふらふら	75	100	25	52.6	68.4	26.3	30.3	66.7	36.4	16.7	66.7	75
ぼうっ(と)	75	75	25	26.3	15.8	36.8	9.1	15.2	39.4	0	8.3	41.7
<b>平均値</b>	<b>67.3</b>	<b>84.5</b>	<b>17.9</b>	<b>55.1</b>	<b>63.9</b>	<b>12.8</b>	<b>34.9</b>	<b>55.6</b>	<b>24.7</b>	<b>25.4</b>	<b>62.3</b>	<b>35.3</b>
<b>4つのグループの正答率の平均：45.7%</b>												

表 7.2 で示した正答率を高い順に述べると、「留学生グループ」の 67.3%がトップで、次に「3年生グループ」の 55.1%、2年生グループの 34.9%と続いた。最も正答率が低かったのは、「1年生グループ」の 25.4%であった。この結果は、各群の日本語能力のレベルと比例している。このように、日本語能力が高ければ高いほど日本語オノマトペをよく使用できていることが示唆された。

しかし、例外も見られた。留学生グループの調査協力者で留学生の中で最も長く日本に滞在している（12年）VJ06は、正答率が低かった。21語のオノマトペのうち、正答を出したのは「びかびか」「びったり」「ばらばら」「たっぷり」「すっと」「ぐるぐる」「ほっと」という7語、誤答が6語、無回答が8問あった。フェイスシートによると、このVJ06は、仕事以外で日本人と話すチャンスが少ないことがわかった。

このように、一般に日本で生活している留学生のほうが、ベトナムにいる学習者よりもオノマトペを使うチャンスが多く、より適切に使用できていることが多い。しかし、VJ06の例のように、日本に長期滞在していたとしても、意識的に習得しようとしなければ、習得できないままになってしまった例も見られた。

次に、具体的にどのようなオノマトペの正答率が高く、どのようなオノマトペの正答率が低いか見てみる。

表7.2を見ると、4つのグループのうち、3グループ以上で正答率が最も高かったオノマトペは「どんどん」「にこにこ」「ばらばら」「がんがん」「びったり」「ほっと」「あっさり」であった。これらは、日本語教科書に取り上げられているオノマトペで、使い方がはっきりしているオノマトペである。このようなオノマトペは、学習者も十分に習得できていることが明らかになった。

逆に、留学生グループを除いて正答率が低かった語は「ちゃんと」「ぐるぐる」「すっと」「ばたばた」「ふと」「ぼうっと」「ぐっと」であった。グエン（2017）のアンケート調査結果では、ベトナム人学習者が日本語オノマトペを覚えようとする場合、その意味をベトナム語に訳して暗記すると回答した学習者が4つのグループにおいて過半数を占めていた。そのため、例えば「名曲を聞いて、ぐっと心に來た」という「ぐっと」の言い方、および「ふと空を見上げる」という「ふと」という言い方については、ベトナム語では、同じ場面で「chạm tới trái tim（心に來た）」という表現だけで十分であるし、「bắt chọt nhìn lên bầu trời（思わず、空を見上げると～）」という言い方をすることが多いため、母語を頼りにオノマトペを覚えている学習者にとって習得が難しい。また、「目がぐるぐる回る」の「ぐるぐる」であるが、ベトナム語では「quay như chong chóng（風車のように回る）」という比喻表現で表現されるため、「ぐるぐる」をすぐに思い起こせる学習者はいないのだろう。また、「ばらばら」の例であるが、母語話者の回答にも「ばらばら」「いらいら」「せかせか」「ぐったり」というように回答がいくつも見られた問題である。描写文は「最近は仕事がとても忙しくて、している。」という文からは「ばらばら」「ぐったり」の産出もありうるし、アニメーションからは「いらいら」「せかせか」の産出もありうるため、今回の「ばらばら」の例は、描写文からの推測か画像からの推測か判断が難しく、迷ってしまったようである。その結果、留学生のグループを除いたベトナムにいる学習者の正答率が低かった。一方、「ぼうっ（と）」と「すっ（と）」というオノマトペはABABという反復形ではない。ベトナム人学習者にとってオノマトペは反復形をしている言葉であるイメージが強い（グエン2017）ため、ABABの形を持っているオノマトペ以外のものはあまり馴染みがなく、習得しにくい可能性が考

えられる。最後に、「ちゃん(と)」は4グループにおいて既知率がほぼ100%にもかかわらず、正答率が1年生(25%)、2年生(15.1%)、3年生(52.6%)、留学生(62.5%)と低かった。

「ちゃん(と)」がオノマトペと結びつきづらいことが要因だと思われる。このように、一般に副詞に思われる語は、既知であってもオノマトペだと考えられにくいため、回答として選ばなかった様子が窺える。

次に既知率と正答率の関係を見てみたい。

表7.2を見ると、全体的に既知率が正答率を上回っており、その差はとくに1年生で大きい。これは、あるオノマトペの意味を知っていても、実際の場面に使用できるとは限らないということの意味している。また、日本語力が高いグループのほうが、既知率に対する正答率が高いことも、オノマトペの知識と運用能力の相関が、日本語力の影響を受けることを示唆している。

4つのグループにおいて既知率が高いのが「たっぷり」「ちゃんと」「どんどん」「にこにこ」「ぴかぴか」「びったり」「ばらばら」で、これらのオノマトペは教科書に取り上げられるため、既知率が高い。しかし、「どんどん」「ちゃんと」のような一般には副詞と考えられるオノマトペの正答率は思ったほどではなかった。「ちゃんと」の正答率が低い要因は先ほど述べた通りである一方、「どんどん」の既知率は全てのグループで100%であった。正答率は、1年生が100%である一方、2年生は51.5%と低かった。これは1年生のほうが2年生よりできているというより、そこに入りそうなオノマトペをそれしか知らなかったためだと思われる。

また、調査実施の際には、当該のオノマトペがわからず、どうしても産出できない場合は無回答にしていと指示した。グループ別の無回答率を見ると、1年生グループがもっとも高く、35.3%であった。残りのグループの無回答率は、20%前後にとどまった。描写文が投影された後、15秒の考える時間があったが、15秒では十分でないことがフォローアップ・インタビューからわかった。

### 7.3 中国人学習者による日本語オノマトペの正答率

中国人学習者の調査結果を検討していく。今回、調査を行ったのは、中国の某大学で日本語を専攻する3年生のデータである。本節はグエン(2018a)をもとに執筆したものである。次ページの表7.3は、中国人学習者3年生の正答率・既知率・無回答率を表したものである。また、それに続く表7.4は中国人学習者3年生の正答率を高い順で並べ替えたものである。

表 7.3 中国人学習者の正答率・既知率・無回答率 (%)

番号	オノマトペ	正答率	既知率	無回答率	番号	オノマトペ	正答率	既知率	無回答率
1	くるくる	25	10	55	12	どんどん	65	100	5
2	うろろう (ぶらぶら)	35	30	40	13	にこにこ	70	100	15
3	がんがん	40	80	50	14	ばたばた (いらいら)	10	20	30
4	ほっ (と)	25	45	55	15	ぱっと (びんと)	5	10	55
5	ぐっと (じーんと)	0	35	40	16	ばらばら	40	100	40
6	あっさり (さっぱり)	40	45	55	17	ぴったり	55	95	25
7	ぐるぐる (くるくる)	35	65	50	18	ぴかぴか	15	100	55
8	さらさら (ふわふわ)	20	20	30	19	ふと	5	5	45
9	すっと (さっと)	5	10	45	20	ふらふら (よろよろ)	35	70	45
10	たっぷり	15	100	40	21	ぼうっと (ぼんやり)	20	10	65
11	ちゃんと	25	100	50		平均	27.9	54.8	42.4

表 7.4 中国人学習者の正答率・既知率・無回答率 (%) (正答率の高い順)

順位	オノマトペ	正答率	既知率	無回答率	順位	オノマトペ	正答率	既知率	無回答率
1	にこにこ	70	100	15	12	ちゃんと	25	100	50
2	どんどん	65	100	5	13	さらさら (ふわふわ)	20	20	30
3	ぴったり	55	95	25	14	ぼうっと (ぼんやり)	20	10	65
4	がんがん	40	80	50	15	たっぷり	15	100	40
5	あっさり (さっぱり)	40	45	55	16	ぴかぴか	15	100	55
6	ばらばら	40	100	40	17	ばたばた (いらいら)	10	20	30
7	うろろう (ぶらぶら)	35	30	40	18	すっと (さっと)	5	10	45
8	ぐるぐる (くるくる)	35	65	50	19	ぱっと (びんと)	5	10	55
9	ふらふら (よろよろ)	35	70	45	20	ふと	5	5	45
10	くるくる	25	10	55	21	ぐっと (じーんと)	0	35	40
11	ほっ (と)	25	45	55		平均	27.9	54.8	42.4

表 7.3 と表 7.4 からわかるように、中国人学習者の平均正答率は 27.9%であった。

すでに述べたように、中国語を母語とする上級日本語学習者を対象に実験を行った中石ほか (2011) の平均正答率は 24.4%であった。中石ほか (2011) の研究と本研究で取り扱っているオノマトペ項目は一致しているわけではないが、どちらも日常生活に頻繁に出てく

るオノマトペである。調査対象者の日本語能力は、中石ほか（2011）は日本語上級学習者、本研究の調査対象者は全員日本語能力試験 N2 レベルである。ということは、日常的な場面で使われる日本語の理解に加え、より幅広い場面で使われる日本語をある程度理解することができるはずである。にもかかわらず、日常生活に頻出するオノマトペを適切に使用できている中国人日本語学習者の割合は 3 割に達していない。一方、本章の 7.2 節から明らかになったベトナム人日本語学習者 3 年生グループの正答率が 55.1%であった。ここからわかるように、中国人日本語学習者はベトナム人日本語学習者より日本語オノマトペを学習しにくいと言えるだろう。

では、中国人学習者の場合、どのようなオノマトペが適切に使用できており、どのようなオノマトペがうまく使用できていないか、表 7.4 を中心に見てみたい。全体的に見ると、正答率より既知率のほうが高い<sup>18</sup>。これは、あるオノマトペの意味を既に勉強して知っていても、実際の場面にすぐに思い出して使用できるとは限らないことを意味している。正答率は既知率ほど高くないという傾向はベトナム人日本語学習者各グループにも共通しているが、ベトナム人学習者 3 年生の正答率が 55.1%で、ずっと高い。オノマトペを含む外国語の運用力はたくさん練習すれば練習するほど高くなるものである。調査のステップ 2 で、中国人学習者の日本語オノマトペ習得状況と日本語オノマトペについての感想や習得状況などについて聞いたところ、「日本語オノマトペはおもしろいと思いますか」という質問に対して、「強くそう思う」と回答した学習者が 10%、「ややそう思う」の回答者が 60%、「あまり思わない」の回答者が 20%、残りの 10%は「全然おもしろく感じていない」であった。そして、「日本人と話すチャンスがありますか。」という質問に対して、「時々ある」と回答した学習者が 75%であった。しかし、「日本人と会話する時に、できるだけ日本語オノマトペを使おうと思っていますか。」の質問に対しては「時々」と答えた学習者が 15%しかなく、「あまり使っていない」のが 70%で、残りの 15%の学習者は「全然使わない」という回答を出した。つまり、中国人の場合、日本語オノマトペの学習意識があまり高くないことが明らかになった。これに対して、ベトナム人学習者の場合、「日本語オノマトペはおもしろいと思いますか」という質問に対して、4つのグループの全員が「とてもおもしろい」か「おもしろい」と回答し、日本語オノマトペに対して強い関心を示していた。そして、「日本人と会話する時に、できるだけ日本語オノマトペを使おうと思っていますか。」の質問に対しては「できるだけ使おうとしている」と回答した学習者 20.8%を占め、「時々使っている」と回答したのは 25%で、合わせて半分弱が日本人との会話の中でオノマトペを使う意欲を持っている。このように、ベトナム人学習者は中国人学習者より、日本語オノマトペに対して高い関心を持っていて、しかも、積極的に使おうとしていることがわかった。

---

<sup>18</sup> 正答率が既知率より上回るのは「くるくる」と「ぼうっ（と）」のオノマトペの場合であるが、これは、「ぐるぐる」「ぼんやり」という筆者が調査したい 21 語以外の語でも正答として認めたためである。

次に、各オノマトペの結果をそれぞれ考察していく。中国人学習者の場合、平均正答率より高かったオノマトペは、「にこにこ」「どんどん」「びったり」「がんがん」「あっさり」「ぼらばら」「うろうろ」「ぐるぐる」「ふらふら」といったオノマトペであった。今回の調査協力者は大学3年生で、全員が日本語能力N2を取得済みであるため、日本語がある程度できている。この中で、正答率が最も高かった3つのオノマトペは、「にこにこ」「どんどん」「びったり」で、いずれも正答率が55%であった。これらの語は、教科書に取り上げられるもので、しかも使い方がはっきりしているため、学習者がしっかりと習得できていることわかる。

平均より正答率が低いオノマトペは、「くるくる」「ほっと」「ちゃんと」「さらさら」「ぼうっと」「たっぷり」「ぴかぴか」「ばたばた」「すっと」「ぱっと」「ふと」「ぐっと」といったオノマトペであった。この中で、正答率が特に低い(20%以下)のものは「くるくる」「さらさら」「ぼうっと」「ばたばた」「すっと」「ぱっと」「ふと」といったオノマトペであった。これらのオノマトペの正答率が低いのはなぜだろうか。

上記で取り上げた正答率が低いオノマトペの中で、「くるくる」「ほっと」「さらさら」「ぼうっと」「ばたばた」「すっと」「ぱっと」「ふと」「ぐっと」は既知率も非常に低いため、正答率が低いのは当然であると言える。原因としては、これらの言葉は学習者が大学で使用する日本語教科書に取り上げられていないか、または、使い方が特殊ではっきりしていないため学習者にとって習得しにくいことが考えられる。

既知率が100%にもかかわらず、正答率が低いオノマトペが3語見られた。それは、「ぴかぴか」「たっぷり」「ちゃんと」である。「ぴかぴか」の場合、既知率が100%であるが正答率は15%であった。ステップ3では、同じ場面を中国語で描写してもらっているが、その結果を見ると、「ぴかぴか」の意味をそのまま中国語で描写している学習者の割合は40%で、残りは「きれいに」「丁寧に」という表現を使用していた。このように、中国語では「くつをぴかぴかに磨く」の言い方はあまりしないようである。そのため、学習者は「ぴかぴか」を知っていても、母語ではその言い方をしないため、回答に現れにくかったと考えられる。

同じく既知率が100%であった「ちゃんと」と「たっぷり」の正答率は25%と15%であった。これは、「ちゃんと」「たっぷり」は一般に副詞に思われる語であり、オノマトペとして考えづらいためだと思われる。この傾向はベトナム人学習者にも共通に観察されたものである。

最後に、中国人学習者がどうしても回答できない、無回答率を見てみたい。表7.3からわかるように、中国人学習者の無回答率は44%である。これは、各シーンの後に画像がそのまま止まっている15秒という時間の短さも影響するかもしれないが、ベトナム人学習者3年生の無回答率が12.8%であることと比較すると、ベトナム人学習者のほうが、より回答率が高いことがわかる。

#### 7.4 第7章のまとめ

以上、ベトナム人学習者と中国人学習者による日本語オノマトペの使用実態を見てきた。その結果は、次の通りにまとめることができる。

全体的にみると、両国の学習者の正答率は既知率をかなり下回る。つまり、学習者は、オノマトペの意味を知っていても、実際の場面において適切に使えるとは限らないことを意味している。

正答率からみると、ベトナム人学習者4つのグループの平均正答率は45.7%、ベトナム人学習者3年生グループの平均正答率は55.1%で、中国人学習者3年生の平均正答率である27.9%よりはるかに高い。この2つのグループの学習者の日本語能力を見てみると、中国人学習者は20名全員日本語能力試験のN2資格を有している一方、ベトナム人学習者の3年生の19名のうち、17名が日本語能力試験のN2資格を取得済みということを考えれば、両グループの学習者は日本語能力にさほどの差がないと考えられる。両国の3年生の学習者の日本語能力が類似している以上、ベトナム人学習者は日本語オノマトペを習得している過程では、中国人学習者よりも有利で、よく使用できていると言えるだろう。その理由として、ベトナム語と中国語という学習者の母語におけるオノマトペに相当する語群の豊富さ、母語におけるオノマトペ表現を使って物事を描写する習慣、日本語オノマトペに対する関心の強さなどが考えられる。

また、特に学年別、滞日経験別に見たベトナム人学習者の調査データからは、学習者による日本語オノマトペの使用能力は学習者の日本語能力及び滞日経験の長さに比例しているという結果が伺えた。

調査協力者の中で、正答率が最も高いのはベトナム人の留学生のグループで、67.3%であった。今回の調査対象となっている21語のオノマトペは日本人の日常会話に頻出する言葉であるため、母語話者と同じ割合には至らなかったが、中国人学習者3年生のグループの正答率(27.9%)と比べると40%近く差があることがわかった。中石ほか(2011)をはじめ、日本語オノマトペは学習者にとって習得が困難であるということは先行研究においてしばしば指摘されている。本研究では、実証的な調査から母語別におけるオノマトペの使用実態が日本語オノマトペに対する学習意識に大きく関わっていることが明らかになった。学習者に対して、効果的な日本語オノマトペ教授法を確実させるためには、母語別におけるオノマトペの使用実態を把握した上で、日本語オノマトペの学習意識を高めるような教室活動が不可欠であると考えられる。

## 第 8 章 ベトナム人学習者と中国人学習者の日本語オノマトペの産出に見られる傾向及び各母語の転移

本調査で、ベトナム人学習者及び中国人学習者が記入した回答の中で、本研究における正答基準を満たしているものと無回答のもの以外、つまり、適切に使用できている場合以外の回答に「産出」というラベルを貼った。本章では、ベトナム人学習者及び中国人学習者が産出した回答の中で、どのような傾向が見られるのか、母語の転移があるかどうかについて考察する。

### 8.1 ベトナム人学習者による日本語オノマトペの産出に見られる傾向と母語の転移

7.2 では、ベトナム人学習者の日本語オノマトペを適切に使用できる能力は日本語能力(学年)と滞日経験に比例していることが明らかになった。ここでは、正答以外のオノマトペについて「産出」というラベルを貼り考察する。ベトナム人学習者が産出した語は、日本語能力と滞日経験を問わず、同じような傾向が観察された。この 8.1 節では、ベトナム人学習者が産出した語に見られる傾向を考察する。本節はグエン (2018b) をもとにして、さらに詳しく執筆したものである。

次の表 8.1 はベトナム人学習者が産出した語の内訳を表すものである。

表 8.1 ベトナム人学習者が産出した語

順番	調査対象のオノマトペ	知っている語の語基の反復	物事の状態を擬音的に捉え造語	意味の近いオノマトペとの混同	発音の近いオノマトペとの混同	その他
1	くるくる	まるまる (10) まわまわ (6)	ふゆふゆ (2) ひゅひゅ (2) びゅびゅ (2) ひゅうひゅう (2) びゅうびゅう (1) びゅうびゅう (2)			
2	うろうろ			ごろごろ (5) のんびり (1)	うらうら (1) ぶらぶら (1)	いったりきたり (4)
3	がんがん	いたいた (11) いやいや (1) つうつう (1)	あいあい (1) うーうー (1)			

日本語学習者の日本語オノマトペ産出の実証的研究  
 —ベトナム語母語話者と中国語母語話者を比較して—

4	ほっ (と)		はあはあ (2) ふゆふゆ (2) ふっ (1) ふうふう (14)			気持ちよく (1) 快く (1) すっきり (4)
5	ぐっ (と)	らくらく (3)	うんうん (4) ららら (2)	しみじみ (2) どきどき (1)		気持ちよく (3) だんだん (1) すっきり (13) ゆっくり (5) よく (3) うっとり (1)
6	あっさり	うすうす (1) うまいうまい(1) うまうま (8) おいしおいし(2)				すごすご (1)
7	ぐるぐる	まるまる (22) まわまわ (7) まわしまわし(1)		ごろごろ (2) わくわく (3)		
8	さらさら	きれきれ (2) ながなが (11)		すべすべ (3)	うわうわ (1)	
9	すっ (と)	すぐすぐ (6)				思わず (2) いきなり (1) いそぎに (1) きゅうに (1) 考えずに (2) すぐ (16) 直ちに (3) はやく (2)
10	たっぷり					いっぱい (17) たくさん (1) だらけの (5) ばかりの (2) もりだくさん (2)
11	ちゃん (と)					きらきら (9) ぴかぴか (13) きれいに (1) きれい (2)

日本語学習者の日本語オノマトペ産出の実証的研究  
 —ベトナム語母語話者と中国語母語話者を比較して—

						しっかり (1) まっしろ (4) よく (11) すぐすぐ (3)
12	どんどん	ふとふと (2) まるまる (2)				少しずつ (5) ますます (4)
13	にこにこ	あかあか (1) めだめだ (1) わらわら (3)				あかるく (1)
14	ばたばた	いそいそ (11) いやいや (3)			ばたばた (1)	おちつかない (1) 怒りんぼ (1) 休けいなし (1) 手が離せない (1)
15	ぱっ (と)		あっ (3) ティンティン (1) びんびん (4)	どんどん (1) ふと (2)		きゅうに (1) 偶然 (1) すぐ (3) 直ちに (1) 突然 (6)
16	ばらばら			ごちゃごちゃ (3) ぼろぼろ (1) めちゃくちゃ (1) めちゃごちゃ (1)	べちゃべちゃ (1)	こわれる (1)
17	びかびか	きれきれ (6)		きらきら (3)	びかびか (1)	きちんと (3) きれいに (3) しっかり (1) ちゃんと (1)
18	ぴったり	きつきつ (3) ちさちさ (1)			ぴったり (2)	合う (1) きっちり (1)
19	ふ (と)			じっ (6)	もんやり (1)	思わず (4) 突然 (8)
20	ふらふら			とぼとぼ (3)	ぶらぶら (2)	いったりきたり (2) 力なく (3) 方向なく (1) よっぱらって (3)
21	ぼうっ (と)	いたいた (19) おもおも (2) まわまわ (1)	うーうー (1)			がんがん (4)

ここからは、ベトナム人学習者が産出した語とフォローアップ・インタビューの結果でわかったそれぞれの産出経緯について見ていく。

### 8.1.1 知っている語の語基を反復させ造語する

回答の中で、知っている語の語基を反復させオノマトペを造語する例が多く見られた。

表 8.1 の左から 3 番目の欄には、詳細な産出例が書いてあるが、これらの語がどのような経緯で産出されたのか見ていく。

**【描写文 1】**「風車（かざぐるま）が風で\_\_\_\_\_回っている。」

描写文 1 の正答は「くるくる」であるが、回答として「まるまる」と答えた学習者が 10 名いる。この場合、正答を知らないか、すぐに思いつかないため、画像から「丸（まる）い」という形をイメージし、その語基である「まる」の部分反復させ、「まるまる」の産出に至ったのではないと思われる。しかも、この回答をしたのは 10 名もいるということは、学習者の間で何らかの共通の感覚が存在していることである。また、「まわまわ」と回答した学習者が 4 名いたが、これは「まわる」という描写文の中にある動詞の語基の反復形から造語されたものと思われる。

**【描写文 3】**「昨日はお酒を飲みすぎたせいで、頭が\_\_\_\_\_する。」

描写文 3 の正答は「がらがら」であるが、産出の中で、最も多かったのは「いたいた」という回答で、この回答をした学習者が 11 名いた。この場合も、おそらく画像と描写文より伝わった「いたい」という感覚を生かし、その語基である「いた」の部分反復させ、「いたいた」という語を創作したのではないと思われる。これと同じ造語方法で、「いやいや」と「つつつつ」という語がそれぞれ 1 例ずつ産出された。この場合、おそらく学習者は画像から「いや」という様子が読み取り「いやいや」を産出し、「痛い」の漢字の音読みである「つつ」を反復させ「つつつつ」を産出したと考えられるだろう。

**【描写文 5】**「名曲（めいきょく）を聞いていて、\_\_\_\_\_と心に來た。」

この描写文の回答として、「らくらく」と回答した学習者が 1 名いた。フォローアップ・インタビューで学習者に確認したところ、「画像からは、音楽を聞いている女の子は気持ちが楽なように見えているため、「楽（らく）」を反復させ「らくらく」を産出したことが明らかになった。

**【描写文 6】**「日本料理は油をあまり使わず、\_\_\_\_\_して体がいい。」

ここで、筆者が調査したいオノマトペは「あっさり」であるが、正答を書けなかった学習者の中で、「うまうま」と回答した学習者は 8 名いた。この場合、学習者は、おそらく「あっさり」の語を知らないか、もしくは思い出せないために、料理を描写する言葉として、「お

いしい」か「うまい」などの語が頭に浮かんだのだろう。そこで、「うまい」の語基である「うま」の部分を反復させ「うまうま」が作られたのではないかと思われる。この他に、「うまいうまい」が1例、「おいしおいし」が2例あるが、創作経緯も「うまうま」と同様であると考えられる。

**【描写文7】**「目が\_\_\_\_\_回る。」

描写文7の正答は「ぐるぐる」が、描写文1と同じような回答「まるまる」が見られた。確かにこの場合、画像からも目が「丸(まる)く」回っている様子が読み取れるため、学習者は、そこに着目し、「まるまる」(22名)、「まわまわ」(7例)、「まわしまわし」(1名)の語を産出した。この場合の造語方法は描写文1と全く同じだと考えられる。

**【描写文8】**「彼女のかみかの毛が\_\_\_\_\_で、きれいだ。」

正答は「さらさら」という髪の毛が整っている状態を表すオノマトペであるが、学習者の産出を見ると、「ながなが」と回答した学習者が11名、「きれきれ」と回答した学習者が2名いた。描写文8の画像からはもちろん、女の子の髪の毛が長くてきれいなことが読み取れるだろうが、このイメージをきっかけで「ながい」「きれい」という語を思い浮かべ、その語基である「なが」「きれ」の部分を反復させることにより「ながなが」「きれきれ」という語が産出されたと思われる。

**【描写文9】**「{電車の中で} 若者が\_\_\_\_\_と立って、お年寄りに席を譲(ゆず)った。」

正答は「すつ(と)」という素早く立つ様子を表すオノマトペであるが、「すぐすぐ」という回答が6例見られた。この場合、正答がわからず、「すぐ」という既知の副詞をそのまま反復させ造語したと思われる。

**【描写文12】**「お母さんのおなかが\_\_\_\_\_大きくなってきた。」

この描写文で筆者が調査したいのは「どんどん」という程度を表すオノマトペである。画像からは、お母さんのおなかが丸(まる)いということも読み取れる。他の描写文と同様に、「まるい」の語基である「まる」の部分を反復させ「まるまる」を産出した学習者が2名いた。一方、丸いイメージと違うがお母さんが「太い」ということも連想し、「ふとふと」という産出も2例見られた。

**【描写文13】**「この子はいつも\_\_\_\_\_している。」

描写文13の正答は「にこにこ」で、ベトナム人学習者4つのグループにおいて、最も正答率が高いオノマトペの一つであるが、正答以外に「あかあか(1名)」「めだめだ(1名)」「わらわら(3名)」という産出が見られた。それぞれの回答をした5名の学習者に対してフォローアップ・インタビューをした結果、「あかあか」は「明るい」イメージからの連想

で「あか」の部分を反復させ、「めだめだ」は「目立つ」という動詞からの語基を反復させ、「わらわら」は「にこにこ」を知っているが、その場でぴんと出てこなかったため、「笑（わら）う」という動詞の語基を反復させ産出したことがわかった。描写文 13 のアニメーションの画像では、登場人物が 3 人おり、注目をひくために、真ん中にいる女の子には矢印で表示されている。確かに、女の子はにこにこ「笑（わら）い」表情が明「（あか）るく」、3 人の中でも「目立（めだ）つ」ことが画像から伝わる。この場合、学習者は画像から読み取れるイメージを表す言葉の語基を反復させ自分なりのオノマトペを創作したと思われる。

【描写文 14】「最近仕事がとても忙しくて、\_\_\_\_\_している。」

この描写文における筆者が意図している正答は「ばたばた」というオノマトペである。アニメーションの画像は、ある事務室が背景となり、ある男性が次から次へ仕事をしている様子を表そうとしている。「ばたばたしている」様子は十分伝わっているが、それを知らない、または思い出せない学習者の中で、「いそいそ」という回答をした人が 11 名いた。この場合、画像から「急ぐ」ということが伝わり、その語基である「いそ」の部分が反復され、「いそいそ」という語の産出に至ったのではないかと考えられる。一方、画像に出現した男性の顔つきに注目すると、「いや」という態度も読み取れる。この態度から「いやいや」と回答した人が 3 名いた。

【描写文 17】「くつを\_\_\_\_\_に磨（みが）いた。」

この描写文の正答は「びかびか」である。このオノマトペを思い出せない学習者の場合、「靴がきれいにみがいた」ということを画像から理解し、「きれ」という部分を反復させ「きれきれ」という語を産出した。この例は 6 例見られた。

【描写文 18】「このくつはサイズが\_\_\_\_\_だ。」

この描写文の正答は「ぴったり」であるが、画像から「靴のサイズがきつい」と読み誤ったようである。学習者の回答の中には、「きつきつ」と答えた人が 3 名いた。この場合、おそらく学習者は「きつ」という部分を反復させ「きつきつ」の産出に至ったのではないかとと思われる。一方、「ちさちさ」という産出は 1 例見られた。フォローアップ・インタビューで回答者に確認したところ、画像からは「靴のサイズが小（ちい）さい」ことが読み取れるが、普段は「ちさい」と発音しているため<sup>19</sup>、思わず、その「ちさ」という部分を語基として反復させ「ちさちさ」の産出に至ったことがわかった（VJ08）。

<sup>19</sup>日本語では、一つの文字は 1 拍の長さで発音されるが、ベトナム語は音節で区切られる。普段、1 音節も 1 拍と同じ長さで発音されているが、ベトナム語では、いくつかの文字を合わせて一つの音節を構成することがあるため、ベトナム人学習者には、合わせて一つの語として発音する傾向が見られる。例えば、「はつおん」というのは日本語で 4 拍になるが、ベトナム人は「は」「つ」「おん」という 3 つの音節で発音してしまう。そして、

【描写文 21】「今日は寝不足で頭が\_\_\_\_\_としていて集中できない。」

当該の画像では、女の子が「ぼうっとしている」様子が伝わっているが、この描写文の正答率が低かった。「ぼうっ」というオノマトペの既知率は留学生のグループを除けば、約 15% で低い。そこで、学習者は工夫し、頭の不快な様子を一生懸命描写しようとしたことが伺える。画像からも描写文からも頭が「痛い」感じが読み取れるが、多くの学習者がこの感覚を生かし、「いた」という部分を反復させ、「いたいた」と回答した (19 名)。一方、ベトナム語では、頭が痛い場合、「“cảm thấy đầu nặng trĩch” (頭を重く感じる)」、あるいは「“cảm thấy đầu óc quay cuồng” (頭が回っているように感じる)」という言い方で表現することがある。学習者の回答の中で、「おもおも」と回答したのが 2 例、「まわまわ」と回答したのが 1 例あったが、学習者にフォローアップ・インタビューで確認したところ、正答がわからないため、ベトナム語の言い方から連想して、言葉の語基反復という造語方法を活用し、オノマトペを産出していたことが明らかになった (VN0304、VJ07、VJ08)。

このように、ベトナム人学習者は、当該の日本語オノマトペがわからない場合、画像から知っている言葉を連想し、その言葉の語基の部分反復させ、自分なりのオノマトペを産出することが明らかになった。

#### 8.1.2 物事の状態を擬音的に捉え日本語オノマトペを産出する

学習者の回答の中で、物事の状態を音で模倣し、オノマトペの産出の例が多く見られた。以下、それらの例を取り上げる。

【描写文 1】「風車 (かざぐるま) が風で\_\_\_\_\_回っている。」

学習者の回答の中で、「ふゆふゆ」「ひゅひゅ」「びゅびゅ」「ひゅうひゅう」「びゅうびゅう」「びゅうびゅう」のような似た回答を出したベトナム人学習者が 11 名いた。これらの産出経緯に関して、フォローアップ・インタビューを実施した。まず、「ふゆふゆ」の産出の例であるが、この回答をした 2 名は同じ説明をした。ベトナム語では、この場面を「chong chóng quay vù vù (風車がヴーヴーと回っている)」というように、風車が回っている時に発する音を模倣する vù vù という擬音語を使って表現をする。この 2 名は正答がわからないため、ベトナム語における表現方法をそのまま真似して産出したと答えた。しかし、日本語には「v」という子音が存在しないため、発音してみて、最も近いと感じている「f」で表記した結果、vù vù が「ふゆふゆ」として産出されたわけである (VN0101、VN0304)。以下の「国際音声字母」の表で確認すると、この産出は解釈できる。

---

このベトナム人学習者は、日本語を発音する際に「ちいさい」と「ちさい」の長音の区別にあまり気づいていないように思われる。

子音 <肺気流>	両唇音	唇歯音	歯音	歯茎音	後部歯茎音	舌音	硬口蓋音	軟口蓋音	口蓋垂音	咽頭音	声門音	【国際音声字母】 (一九九三年改訂版より抜粋)
破裂音	p b			t d		ʈ ɖ	c ɟ	k ɡ	q ɢ		ʔ	
鼻音	m	ɱ		n		ɳ	ɲ	ŋ	ɴ			
ふるえ音	ʙ			ɾ					ʀ			
弾き音				ɽ								
摩擦音	ɸ β	f v	θ ð	s z	ʃ ʒ	ʂ ʐ	ç ʝ	x ɣ	χ ʁ	h ɦ	h̥ h̄	
側面摩擦音				ɬ ɮ								
接近音		ʋ		ɹ		ɻ	j	ɰ				
側面接近音				ɻ		ɻ	ɻ	ɻ				

記号が対になっているところは、右側のものが有声子音を表す。影を付けた部分は、発音が不可能であると考えられることを示す。

図 8.1 : 国際音声字母 (松村 1995 : 1880)

上記の国際音声字母の図からわかるように、「f」も「v」も、唇歯音で構音方法は摩擦音である。

次に、「ひゅひゅ」「びゅびゅ」「ひゅうひゅう」「びゅうびゅう」「ひゅうびゅう」と回答した学習者のうち、代表として2人にフォローアップ・インタビューを行い、その産出経緯について教えてもらった。その結果、2名とも「かざぐるまが風で\_\_\_\_\_回っている。」の描写文の中で「風」という言葉があるため、風が吹いている時の音を模倣する「hiu hiu」というベトナム語の擬音語を連想し、それぞれ「ひゅうひゅう」「びゅうびゅう」の産出に至ったことわかった (VN0222、VJ08)。

【描写文 3】「昨日はお酒を飲みすぎたせいで、頭が\_\_\_\_\_する。」

学習者の中で、「あいあい」と「うーうー」と回答した人がそれぞれ1名いた。それぞれの学習者に産出経緯について教えてもらったところ、「あいあい」と回答した学習者は「ベトナム語では、どこかが痛い時に、「ái ái (あいあい) と叫んでいる。画像からは頭が痛い様子が読み取れて、ベトナム語の叫び声をそのまま利用した。」と語った (VN0101)。そして、「うーうー」と答えた学習者へのフォローアップ・インタビューでは、「ベトナム語では、頭が痛い時に「“đầu cứ ù ù” (頭の中でうーうーという音がしている) という言い方をしているため、ここでベトナム語の言い方をそのまま利用して日本語オノマトペを産出してみたい。」と語った (VJ07)。これらはある程度、オノマトペをただ適当に産出したように思われるが、母語の擬音語と連想して、同じ物事の状態を他の言語でも擬音的に捉え描写しようという経緯が見られた。

【描写文 4】「難しい仕事をぶじに終えて、\_\_\_\_\_と一息ついた。」

この描写文は「ほっ」が正答であるが、学習者の回答の中で「ふゆふゆ」が2名「ふっ」が1名、「ふうふう」が14名いた。つまり、「ふ」から始まる産出をしたのが17名いる。フォローアップ・インタビューに協力してもらった5名は全員同じような産出経緯を述べていた(VN0101、VN0222、VN0304、VJ07、VJ08)。VJ07とVJ08は「ため息ついた」の意味を知っており、文全体の意味を理解していた。VN0101、VN0222、VN0304は「ため息ついた」の意味はわからないが、「難しい仕事を無事に終えて」の部分を手がかりにし、画像を参考したため、文の意味が理解できたという。5人とも「ふ」というオノマトペが知らないと述べているが、ベトナム語では、ほっとした気持ちを「thở phứ một cái (ふうという音をして一息ついた)」という言い方があるため、「phứ」という音を利用し、それぞれ「ふっ」(音を強調する)「ふゆふゆ」「ふうふう」(音節を反復させオノマトペらしさをつける)という語の産出に至ったという。このように、学習者は、母語(ベトナム語)の擬音語を生かし、日本語オノマトペを産出していた。

【描写文 5】「名曲(めいきょく)を聞いていて、\_\_\_\_\_と心に來た。」

この画像では、「ぐっと心に來た」情態を表しているが、ベトナム人学習者72人のうち、3名しか正答を出すことができなかった。そして、各グループの既知率・無回答率がそのほかの既知率・無回答率の平均を大きく下回り、ベトナム人学習者にとって馴染みのないオノマトペであることがわかった。誤答も多く見られたが、その中で擬音的に捉え造語したと思われる「うんうん(4名)」と「ららら(2名)」の例を紹介する。画像では、イヤホンを挿して音楽を気持ちよさそうに聞いている女の子の姿が映し出されている。何故、「うんうん」「ららら」というように産出したかという経緯についてフォローアップ・インタビューで確認してみた。「うんうん」と答えた4名のうち2名は「自分が気に入っている音楽を一人で聞いている時は、よく目を閉じ、その音楽に合わせて体を動かしながら口の中で「うんうん」という音を出しているのだ。」と答えた。「ららら」と答えた2名とも、「気に入っている音楽を聞いている時は、気持ちが興奮し、「ららら」とメロディーを真似しながら楽しんでるから」と語った。このように、学習者は当該のオノマトペがわからない場合、物事の状態を理解すると、その場で発している音・声を手がかりに自分なりにオノマトペを創作する姿が伺えた。

【描写文 15】「友達と話している時に、\_\_\_\_\_と、いいアイデアが思い浮かんだ。」

この描写文は正答が「ぱっ」という動作・変化が突然で速やかである意味を表すオノマトペである。学習者の回答の中で、「あっ」という産出が3例、「ティンティン」が1例で、「ぴんぴん」が4例見られた。それぞれの代表として、各1名にフォローアップ・インタビューをして確認した。その結果、以下のことがわかった。まず、「あっ」という回答であるが、ベトナム語では、考えている最中に、何かいいアイデアが突然に思い浮かぶと喜んで「A,

ngĩ ra ròì」(あっ、思い出した)」または「A, tìm ra ròì (あっ、見つかった)」と叫ぶことがある。この場合、描写文の意味が読み取れ、ベトナム語の叫び声をそのまま引用し、日本語オノマトペを産出したという。次に、「ティンティン」と「ぴんぴん」の回答であるが、アニメーションでは、「ぱっといいアイデアが思い浮かぶ」ことを生き生きと描写しようと、電球がぱっと光ると同時にぱっとひらめく音がした。学習者はこの音を「ティン」「ぴん」に置き換え、「ティンティン」「ぴんぴん」と反復造語法を活用し、オノマトペを作ったと語った。

【描写文 21】「今日は寝不足で頭が\_\_\_\_\_としていて集中できない。」

描写文 3 で「うーうー」と回答した学習者 (VJ07) がここでも「頭が痛い」様子が読み取れるので同じく「うーうー」という回答をしていた。

以上、擬音的に造語したと思われる例文を取り上げ、ベトナム人学習者のフォローアップ・インタビューからその理由を検討した。上記の例からわかる通り、ベトナム人学習者は、当該のオノマトペがわからない時に、母語での言い方を想起し、その場で発する音・声をそのまま引用し、オノマトペの産出を試みることがわかった。このように、物事の状態を擬音的に捉えることが可能な場合、ベトナム語で表現する擬音語が日本語オノマトペの産出に強く影響していることがフォローアップ・インタビューの結果から明らかになった。

### 8.1.3 意味の近い日本語オノマトペとの混同

この節で取り上げる例は、学習者自身が新しく語を作るといふより、既存の日本語オノマトペを使用しているが、適切に使用できていない例である。つまり、既存の日本語オノマトペを混同する例であるが、どうして、このような混同が起きているか、学習者の回答とフォローアップ・インタビューの結果を通して確認する。

【描写文 2】「今日は学校が早く終わって、することなかったので、学校の前を\_\_\_\_\_していた。」

正答は「うろうろ」であるが、「ごろごろ」と回答した学習者が 5 名、「のんびり」と回答した学習者が 1 名いた。「ごろごろ」と回答した 3 名と「のんびり」と回答した 1 名にフォローアップ・インタビューをしたところ、「ごろごろ」と回答した学習者は、「ごろごろ」というオノマトペを勉強したが、「暇な時に、何もしく、家でごろごろ／のんびりしている」のような意味で覚え、描写文では、「学校が早く終わって、することがなかった」ということを手がかりに、「ごろごろ」「のんびり」を連想した。しかし、「<場所>をごろごろ／のんびりしている」という言い方は非文である。このように、オノマトペの意味合いは覚えていても、用法までしっかりと把握しないと、実際に適切に使えないことがわかる。

【描写文 5】「名曲 (めいきょく) を聞いていて、\_\_\_\_\_と心に来た。」

この描写文は正答率が最も低かった。これは、日本語の特殊な表現が原因で学習者を困らせたようである。学習者の回答の中で、「しみじみ (2名)」と「どきどき (1名)」の例が見られた。フォローアップ・インタビューから以下のことが明らかになった。

まず、「しみじみ」は「心から深く感じるさま」を表すということを既に知っていて、この場合、「名曲を聞いている」「心に来た」と画像から自信をもって「しみじみ」と回答したということである。しかし、「しみじみ」なら「～と心に来る」という言い方ではなく、正しいのは「～(と)感じる」という使い方である。

「どきどき」も同じように、既知のオノマトペとの混同だと思われる例である。学習者に確認したところ、「彼氏に会うたび、どきどきしている」という例文は読んだことがあるので、勝手に「楽しくて興奮」として解釈し、そのまま描写文に登場している女の子との気持ちよさそうな気分当てはめたと語った。確かに、「どきどき」は「興奮」する意味合いもあるが、このほかにも「不安・恐怖・期待」など幅広い意味合いを表すことができるオノマトペで、しかも、「どきどきする」という形で使われている。このように、知っている語の意味合いと用法をしっかりと把握しないことにより、混同が起きてしまっている。

【描写文7】「目が\_\_\_\_\_回る。」

正答は「ぐるぐる」であるが、日本語母語話者20名のうち、「ぐるぐる」と回答した人が14名、「くるくる」と回答した人が6名、どちらも目の回る様子に着目していることがわかった。つまり、日本語母語話者は画像について同じ解釈をしていると言える。それに対して、学習者の産出は、「ごろごろ」の回答が2例、「わくわく」の回答が3例見られた。フォローアップ・インタビューでその理由を聞くと、「ごろごろ」と回答した2名は、「女の子の目に異物が入っているように、目が連続的に瞬きをしているよう」との解釈から「目がごろごろする」という既知のオノマトペを回答したと述べた。一方、「わくわく」と回答した3人中の1名に対して、インタビューをした結果、この学習者は漫画が大好きで、画像から「女の子が喜んでいる」様子から「わくわく」の気持ちを読み取り、「わくわく」と回答したと語った。しかし、「目がわくわくする」という言い方は非文であることに気付いていなかった。

【描写文8】「彼女はかみがの毛が\_\_\_\_\_で、きれいだ。」

ここで、筆者が調査したのは「さらさら」というオノマトペであるが、統制群である母語話者20名のうち、17名が「さらさら」と答えた一致率の高いオノマトペであった。一方、学習者の回答の中では、「すべすべ」と答えた人が3名いた。「すべすべ」と答えた3名の学習者にフォローアップ・インタビューで聞いてみると、ベトナム語での言い方が影響していることが明らかになった。ベトナム語では、髪の毛が滑らかでさらさらしている場合は、「tóc trơn mượt」(髪の毛が滑らかでさらさらしている)」という言い方をする。そして、日

本語では「すべすべ」というオノマトペが「滑らか」の意味を表すことを既に知っていたため、「すべすべ」と産出したと語った。

【描写文 16】「ロボットの体が\_\_\_\_\_になっている。」

正答は「ばらばら」であるが、学習者の回答では、同じような意味合いを持っているオノマトペの産出が見られた。例えば、「ごちゃごちゃ」が3例、「めちゃくちゃ」「めちゃごちゃ」「ぼろぼろ」それぞれ1例である。「ばらばら」は本来一つにまとまるはずのものが分解された状態を表すのに対し、「ごちゃごちゃ」「めちゃくちゃ」「めちゃごちゃ」は種々の物が乱雑に入り混じった様を表している。学習者は、この区別ができず、混同したと思われる。グエン（2017）では、50%以上の学習者が日本語オノマトペを勉強する際に、母語に訳して意味を覚えていると指摘しているが、「ばらばら」と「ごちゃごちゃ」「めちゃくちゃ」「めちゃごちゃ」はベトナム語で同じ言葉で表現することができるため、この場合、ベトナム語の同じ言葉で把握している可能性が高いと考えられる。

【描写文 17】「くつを\_\_\_\_\_に磨（みが）いた。」

この描写文の正答は「ぴかぴか」であるが、ベトナム人学習者の回答のうち、「きらきら」という回答が3例ある。ベトナム語では、「ぴかぴか」も「きらきら」も「lấp lánh」というオノマトペに訳される。日本語オノマトペをベトナム語に訳して暗記するという習得方法を採用している学習者は、この混同が起きてしまう恐れがある。

【描写文 19】「夜道を一人とぼとぼ歩いていた。\_\_\_\_\_と空を見上げると、お月様が私に笑いかけてくれ、元気が出た。」

正答は「ふ」というオノマトペで、「何気なく突然」という状態を表している。学習者の回答の中で、「じっ」と回答が6名いた。確かに、「じっ」も「見る」動詞を表すオノマトペの一つであるが、「じっ」は最初から集中して見る様子を表し、「何気なく突然」というニュアンスは含まれない。「ふ」も「じっ」も「見る」という動詞を修飾することができるが、微妙なニュアンスが異なっている。しっかりとニュアンスを把握できていないため、このような混同が起きたと考えられる。

【描写文 20】「道で酔（よ）っぱらった人が\_\_\_\_\_歩いている。」

正答は「ふらふら」であるが「とぼとぼ」と回答した学習者が3名いた。確かに「とぼとぼ」も「ふらふら」も「歩く」動詞を修飾することができるが、「とぼとぼ」は単に「元気なく歩く様子」を表しているのに対し、「ふらふら」は「揺れ動いて安定しない」歩き方を表していることで異なっている。描写文では、「よっぱらう人」という部分が入っているため、「とぼとぼ」と回答したのは、この「よっぱらう人」の意味が理解できていないためと考えられる。

#### 8.1.4 発音の近い日本語オノマトペとの混同

数は少ないが、学習者の回答の中には、発音が近い日本語オノマトペとの混同と思われる例が見られた。

【描写文 2】「今日は学校が早く終わって、することなかったので、学校の前を\_\_\_\_\_していた。」

正答は「うろうろ」と「ぶらぶら」であるが、「うらうら」と「ぷらぷら」の産出がそれぞれ1例ある。フォローアップ・インタビューで、ベトナム語で説明してもらうと、発音の近い「うろうろ」と「ぷらぷら」と間違えて覚えていたことが明らかになった。

【描写文 8】「彼女はかみの毛が\_\_\_\_\_で、きれいだ。」

学習者の回答の中で「うわうわ」という産出が1例あった。フォローアップ・インタビューで確認すると、学習者は「ふわふわ」と答えるつもりであったが、「うわうわ」と間違えて覚えていたことが明らかになった。

【描写文 14】「最近仕事がとても忙しくて、\_\_\_\_\_している。」

正答は「ばたばた」であるが、学習者の回答の中で「ばたばた」という産出が1例あった。フォローアップ・インタビューで確認すると、学習者は「ばたばた」と答えるつもりであったが、「ばたばた」と間違えて覚えていたことが明らかになった。この場合、学習者は「b」を「p」と間違えていた。(VN0101)

【描写文 17】「くつを\_\_\_\_\_に磨（みが）いた。」

正答は「びかびか」であるが、学習者の回答の中で「びかびか」という産出が1例あった。フォローアップ・インタビューで確認すると、学習者は「びかびか」と答えるつもりであったが、普段、「b」と「p」をはっきり意識して発音していないため、「びかびか」と間違えて覚えていたことが明らかになった (VN0304、VJ08)。

【描写文 20】「道で酔（よ）っぱらった人が\_\_\_\_\_歩いている。」

正答は「ふらふら」であるが、「ぶらぶら」と回答した学習者が2名いた。「のんびりして急がずに歩く様子」を表す「ぶらぶら」の意味で回答したかどうかを確認するため、フォローアップ・インタビューで確認した。その結果、2名とも、正答の「ふらふら」を知っていて、それを答えようとしたが普段の発音が正しくないため、「ぶらぶら」とを誤記してしまったことが明らかになった。つまり、この場合も学習者は「b」と「p」を間違えて覚えていた (VN0304、VJ08)。

このように、描写文 14、17、20 では、「b」と「p」の覚え間違いが観察された。「b」も「p」も両唇音で、構音方法は破裂音である。構音方法と構音場所が同じであるために、混同が起きてしまったのではないかと考えられる。

【描写文 16】「ロボットの体が\_\_\_\_\_になっている。」

正答は「ばらばら」であるが、8.1.3 で取り上げたように「めちやめちや」の意味との混同があった。ここで、「べちやべちや」と答えた学習者が 1 名いる。フォローアップ・インタビューで、ベトナム語で説明してもらおうと、「めちやめちや」の意味で答えようとしたが、「べちやべちや」とオノマトペの発音を間違えて覚えたことが判明にした。つまり、「m」を「b」と間違えたのである。

【描写文 19】「夜道を一人とぼとぼ歩いていた。\_\_\_\_\_と空を見上げると、お月様が私に笑いかけてくれ、元気が出た。」

正答は「ふ」であるが、「ぼんやり」も認められる。学習者の中で、「もんやり」と回答したのが 1 名いた。フォローアップ・インタビューで確認すると、「ぼんやり」と答えようとしたが、「もんやり」とオノマトペの発音を間違えて覚えたことが判明にした。つまり、「b」を「m」と間違えたのである。

このように、描写文 16、19 では、学習者がそれぞれ「b」を「m」に、「m」を「b」に発音を間違えたことがわかった。「b」と「m」は両方とも両唇音であるが、「b」は破裂音で、「m」は鼻音と異なっている。この場合、「b」と「m」は音声的に近いため、聞き間違えて、覚えてしまったため、混同が起きたのではないかと考えられる。

## 8.2 中国人学習者による日本語オノマトペの産出に見られる傾向と母語の転移

8.1 ではベトナム人学習者の 4 つのグループの産出に見られる傾向について見てきた。この 8.2 節では、中国人学習者 20 名の産出に出てくる傾向について見ていく。第 7 章で述べたように、中国人学習者による無回答率がベトナム人学習者による無回答率より多く、調査協力者人数も少ないため、産出例の数もかなり少ない。しかし、中国人学習者の産出例の内訳を見ると、次のページの表 8.2 の通り、ベトナム人学習者の産出に見られる傾向と同じ傾向に分類することができる。本節はグエン (2018a) をもとに執筆したものである。

表 8.2 中国人学習者が産出した日本語オノマトペ

順 番	調査対象の オノマトペ	知っている語の 語基の反復	物事の状態を擬 音的に捉え造語	意味の近いオノ マトペとの混同	発音の近いオノ マトペとの混同	その他
1	くるくる	まるまる (2) まわまわ (1)				ゆっくり (2)
2	うろうろ			そわそわ (1)		うらうら (1) * あるき回し (2)
3	がんがん	いやいや (1)	うんうん (1)			
4	ほっ (と)		ふう (2) ふうふう (2)	すっきり (1)		いよいよ (2) とうとう (1) やっと (2)
5	ぐっ (と)		うーうー (1)	わくわく (1) すっきり (3) ゆらゆら (2) さっぱり (2) すっきり (1)		和やか (1)
6	あっさり			すっきり (1)		
7	ぐるぐる	まるまる (3)				
8	さらさら	ながなが (1)		すべすべ (4)		やわらか (3)
9	すっ (と)	はやはや (2)		てきばき (1) どうどう (1) きっぱり (1)		さっそく (1) すぐ (2) はっきり (1) 自覚的 (1)
10	たっぷり					ばっかり (2) ずくめ (1) くわえ (1) スープ (1) 中心 (1) だらけ (2)
11	ちゃん (と)			きらきら (1) こつこつ (1)		ゆっくり (1) まじめ (1)
12	どんどん					次々と (1) 張って (1) ゆっくり (3) いっそう (1)
13	にこにこ	わらわら (2)		きやらきやら (1)		注目 (1)

日本語学習者の日本語オノマトペ産出の実証的研究  
 —ベトナム語母語話者と中国語母語話者を比較して—

14	ばたばた	まよまよ (1) いやいや (1) まるまる (2)		そわそわ (1) さんざん (1)		大変 (1) 忙しい (5)
15	ぱっ (と)		びんびん (1)			一瞬 (2) 突然 (4)
16	ばらばら			粉々 (1) ぼろぼろ (1)		
17	びかびか	きれきれ (2)	さあさあ (1)	きらきら (1) ぶりんぶりん(1)		丁寧に (1)
18	びったり					ちょうどいい (1) 小さい (1) きつい (2)
19	ふ (と)					偶然 (2) じっと (1) つい (2) 不意 (1) ゆっくり (3) ちょっと (1)
20	ふらふら	よわよわ (1)			ぶらぶら (1)	あちこち (1) 歪んで (1)
21	ぼうっ (と)	おもおも (1)			ぼんやり (1)	

上掲の表 8.2 は中学人学習者が産出した例を傾向別に分類したものである。以下では、それぞれの傾向を例文とともに具体的に見ていく。残念ながら、中国人学習者に対しては、フォローアップ・インタビューを実施できなかったため、本調査のステップ 2 で実施したアンケート調査の結果に基づいた考察である。ところによっては、ベトナム人学習者に見られた例と比較をしながら考察する。

### 8.2.1 知っている語の語基を反復させ造語する

ベトナム人学習者と同様に、中国人学習者の回答の中には、知っている語の語基を反復させてオノマトペを造語する例が見られた。

【描写文 1】「風車 (かざぐるま) が風で\_\_\_\_\_回っている。」

描写文 1 の正答は「くるくる」であるが、回答として「まるまる」と答えた中国人学習者が 2 名いた (C4, C15)。この場合、正答を知らないかすぐに思いつかないため、画像から「丸 (まる) い」という形をイメージし、その語基である「まる」の部分反復させ、「ま

るまる」の産出に至ったのではないかと思われる。同じく、「まわまわ」と回答したのは1名(C1)であるが、これは「まわる」という描写文の中にある動詞の語基の反復形から造語されたものと思われる。ちなみに、ベトナム人学習者のグループにおいても同様に「まるまる」「まわまわ」の産出例が見られた。

【描写文3】「昨日はお酒を飲みすぎたせいで、頭が\_\_\_\_\_する。」

描写文3の正答は「がんがん」であるが、「いやいや」という回答が1例見られた(C16)。ベトナム人学習者のグループでも同様に、「いやいや」が1例見られた。この場合、おそらく学習者は画像から既に知っている「いや」という様子を読み取り、「いやいや」の産出に至ったのではないかと考えられる。ベトナム人学習者は、同じ造語法で、このほかに、「いたいた」「つうつう」の産出例が多く見られた。

【描写文7】「目が\_\_\_\_\_回る。」

描写文7の正答は「ぐるぐる」だが、「まるまる」という回答例が3例見られた(C1、C4、C15)。この場合も、描写文1と同じようなメカニズムで、画像からも目が「丸(まる)く」回っている様子を読み取ったため、学習者はそこに着目し、「まるまる」を造語したと思われる。ベトナム人学習者のグループでも、同じ回答例が見られた。

【描写文8】「彼女はかみの毛が\_\_\_\_\_で、きれいだ。」

正答は「さらさら」という髪の毛が整っている状態を表すオノマトペであるが、「ながなが」との回答が1例(C5)見られた。ベトナム人学習者の産出の中でも「ながなが」と回答した学習者が11名見られた。確かに、描写文8の画像からは、女の子の髪の毛が長くてきれいなことが読み取れるが、学習者はおそらく、このイメージをきっかけとして「ながい」という語を連想し、その語基である「なが」の部分を反復させることにより「ながなが」という語を産出したと思われる。

【描写文9】「{電車の中で} 若者が\_\_\_\_\_と立って、お年寄りに席を譲(ゆず)った。」

正答は「すつ(と)」という素早く立つ様子を表すオノマトペであるが、「はやはや」という回答例が2例見られた(C11、C18)。この場合、正答がわからず、「すぐ」という既知の副詞をそのまま反復させ造語したと思われる。同じ造語法であるが、ベトナム人学習者のグループでは「すぐすぐ」という回答例が6つ見られた。

【描写文13】「この子はいつも\_\_\_\_\_している。」

描写文13の正答は「にこにこ」であるが、「わらわら」の回答例が2例見られた(C10、C16)。ベトナム人学習者の中でも、「わらわら」と回答した例が3例見られたが、フォローアップ・インタビューでは、「笑(わら)う」という動詞の語基を反復させ産出したことが

明らかになった。この場合、C10とC16も同じ経緯で「わらわら」を産出したと思われる。このほかに、ベトナム人学習者グループの回答には、「めだめだ」「あかあか」という産出例も見られた。

【描写文 14】「最近仕事がとても忙しくて、\_\_\_\_\_している。」

この描写文における正答は「ばたばた」というオノマトペである。アニメーションの画像は、ある男性が次から次に仕事をしている様子を表している。アニメーションからは、「ばたばたしている」様子は十分伝わっているが、正答率は10%と非常に低かった。また、既知率も20%と低かった。中国人学習者の回答には、「まよまよ」が1例(C19)、「いやいや」が1例(C18)、「まるまる」が2例(C5、C8)見られた。画像では、男性が嫌そうな顔で、仕事を連続的にしている様子が2回上映された。学習者は、仕事が多すぎどんな順番でやればいいのかわからなく迷(まよ)っている様子に着目したため「まよまよ」の産出につながり、2回連続して上映されることによって、サイクルのようなイメージができ、「まるまる」の産出につながったと考えられる。また、男性の嫌そうな顔に着目したのなら、「いやいや」という産出につながる。ちなみに、ベトナム学習者のグループでは、「いやいや」の3例のほかに「いそいそ」(急ぐという動詞の語基を反復させ造語する)という産出が目立った。

【描写文 17】「くつを\_\_\_\_\_に磨(みが)いた。」

この描写文の正答は「ぴかぴか」である。正答を出せなかった2名の学習者は、「靴がきれいにみがいた」ことを画像から理解し、「きれ」という部分を反復させ「きれきれ」という語を産出していた。(C12、C18)。ベトナム人学習者のグループにおいても同じ回答が6例見られた。

【描写文 20】「道でよっぱらった人が\_\_\_\_\_歩いている。」

正答は「ふらふら」というオノマトペであるが、「よわよわ」という産出が1例見られた(C11)。画像からは酔っぱらっている男性が道を歩いている様子が読みとれる。この場合、おそらく正答がわからないため、画像から力が弱(よわ)いことを連想し、語基である「よわ」の部分を反復させ「よわよわ」の産出に至ったと思われる。

【描写文 21】「今日は寝不足で頭が\_\_\_\_\_としていて集中できない。」

正答は「ぼうっ」というオノマトペである。ここの描写文では、ベトナムに在住中の学習者と中国に在住中の学習者の正答率が非常に低かった。中国人学習者の回答には「おもおも」という回答が1例(C11)見られたが、ベトナム人にも同じ回答が2例観察された。ベトナム人学習者にフォローアップ・インタビューでその経緯を聞くと、ベトナム語では、頭が痛い場合「*cảm thấy đầu nặng trĩch*」(頭を重(おも)く感じる)と表現するため、「おもおも」と産出したことが明らかになった。一方、中国語では、同じような表現が見当たらないため、

おそらく、C11 は頭が重（おも）く感じることを感じ、その感覚を生かして「おもおも」の産出に至ったのではないかと考えられる。つまり、ベトナム人学習者とは違って、中国人学習者は、未知のオノマトペを産出する際に、母語での言い方を頼りにしないということである。

このように、中国人学習者にも、未知の日本語オノマトペを創作しないといけない場合、知っている言葉を連想し、その言葉の語基の部分を反復させ、自分なりのオノマトペを産出するという傾向が観察された。

### 8.2.2 物事の状態を擬音的に捉え日本語オノマトペを産出する

物事の状態を音で模倣し、オノマトペを産出するという傾向であるが、8.1.2 では、ベトナム人学習者の回答例について見てきた。ここでは、中国人学習者による産出例を見てみたい。

この造語法であるが、ベトナム人学習者は、【描写文 1】「風車(かざぐるま)が風で\_\_\_\_\_回っている。」と【描写文 3】「昨日はお酒を飲みすぎたせいで、頭が\_\_\_\_\_する。」では、それぞれベトナム語の「風車が回っている時の音」「風が吹いている時の音」「頭が痛い時に頭の中で発している音」を模倣し、新しいオノマトペの創作への工夫が見受けられた。そして、これらの語は、すべて母語での言い方を手がかりに産出されたことがフォローアップ・インタビューで確認された。これに対して、これらの描写文において、物事の状態を擬音的に捉え創作された語の例が一つも見つからなかった。中国語での描写内容を見ると、中国語では「頭ががんがんする」に相当する言い方として、「头嗡嗡（wēngwēng）地响。」が一般的なようである。つまり、中国語では、この場合「嗡嗡（wēngwēng）」という擬音語の表現を使用している。にもかかわらず、中国語での言い方を手がかりにして日本語オノマトペを産出する様子は見られなかった。

【描写文 4】「難しい仕事を無事に終えて、\_\_\_\_\_と一息ついた。」

この描写文は「ほっ」が正答である。【描写文 4】の産出の例には、ベトナム人学習者と中国人学習者も共通して、「ふ」で始まる回答が目立った

中国人学習者の回答の中には、「ふう」という回答が 2 例（C6、C7）、「ふうふう」という回答例が 2 例（C8、C9）見られた。中国語での描写内容を確認したところ、中国語でいうときは、「松了一口气」「舒了一口气」（心配事や緊張がなくなって安心する様子）といった表現が主な表現である。中国人学習者に対しては、フォローアップ・インタビューを実施できなかったため、ため息をする時の音を母語での言い方を手がかりにしたかどうか確認できないが、8.2.1 で見たように、母語での言い方を手がかりにして創作した例が一つもなかったため、この場合も母語の感覚を生かした意識はなく、ただ直感的にその音を思い浮かべて日本語オノマトペを創作したと考えられる。

【描写文 5】「名曲（めいきょく）を聞いていて、\_\_\_\_\_と心に來た。」

「ぐっ」の正答率は両国の学習者の間とも低かった要因について 7.3 で述べた。画像では、イヤホンをして音楽を気持ちよさそうに聞いている女の子の姿が映し出されている。ここでは「うーうー」という回答が 1 例見られた (C1)。ベトナム人学習者の中でも、似ているような回答（うんうん）が 4 例見られた。ベトナム人学習者に対するフォローアップ・インタビューでは、「自分が気に入っている音楽を一人で聞いている時は、よく目を閉じ、その音楽に合わせて体を動かしながら口の中で「うんうん」という音をしているのだ。」という経緯が明らかになったが、C1 の場合も同じ経緯で、ただ「うんうん」という音ではなく、「うーうー」と捉え産出したのではないかと考えられる。

【描写文 15】「友達と話している時に、\_\_\_\_\_と、いいアイデアが思い浮かんだ。」

この描写文は正答が「ぱっ」という動作・変化が突然で速やかである意味を表すオノマトペであるが、「ぴんぴん」という回答がベトナム人学習者（4 例）にも中国人学習者（1 例、C5）にも見られた。産出経緯について、ベトナム人学習者に聞いてみると、アニメーションでは、「ぱっといいアイデアが思い浮かぶ」ことを生き生きと描写しようと、電球がぱっと光ると同時に「ぴんぴん」のような音がしたことに気付いて、「ぴんぴん」という産出に至ったということがわかったが、中国人学習者の C5 も同じ経緯で産出したのではないかと考えられる。ベトナム人学習者は、ベトナム語で「突然いいアイデアが見つかった」時の叫ぶ声として「あっ」という音を生かし「あっ」を産出した人が 3 名いたが、中国人学習者はこのような母語での言い方の音を模倣し、産出するものは見られなかった。

【描写文 17】「くつを\_\_\_\_\_に磨（みが）いた。」

正答は「ぴかぴか」であるが、「さあさあ」という産出が 1 例見られた (C19)。これは、雨の降る音を表す「ざあざあ」との混同というより、くつを磨くとき、ブラシと靴の表面が触れて発する音に着目して造語したと思われる。

上記のように、該当するオノマトペがわからない場合、ベトナム人学習者も中国人学習者も、物事の状態を擬音的に捉え、オノマトペの創作にチャレンジする姿が見受けられた。ただ、ベトナム人学習者のほうが、例文の数が多く、しかも、創作経緯には母語（ベトナム語）を手がかりにする様子が伺えた。

### 8.2.3 意味の近い日本語オノマトペとの混同による誤用

日本語オノマトペは数が多く、微妙なニュアンスを使い分けることが多いため、学習者には、意味が似ていたり、共通の意味合いを持っている既存のオノマトペとの混同がよく起きる。8.1.3 では、ベトナム人学習者による混同の例とその原因を見てきた。この 8.2.3 では、中国人学習者の回答の中で、共通の意味合いを持っている既存のオノマトペとの混同と思われる例について見ていく。

【描写文 2】「今日は学校が早く終わって、することなかったなので、学校の前を\_\_\_\_\_していた。」

正答は「うろうろ」であるが、「そわそわ」という回答が1例見られた(C3)。この産出の経緯について考えてみたい。確かに、アニメーションの画像では、男の子が学校の前を行ったり来たりする姿が映されたが、スピードが少し早いため、人によっては「いらいら」ということが感じるかもしれない。一方、「そわそわ」は「発表待ちで朝からそわそわする」のように、気持ちや態度が落ち着かない様を表す。こうすると、C3という学習者はこのアニメーションから「いらいら、落ち着かない」様子が読み取れ、「落ち着かない」様子を表す「そわそわ」をすぐ思い出して回答したのではないかと考えられる。しかし、「そわそわ」は、「やることがなく、学校の前をそわそわしている」のような言い方はないため誤用が起きた。

【描写文 3】「昨日はお酒を飲みすぎたせいで、頭が\_\_\_\_\_する。」

学習者の回答の中で、「うんうん」という回答が1例見られた(C14)。この回答を見て、頭が痛い時に、頭の中で発する音を中国語での発音を生かして産出したのではないかと思ひ、中国語での描写を調べてみた。中国語での描写内容を見ると、「头很痛(とても痛い)」という一般的な描写、及び「头嗡嗡地响(頭ががががしている)」ように、「嗡嗡(wēngwēng)」という擬音語を使う描写がある。「うんうん」は中国語の擬音語の感覚を生かしたとは言えない。一方、日本語には「うんうん」というオノマトペが存在している。その意味は、「力をこめたり苦しんだりして繰り返りきむうなり声・ようす」と説明されている<sup>20</sup>。確かに、【描写文 3】から男性が頭痛で苦しんでいる様子は十分に伝わっている。「うんうん」というオノマトペも「苦しむ」という意味合いを表しているため、混同が起きた可能性はありうる。しかし、「うんうん」の場合、「~いう」「~苦しむ」という用法があるが、「頭が~する」という用法はない。この場合、学習者は、「うんうん」というオノマトペの意味・用法をしっかりと把握していなかったため、誤用が起きたのではないかと考えられる。

【描写文 4】「難しい仕事を無事に終えて、\_\_\_\_\_一息ついた。」

正答は「ほっ」という心配事・緊張がなくなった安心する様子を表すオノマトペであるが、学習者の回答の中で「すっかり」という回答が1例見られた(C4)。「すっかり」は普段、「病気がすっかり治った」のように「一つ残らず、すべて<sup>21</sup>」という意味で使われていることが多い。C4は、この場合「難しい仕事をぶじに終えて」という部分から、「難しいものがすべて終わる」ということを派生的に捉え、「すっかり」を連想した可能性があると思われる。しかし、本当にそうであるならば、「すべて」という意味合いは伝わっているが「すっ

<sup>20</sup> 阿刀田 (2009 : 17)

<sup>21</sup> 阿刀田 (2009 : 233)

かり一息つく」という言い方は適切ではない。そのため、「すっかり」の誤用であると思われる。

【描写文 5】「名曲（めいきょく）を聞いていて、\_\_\_\_\_と心に来た。」

前節で述べたように、この「ぐっと心に来た」のは日本語の特殊な表現で、ベトナム語にも中国語にもぴったりの表現がないため、学習者には馴染みがなく、ほとんど使えないのが実状である。そして、ベトナム語と中国語での描写では、「感動した」「よい気持ち」などといった解釈をしていることが確認された。中国人学習者の産出の中で、「ゆらゆら」が2例（C7、C13）、「わくわく」が1例（C20）、「すっきり」が3例（C5、C10、C16）、「さっぱり」が2例（C14、C15）、「すっかり」が1例（C4）見られた。これらの回答はすべて日本語に既存のオノマトペで、おそらく学習者はこれらのオノマトペを知っていると思われる。これらのオノマトペはどんな意味を持っているか見てみたい。

まず、「ゆらゆら」は「力が加わるままにゆるやかに連続して揺れ動くようす<sup>22</sup>」を表しているオノマトペである。確かに、アニメーションでは、女の子が音楽に合わせて体をゆらゆら動かす様子が伝わって、C7とC13はこの女の子の体の様子に着目して「ゆらゆら」を産出したと思われる。次に、C20が産出した「わくわく」であるが、「喜びや楽しみで、期待で気持ちがわきたって落ち着かないようす<sup>23</sup>」を表すオノマトペである。そして、「すっきり」と「さっぱり」はどちらでも「気分がよい」様子を表す言葉である。

C4は【描写文 4】「難しい仕事を無事に終えて、\_\_\_\_\_一息ついた。」においても、【描写文 5】「名曲（めいきょく）を聞いていて、\_\_\_\_\_と心に来た。」においても「すっかり」という回答をした。ここから、C4さんは「すっかり」は「気分がよい」様子を表しているオノマトペと捉えていると考えられる。

学習者が産出したオノマトペは「気分がいい」という意味ではあるが用法の面から見るとすべてが誤用である。これらのオノマトペは「〜と心に来た」という共起には使えないからである。このように、オノマトペを知っているとは言え、その意味と用法をしっかりと把握しないと、知っているオノマトペとの混同による誤用が起きてしまう。

【描写文 8】「彼女はかみの毛が\_\_\_\_\_で、きれいだ。」

ここで、筆者が調査したのは「さらさら」というオノマトペであるが、中国人学習者の回答の中で、「すべすべ」との回答が4例（C6、C7、C10、C16）見られた。ベトナム人学習者の回答の中でも、「すべすべ」と産出した学習者が3名いたが、母語であるベトナム語での言い方が影響していた。そこで、筆者は中国語での表現を調べてみた。そうすると、「かみの毛がさらさらです。」という文を中国語でいうと「头发光滑」という表現になり、「肌がすべすべです。」という文を中国語でいうと「我的皮肤很光滑」という表現になるようである。

<sup>22</sup> 阿刀田（2009：552）

<sup>23</sup> 阿刀田（2009：560）

このように、日本語ではかみの毛がさらさらしている状態を表す「さらさら」も「肌がすべすべ」の状態を表す「すべすべ」も中国語では「光滑」という同じ言葉で表現される。回答の内訳を見ると、「すべすべ」と回答した4名とも「さらさら」というオノマトペを知らないということがわかった。この場合、おそらく、この4名は「すべすべ」の意味を「光滑」と暗記して「すべすべ」の産出に至ったのではないかと考えられる。つまり、この場合に「すべすべ」という産出をしたのは中国語母語からの転移によると思われる。

【描写文 9】「{電車の中で} 若者が\_\_\_\_\_と立って、お年寄りに席を譲（ゆず）った。」

正答は「すっ（と）」という素早く立つ様子を表すオノマトペであるが、学習者の回答の中で「てきぱき」が1例（C20）、「きっぱり」が1例（C3）、「どうどう」が1例（C8）見られた。なぜ、これらのオノマトペが産出されたのかを考えてみたい。まず、「てきぱき」の意味は「てきぱきと片付けた」のように処理や対応がはっきりしていて、歯切れのよい様を表す。そして「きっぱり」は「きっぱりと断る」のように「態度をはっきりと決める様を表すオノマトペである。確かに、「すっ」「てきぱき」「きっぱり」のどちらからも「素早い意味合いを共通に持っていると考えられるが、「きっぱり」は態度に着目し、「てきぱき」は連続した動作を歯切れよく様子を描写するのに使われ、「てきぱきと／きっぱりと席を譲る」のような一瞬で終わった動作には使えない。一方、「どうどう」は「堂々とした態度」のように、立派で威厳のある様を表すが、この場面では不適切だと思われる。

【描写文 11】「子供は、歯磨きが\_\_\_\_\_とできたね、とママに褒（ほ）められて喜（よろこ）んだ。」

正答は「ちゃん」という一般的な副詞と思われやすいオノマトペであるが、学習者の回答の中で「きらきら」が1例（C10）と「こつこつ」が1例（C4）見られた。「きらきら」の産出であるが、アニメーションの画像では、女の子が歯磨きをして、ママに頭を撫でられ、ほめられたシーンが映されたが、きらきらしている歯に注目すれば、「きらきら」という言葉を連想させることが予想される。ただ、描写文からすると「歯磨きがきらきらとできる」という言い方は非文である。また、「こつこつ」は「こつこつと勉強している」のように、まじめにたゆまず努め励むさまを表すオノマトペである。この場合、女の子がまじめに歯磨きをしていることに注目して「こつこつ」という産出に至ったのではないかと考えられる。しかし、日本語母語話者は「こつこつとできる」という言い方をしない。ここでは、「こつこつ」の共起をしっかりと把握していないために起きた誤用だと思われる。

【描写文 14】「最近仕事がとても忙しくて、\_\_\_\_\_している。」

正答は「ばたばた」というあわただしく仕事をしている様子を表すオノマトペである。C3学の回答では、描写文2での「落ち着かない」様子を「そわそわ」というオノマトペを使って描写しているが、この描写文14でも「そわそわ」という産出をしていた。おそらくC3

は、この描写文でも男性の顔つきから落ち着かない感じが読み取ったため、「そわそわ」の産出に至ったのではないかと考えられる。しかし、先ほど述べたように、確かに「落ち着かない」意味合いはあるが、使う場面が異なるため、これは「そわそわ」の誤用の例だと思われる。また、これを通して、C3 という学習者は「そわそわ」の意味をただ「落ち着かない」と捉え、その用法と共起をしっかりと把握していないため、誤用の産出をしたことがわかった。

【描写文 16】「ロボットの体が\_\_\_\_\_になっている。」

正答は「ばらばら」であるが、学習者の回答の中で「粉々」が 1 例 (C20) と「ぼろぼろ」が 1 例 (C2) 見られた。「ぼろぼろ」は物がひどく破れたり崩れたりしている様子を表し、「こなごな」はごく細かく碎ける様を表すオノマトペである。確かに、「ばらばら」「ぼろぼろ」「こなごな」はどちらでも物が破壊されたり、最初のように一つのまとまりの感じがなくなったという意味合いは共通していると思われる。しかし、「ばらばら」というのは「まとまっているべき物が離れ離れ、まちまちになっている<sup>24</sup>ようす」を表すため、この場合は「ばらばら」だけが適切である。

【描写文 17】「くつを\_\_\_\_\_に磨 (みが) いた。」

正答は「ぴかぴか」であるが、「きらきら」というかなり似ている回答が 1 例 (C10) 見られた。ちなみに、C10 は描写文 11 で、女の子が歯磨きをしているシーンでも、歯に注目し、「きらきら」を産出している。ベトナム語では「ぴかぴか」も「きらきら」も同じ言葉になるため、混同が見られた。C10 もこのような混同を起こしたと考え、中国語母語話者に確認してみた。すると、「きらきら」は中国語では「亮晶晶」といって、例えば、「星星一闪一闪亮晶晶」(星がきらきら輝いている)。これに対して、「ぴかぴか」はツヤがある感じで、中国語で言うと、「光亮」という言葉に当たるとのことだった。つまり、ベトナム語の問題とは違うことがわかった。具体的な経緯に関してはフォローアップ・インタビューなど、他の方法から確認することが必要である。

同じく、描写文 17 の回答で、「ぶりんぶりん」というトレンドなオノマトペの産出が 1 例見られた (C5)。この「ぶりんぶりん」の意味を調べたら、どうも、ヒップホップの用語で、英語では *bling bling* と書いて、きらきらしているものの擬態語だそうである。C5 のアンケート調査の結果を見たところ、日本の歌や漫画が大好きと書いてあったため、歌から習得された可能性があると思われる。

#### 8.2.4 発音が近い日本語オノマトペとの混同

数は少ないが、中国人学習者の回答の中でもベトナム人学習者と同じように、発音の近い日本語オノマトペとの混同の例が見られた。以下、その例を取り上げる。

---

<sup>24</sup> 阿刀田 (2009 : 389)

8.1.4 で述べたように、ベトナム人学習者には発音メカニズムが近い「b」と「p」を混同する傾向が見られた。この 8.2.4 節では、中国人学習者に同じ傾向が見られるかどうかを見てみたい。

【描写文 20】「道で酔（よ）っぱらった人が\_\_\_\_\_歩いている。」

正答は「ふらふら」であるが、「ふらふら」という回答が 1 例見られた (C1)。この場合、学習者は「ふらふら」を発音の近い「ぷらぷら」と間違っ産出したのではないかと考えられる。

【描写文 21】「今日は寝不足で頭が\_\_\_\_\_としていて集中できない。」

同じ C1 であるが、この描写文では「ぼんやり」という回答をした。描写文 21 の正答は「ぼうっ」であるが「ぼんやり」というオノマトペも正答である。おそらく、C1 という学習者は「ぼんやり」と回答しようと思ったが、「ぼんやり」と間違っただろう。国際音声字母で確認すると、「f」と「p」の発音は似ていないが、同じ学習者であるため、おそらくこの学習者個人のくせではないかと考えられる。

### 8.3 第 8 章のまとめ

以上、ベトナム人学習者と中国人学習者が産出した語（オノマトペ）に見られる傾向及びそれぞれの母語の転移について見てきた。まとめると、以下のことが言える。

全体的に見ると、両国の学習者が産出した語の中で、ABAB 型の語が圧倒的に多かった。本研究における調査のステップ 2 に記入してもらったアンケート項目の一つとして、「思い浮かぶオノマトペを 5 つ挙げなさい」という項目があるが、答えを見ると、ベトナム人学習者が例として挙げている例のほぼすべてが ABAB 型のオノマトペであった。つまり、ベトナム人学習者にとってオノマトペは反復形をしている言葉であるイメージが強いことがわかった。この傾向はベトナム語の転移によるものかと考えると、確かに、ベトナム語の反復形を持っている「tù láy (反復語)」という語群は豊富であるが、その反復の形は様々である。AABB という形はあるが、ABAB の形は存在しないため、ベトナム語からの転移とは言いがたい。

両国の学習者において、反復造語法の活用が共通して見られた。これは、日本語オノマトペの最も典型的な形態であるが、学習者がこの形態を意識しながら、未知の日本語オノマトペを産出しようとしているのは、日本語オノマトペのセンスがある程度身につけているといえるだろう。ベトナム人の場合、ABAB という形式での造語は母語の知識が多少影響するかもしれないが、日本語オノマトペについてのセンスも影響していると思われる。これに対して、中国人学習者が産出した日本語オノマトペを見ると、ABAB の形をしているオノマトペもかなりの割合を占めているが、ほかには「A っ B り」「A ん B り」の形も散見された。中国人学習者にとって、日本語オノマトペが ABAB の形をしているというイメージはベト

ナム人ほど強くないと言える。しかし、中国語には、形容詞を疊語化することによってその意味の描写性を高めることができるという強調用法があることが指摘されている（中川1997）。中国語には擬態語の概念が存在しないが、「描写性」を高めるという性質は日本語オノマトペの性質と共通している点があるため、中国人学習者は、知らない日本語オノマトペを産出する際に、この母語にある知識を運用したのではないかと考えられる。

当該のオノマトペがわからない場合、ベトナム人学習者も中国人学習者も工夫をして、オノマトペの産出を試みていた。こうして産出されたオノマトペには共通の傾向が観察された。それは、「知っている語の語基を反復させオノマトペを創作する」「物事の状態を擬音的に捉えオノマトペを創作」「共通の意味を持っている語との混同による誤用」「発音の近いオノマトペとの混同」「その他」である。

まず、「知っている語の語基を反復させオノマトペを創作する」という傾向であるが、産出の例の数は、どちらのグループにおいても全体の産出例の中で大きな割合を占めている。つまり、両国の学習者にとって日本語オノマトペは「反復」というイメージが強く、しかも、この造語法をよく活用している。しかし、産出された語を見ると、手がかりにしている語はベトナム人学習者と中国人学習者で異なっている。中国人学習者はアニメーションの画像から読み取れるイメージをもとに、知っている日本語の語の語基を反復させ、自分なりのオノマトペを創作している。ベトナム人学習者はこのほかに、母語との連想をして、母語を手がかりにして、同じ造語法を活用しオノマトペを創作している。このように、学習者は語の語基を反復させオノマトペを創作することができるため、日本語オノマトペを導入する際に、由来する言葉がある場合、それを明示し、オノマトペができた経緯を紹介すると、学習者にとって印象的に習得できるかもしれない。

次に、「物事の状態を擬音的に捉えオノマトペを創作」という傾向であるが、物事の状態を擬音的に捉え表現できそうな場合、両国の学習者ともに、自分で感じた音の感覚を生かした新しいオノマトペの創作が見られた。特に、ベトナム人学習者は同じ場面において、母語での擬音語をそのまま生かし、オノマトペの創作に挑戦することがフォローアップ・インタビューから明らかになった。

3つ目の「意味の近いオノマトペとの混同による誤用」であるが、日本語では、同じような意味合いを持っているオノマトペが数多く存在しているため、学習者はよく誤用をしていた。オノマトペを導入する際に、単にその意味を説明するだけではなく、使われている具体的な場面の提供と共起する動詞を説明すれば、このような誤用は少なくなると思われる。その一方で、いくつかの日本語オノマトペが中国語とベトナム語では一つの同じ言葉になる場合があるため、母語の転移による誤用も見られた。

4つ目の「発音の近いオノマトペとの混同」については、学習者は有声音と無声音の区別がつかないというのは先行研究で既に指摘されている。この改善案としては、導入する時に、何回も口に出して練習したり、あるいは体の動きと一緒に覚えさせたりすることにより軽減されることなどが考えられる。

## 9章 ベトナム人学習者と中国人学習者による各母語での描写

第7章では、本研究における日本語オノマトペの正答の基準を述べた後、ベトナム人学習者と中国人学習者の正答率について考察した。ベトナム人学習者のグループが日本語オノ

マトペを適切に使用する能力は日本語能力と滞日経験に概ね比例するという結果になった。また、日本語能力が同等なレベルにあるベトナム人学習者の3年生グループと中国人学習者3年生のグループとでは、それぞれ55.1%と27.9%で、ベトナム人学習者のほうが日本語オノマトペの使用能力が高いことが明らかになった。第8章では、学習者による日本語オノマトペの産出に見られる傾向及び各母語の転移の有無について考察した。その結果、日本語オノマトペの産出には、両国の学習者に同じような傾向が観察されているが、母語によって転移の現れ方が異なっていた。

ベトナム人学習者と中国人学習者の日本語オノマトペの使用能力や使用実態の違いは、第6章で述べた日本語オノマトペに対する意識、学習意欲、学習方法、及びそれぞれの母語におけるオノマトペの特徴と母語での使用実態に密接に関係すると思われる。第6章では、日本語オノマトペについての意識とその学習意欲、学習方法について両国の学習者が記入したアンケートの結果を述べたが、日本語オノマトペについての意識、学習意欲、学習方法に関して、ベトナム人学習者と中国人学習者は異なる傾向を示していることが明らかになった。具体的には、中国人学習者は日本語オノマトペという存在に対する認識が希薄な者が少なくなく、そうした学習者は日本語オノマトペを難しいと感じ、積極的に覚えることを避ける傾向がある。そして、母語で話す時、オノマトペを使って表現する習慣を有するのは全体の60%にとどまり、新しい日本語オノマトペを覚えようとする時に、母語に訳して暗記するという方法を採用しているのは全体の15%に過ぎなかった。つまり、中国人学習者による日本語オノマトペの学習においては、母語を頼りにしている傾向がはっきり観察されなかった。これに対して、ベトナム人学習者は全員、日本語オノマトペという語群の存在をはっきり認識し、日本語オノマトペのことを全員おもしろいと感じ、もっと覚えようとする意欲が強いことが明らかとなった。そして、母語で話す時もオノマトペを使って表現する習慣を有する者が全体の93%を占め、新しい日本語オノマトペを覚えようとする時に母語に訳して暗記する方法を採用する者が全体の63.8%に及ぶことがわかった。つまり、ベトナム人学習者による日本語オノマトペの学習においては、母語を頼りにする姿がはっきり観察されている。

調査のステップ3では、同じアニメーションを材料に、それぞれの母語で描写してもらったが、本章では、このデータを用い、それぞれの母語におけるオノマトペの使用実態を調査する。この結果を通して、第7章と第8章で考察した両国の学習者による日本語オノマトペの使用実態及び両国の学習者が産出したオノマトペに見られる傾向の違いを裏付けるとともに、両国学習者のための日本語オノマトペの学習方法に示唆を得たい。

本章の9.1と9.2では、それぞれ、ベトナム人学習者と中国人学習者による母語での描写について考察するが、具体的には、以下の点に着目し考察を行う。

- ・同じ場面において、ベトナム人学習者と中国人学習者はどのような言葉（表現）を使って描写するか。

- ・使用されている言葉の中で、日本語オノマトペと意味が似ている、または、意味が対応する言葉がどのくらいあるか。
- ・それぞれの描写文において、ベトナム人学習者と中国人学習者の回答一致率がどのくらいであるか。

## 9.1 ベトナム人学習者によるベトナム語でのオノマトペの描写

### 9.1.1 ベトナム人学習者によるベトナム語での描写のデータについて

以下の表 9.1 は、ベトナム人学習者によるベトナム語の描写文の詳細である。調査に協力してくれたベトナム人学習者の 4 つのグループ、合計 72 名であるが、母語での描写は各グループに差が見られないため、ここでは、4 つのグループのデータを合わせたものに対する考察を行う。

表 9.1 ベトナム人学習者によるベトナム語での描写

調査対象のオノマトペ (A)	日本語オノマトペの意味に似ている、または意味が対応する <sup>25</sup> ベトナム語の回答例 (B)	日本語オノマトペと異なつたとらえ方をした語の回答例 (C)	回答一致率 (%) (D)
くるくる (64/72) 88.9%	vòng vòng (12) (何回も続いて回るさま、くるくる) / tít (10) / tít thò lò (40) / tít mù (2) (動いているものがはっきり見えなくなるほど速く回っているさま。)	vù vù (5) (あるものが空気と衝突する急な音。例えば扇風機の音) / vun vút (2) (細い棒が連続的で強く空気に打つ音) / tít tít (1) / (ゆっくり)	40/72 55.6%
うろうろ (69/72) 95.8%	loanh quanh (44)/lòng vòng (6) (あちこち歩き回る様子、うろうろ) / lang thang (10) (目的なくあちこちを歩きまわっている) / lượn lờ (4) / đi đi lại lại (5)※ (あるところを行ったり来たりして離れようとしめない)	thơ thân (3) (何か考える事があるようでゆっくりと行ったり来たりするようす。)	44/72 61.1%
がんがん (61/72) 84.7%	đau như búa bổ (48)※ (ハンマーに打たれるように痛む、がんがんする。) / ong ong (12) (頭の中で大きな音が響くように痛むさま、がんがんする) / ù ù (1) (頭の中でウーウーと音が響くさま)	quay vòng vòng (1) (くるくる回っている様子) / đau như máy xén (1)※ (裁断機で切られるように痛むさま) / ê âm (1) (痛さがじんじんと長引くさま) / choang choáng (3) (頭がくらくらする)	48/72 66.7%

<sup>25</sup> 例えば、描写文 1 の「かざぐるまがくるくる回っている。」の例において、「くるくる」というかざぐるまの回っている様子に注目して描写する。ベトナム語で描写する時、vòng vòng (何回も続いて回るさま)、tít・tít thò lò・tít mù (動いているものがはっきり見えなくなるほど速く回っているさま) といった回答を B 欄に書いてある。一方、vù vù (あるものが空気と衝突する急な音。例えば扇風機の音)、vun vút (細い棒が連続的で強く空気に打つ音) のようなかざぐるまが回っている時に発する音を模倣して描写する、つまり、該当の日本語オノマトペと違う捉え方をとって描写する回答は C 欄に書いてある。

日本語学習者の日本語オノマトペ産出の実証的研究  
 —ベトナム語母語話者と中国語母語話者を比較して—

		／đau dữ dội (2) ※ (ひどく痛むさま) ／ nhức kinh khủng (3) ※	
ほっと (56/72) 77.8%	thờ phào (5) ※ ／thờ phào nhẹ nhõm(51) ※ (ほっとした、ほっとため息ついた)	phấn chấn (1) (意気揚々とした気持ちを 感じる) ／sung sướng (1) (喜ぶ) ／Đễ chịu※(1) (気持ちがいい) ／vui sướng không tả nổi※(1) (表現できないような 喜び) ／Yên tâm※(1) (安心する) ／nhẹ cả người ※(1) ／nhẹ nhõm※(10) (楽に感 じる)	51/72 70.8%
ぐっと (27/72) 37.5%	Chạm tới trái tim (27) ※ (心に来た)	đong đưa theo nhạc (8) ／thả hồn theo giai điệu ※(2) ／hòa cùng tiếng nhạc ※(10) (音 楽に載せてゆらゆらするさま) ／tim đập thình thịch (1) (心臓がどきどきする) ／ rung rung (1) ／cảm thấy nao nao (2) (感動する) ／đạt dào cảm xúc (6) (感動 で胸がいっぱい) ／rao rức (1) ／hào húng (1) (わくわく) ／thanh thân (1) (心 配ことがない様子) ／lặng cả người※(3) (体がしーんとなる) ／cảm động ※(5) (感動する) ／vui vẻ (3) ※ (楽しい) ／say sưa (1) ※ (夢中になる)	27/72 37.5%
あっさり (72/72) 100%	thanh đạm (57) ※／thanh mát (10) ※／thanh nhạt (4) ※ ／thanh (1) ※ (味が複雑でなくあっさりしたさま)		57/72 79.2%
ぐるぐる (66/72) 91.7%	vòng vòng (44) (何回続いても回っているさま) ／ như chong chóng (20) (風車のように～、ぐるぐる、 くるくる) ／tít tót (2) (動いているものがはっきり 見えなくなるほど早く回っている様子)	lờ đờ (2) (動作が緩慢する様子) ／diễn đào (3) (腫がじっとしながら周りを見て いる様子) ／lảo đảo (1) (よろよろ、よ ろめく)	44/72 61.1%
さらさら (54/72) 75%	suôn mượt(42) ※ ／mượt mà (12) (かみの毛がさらさらしているさま)	óng ả (8) ※ (つやのあるさま) ／mềm mại (5) (柔らかいさま) ／bồng bềnh (5) (ふわふわ)	42/72 59.3%
すっと (57/72) 79.2%	phất dậy (47) ／ phàn phất (1) (すっと立ち上がるさ ま) ／ngay lập tức※(9) (直ちに～)	nhẹ nhàng (1) (軽く～) ／như lò xo (1) (スプリング跳ねのように素早く～) ／ nhanh như chớp※(5) (雷のように素早く ～) ／nhanh chóng※(8) (速やか～)	47/72 65.3%

日本語学習者の日本語オノマトペ産出の実証的研究  
 —ベトナム語母語話者と中国語母語話者を比較して—

たっぶり (54/72) 75%	đầy ắp (50) ※ / Ầm ắp (2) / đầy ※ (2) (たっぶり)	toàn ※ (10) (～ばかり) / rất nhiều ※ (8) (とても多い)	50/72 69.4%
ちゃんと (50/72) 69.4%	cẩn thận (50) ※ (きちんと、ちゃんと)	sạch sẽ (14) (きれいに～) / đều đặn (3) (毎日同様に～) / lấp lánh (1) (ぴかぴか) / sáng bóng ※ (3) / trắng sáng ※ (1) (明るくぴかぴか)	50/72 69.4%
どンドン (53/72) 73.6%	dần dần (39) / đều đều (3) (だんだん、どンドン) / rất nhanh ※ (11) (早く～)	vùn vụt (2) (ぐんぐん～) / từng ngày ※ (17) (毎日、日に日に)	39/72 54.2%
にこにこ (57/72) 72.2%	mim cười (52) ※ (にこにこする) / tùm tùm (5) (微笑む)	Cười vui vẻ (2) / hóm hờ (2) / cười toe toét (2) (楽しく笑う) / cười khúc khích (4) (小さく連続的に笑う様子、くすくす) / cười tươi rói ※ (3) / vui tươi ※ (2) (楽しく笑う)	52/72 72.2%
ばたばた (64/72) 88.9%	tất bật (25) / luôn chân luôn tay (28) (ばたばたして手足は休まずに) / tối mắt tối mũi (5) (目が真っ暗になるほど忙しい) / gấp gáp (2) / quàng quàng (1) / vội vã (1) / cuống cuống (2) (慌てる・ばたばたしている)	cau có (4) (怒っているように顔をしかめる) / bực bội (1) (怒っている) / mệt mỏi (2) (疲れている) / căng thẳng (1) (ストレス)	28/72 38.9%
ぱっと (69/72) 95.8%	chợt nảy ra (25) / vụt hiện ra (3) / lóe lên (41) (ぱっとアイデアが出た)	xuất hiện (3) (アイデアが現れた)	41/72 56.9%
ばらばら (64/72) 88.9%	rời rạc (64) (ばらばら)	tan tành (2) (完全に壊された) / lung tung (3) / bừa bãi (2) / tanh bành (1) (散らかっているさま)	64/72 88.9%
ぴかぴか (54/72) 75%	sạch bóng (49) ※ (つやが出るほど非常にきれい) / sáng lấp lánh (5) (明るくぴかぴか)	sáng bóng ※ (5) / bóng loáng ※ (8) / sáng loáng ※ (5) (非常にきれいにつやの出ているさま)	49/72 68.1%
ぴったり (72/72) 100%	vừa khít (4) / vừa khít khin khịt (40) / vừa vặn (20) / vừa như in (10) (サイズがぴったりしている様子)		40/72 55.6%
ふと (51/72) 70.8%	bất chợt (46) (思わず、ふと) / bất giác ※ (5) (思わず、ふと～)	đột nhiên ※ (21) (突然)	46/72 63.9%

日本語学習者の日本語オノマトペ産出の実証的研究  
 —ベトナム語母語話者と中国語母語話者を比較して—

ふらふら (69/72) 95.8%	loang choang (62) / chuênh choang (2) / liêu xiêu (3) / lảo đảo (2) (ふらふら)	xoắn quẩy※ (3) (千鳥足)	62/72 86.1%
ぼうっと (55/72) 76.4%	lơ mơ (30) / mơ màng (25) (ぼうっと)	quay cuồng (3) (回っている) / choang choáng (3) (頭がくらくらするさま) / ong ong (4) (頭の中で大きな音が響くよ うに痛む様子) / mụ mị (1) (愚鈍) / trống rỗng (2) (からから) / nặng trĩch※ (2) (重い)	30/72 41.7%
平均 : 81.7%			平均 : 61.0%

表 9.1 の見方を説明する。表 9.1 は左から見て、A、B、C、D の 4 列からなっている。A 列は、調査対象となる 21 語の日本語オノマトペである。A 列にあるオノマトペの下にある数字は日本語オノマトペと意味がほぼ対応しているベトナム語の回答者の人数の合計である。例えば、オノマトペの「うろうろ」の下には(69/72)という数字があるが、これはベトナム人学習者 72 名のうち、69 名が「うろうろ」と意味がほぼ同様のベトナム語を産出したことを意味している。(69/72)の下に、95.8%という数字がパーセンテージである。B 列には、日本語オノマトペと対応すると思われるベトナム語の回答例である。それぞれの語の右にある括弧の中は回答者の人数である。C 列は、日本語オノマトペと意味が完全には重ならない、つまり、異なるとらえ方をしたベトナム語の回答例である。D 列には、それぞれの例に、同じ回答をしている人数が全体でどのぐらい占めているかという割合、つまり、ベトナム語母語話者の回答一致率を表している。回答一致率の計算方法について、7.1 を参照されたい。

それぞれの回答は Hoàng Phê (2011)の説明に基づき、日本語訳を ( ) に記入する。※がついている語はオノマトペではない。回答がベトナム語においてオノマトペであるかどうかについては、筆者が内省で判断を行った。なお、72 名の学習者が回答した 1512 語のうち、オノマトペではないのが 443 語で 29.4%を占め、残りの 70.6%がオノマトペであった。

### 9.1.2 ベトナム人学習者によるベトナム語での描写のデータの考察

本節では、ベトナム人学習者によるベトナム語の母語におけるオノマトペの使用実態を明らかにし、第 7 章と第 8 章で見てきたベトナム人学習者による日本語オノマトペの使用実態と日本語オノマトペの産出に見られる傾向の裏付け資料とする。

上記のように、学習者の回答の中で、ベトナム語におけるオノマトペが 70.6%で、オノマトペではない語より、ずっと多いことがわかった。つまり、ベトナム語母語話者は、同じ場面において、日本語母語話者と同じように、オノマトペを積極的に使って描写するというこ

とである。調査の際に、できる限りベトナム語のオノマトペを使用し、生き生きと描写するようにとの指示に影響を受けている可能性もあるが、それを可能にするのも、ベトナム語にオノマトペが豊富に存在し、かつ日常的にオノマトペを使用する習慣によると言える。調査材料として、日本語オノマトペの使用を誘出するアニメーションを上映したが、同じ場面において、日本語オノマトペが積極的に使用されているのと同様に、ベトナム語においても、オノマトペが多く産出されたことが明らかになった。調査のステップ2の質問10では、「母語で話す時、母語におけるオノマトペをよく使いますか。」に対して、ベトナム人学習者は、母語で話す時も、オノマトペを使う習慣（「よく使っている」と「時々使う」）を持っている者が全体の93%を占めていた。ベトナム人学習者の大多数が母語で話す時もオノマトペを使用しているというのは、母語のオノマトペの知識があり、日本語オノマトペに対しても興味を持ち、馴染みを感じやすいと思われる。

表現というのは個人差に左右されるものであるため、同じ場面においても、個人の捉え方によって表現が異なっている。しかし、豊富に存在している言葉の中で、複数の母語話者が共通して使っているというのは、その表現が一般的で、母語話者の間に共通の感覚が存在していると言える。一致率が高い表現が出るケースは、その表現が一般的で、広く認知されている語であり、このことは、一つの事象とそれを表現する表現（オノマトペ）が社会の中で共有されていることを示している。日本語のようなオノマトペが豊富に存在し、母語話者の言語生活に頻繁に使用されている言語の場合、その言語の母語話者の間には、オノマトペに対する感覚が共有されていると思われる。つまり、同じ物事の状態を描写しようとする時に、母語話者は同じオノマトペを選択する傾向が強い。第7章の7.1からわかるように、日本語母語話者の回答一致率は72%であった。特に、「ばらばら」「にこにこ」の回答一致率は100%で、「ぴかぴか」「ぴったり」「ぼうっ」の回答一致率は90%であった。つまり、それらの場面において、日本語母語話者は、ほぼ全員が同じオノマトペを使って表現するのである。ベトナム語母語話者の場合も同様で「ばらばら」「ふらふら」「あっさり」「にこにこ」の回答一致率がそれぞれ88.9%、86.1%、79.2%、72.2%と高かった。21の描写文において、日本語母語話者の平均回答一致率が72%で、ベトナム語母語話者の平均回答一致率は61.0%（D列）であった。

このように、ベトナム語母語話者は母語におけるオノマトペを使用する時に、回答一致率は日本語母語話者ほどではないが、全体の6割を占めている。つまり、ベトナム語母語話者の過半がベトナム語のオノマトペに関する共通感覚を備えている。

今回、調査に協力してくれた学習者は、全員が大学に入ってから日本語を勉強し始めた、いわゆる成人になってからの日本語学習者である。このような成人型の外国語学習では、母語の言語構造や表現方法を参照しながら外国語を学習していくと思われる。

では、それぞれの描写文において、どのような語を使って描写しているのだろうか。以下、それぞれの描写文で回答例が最も多い語を取り上げる。

【描写文1】「風車（かざぐるま）が風で\_\_\_\_\_回っている。」

ベトナム人学習者 72 名の中で、40 名が「tít thò lò (動いているものがはっきり見えなくなるほど速く回っているさま。)」というオノマトペを使って描写している。この場合、正答である「くるくる」が表す「ものが軽く続いて回るさま」の意味と少し程度が異なる。詳しく言うと、ベトナム語の「tít thò lò」のほうが、「くるくる」より物事が回す速度が速いと思われる<sup>26</sup>。

【描写文 2】「今日は学校が早く終わって、することなかったので、学校の前を\_\_\_\_していた。」

正答である「うろうろ」というのは「あちこちを歩き回るさま」を表すオノマトペであるが、これと意味が対応する「loanh quanh」というベトナム語のオノマトペを回答したのは 44 名で、最も多かった。

【描写文 3】「昨日はお酒を飲みすぎたせいで、頭が\_\_\_\_\_する。」

72 名の中で、48 名が「đau như búa bổ (ハンマーに打たれるように痛む)」という表現を使って描写している。つまり、比喩方法を採用し、頭の痛む状態に注目して描写をしている。これに対して、正答である「がんがん」は、「頭の中で大きな音が響くようにひどく痛むさま」と、頭の中で響く音を模倣することにより、そのひどく痛む状態を表している。つまり、表す意味は同じであるが、注目しているところが異なっている<sup>27</sup>。

【描写文 4】「難しい仕事を無事に終えて、\_\_\_\_\_と一息ついた。」

ベトナム人学習者の中で、51 名が「thở phào nhẹ nhõm (ほっとした、ほっとため息ついた)」という表現を使って描写しているが、この言い方は、「ほっとため息ついた」の表現と対応している。

【描写文 5】「名曲 (めいきょく) を聞いていて、\_\_\_\_\_と心に来た。」

日本語の「ぐっと心に来る」という表現はベトナム語にすれば、「Chạm tới trái tim (心に来る)」という表現に対応しているが、この言い方は改まった時にしか言われていないため、この回答者は 27 名しかなかった。

【描写文 6】「日本料理は油をあまり使わず、\_\_\_\_\_していて体にいい。」

<sup>26</sup> 「くるくる」と意味が一致している語として「vòng vòng」というオノマトペがあるが、この回答者は 12 名しかいない。ベトナム人にとって、「tít thò lò」のほうがスピード感があり、印象的なようである。

<sup>27</sup> 「がんがん」と意味が一致している語として「ong ong」というオノマトペがあるが、この回答者は 12 名しかいない。ベトナム人にとって、「đau như búa bổ」という言い方のほうが、頭が痛い状態を強調して表現することができると思われる。

ベトナム人学習者の中で、57名が「*thanh đạm* (味が複雑でなくあっさりしたさま)」という表現を使って描写しているが、これは「味があっさりしている」という日本語表現に合っている。

【描写文 7】「目が\_\_\_\_\_回る。」

日本語の「目がぐるぐる回る」をベトナム語にすれば、「*mắt quay vòng vòng* (何回続いても回っているさま)」という表現に対応している。

【描写文 8】「彼女はかみの毛が\_\_\_\_\_で、きれいだ。」

ベトナム人学習者の中で、42名が「*suôn mượt* (かみの毛がさらさらしているさま)」という表現を使って描写しているが、この言い方は、「かみの毛がさらさらしている」の表現と対応している。

【描写文 9】「{電車の中で} 若者が\_\_\_\_\_と立って、お年寄りに席を譲 (ゆず) った。」

ベトナム人学習者の中で、47名が「*phất dậy* (すっと立ち上がるさま)」という日本語の「すっ立つ」というオノマトペを対応する言葉を使って描写をしている。

【描写文 10】「お昼は野菜\_\_\_\_\_のカレーを食べた。」

ベトナム人の中で 50名が「*đầy ắp* (量がたっぷり)」という日本語の「たっぷり」と意味が対応する語を使って描写している。

【描写文 11】「子供は、歯磨きが\_\_\_\_\_とできたね、とママに褒 (ほ) められて喜 (よろこ) んだ。」

ベトナム人の中で 50名が「*cẩn thận* (きちんと、ちゃんと)」という日本語の「ちゃん(と)」と意味が対応する語を使って描写している。

【描写文 12】「お母さんのおなかが\_\_\_\_\_大きくなってきた。」

ベトナム人の中で 39名が「*dần dần* (どんどん、または、だんだん)」という日本語の「どんどん」と意味が対応する語を使って描写している。

【描写文 13】「この子はいつも\_\_\_\_\_している。」

ベトナム人の中で 52名が「*mim cười* (にこにこする)」という日本語の「にこにこ」と意味が対応する語を使って描写している。

【描写文 14】「最近は仕事がとても忙しくて、\_\_\_\_\_している。」

「仕事が忙しくばたばたしているさま」を表すベトナム語として、「tắt bật (ばたばた)」か「luôn chân luôn tay (手足は休まず忙しい)」という言い方があるが、「tối mắt tối mũi」「gấp gáp」「cau có」「bực bội」「căng thẳng」「mệt mỏi」「quáng quàng」「cuồng cuồng」「vội vã」という様々な回答の中で、「tắt bật (ばたばた)」か「luôn chân luôn tay (手足は休まず忙しい)」それぞれの回答者は25名と28名で目立っている。

【描写文 15】「友達と話している時に、\_\_\_\_\_といいアイデアが思い浮かんだ。」  
ベトナム人の中で41名が「lóc lên (ぱっとアイデアが出た)」という日本語の「ぱつ(と)」と意味が対応する語を使って描写している。

【描写文 16】「ロボットの体が\_\_\_\_\_になっている。」  
ベトナム人学習者の中で64名が「rời rạc (ばらばら)」という日本語の「ばらばら」と意味が対応する語を使って描写している。

【描写文 17】「くつを\_\_\_\_\_に磨(みが)いた。」  
ベトナム人学習者の中で49名が「sạch bóng (つやが出るほど非常にきれい)」という日本語の「ぴかぴか」と意味が対応する語を使って描写している。

【描写文 18】「このくつはサイズが\_\_\_\_\_だ。」  
ベトナム人学習者の40名が「vừa khít khìn khịt (サイズがぴったりしている様子)」という日本語の「ぴったり」と意味が対応する言葉を使って表現している。

【描写文 19】「夜道を一人とぼとぼ歩いていた。\_\_\_\_\_と空を見上げると、お月様が私に笑いかけてくれ、元気が出た。」  
正答は「ふ(と)」というオノマトペであるが、これと意味が対応するベトナム語として「bát chọt」という言葉があるが、この回答者が46名で、目立っている。

【描写文 20】「道で酔(よ)っぱらった人が\_\_\_\_\_歩いている。」  
正答は「ふらふら」というオノマトペであるが、ベトナム人学習者の中で62名が「loạng choạng (歩き方がふらふらしている)」という言葉を使って表現している。

【描写文 21】「今日は寝不足で頭が\_\_\_\_\_としていて集中できない。」  
正答は「ぼうつ(と)」というオノマトペであるが、ベトナム語の中でこれと意味が対応するのは「lơ mơ」と「mơ màng」というオノマトペがある。回答者はそれぞれ30名と25名で、目立っている。

以上、ベトナム人学習者がベトナム語で描写している際、それぞれの目立つ回答を見てきた。21文の目立つ回答の中で、【描写文1】と【描写文3】以外の回答が日本語オノマトペと意味が対応することがわかった。つまり、同じ場面において、ベトナム人学習者の多くが日本語母語話者と同じ捉え方をし、日本語オノマトペの意味と対応しているベトナム語のオノマトペ（表現）を使って描写している。第6章では、ベトナム人学習者の63.8%が「新しい日本語オノマトペを覚えようとする時に、意味を母語に訳して暗記する」方法を採用しているということが明らかになったが、ベトナム語には、日本語オノマトペと意味が対応する語が多く存在しているという背景の下で、このような学習方法は日本語オノマトペの習得に効果的だと考えられる。第7章で見たように、ベトナム人学習者3年生と中国人学習者3年生の正答率を比較すれば、ベトナム人学習者3年生の正答率が55.1%で、中国人学習者3年生の正答率の29%よりかなり高いが、これは、ベトナム語に日本語オノマトペと意味が対応する語が多く存在することと、日本語オノマトペを覚えようとするとき、母語を頼りにできることによると考えられる。

以上、ベトナム人学習者が日本語オノマトペの学習において強みを持っていることについて論じた。次に、ベトナム語での描写とベトナム人学習者が産出した日本語オノマトペとの間に関連性があると思われる例を取り上げ、改めて母語の転移について見ていきたい。

【描写文1】「風車（かざぐるま）が風で\_\_\_\_\_回っている。」

【描写文7】「目が\_\_\_\_\_回る。」

ベトナム人学習者の産出例には、「まるまる」「まわまわ」という例が多く見られた。8.1.1では、それぞれ丸（まる）く回っている、または回（まわ）っている様子から、その語基である「まる」と「まわ」の部分を反復させ産出したのではないかという推測をした。しかし、ベトナム語の回答では、12名も「vòng vòng（何回も続いて回るさま）」という「くるくる」、または「ぐるぐる」と意味が対応する語を使って描写していることが明らかになった。「vòng vòng」という言葉を学習者が日本語に訳しようとするとき「quay vòng（まわる）」あるいは「quay vòng tròn（丸くまわる）」という言葉になる。これに関しては、フォローアップ・インタビューで聞けなかったため断定できないが、ベトナム語をもとに、日本語に訳し、その言葉の語基の部分を反復させ造語した可能性も十分考えられる。つまり、日本語オノマトペを産出する際には、母語での言い方と日本語オノマトペの造語法を活用し、産出したという可能性もある。

【描写文1】「風車（かざぐるま）が風で\_\_\_\_\_回っている。」

ベトナム人学習者が日本語オノマトペとして産出した例のうち、「ふゆふゆ」「ひゅひゅ」「びゅびゅ」「ひゅうひゅう」「びゅうびゅう」「びゅうびゅう」のような似ている回答をしている。第8章では、「物事の状態を擬音的に捉え日本語オノマトペを産出する」というカ

テゴリーに分類している。フォローアップ・インタビューでは、それぞれ、ベトナム語の「vù vù」と「hiu hiu」<sup>28</sup>という擬音語と連想して産出したことが確認されたが、ベトナム語の回答を見ると、「vù vù」という回答例が5つも見られたため、母語のオノマトペの知識を活用し、未知の日本語オノマトペを産出することが改めて確認された。

【描写文 21】「今日は寝不足で頭が\_\_\_\_\_としていて集中できない。」

ベトナム人学習者の産出に、「おもおも」と「まわまわ」という産出がそれぞれ2例と1例見られた。学習者にフォローアップ・インタビューで聞いたところ、ベトナム語の言い方から連想して、言葉の語基反復という用語法を活用しオノマトペを産出することが明らかになった(VN0304、VJ07、VJ08)。表 9.1 でベトナム語の回答を見ると、「“nặng trĩch” (頭を重(おも)く感じる)」の例と「“quay cuồng” (頭が回(まわ)っているように感じる)」という例が見られた。このように、ベトナム人学習者は、知らない日本語オノマトペを産出する際に、母語の知識を頼りにして、産出することが見受けられた。

このように、ベトナム人学習者は日本語オノマトペを産出する際に、知っている語の語基を反復させたことがわかったが、元となる語はベトナム語から連想したことが窺えた。

今までは、ベトナム語のオノマトペの知識が、日本語オノマトペの学習者に有利に働き、あるいは、未知の日本語オノマトペの産出に影響している例を見てきた。しかし、ベトナム語においても、意味が似ているオノマトペが存在し、細かいニュアンスに気を付けないと、混同が起きてしまう。次の【描写文 16】がその例である。

【描写文 16】「ロボットの体が\_\_\_\_\_になっている。」

正答は「ばらばら」であるが、ベトナム人学習者の産出に「ごちゃごちゃ」が3例、「めちゃくちゃ」「めっちゃごちゃ」「ぼろぼろ」それぞれ1例である。このような日本語オノマトペは意味が似ているため、混同が起きたということは8.1で既に述べている。しかし、ベトナム語においてもオノマトペが多く存在し、意味が似ているようなオノマトペが存在しているため、このような混同がベトナム語からの転移に要因がある可能性も考えられる。

では、ベトナム語からの転移があるかどうかを検討するために、ベトナム人学習者のベトナム語の回答も見てみる。

ベトナム語の回答には、「rời rạc」という回答が64例で、圧倒的に多い。このほかに、「tan tành」が2例、「tanh bành」が1例、「lung tung」が3例、「bừa bãi」が2例見られた。このうち、「rời rạc」というのは、「まとまっているべきものがまとまっていない状態」を表し、日本語の「ばらばら」というオノマトペと意味が対応している。「tan tành」とは

<sup>28</sup> ベトナム語の回答には、「hiu hiu」という回答は見つからない。ベトナム語で描写すると、画像に合った描写をするため、かざぐるまの回っている様子、あるいは、回っているの音を描写しないとイケない。そのため、「hiu hiu」という「風の軽い音を表す擬音語」が使われない。

物が完全に壊された状態を表し、「*tanh bành*」というオノマトペは「物事が非常に散らかっているさま」を表し、「*lung tung*」と「*bừa bãi*」は「種々の物が乱雑に入り混じって散らかっているさま」を表しているオノマトペである。これは、日本語の「ごちゃごちゃ」「めちゃくちゃ」というオノマトペに対応している。このように、これらのベトナム語は微妙なニュアンスで異なっているが、ベトナム語では、違和感がないように感じるため、自分がいつも使っているベトナム語との対応関係から暗記してしまう。その上で日本語のオノマトペを産出すると、上述の誤答が起きてしまうのである。

ベトナム人学習者の正答率が最も低いのは「ぐっ」の描写文であるが、この場合に母語の転移があるかどうか見てみたい。今回調査した 21 語のうち 20 語については、72 名中 50 名以上が日本語に対応する適切なベトナム語を産出していたが、「ぐっと」は傾向が異なっていた。「ぐっと」の回答例のうち、もっとも一致率が高かったのは「*Chạm tới trái tim*」で回答者が 27 名であった。「*Chạm tới trái tim*」というベトナム語の表現は「ぐっと心に来た」と対応すると思われ、「心に来た」の部分の直訳でもある。このベトナム語の表現はこのままの形で使用され、歌や話に対する感想として「非常に感動し、胸を打たれた」という意味で改まった場面でよく使用されるが、日常的な場面での使用はまれである。フォローアップ調査の協力者 5 名のうち、3 名が「心に来た」の前にある下線のブランクに入れるためのオノマトペを一生懸命考えたが思い浮かばないので直訳をした。」と語っていた。適切な回答が思い浮かばない理由としては、日本語とは異なり、「心に来る」の前に「ぐっと」のようなオノマトペが共起しないこと、この種のオノマトペの日常的な使用場面が非常に少ないことが考えられる。

以上、ベトナム人学習者によるベトナム語での描写を見てきた。結果からわかるように、同じ場面において、ベトナム人学習者の多くが、日本語オノマトペと意味が対応しているオノマトペを使って描写している。ベトナム人学習者の中に、日本語オノマトペをベトナム語に訳して暗記する方法を採用している学習者が多いため、ベトナム語に対応語（対応表現）が存在する場合、習得しやすく、逆に、「ぐっ」のようなベトナム語に対応語（表現）が存在しない場合は習得しづらいという示唆を得た。また、未知の日本語オノマトペを産出する際には、ベトナム語での言い方を活用し、意味が似ているベトナム語をもとにして産出することが見られた。ベトナム語に豊富なオノマトペ語群があり、学習者は普段からオノマトペを使用しているが故に、日本語オノマトペの習得に強みを有することを別の面から示していると言えよう。

## 9.2 中国人学習者による中国語での描写

### 9.2.1 中国人学習者による中国語での描写のデータ

9.1 の表 9.1 では、ベトナム人学習者の母語のデータを見た。一方、以下の表 9.2 は、中国人学習者による中国語母語の描写文の詳細である。

表 9.2 中国人学習者による中国語での描写

調査対象のオノマトペ (A)	日本語オノマトペの意味に似ている、または意味が対応する中国語の回答例 (B)	日本語オノマトペと異なるとらえ方をした語の回答例 (C)	回答一致率 (%) (D)
くるくる (3/20) 15%	吱呀吱呀 (1) 溜溜 (1) (くるくる) 吱悠悠 (1) (ぐるぐる)	咕噜咕噜 (2) (ものが転がる時やのどが勢いよく飲む時の音、腹が空いた時の音) — <u>随风</u> (1) 随着风 (1) (風に乗って〜) — <u>圈圈</u> (1) (風で〜) <u>呼呼</u> (4) 呜呜地 (1) (風でふーふー〜) 慢慢 (2) 悠悠 (2) (ゆっくり〜) — <u>直转</u> (1) (ずっと〜) 呼啦呼啦 (1) (ばたばた〜) 喇喇 (1) (ものが素早く回っている時や、表面が摩擦されているときに出た音)	4/20 20%
うろうろ (20/20) 100%	来来回回 (3) 走来走去 (3) 徘徊 (2) 徘徊逡巡 (1) 闲逛 (4) 溜达溜达 (1) 来回地转 (1) 闲晃 (1) 来回转 (1) 转悠 (1) 无聊地走着 (1) (ぶらぶら、うろうろ) 来回走 (1) (行ったり来たり)		4/20 20%
がんがん (6/20) 30%	头剧痛 (1) 头刺痛 (1) (ずきずき) 嗡嗡 (4) (がんがん)	头很疼 (2) 头很痛 (3) 头特别疼 (2) (とても痛い) 迷迷糊糊 (1) (ぼうつ) 晕晕乎乎 (2) 头晕目眩 (1) 晕晕沉沉 (1) 头很晕 (1) (くらくら) 痛的不行 (1) (痛くてたまらない)	4/20 20%
ほっと (15/20) 75%	长长的 (1) 长叹了 (1) 长舒了 (1) (ふーっ〜) 松了 (5) 舒了 (1) (ほっ〜) 终于松了 (6) (やっどほっと)	总算可以舒 (1) 不禁 (1) (思わず) 一下子 (1) (一気に) 放松 (1) (リラックスして〜) 一时 (1) (一時的)	6/20 30%
ぐっと (6/20) 30%	响彻心灵 (1) 心里有所触动 (1) 投入到心里 (1) 心里很受震动 (1) (心が動かされた) 心旷神怡 (1) (心がとろけた) 被拨动心弦 (1) (胸を揺さぶられた)	心情舒畅 (1) 沁人心 (1) (気分・心がすっきりした) 心情大好 (1) (気分・気持ちがよくなった) 心情很开朗 (1) 心情很舒悦 (1) 心情好好 (1) (気分がよくなった) 心里扑通扑通的 (1) (どきどきする) 心情飘乎乎的 (1) (ふらふらする) 心情放松 (舒畅) (1) (心が安らいだ) <u>感受到了心灵上的安宁</u> (1) (心の安らぎを感じた) 沉醉其中 (1) 沉醉之中 (1) (酔い	1/20 5%

日本語学習者の日本語オノマトペ産出の実証的研究  
 —ベトナム語母語話者と中国語母語話者を比較して—

		しれている) 旋律就涌上心头。(1) (メロディーがこみあげている) 心里很开心 (1) (楽しくなってきた)	
あっさり (14/20) 70%	清淡 (14) (あっさりしている)	感觉对身体很好 (1) 原本的做对身体好。(1) 对身体很好 (3) (体にいい) 坚持下去对身体好。(1) (続けると体にいい)	14/20 70%
ぐるぐる (4/20) 20%	来回转着 (1) (行ったり来たり) 溜溜地转 (1) (くるくる) 滴溜溜地转 (2) (ぐるぐる)	咕噜咕噜 (2) 轱辘轱辘 (1) 咕噜噜地转 (1) 骨碌碌 (1) 骨碌骨碌 (1) (ものが転がる時の音、水車の回る音) 头晕目眩 (3) 晕乎乎的转 (1) めまいがする。金星 (1) (きらきら) 不停地转 (1) (ずっと) 转 (1) (回る) 缭乱 (3) (~がちがちか)	3/20 15%
さらさら (9/20) 45%	柔顺 (5) 很顺 (2) (さらさら) 整整齐齐 (1) (まとまっています) 又长又直 (1) (長くてまっすぐ)	顺滑 (3) 光滑 (1) (つやつや) 很软 (1) (柔らかい) 飘逸 (4) (おしゃれで) 头发的样子很漂亮 (1) (髪の毛をかきあげる様子が) 美女的秀发 (1) (きれい)	5/20 20%
すっと (13/20) 65%	唰地 (2) (すっ) 毫不犹豫 (1) (躊躇せず) 立刻 (4) 马上 (3) 赶忙 (1) 快速的 (1) 立马 (1) (すぐに)	突然 (2) (突然) 自觉 (2) (自觉) 接次地 (1) (次々と) 站着 (1) (立つ) 给老人让座 (1) (お年寄りに席を譲った)	4/20 20%
たっぷり (11/20) 55%	青菜丰富 (1) 丰富的蔬菜 (1) 蔬菜很多 (1) 满是青菜 (1) (野菜たっぷり) 全是蔬菜 (4) 都是蔬菜 (1) (だけの~) 有很多蔬菜 (2) (たくさん入った)	带蔬菜 (1) (野菜の入った) 蔬菜咖喱饭 (8) (野菜カレー)	8/20 40%
ちゃんと (4/20) 20%	认真 (3) (真面目に) 细地刷了 (1) (丁寧に)	干净 (2) 白白亮亮 (1) (きれいに) 自己刷牙 (4) (自分で歯磨きができて) 刷的很好 (1) 好好的将牙刷好了 (1) 很好的刷牙 (1) 很会刷牙呢 (1) (よくできた) 在刷牙的时 (1) (歯磨きをする時) 很利索地 (1) (素早く) 刷完牙 (1) (歯磨きした後) 高兴地露出了牙齿 (1) (歯を見せて喜んだ) 小孩子刷牙的声音 (1) (歯を磨く時に発する音)	4/20 20%
どンドン (16/20) 80%	逐渐 (2) 渐渐 (7) 一点点 (3) 一点一点 (2) 慢慢 (2) (だんだん)	一下子 (2) (一気に) 扑通扑通地动着 (1) (ごろごろ動いている) 一天天 (1) (日に日に)	7/20 35%

日本語学習者の日本語オノマトペ産出の実証的研究  
 —ベトナム語母語話者と中国語母語話者を比較して—

にこにこ (11/20) 55%	笑眯眯 (5) 总是笑呵呵的 (1) 灿烂地笑 (1) 笑呵呵的 (1) (にこにこ) 经常微笑 (3) (微笑んでいる)	总是微笑 (1) (笑う) 很受欢迎 (2) (もてる) 是笑得很开心 (1) (楽しそうに笑う) 直 咯咯地笑 (1) (げらげら笑う) 一直笑着 (1) (ずっと笑う) 一直在笑 (1) (いつも笑う) 这个孩子总是那两个男孩子的中心 (1) (中心 になっている) 经常哭 (1) (よく泣いてい る)	5/20 25%
ばたばた (15/20) 75%	手忙脚乱 (4) 脚忙手乱 (1) 脱不开身 (1) 忙 的团团转 (1) (ばたばたしている) 忙晕了 (2) (目が回るほど) 不可开交 (2) (忙しくどうしようもない) 总是连轴转 (1) 接连不断地做 (1) (休まないで働く) 要忙掉脑袋了 (1) 非常忙 (1) (とても忙し い)	焦头烂额 (2) (さんざんな目に遭った) 很慌张 (1) (慌てている) 不停地在工作 (1) (ずっと働いている) 心力憔悴 (1) (精神的 に疲れ果てている)	4/20 20%
ぱっと (18/20) 90%	突然 (13) (急に) 突然之间灵光一闪 (2) 脑 海中仿佛叮当地 (1) 灵光一现 (1) (ぱっと) 灵激 (机) 一动 (1) (ふと)	想了很好的主意 (1) 出来了一个好主意 (1) (思い出した)	13/20 65%
ばらばら (17/20) 85%	机器人的身体散了 (1) (散らかっている) 七 零八落 (3) 四分五裂 (3) 支离破碎 (2) 机器 人的身体被拆的零碎 (2) 机器人散架了 (2) 零散 (2) 七零八碎 (1) 散落 (1) (ばらば ら)	机器人的零件被拆了 (1) (分解された) 机器 人身体很牢固 (1) (しっかりしている) 机器 人被拆的乱七八糟 (1) (めちゃくちゃしてい る)	3/20 15%
ぴかぴか (9/20) 45%	buliNgbuliNg 的 (1) (きらきら) 锃亮 (1) 闪 闪发亮 (1) 擦亮了 (1) 闪亮 (1) 哔哩哔哩 (1) 很亮 (1) 发亮 (1) 亮堂堂的 (1) (ぴ かぴか)	使劲刷鞋 (1) (大きい力で) 刷鞋 (1) (靴を 磨いた) 努力刷鞋 (1) (頑張って~) 彼此摩擦 (1) (靴がすりあっている) 鞋很磨 脚 (1) (靴擦れている) 唰唰地刷鞋 (1) (さ らさら「靴を磨くときの音」と靴を磨いた) 鞋 被擦的乱七八糟 (1) (むちゃくちゃにみがい た) 很亮 (1) 很干净 (1) 光洁如新 (新品のよ うにきれいに) (きれいに) 细的刷干净 (1) (丁寧に)	1/20 5%

日本語学習者の日本語オノマトペ産出の実証的研究  
 —ベトナム語母語話者と中国語母語話者を比較して—

ぴったり (16/20) 80%	正好 (7) 合适 (2) 合脚 (3) 刚刚好 (2) 刚好 (2) (ぴったり)	亮 (1) (光っている) 有点挤脚 (1) (小さい) 大了 (1) (大きい) 尺码不对 (1) (合わない)	7/20 35%
ふと (13/20) 65%	突然看向天空 (6) 忽然抬头看 (1) (急に) 偶然抬起头 (2) (たまたま) 不经意抬头看 (1) 猛地一抬头 (1) (ふと) 不经意的 (1) 无意 (1) (何気なく)	仰望天空 (1) (空を見上げると) 抬头看天空 (3) (見上げて) 慢慢抬头看天空 (1) (ゆっくり) 稍一看天空 (1) (ちょっと) 闷闷的不开心的看天上 (1) (悶々として)	6/20 30%
ふらふら (19/20) 95%	摇摇晃晃 (8) 晃悠悠 (1) 晃晃悠悠 (5) 歪歪斜斜 (2) 飘飘的走着 (1) 飘乎乎的走着 (1) 晃悠悠的走着 (1) (ふらふら)	微醺 (1) (ほろ酔いで)	8/20 40%
ぼうっと (16/20) 80%	头脑很不清醒 (1) (頭がはっきりせず) 晕乎乎 (1) 晕晕乎乎 (1) 昏昏沉沉 (1) 昏昏沉沉 (2) (くらくら) 头有点蒙蒙的 (1) 很迷糊 (1) (ぼんやり) 迷迷糊糊 (2) 懵懵的 (1) (ぼうっと) 头很痛 (3) (頭がとてもいたい) 头咚咚的响 (1) (がんがん) 头一阵阵地剧痛 (1) (ずきずき)	头晕 (1) (头很晕) (1) (めまいがする) 头很沉 (1) (頭が重くて) 头痛 (1) (頭が痛い)	3/20 15%
平均: 60.7%			平均: 26.9%

表 9.2 の見方は 9.1.1 の表 9.1 の見方と同じである。A 欄は、調査対象となっている 21 語のオノマトペである。A 欄にある日本語オノマトペの下にある数字は日本語オノマトペと意味がほぼ対応している中国語の回答者の人数の合計である。例えば、オノマトペの「ぼうっと」の下には(16/20)という数字があるが、これは中国人学習者 20 名のうち、16 名が「ぼうっと」と意味がほぼ同様の中国語を産出したことを意味している。(16/20)の下に、80 という数字が書いてあるが、これがパーセンテージとなっている。説明が繰り返しになるが、B 欄には、日本語オノマトペと対応すると思われる中国語の回答例である。それぞれの語の右にある ( ) の中は回答者の人数である。C 欄には、日本語オノマトペと意味が完全には重ならない、異なるとらえ方をした中国語の回答例である。D 欄には、それぞれの例に、最も同じ回答をしている人数が全体でどのぐらい占めているかという割合、つまり、中国語母語話者の回答一致率を表している。回答一致率の計算方法について、7.1 をご参照されたい。

それぞれの回答は日本語教育を専攻としている大学院生の中国語母語話者 2 名と中国語ができる日本語教育を専攻としている大学院生の日本語母語話者 1 名で日本語に訳し、統

一してもらった。この3名の判定者により判断をしてもらい、3名のうち、2名以上に認定を受けた場合を中国語におけるオノマトペと判断する。表 9.2 には載せないが、20名の学習者が回答した420語のうち、中国語のオノマトペではないのが391語で、93%を占め、オノマトペに相当する割合は7%であった。これに対し、ベトナム語の回答の中では、オノマトペである割合が全体の70.6%を占め、圧倒的に多いことがわかる。

### 9.2.2 中国人学習者による中国語での描写データの考察

本項では、9.1.2 で述べたベトナム人学習者によるベトナム語におけるオノマトペの使用実態からわかったことと比較しながら、中国人学習者の中国語におけるオノマトペの使用実態を明らかにし、第7章と第8章で見えてきた中国人学習者による日本語オノマトペの使用実態と日本語オノマトペの産出に見られる傾向の裏付けを行う。

既に見たように、ベトナム人学習者はベトナム語において日本語母語話者と同じように、オノマトペを積極的に使って描写する習慣があるが、中国人学習者の場合、中国語にはそもそもオノマトペがそんなに多く存在しないためか、積極的に使おうとしている姿が見られない。調査のステップ2の質問10で、「母語で話す時、母語におけるオノマトペをよく使いますか。」に対して、中国人学習者は、母語で話す時も、オノマトペを使う習慣（「よく使っている」と「時々使う」）を持っているのは全体の60%であり、ベトナム人の93%に比べると低かった。調査のステップ3では、「できる限り中国語のオノマトペを使用し、生き生きと描写するように」との指示を出したものの、こんなに、オノマトペの割合が少ないのは、同じ場面を描写するための中国語のオノマトペがそれほど存在しないし、物事の状態を生き生きと表現するのに、オノマトペ以外の方法を採用しているだろうと思われる。

そして、9.1.2 で述べているように、回答一致率が高い語は、その表現が一般的で広く認知されていることを表している。日本語母語話者とベトナム人学習者による母語での回答一致率がそれぞれ72%と61%で、それぞれの描写文で目立つ回答があるのに対して、中国人学習者の場合、回答一致率が26.9%で低いものの、各回答の回答者数はそれぞれほぼ同じであった。このことは、中国語の場合、同じ場面を描写するのに、一つのパターンが突出するわけではなく、複数のパターンが並行することが多いことがわかる。

また、成人型の外国語学習において、ターゲット語と母語の構造・表現の仕方が類似しているかどうかということが学習しやすさを決めている要因の一つであるということも9.1.2で既に述べた。表9.2を見ると、日本語オノマトペと意味が対応している中国語の回答の割合が60.7%を占め、ベトナム語の回答の81.7%と比べるとかなり低い。しかも、それぞれの描写文において最も回答者数が多い語はいつもB欄（日本語オノマトペに意味がほぼ対応している）にあるわけではない。中国人学習者は、同じ場面を描写するのに、日本語オノマトペと意味が対応する語がベトナム語より少なく、しかも、日本語母語話者と同じような表

現方法を用いて描写する割合もベトナム人学習者に比べて少ない。つまり、日本語オノマトペの学習においてベトナム人学習者が中国人学習者より有利であると言える。

中国語の回答の内訳を見ると、同じ描写文において、回答のバリエーションがベトナム語の回答よりかなり豊富であることがわかる。中国人学習者の回答一致率が低いかわりに、回答のバリエーションが多かった。確かに、調査のステップ 3 では、ベトナム人学習者の場合、日本語の描写文の構文がベトナム語に訳され、オノマトペだけの部分を回答してもらったのに対して、中国人学習者の場合、日本語の描写文の構文を中国語に訳さず、自由回答式という形で回答してもらった。しかし、中国語の回答の内訳を見ると、少数の例外<sup>29</sup>を除けば、ほとんどの回答は日本語の描写文と同じ構文で訳され、異なるのはオノマトペの部分だけであった。

では、中国人学習者はそれぞれの描写文において、どのような中国語を使って表現するか中国語の回答のバリエーションを見てみる。ベトナム語の回答には、それぞれの描写文で目立つ回答が 1 つだけであることが多かったため、目立つ回答だけを取り上げているが、中国語の回答には、1 つの回答だけが目立つ傾向にはないため、それぞれの描写文に見られるバリエーションをすべて検討した後、日本語オノマトペの使用実態と産出傾向の間に関連性があると思われるところも見ていく。

【描写文 1】「風車（かざぐるま）が風で\_\_\_\_\_回っている。」

正答は「くるくる（または「ぐるぐる」）というかざぐるまが軽く回っている様子を描写するオノマトペであるが、これと意味が対応する中国語での回答がたった 3 例しかない。中国語の回答には、「风车在咕嚕咕嚕地转。」という描写文が 2 例（C1 と C2）見られた。この「咕嚕咕嚕」の発音は、「ぐるぐる」で、正答と重なり、日本語に訳すれば（かざぐるまがぐるぐる回っている）になるが、B 欄に載せることができない。この C1 と C2 は、「ぐるぐる」「くるくる」という日本語オノマトペは知らないと回答し、調査のステップ 1 では、誤答している。つまり、この場合、C1 と C2 は日本語オノマトペの「くるくる」または「ぐるぐる」を知っていて、母語で回答する時に、その音をまねて「咕嚕咕嚕」を作った可能性はないわけである。残りの回答は、「风车在随风转动」のように（かざぐるまが風で回っている）とか「风车随着风慢慢地转动。」（かざぐるまがゆっくり回っている）のようなオノマトペなしの描写方法、あるいは、「风车呼呼的吹」（かざぐるまがふーふー回っている）のようなかざぐるまが回っている時に発する音に着目した擬音語の回答である。特に、最も回答者が多かったのは「风车呼呼的吹」（かざぐるまがふーふー回っている）で 4 例見られた。

【描写文 2】「今日は学校が早く終わって、することなかったので、学校の前を\_\_\_\_していた。」

正答は「うろうろ（または「ぶらぶら」）というオノマトペであるが、中国人学習者が出した回答は「来来回回」「走来走去」「徘徊」「徘徊逡巡」「闲逛」「溜达溜达」「来回地转」「闲

<sup>29</sup> 「ちゃんと」に該当する描写文の場合、解釈がばらばらなようである。

晃」「来回转」「转悠」「无聊地走着」「来回走」という12語で、中には、反復形を持っているものとそうでないものがあり、バリエーションが多かった。微妙なニュアンスにはもちろん違いがあると思われるが、日本語の「うろうろ」「ぶらぶら」とほぼ意味が対応している。回答者数が最も多いのが「闲逛」（4名）で、次が「来来回回」「走来走去」それぞれ3名である。

【描写文3】「昨日はお酒を飲みすぎたせいで、頭が\_\_\_\_\_する。」

学習者の回答の中で、「嗡嗡」という回答をしたのが4名でもっとも多かった。この意味は、「頭の中で音が響くような痛いさま」を表し、日本語の「がんがん」と意味が対応している。残りの語の中で、「头很疼（2例）」「头很痛（3例）」「头特别疼（2例）」（とても痛い）、「痛的不行（1例）」（痛くてたまらない）といった8例が頭痛の程度を表し、「迷迷糊糊（1例）」（ぼうっ）、「晕晕乎乎（2例）」「头晕目眩（1例）」「晕晕沉沉（1例）」「头很晕（1例）」（頭がくらくらしている）、「头剧痛（1例）」「头刺痛（1例）」（頭がずきずきしている）の語を使って表現している。

【描写文4】「難しい仕事を無事に終えて、\_\_\_\_\_一息ついた。」

正答は「ほっとため息ついた」の中で「ほっ」というオノマトペであるが、「困难的工作完成了，终于松了一口气。」の回答が6例で最も多かった。次に多かったのは「松了口气」の5例で、この2つを合わせれば全体の過半を占めている。

【描写文5】「名曲（めいきょく）を聞いていて、\_\_\_\_\_と心に来た。」

正答は「ぐっ」というオノマトペである。この描写文の場合、ステップ1で、両国の学習者の正答率は21語のオノマトペの中で最も低かったが、日本語母語話者の回答一致率が80%であるため、アニメーションの画像がわかりにくい、または例文がわかりにくいという可能性は排除できる。ベトナム人学習者が回答したベトナム語の中で、正答と重なる「cham tói trái tim（心に来た）」という回答を出した割合が37.5%であった。中国人学習者20名はそれぞれ違う表現で描写し、しかも、「ぐっ」と心に来た」と意味がばっちりに対応する表現が見当たらなかった。

【描写文6】「日本料理は油をあまり使わず、\_\_\_\_\_して体がいい。」

正答は「あっさり」というオノマトペであるが、これと対応している「清淡」という回答者数が14名で、21語の中で最も多かった。

【描写文7】「目が\_\_\_\_\_回る。」

【描写文1】と同じように、正答は「ぐるぐる」というオノマトペであるが、日本語の「ぐるぐる」と意味が対応している語で描写している学習者は4名しかない。残りは、「かざぐ

るまがずっと回っている。」のような、普通の描写をしたり、「骨碌碌」「骨碌骨碌」などのように、音に着目し描写している傾向が見られる。

【描写文 8】「彼女はかみの毛が \_\_\_\_\_ で、きれいだ。」

正答は「さらさら」であるが、これに当たるのは「柔順」という語で、回答者数が5名で最も多かった。ほかの回答は「顺滑 (3例)」「光滑 (1例)」といった「かみの毛につやがあるさま」に注目し描写したり、あるいは「飘逸 (4例)」のようなかみの毛のおしゃれである様子を表している。

【描写文 9】「{電車の中で} 若者が \_\_\_\_\_ と立って、お年寄りに席を譲 (ゆず) った。」

正答は「すっ」という「動作を素早く行われるさま」を表すオノマトペであるが、中国人学習者の回答は非常にばらばらである。この中で、「すつ」と意味が対応しているのは「喇地」という語で、2例しか見られない。

【描写文 10】「お昼は野菜 \_\_\_\_\_ のカレーを食べた。」

正答は「たっぷり」という量を表すオノマトペであるが、これと同じ意味をしている中国語での回答は4例だけで、もっとも回答が目立つのは「蔬菜咖喱饭 (8例)」「野菜カレー」という回答である。

【描写文 11】「子供は、歯磨きが \_\_\_\_\_ とできたね、とママに褒 (ほ) められて喜 (よろこ) んだ。」

この描写文は回答がばらばらであり、傾向を述べるのが難しい。最も目立つのは「自己刷牙 (4例)」「自分で歯磨きができて」という回答である。

【描写文 12】「お母さんのおなかが \_\_\_\_\_ 大きくなってきた。」

正答は「どんどん」という物事が勢いよく進行するさまを表すオノマトペであるが、中国語の回答にはこれと意味が対応する語がなく、「だんだん」に対応する回答が16例ある。その中で、もっとも目立つのは「渐渐」で7例見られた。

【描写文 13】「この子はいつも \_\_\_\_\_ している。」

正答は「にこにこ」という微笑むようすを表すオノマトペであるが、これと意味が同じである回答は「笑眯眯 (5例)」「总是笑呵呵的 (1例)」「灿烂地笑 (1例)」「笑呵呵的 (1例)」「经常微笑 (3例)」の11例で、過半数を占めている。その中で、最も目立つのは「笑眯眯 (5例)」という回答である。

【描写文 14】「最近は仕事がとても忙しくて、 \_\_\_\_\_ している。」

正答は「ばたばた」という「あわただしく物事を行うさま」を表すオノマトペであるが、これと意味が対応する中国語の回答が「手忙脚乱（4例）」「脚忙手乱（1例）」「脱不开身（1例）」「忙的团团转（1例）」「忙晕了（2例）」「不可开交（2例）」「总是连轴转（1例）」「接连不断地做（1例）」「要忙掉脑袋了（1例）」「非常忙（1例）」などで15例も見られた。その中で、最も目立つのが「手忙脚乱（4例）」（忙しくて手も足も休めずばたばたしている）という回答である。

【描写文15】「友達と話している時に、\_\_\_\_\_といいアイデアが思い浮かんだ。」

正答は「ぱっ」という「瞬間に物事が起きるさま」を表すオノマトペであるが、中国語の回答の中で最も目立つのは「突然（13例）」（急に）という回答である。

【描写文16】「ロボットの体が\_\_\_\_\_になっている。」

正答は「ばらばら」という「物事が分散しているさま」を表すオノマトペであるが、中国語ではこれと意味が対応している表現が多いようである。中国語の回答の中で、「ばらばら」と意味が対応しているのは「七零八落（3例）」「四分五裂（3例）」「支离破碎（2例）」「零散（2例）」「七零八碎（1例）」「散落（1例）」など17例も見られた。

【描写文17】「くつを\_\_\_\_\_に磨（みが）いた。」

この描写文において、日本語母語話者は全員が同じ回答を出すのに対し、中国人学習者20名がそれぞれ違う回答をしている。しかも、「ぴかぴか」と意味が対応していない回答のほうが多い。おそらく、中国語では「くつをぴかぴかにみがく」という言い方はしないためだろうと思われる。

【描写文18】「このくつはサイズが\_\_\_\_\_だ。」

正答は「ぴったり」というオノマトペであるが、これと意味が対応している回答をするのは「正好（7例）」「合适（2例）」「合脚（3例）」「刚刚好（2例）」「刚好（2例）」で16例である。その中で、もっとも目立つのは「正好（7例）」（ぴったり）という回答である。

【描写文19】「夜道を一人とぼとぼ歩いていた。\_\_\_\_\_と空を見上げると、お月様が私に笑いかけてくれ、元気が出た。」

正答は「ふ」という「はっきりした理由や意識もないままに事が起こるさま」を表すオノマトペであるが、中国語の回答の中で「ふ」と意味が対応しているのは「不经意」と「猛地」で、それぞれ1例しか見られなかった。学習者の中で最も目立つのは「突然（6例）」という回答である。

【描写文20】「道で酔（よ）っぱらった人が\_\_\_\_\_歩いている。」

正答は「ふらふら」という「体が揺れて安定しないさま」を表すオノマトペであるが、学習者の回答のうち、これと意味が対応しているのは「揺摇晃晃 (8 例)」「晃悠悠悠 (1 例)」「晃晃悠悠 (5 例)」「歪歪斜斜 (2 例)」「飘飘的走着 (1 例)」「飘乎乎的走着 (1 例)」「晃悠悠的走着 (1 例)」などで 19 例見られた。そのうち、最も目立なのが「揺摇晃晃」で 8 例見られた。

【描写文 21】「今日は寝不足で頭が\_\_\_\_\_としていて集中できない。」

正答は「ぼうつ」という「意識が正常ではなく、ぼんやりしているさま」を表すオノマトペであるが、学習者の回答の中で、これと意味が対応しているのが「很不清醒 (1 例)」「晕乎乎 (1 例)」「晕晕乎乎 (1 例)」「昏昏昏 (1 例)」「昏昏沉沉 (2 例)」「有点蒙蒙的 (1 例)」「很迷糊 (1 例)」「迷迷糊糊 (2 例)」「懵懵的 (1 例)」「很痛 (3 例)」「咚咚的响 (1 例)」「一阵阵地剧痛 (1 例)」といった 16 語である。

以上、中国人学習者による中国語での回答のバリエーションを見てきた。ベトナム人学習者によるベトナム語での回答の場合、ほぼすべての描写文において、大多数が日本語オノマトペと意味が対応しているベトナム語で描写しているのに対し、中国人学習者の回答一致率が低く、しかも、日本語オノマトペと意味が対応している中国語の回答が少なかった。このように、同じ場面の描写において、中国人学習者が使っている表現はばらばらで、回答一致率は日本語母語話者とベトナム人学習者よりもはるかに低いことがわかった。そして、中国語の回答の中で、中国語のオノマトペの割合が非常に少ないことも表 9.2 から明らかになった。日本語オノマトペと意味が対応している中国語表現の割合もベトナム語ほどではなかった。

一方、調査のステップ 1 で中国人学習者が産出した日本語オノマトペの中で、中国語の転移があると思われるものが見られた。

【描写文 4】「難しい仕事を無事に終えて、\_\_\_\_\_一息ついた。」

中国語での描写の中で、以下の 4 名が意味が似ている回答をしている。

「很难的工作顺利结束，长长的叹了一口气。」(C6)

「终于做完工作，长叹了一口气。」(C7)

「难办的工作也安然完成了，我长舒了一口气。」(C8)

「有困难的工作终于完成了，松了一口气。」(C9)

このうち、C6、C7、C8 が描写している中国語は、「難しい仕事を無事に終えて、ふーっと溜息をついた。」という日本語に訳すことができる。この 3 つの中国語の文は、ため息をすする時に発する「ふーっ」という音に着目して描写している。C9 が表している中国語の文は「難しい仕事を無事に終えて、ほっと溜息ついた。」という日本語の文に訳すことができる。この 4 人の日本語の回答を見ると、C6 と C7 が「ふう」という回答、C8 と C9 は「ふうふ

う」という回答をしているが、おそらく、C9以外の3人は、中国語の影響を受けて日本語オノマトペを産出したと思われる。

【描写文 21】「今日は寝不足で頭が\_\_\_\_\_としていて集中できない。」

調査のステップ1で、中国人学習者が産出した日本語オノマトペの中で、C11は「おもおも」という語を産出したが、この学習者の中国語で描写を見ると、「今日睡眠不足、头很沉，无法集中注意力。（今日は寝不足で頭が重（おも）くて、集中できない。）」と描写していることがわかった。この場合、おそらく、C11は中国語から影響を受けて「おもおも」の産出に至ったと思われる。

このように、未知の日本語オノマトペを産出する際に、同じような意味を表す母語と連想して、反復造語法を活用し日本語オノマトペを産出するのは双方の学習者に見られた傾向である。しかし、この傾向はベトナム人学習者のほうがずっとはっきりしている。つまり、日本語オノマトペの学習において、ベトナム人学習者のほうが強みを備えており、オノマトペをめぐる母語の転移がはっきり見られている。

### 9.3 第9章のまとめ

以上、調査のステップ1と同じアニメーション画像を用い、ベトナム人学習者と中国人学習者がそれぞれの母語で描写するデータを見てきた。それを通して、以下のことが言えるのではないかと考えられる。

同じ場面において、ベトナム人学習者は日本語母語話者と同じように、オノマトペを積極的に使って描写している（ベトナム人学習者のベトナム語の回答の中でオノマトペの割合が70.6%を占めている）。それぞれの描写文において、ベトナム人学習者の回答一致率が61%で、日本語母語話者の回答一致率が72%とさほど差がない。また、それぞれの描写文において、回答者数が最も多い回答は、日本語オノマトペと意味が似ている、または対応している語である。ベトナム人学習者のうち、新しい日本語オノマトペを覚えようとする時に、母語に訳して暗記する方法を採用する学習者の割合が63.8%ということを考えれば、ベトナム人学習者は日本語オノマトペの学習において強みを持っていることは間違いない。

これに対して、中国人学習者の回答の中で、オノマトペの割合がわずか7%で、非常に少ない。それぞれの描写文における回答一致率が26.9%しか占めておらず、ベトナム人学習者の回答一致率の半分弱しかない。学習者の母語の回答の中で、日本語オノマトペと意味が似ている、または対応している語の割合から見ると、ベトナム語は81.7%、中国語は60.7%であった。しかも、日本語オノマトペと意味が対応する語の割合だけを見ると、ベトナム語のほうがずっと多い。成人になってから外国語を学習する成人型の学習を考えれば、当該の外国語の構造・表現方法に対応する部分が多ければ多いほど学習しやすい。このことを考えれば、日本語オノマトペの学習において、ベトナム人学習者のほうが中国人学習者より有利であることが言えるのではないかと考えられる。

一方、両国の学習者が未知の日本語オノマトペを産出する際に、同じような傾向が観察され、それぞれの母語の転移が見られているが、転移の数を見れば、ベトナム人学習者のほうが転移の例がよく見られている。つまり、日本語オノマトペの学習において、ベトナム人学習者は、ベトナム語にあるオノマトペの知識と感覚を生かしており、中国人学習者より有利であると言える。

## 第10章 おわりに

本章では、第1章から第9章の内容をまとめ、その結果を踏まえ、日本語オノマトペ教育への有益な示唆を提案し、今後の課題を述べる。

### 10.1 まとめ

日本語オノマトペは日本語教育において十分に重視されておらず、学習者にとって学習・習得の難関の一つであると言われている。しかし、学習者が日本語オノマトペをどの程度使用できているかについての実証研究は限られており、しかも、それらの研究対象者は母語にオノマトペが豊富ではない中国語を母語とする中国人学習者である。第二言語学習においては母語の知識に影響を受けているため、母語にオノマトペが豊富な言語を母語とする学習者には異なる傾向が予想される。学習者のための有効な教授法を確立するためには、母語別の学習者による日本語オノマトペの使用実態を調査するとともに、それぞれの母語におけるオノマトペの使用実態とその影響を調査する必要があると思われる。

本研究はこのような背景から、母語にオノマトペが豊富な言語と母語にオノマトペが少ない言語を母語とする学習者の代表として、ベトナム人学習者と中国人学習者を調査対象者として、

- ①ベトナム人学習者と中国人学習者が日本語オノマトペとその学習に対してどのような意識を持っているか、日本語オノマトペをどのような方法で学習しているか。
- ②ベトナム人学習者と中国人学習者が日本語オノマトペをどの程度、適切に使用できているか。
- ③ベトナム人学習者と中国人学習者は該当のオノマトペがわからない場合、どのように日本語オノマトペを産出するか。
- ④ベトナム人学習者と中国人学習者がそれぞれの母語におけるオノマトペの使用実態はどうなっているか。これが日本語オノマトペの使用実態にどのように影響をしているか。

という4つの研究課題を設定し、研究を進めてきた。

これらの研究課題を解明することにより、ベトナム人学習者と中国人学習者による日本語オノマトペの使用実態が明らかになるだけでなく、それぞれの母語におけるオノマト

ペの使用実態も可視化できるようになり、日本語オノマトペの使用実態に母語の知識がどのように影響しているかということも明瞭になることが期待できる。

以下、各章の内容をまとめる。

第1章「はじめに」では、上記の4つの研究課題を設定する背景、研究課題と章立てについて述べた。日本語オノマトペは臨場感があふれ、表現効果が高く、日本人の言語生活に欠かせない要素である。日本語母語話者は、自然習得であるため、ほとんどだれでも使いこなしているが、学習者の場合、上級学習者でさえ、オノマトペを使えず、戸惑ってしまうことが多く、学習・習得の難関の一つである。理由として、「日本語オノマトペは感覚的な言葉で、理屈で割り切れないものであるため、日本語母語の環境で育たない人にとってはわかりづらい」「中国人学習者の場合、学習者の母語にオノマトペが少なく、使う習慣がない」「日本語教科書において日本語オノマトペが積極的に導入されておらず、しかも日本語教育において積極的に取り上げられていない。しかも、日本語オノマトペ辞書は、本来なら、学習の頼りとなるべきものであるが、多くの例文が文学作品からの引用で、説明がわかりづらい」などが考えられる。学習者が日本語オノマトペをどの程度使用できているかについての先行研究はあるにはあるが、その調査対象者の多くは、母語にオノマトペが豊富ではない中国語を母語とする中国人学習者である。一方、外国語の学習には、母語の知識が影響を与えていると言われている。つまり、学習者はそれぞれ母語の知識を生かし、日本語（外国語）を学習していくわけで、学習者の日本語オノマトペの習得状況を調べるには、母語にオノマトペが少ない中国語のような言語だけでなく、オノマトペが多い言語を母語とする学習者も調査対象者にする必要がある。こうした背景から、本研究では、母語にオノマトペが豊富な言語を持つベトナム人学習者と、そうではない言語を母語とする中国人学習者を対象に、上記の4つの研究課題を設定することを述べた。

第2章「日本語オノマトペの概要及び本研究の日本語オノマトペの判定基準」では、日本語オノマトペの著名な研究の成果について概観した後、本研究における日本語オノマトペの判定基準について示した。日本語オノマトペについての研究は歴史が長く、その言語学的特徴及び音象徴についての研究の蓄積は豊富である。しかし、日本語において「オノマトペ」という概念についての見解が学者の間で必ずしも一致を見ておらず、擬音語・擬態語という言い方もあれば、総称してオノマトペという言い方を採用している研究も多くある。または、より下位分類が詳細のものとして「擬音語」「擬声語」「擬態語」「擬情語」「擬容語」という分類方法もある。これらの他にも、この語群の言語学上の特徴に着目し「音象徴語」という言い方もある。本研究では、議論の便宜上、これらを総称したオノマトペという言い方を採用した。

日本語オノマトペの形態は複雑で、その分類方法も様々ある。日本語オノマトペの形態に関する分類の仕方は学者によって異なるが、基本的には1モーラと2モーラの基本形から

なる。そのうち、「XYXY」「XっYり」「XんYり」という3つの形態が日本語オノマトペのもっとも代表的な形態であると言われていることを示した。

日本語オノマトペの用法であるが、特別な語群であるため、「副詞用法」「動詞用法」「名詞用法」「形容詞・形容動詞用法」「引用用法」「文外独立用法」という多くの役割を果たしている。このうち、副詞（特に様態副詞）として働くことが多いことを指摘した。

また、日本語オノマトペを構成する要素の中で、いくつかの母音と子音は特有の意味を表している。この音象徴のルールを知っておくことによって、出会う日本語オノマトペのニュアンスをある程度感じることができると思われるため、こうした特徴を学習者に教えるべきだという声もあることを示した。

日本語オノマトペの表す意味とその形態によって「オノマトペ度」が異なっている。ある語がオノマトペであるかどうかという判定に関して、日本語母語話者の間ではある程度一致する。これはそれぞれのオノマトペの「オノマトペ度」の違いによると思われる。本研究では、便宜のため、4冊のオノマトペの辞書の中で2冊以上の辞書に記載されている語をオノマトペとして取り扱った。最終的に、正確さを期すため、日本語教育学を専攻する日本語の母語話者7名により、4名以上に認定された語をオノマトペとした。

第3章「ベトナム語オノマトペおよび中国語オノマトペの概要」では、ベトナム語と中国語のオノマトペをどのように捉えるべきか、両言語の実態に即して述べた。本研究はベトナム人と中国人による日本語オノマトペの使用実態を調査するために、ベトナム語と中国語におけるオノマトペの使用実態も調査した。その前提として、本章では、ベトナム語と中国語におけるオノマトペについて、ベトナム語と中国語におけるオノマトペの定義、形態、用法、音象徴性といった観点から概観し、次のことを示した。

ベトナム語には日本語と同様に、擬音語と擬態語の語群が数多く存在し、その定義がはっきりしており、ベトナム語の国語教育においても一つの項目として取り上げられている。ベトナム語には、「Tù láy（反復語）」という語群があるが、この反復という造語法は表現効果が高いと言われ、多くの場合、ベトナム語の擬音語・擬態語が「tù láy（反復語）」と重なっている。ベトナム語の研究の中で、擬音語・擬態語を研究対象として正面に取り上げられている研究が少なく、「Tù láy（反復語）」の反復造語法の音象徴や表現効果についての研究が盛んである。辞書に関しても、ベトナム語のオノマトペ辞書はなく、「tù láy（反復語）」の辞書が多く出版されている。

ベトナム語のオノマトペの形態であるが、基本的には1音節からなるものと2音節以上からなるものがある。2音節からなるもののうち、一つの音節が基本となり、残りの音節がその基本の音節を何らかの形で反復する。反復形の種類としては「語頭子音の反復」「音韻の反復」「語末子音の反復」がある。

ベトナム語のオノマトペの用法であるが「形容詞用法」「動詞用法」「副詞用法」「単独用法」（日本語オノマトペの「文外独立用法」と同じ）がある。

また、ベトナム語のオノマトペの場合、それを構成する母音、子音、音韻の音声的特徴とその表徴している意味が密着関連している。つまり、ベトナム語のオノマトペも日本語オノマトペと同じように、音象徴語であると考えられる。

これに対して、中国語では擬音語という概念は存在しているが、擬態語という概念は正式に取り上げられていない。しかも、その数も日本語オノマトペに比べ遥かに少ない。中国語においてオノマトペが少ない原因として、中国語の動詞は日本語の動詞より動作を細かく表すことが多く、擬態語の代わりに形容詞を用いることが多いと言われている。そして、口語では擬声語・擬態語の表現が使われているが、一旦文字化されると、漢字で表せないものがあつたり、文章語としての体裁を整えるために削られたり、他品詞に改められたりすることとも言われている。

中国語のオノマトペの形態であるが、1音節からのものと2音節からのものがある。2音節からなるものは、AA、ABB、AABB、ABAB、ACAB という反復の形を持っている。そのうち、オノマトペの形態によってある語が擬音語か擬態語か形態によって識別できるものがある。このように、言語は異なっているが、日本語、ベトナム語、中国語のオノマトペにおいて、何らかの反復形を持っている語が存在していることがわかる。つまり、反復という造語法はオノマトペの描写効果に直接貢献していると言える。

中国語オノマトペの用法であるが「独立用法」「連用修飾用法」「連体修飾用法」「述語用法」「補語用法」「特殊用法」という機能に整理することができる。

音象徴についてであるが、中国語オノマトペは日本語オノマトペのような清音と濁音の対立しているものではなく、有声音・無声音  $b \cdot p/d \cdot t/g \cdot k$  などのものがあり、二音節からなる擬声語の子音の対応において、同じようなものが選ばれる傾向があると言われている。そして、中国語オノマトペの音象徴は具体的な母音、子音、音韻により決まるのではなく、オノマトペの形態（例えば、A パターン、AA パターン、AB パターン、ABB パターンなど）によって決まる。

第4章「先行研究の概観と本研究の位置づけ」では、先行研究を概観し、先行研究の優れた面を評価しつつも、先行研究で十分に検討されてこなかった部分を本研究が補完しようという研究史上の意義について論じた。本研究は日本語学習者による日本語オノマトペの使用実態・産出実態、それぞれの母語におけるオノマトペの使用実態を明確にした上で、日本語オノマトペの教育に有益な示唆を得ることを目的としているため、先行研究として、日本語オノマトペの教育に関する研究を概観し、その知見を参考にしながら、問題点を指摘し、本研究の位置づけを合わせて示した。本研究では、日本語オノマトペの「教育」とは「学習」と「指導」の両輪からなるという考えを採用する。オノマトペ指導に関して「オノマトペ指導に関する考え方」「オノマトペ指導の現状」「指導における問題点」「基本語彙選定」「指導法の提案」といった内容の研究を概観し、オノマトペ学習に関して「学習者が困難である原因」「習得状況に関する実証研究」「学習支援・教材開発」といった内容の研究を概観した。

日本語オノマトペの指導に関する先行研究のポイントをまとめると次の通りである。日本語オノマトペは国語教育において重要な項目として取り上げられているのにもかかわらず、学習者用の日本語教科書・教材においてあまり取り上げられておらず、日本語オノマトペが日本語教育において十分に重視されていない。しかも、取り上げられる場合も、短文に区切られているため、オノマトペの意味とオノマトペが使われている場面の把握が困難である。また、オノマトペが豊富な言語を母語とする学習者に教える場合でも、日本語オノマトペと母語におけるオノマトペの意味にずれがあるため、必ずしも有効ではないということも指摘されている。このような現状において、「日本語オノマトペを日本語教育に積極的に導入すべき」という考え方と「語彙の習得にかける学習者の負担も大きいのに、数も多い上に、付随的な要素であるオノマトペを学習させる必要はない」という2つの考え方に分かれている。筆者としては、日本語オノマトペを日本語教育の早い段階から積極的に導入すべきという主張をとっている。筆者と同じ考え方で、日本語オノマトペを早い段階から導入すべきと主張している研究者の間では、「どのようなオノマトペ」を「どのように教えるか」という問いに対する答えを探ろうとする姿勢が見られる。「どのようなオノマトペ」を教えるかという問いに対し、オノマトペの「基本語彙選出」を試みる研究がいくつかある。日本語オノマトペの基本語彙選出に関する先行研究は各種ジャンルから出現頻度だけに注目し、出現頻度で上位のオノマトペを抽出するやり方が主流であったが、最近の研究は「出現頻度」とともに「親密度」も加えて抽出するようになった。日本語オノマトペを「どのように教えるか」という問いに関する先行研究では、いくつかオノマトペ指導法の提案をしているが、これらは理論だけで、実際に学習者に教え、縦断的にその効果を検討する研究はほとんど見られない。

日本語オノマトペの学習に関する先行研究をまとめると次の通りになる。日本語オノマトペは上級学習者でさえあまり適切に使用できていないのが現状である。学習者にとって学習・習得が難しく、難関の一つであるということがしばしば指摘されている。この原因として、日本語オノマトペは感覚的で理屈で割り切れないため、日本語の環境と接触していない人にとっては理解・使用が難しい、日本語教育において積極的に導入されていない、オノマトペ辞書の記述に不整備があることなどが考えられる。学習者が日本語オノマトペをどの程度使用できているかについての実証研究がここ数年登場してきているが、対象にされているのはすべてオノマトペを豊富に持たない中国語を母語とする学習者である。しかし、母語が定着してから外国語を勉強する際に、母語を頼りにしながら外国語を習得していくという成人型の学習では、母語の影響を無視することはできない。母語にオノマトペが豊富に存在し、母語にもオノマトペを頻繁に使う習慣がある学習者による日本語オノマトペの使用実態、習得状況に関して、母語にオノマトペが少ない中国人学習者とは異なる結果が予想される。

一方で、日本語オノマトペの学習支援・教材開発への取り組みが見られる。オノマトペの学習支援教材として、絵カード、フラッシュがついている動画などがあるが、これらの教

材を開発するには時間と費用がかかるため、対象にしているオノマトペが非常に少なく、しかも、簡単にアクセスできる状況とは言えない。

このように、日本語オノマトペの指導においても学習においても上記のような問題点がある。学習者の日本語オノマトペ学習効果を高めるためには、指導の改善とともに、学習者のオノマトペに関する学習意欲、母語におけるオノマトペの使用実態、日本語オノマトペの使用実態を明らかにした上で、オノマトペ学習に影響している要因を総合的に評価することが必要であると思われる。

このため、本研究では、先行研究の知見を参考にしつつ、その問題点も考慮した上で、それを解決するためのリサーチ・デザインを設計し、上述の四つの研究課題の解決を試みた。その調査結果を、第5章から第9章において詳述した。

第5章「本研究における調査の概要」では、本研究の目的に基づく調査設計とその実施概要について述べた。第4章で述べたように、「どのような日本語オノマトペ」を優先的に導入すべきかという「オノマトペの基本語語彙選定」の研究がなされているが、調査対象としている言語資料はほとんど書き言葉に属しているものである。しかし、書き言葉のジャンルにおけるオノマトペは数もバリエーションも多いため、その意味と用法を理解・使用できるのは難しいところがある。学習者の場合、日本語母語話者の日常会話に頻出するオノマトペの意味・用法を把握できれば、日本人とのコミュニケーションにすぐに役に立つと思われる。本研究の目的は学習者の日本語オノマトペ産出を検討するため、どのような日本語オノマトペを調査対象にすべきかが悩ましい。書き言葉に頻出するものと話し言葉に頻出するものの双方を調査対象にするのが理想的であるが、そうなると、調査協力者への負担が重過ぎると思われる。そこで、本研究では、書き言葉に頻出するものと話し言葉に頻出するものの重なっている部分、つまり、書き言葉においても話し言葉においても頻出するオノマトペを本研究の調査対象とした。

書き言葉に頻出するものと話し言葉に頻出するものを組み合わせ、重なっている部分を抽出した後、日本語教育を専攻している日本語母語話者に示し、取り除くべき語を選定してもらい、最終的に21語のオノマトペを調査材料としている。そして、選出した21語のオノマトペが日常会話に使われている場面と同じようにそれぞれの描写文の作例に努めた。作例の中では、オノマトペの部分が下線のブランクになっている。意味の理解に影響されないように、21描写文を再生する21シーンからなる動画を独自に制作し、研究課題にそって調査を実施した。具体的には、次の通りである。調査の「ステップ1」では、アニメーションを見て、解答用紙にある各描写文の下線のところに、アニメーション画像にふさわしいと思われるオノマトペを記入する。わからない場合は自分の知識を生かし自分なりのオノマトペを創作してもらうように指示した。これによって、学習者が日本語オノマトペをどのくらい適切に使用できているか、または、該当のオノマトペがわからない場合に創作した語にどのような傾向が見られるかを知ることができた。調査の「ステップ2」では、日本語学習歴、オノマトペ学習に対する意識、オノマトペの学習方法、学習者の母語におけるオノマトペの使用習慣などに関するアンケート調査に答えてもらった。これによって、学習者の学習背景、オノ

マトペに対する意識、オノマトペの学習方法、それぞれの母語におけるオノマトペの使用習慣などを知ることができる。調査の「ステップ3」では、同じアニメーションを用い、それぞれの母語で描写してもらった。これによって、学習者の母語におけるオノマトペの使用実態、学習者の母語に日本語オノマトペと対応している語があるかどうかを知ることができる。

調査協力者であるが、ベトナム国内の大学の日本語学部1年生、2年生、3年生の学生と日本に滞在中のベトナム人留学生（日本在住期間3年から12年）、及び中国国内の大学にいる学部3年生の中国人学習者である。そのうち、ベトナム人留学生グループは全員日本語能力試験のN1資格を有し、3年生の学習者のほとんどがN2資格を有し、2年生の学習者はほとんどがN3資格を、1年生の学習者はN3かN4資格を有する。統制群は日本語母語話者の20名であるが、統制群には調査のステップ1だけに協力してもらった。また、必要に応じて、一部の学習者に対して、フォローアップ・インタビューを実施した。

第6章「アンケート調査の結果」は研究課題1の解決につながるものであり、調査のステップ2で学習者が記入した内容に基づき、学習者の日本語オノマトペの学習意識と学習方法などについて考察した。日本語オノマトペに対する意識であるが、「日本語オノマトペ（擬音語・擬態語）という語群があることを知っていますか」という質問に対して、ベトナム人学習者全員が「はい、知っている」と答えたのに対し、同じ答えをした中国人学習者は60%であった。また、日本語オノマトペが面白いかどうか、日本語オノマトペをもっと覚えたいかどうかということについて、ベトナム人学習者と中国人学習者の間で答えが分かれ、ベトナム人学習者のほうが、中国人学習者より日本語オノマトペに対して興味を持っていることがわかった。さらに、母語で話す時でも、母語においてオノマトペを使う習慣がある学習者の割合から見ると、ベトナム人学習者のほうが中国人学習者より遥かに高いこともわかった。そして、日本人と話す時に、ベトナム人学習者のほうが、中国人学習者より日本語オノマトペを積極的に使おうとしている意欲が高いこともわかった。

今回の調査材料となっている21語のオノマトペをどこで覚えたかという質問の回答から、日本語オノマトペの学習は日本語の教科書より、「アニメ」「漫画」「歌」などといったクラスの外で学ぶことが多いように思われた。また、文章などにおいて、未知のオノマトペに出会った時の対応について聞いたところ、中国人学習者は漢字で書かれている文字をほぼ理解できているため、理解を漢字に依存し、ひらがな・カタカナで書いてあるオノマトペを軽視する傾向が観察された。

一方で、ベトナム人学習者は、日本語学習歴が長い人ほど、さらには留学経験が長い人ほど、未知のオノマトペを無視する傾向が多くなるとともに、辞書を頼りにする意識も薄れていく傾向が観察された。日本語オノマトペの学習方法については、約3分の2のベトナム人学習者は日本語オノマトペを学習する際に、母語と対応させて覚えているのに対し、中国人学習者ではこの方法を採用しているのが15%であった。つまり、中国人による日本語オノマトペの学習において母語における対応語の役割がはっきりしていないと思われる。

因みに、日本語オノマトペを学習する際に、「一緒に使われる動詞とセットで用法まで覚える」という学習方法を採用しているベトナム人学習者の割合と中国人学習者の割合はともに40%ぐらいで、ほぼ同じであった。最後に日本語オノマトペの学習に母語の知識が有利かどうかという質問に対して、「有利」と考えている中国人学習者は30%であるのに対して、ベトナム人学習者は62.5%である。このように、中国人学習者より、ベトナム人学習者のほうが、日本語オノマトペに興味を持ち、日本語を使う時も、母語で話す時も積極的にオノマトペを使用し、日本語オノマトペを学習する際に、母語の知識を有利に感じていることがわかった。

第7章「ベトナム人学習者と中国人学習者による日本語オノマトペの正答率」は研究課題2の解決につながるものであり、ベトナム人調査のステップ1の結果に基づき、ベトナム人学習者と中国人学習者がどの程度日本語オノマトペを「適切に使用できている」かについて考察した。日本語オノマトペを「適切に使用できている」かどうかを見るためにオノマトペの「正答率」の基準を設けた。本研究における日本語オノマトペの「正答率」は統制群である日本語母語話者が回答した語の中で、本研究におけるオノマトペの基準を満たしている語である。正答と認められているオノマトペのすべては筆者が意図している21語のオノマトペと重なっているわけではない。しかし、同じ問題に対して、同じオノマトペを回答した日本語母語話者の平均回答一致率が72%であり、3分の2を占めていた。つまり、同じ場面において、日本語母語話者3人のうち2人が同じオノマトペで表現している。学習者による正答率については次のようにまとめることができる。中国人学習者3年生グループの平均正答率は29%であるのに対して、ベトナム人学習者3年生グループの正答率が55.1%とかなり高いが、これはベトナム語において、日本語オノマトペの対応語が多く存在し、ベトナム人学習者が日本語オノマトペの学習において強みを持っていることの表れであろう。ベトナム人学習者だけの正答率を見ると、平均正答率が「留学生グループ」「3年生グループ」「2年生グループ」「1年生グループ」の順となっている。つまり、日本語能力が高ければ高いほど日本語オノマトペをよく使用できていることが示唆された。学習者が出した回答の中で、正答率が高いのは「どんどん」「にこにこ」「がんがん」「ぴったり」「ほっ」「あっさり」といった語であったが、これらの語は日本語教科書に取り上げられているオノマトペでもあり、使い方がはっきりしているため、学習者が十分に習得できていると考えられる。しかし、この中で、「どんどん」と「ちゃんと」は既知率が100%であるのに、正答率が思ったほど高くないのは、それがオノマトペと思われていない可能性があると考えられる。両国の学習者がほとんど正答できないのは「ぐっ」というオノマトペであったが、このオノマトペの既知率が低いという理由もあるが、日本語の特殊な表現であるために、学習者の母語ではこのような言い方が存在しないということが主な原因だと思われる。全体的に見ると、ベトナム人学習者のほうが中国人学習者より日本語オノマトペを適切に使用できていると

ということが示唆されたが、これはベトナム人学習者と中国人学習者の母語におけるオノマトペの使用実態と日本語オノマトペに対する学習意識の違いによるものと思われる。

第8章「ベトナム人学習者と中国人学習者の日本語オノマトペの産出に見られる傾向及び各母語の転移」は研究課題3の解決につながるものであり、第7章と同じ、調査のステップ1の結果について言及している。しかし、考察対象として正答以外のところに焦点を当て、正答と「無回答」以外のところに、学習者が産出した語にどのような傾向が見られるかを考察した。そして、フォローアップ・インタビューとそれぞれの母語での描写内容を参考にしながら、それぞれの母語の転移についても検討した。全体的に見ると、両国の学習者が産出した語の中で、ABAB型の語が圧倒的に多かった。これは、学習者にとって、日本語オノマトペはこのABABという反復形をしている言葉だというイメージが強いことを意味している。そして、ベトナム人学習者と中国人学習者が産出した語の中で同じような傾向が見られるが、母語の転移の現れが異なっていることがわかった。

両国の学習者が似ているという点で言えば、両者により産出された語の中で「知っている語の語基の反復」「物事の状態を擬音的に捉えて造語する」「意味の似ている日本語オノマトペとの混同」「発音が似ている日本語オノマトペとの混同」といった傾向が観察された。第3章では、日本語、ベトナム語、中国語におけるオノマトペの中で、何らかの「反復形」を持つ語が多く存在することがわかっている。つまり、学習者は「反復」という造語法について認識しているはずである。実際、学習者は、未知の日本語オノマトペを産出する際に、知っている語の語基を反復させ、自分なりのオノマトペを産出するという傾向が両国の学習者に共通して見られた。しかし、両者の異なりという点に着目すると、母語での言い方を頼りにしている姿はベトナム人学習者のほうが目立っていた。同じく「物事の状態を擬音的に捉えオノマトペを産出する」という傾向も共通して見られたが、ベトナム人学習者は母語での言い方を想定し、そのまま記述してオノマトペを産出したことがわかった。

第9章「ベトナム人学習者と中国人学習者による各母語での描写」は研究課題4の解決につながるものであり。調査のステップ3に基づき、ベトナム語と中国語での描写内容を考察した。ベトナム人学習者と中国人学習者による日本語オノマトペの使用実態と産出傾向との関連性を見るため、両国の学習者が使用しているベトナム語・中国語の中で、オノマトペがたくさん使われているか、日本語オノマトペに意味が対応している語がどのくらいあるか、それぞれの母語話者の間の回答一致率がどのくらいあるかという視点から分析を行った。

その結果、同じ場面において、ベトナム人学習者と日本語母語話者はオノマトペを積極的に使用し描写しているのに対して、中国人学習者はオノマトペをあまり使っておらず、オノマトペの代わりに、一般の動詞や形容詞を使用し描写していることがわかった。これは第3章で述べたように、中国語にはオノマトペ（特に擬態語）が少ないことと、動詞によって物

事の状態を細かく描写することができることによると思われる。回答一致率を見ると、ベトナム人学習者の回答一致率は61%で、日本語母語話者の72%に比べてさほどの差がないのに対し、中国人学習者の回答一致率は26.9%で低かった。これは、同じ場面において、日本語母語話者とベトナム語母語話者が中国語母語話者に比べ、より共通の感覚を持っていることを示唆している。最後に、学習者の回答の中で、日本語オノマトペと意味が対応している語の割合を見ると、ベトナム語は81.7%で、中国語は60.7%であった。成人型の外国語の学習には、目標言語と母語の間に対応している部分が多ければ多いほど学習に有利であると言われており、上記の結果から、日本語オノマトペの学習において、ベトナム人学習者は中国人学習者より有利であると言える。

一方、学習者が産出した語の中で、母語の転移によるものと思われる例はベトナム人学習者のほうが多かった。これは、ベトナム人の調査協力者の人数のほうが多いことも影響しているかもしれないが、日本語オノマトペの学習において、ベトナム人学習者のほうが母語の知識を生かして学習していることを意味しているのではないかとと思われる。

このように、これまで日本語オノマトペの学習・習得は日本語学習者にとって困難であるということがしばしば指摘されているが、本研究では、日本語オノマトペの使用実態と母語におけるオノマトペの使用実態に関して、ベトナム人学習者と中国人学習者の間ではかなり異なる実態が観察された。その要因として、日本語オノマトペに対する学習意識や、それぞれの母語におけるオノマトペの使用習慣、それぞれの母語における日本語オノマトペと対応している語の存在、日本語と学習者の母語の表現のずれなどが考えられる。

以上の議論を踏まえ、これからの日本語オノマトペ教育への提案として、日本語教師は以下のことをすべきではないかと考える。

- (1) 同じ物事を描写するのに、オノマトペが含まれる言い方と一般の語で描写している言い方を両方提示することによって、その表現の効果を比較させ、感じさせる。これによって、日本語オノマトペのおもしろさを感じさせ、日本語オノマトペという語群に対する興味・学習意識を高める。その結果、日本語オノマトペの学習動機も高くなるはずである。
- (2) 現在の日本語教科書には、オノマトペが積極的には導入されていないが、調査のステップ2では、学習者は教室の環境よりも「漫画」「歌」などといった教室外の環境でオノマトペを覚えていることが明らかになった。このため、授業の内容に関係したオノマトペがあれば、教師はおもしろい例文を提示し、導入することも効果的ではないかと考えられる。
- (3) 学習者が産出した語において、もっとも目立つ傾向は知っている語の語基を反復させるという反復造語法であるが、日本語オノマトペを導入する際、もし、元となる語がわかれば、それをはっきり示すことにより、オノマトペに対する印象が

深まり、理解度と記憶力を強化することができるのではないかと考える。例えば、「すべすべ」という言葉を「すべる」という動詞の意味を説明することによって、「すべすべ」の基本となる意味を「邪魔するものがない、スムーズ」であるということイメージさせることができる。

- (4) 学習者の母語に、日本語オノマトペと対応する（またはかなり似ている）言い方があれば、それを徹底的に活用し、覚えさせることも効果的であると考えられる。
- (5) 学習者の産出に、意味の近いオノマトペの混同が見られるが、日本語オノマトペを導入する際に、該当のオノマトペの基本となる意味をイメージさせ、共起する動詞と一緒に覚えさせることによって、オノマトペの用法もでき、異なる場面に出会っても、頭の中で派生的に考え、正確に理解・使用できる可能性も高まると考えられる。
- (6) 学習者の産出に、発音が近いオノマトペとの混同が見られるが、このような誤用を減少させるために、オノマトペを導入する際に、学習者の母語により発音が間違いやすい（例えば/t/と/d/、/m/と/b/など）ところに注意させ、口に出して発音の練習を数回させると効果的であると思われる。

## 10.2 今後の課題

以上、これまでに論じてきたことをまとめて示した。その上で、以下のことを今後の課題としたい。

### 【調査材料とするオノマトペについて】

今回の調査の調査材料としたのは書き言葉においても話し言葉においても頻出する 21 語の日本語オノマトペであるが、今後は日常生活における必要性も考慮し、何らかの選定基準でこの数を増やし調査を実施したいと考える。

### 【調査協力者のグループ構成と人数】

今回の調査は、オノマトペが豊富に存在する言語とオノマトペが少ない言語を母語とする学習者の代表として、ベトナム人学習者と中国人学習者に協力してもらった。ベトナム人学習者のほうは「3年生」「2年生」「1年生」という学年（日本語能力）が異なるグループと在日の留学生（留学経験のある）グループに協力してもらうことができ、これによって、日本語能力の違いと留学経験の有無によって日本語オノマトペの使用能力の違いが見られた。残念ながら、中国人学習者のほうは中国国内の大学の「3年生」にしか協力を仰ぐことができなかつたため、ベトナム人学習者グループと同じように、日本語能力の違いと留学経験の有無による日本語オノマトペの使用能力を確認することができなかつた。また、各グループの人数にもばらつきがあった。今後は、各グループの人数の均衡に考慮し、日本語能力別に、留学経験のある中国人学習者にも協力してもらい、追加調査を実施したいと考える。

一方、調査のステップ3ではそれぞれの母語で描写してもらった。日本語の描写文を気にしないように指示したが、日本語学習者であるため、多少日本語の描写への仕方に影響を受けた可能性がある。今後は、日本語学習者ではないベトナム語母語話者と中国語母語話者に調査のステップ3に協力してもらい、考察を進めていきたいと考える。

#### 【当日の日本語能力測定】

今回は残念ながら、調査協力者に対して、当日の日本語能力測定を実施できなかった。今後は追加調査を実施する際に、各被験者に対して、J-CATなどのそのときの日本語能力テストを実施することにより、被験者の日本語能力をより正確に把握したいと考える。

#### 【オノマトペ指導の効果の研究】

今後は調査材料とするオノマトペの数を増やし、それらの語の意味・用法がわかるような教材（場面設定、アニメーションなど）を開発した上で実際に指導し、縦断的にその効果を検討できればと考えている。

## 参考文献

### <辞典>

- 浅野鶴子(編)・金田一春彦解説(1978)『擬音語・擬態語辞典』角川書店
- 阿刀田稔子・星野和子(2009)『正しい意味と用法がすぐわかる 擬音語擬態語使い方辞典』第2版  
創拓社出版
- 天沼寧(編)(1974)『擬音語・擬態語辞典』東京堂出版
- 小野正弘(2007)『日本語オノマトペ辞典:擬音語擬態語 4500』小学館
- 夏征农、陈至立主编(2009)『辞海』上海辞书出版社
- 现代汉语大词典编委会(2010)『现代汉语大词典』上海辞书出版社
- 五味政信(2015)『Từ điển Việt- Nhật 学習者用ベトナム語辞典』武蔵野大学出版
- 中国社会科学院语言研究所词典编辑室编(2005)『现代汉语词典』第5版、北京:商务印书馆
- 日本語教育学会編(2005)『新版日本語教育辞典』大修館書店
- 日本語教育学会編(1990)『日本語教育ハンドブック』大修館書店
- 野口宗親(1995)『中国語擬音語辞典』東方書店
- 牧野成一・筒井通雄(1995)『日本語文法辞典』有精堂
- 松村明(編)(1995)『大辞林』第2版 三省堂
- 山口仲美(2003)『暮らしのことば 擬音・擬態語辞典』講談社
- Chang, Andrew C(ed.) 1990. A Thesaurus of Japanese Mimesis and Onomatopoeia: Usage by Categories. Tokyo: Taishukan
- Hoàng Văn Hành (1995)『Từ điển từ láy tiếng Việt』(ベトナム反復語辞典)』教育出版社
- Nguyễn Hoàng Phê(2011)『Từ điển tiếng Việt』(ベトナム語辞典)』ダナン出版社
- Nguyễn Như Ý(1998)『Đại từ điển tiếng Việt』(ベトナム広辞典)』文化情報出版社

### <論文・著書>

- 秋元美晴(2007)「日本語教育におけるオノマトペの位置づけ」『日本語学』26-7、pp.24-34、  
明治書院
- 阿刀田稔子・星野和子(1989)「日本語教材としての音象徴語」『日本語教育』68、pp.30-44、日本語  
教育学会
- 有賀千賀子(2007)「オノマトペを通じて、語彙の学習・教育について考える」『日本語学』26 - 7、  
pp.65 - 73、明治書院
- 飯田香織・玉岡賀津雄・初相娟(2012)「中国人日本語学習者の音象徴語の理解」『日中言語研究  
と日本語教育』5、pp.46 - 54、好文出版
- 庵功雄(2001)『新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える』初版、スリーエーネットワーク
- 石黒圭(2007)『よくわかる文章表現の技術V 文体編』明治書院
- 石黒圭(2008)「オノマトペとは」『国文学—特集おのまとペ』53 - 14、pp.24 - 32、学燈社
- 石黒圭(2016)「『オノマトペ』をあなどれない三つの理由」『YOMIURI ONLINE』2016年10月7

- 日、<http://www.yomiuri.co.jp/kyoiku/ichiran/20161007-OYT8T50013.html> (2018年2月10日閲覧)
- 石黒圭(2017)『形容詞を使わない大人の文章表現力』日本実業出版社
- 泉邦寿(1976)「擬声語・擬態語の特質」『日本語の語彙と表現』、pp.104 - 151、大修館書店
- 大関浩美(編)(2010)『日本語を教えるための第二言語習得論入門』くろしお出版
- 大野晋(1974)『日本語を遡る』岩波書店
- 生越まり子(1989)「日本語の擬音・擬態語教授上の問題」『日本語教育』68、pp.71 - 82、日本語教育学会
- 葛西明香(2007)「日本語教育における『擬音語・擬態語』に関する授業の実践報告」『拓殖大学日本語紀要』17、pp.183 - 190、拓殖大学国際部
- 角岡賢一(2004)「日本語オノマトペ語彙の語源について」『龍谷大学国際センター年報』13、pp.15 - 36、龍谷大学国際センター
- 金慕箴(1989)「中国における日本語の擬音語擬態語教育について」『日本語教育』68、pp.83 - 98、日本語教育学会
- 金田一春彦(1978)「擬音語・擬態語解説」浅野鶴子編『擬音語・擬態語辞典』、pp.5 - 30、角川書店
- グエンティタイントウイ(2017)「日本語オノマトペの習得におけるベトナム語母語話者の強み」『一橋大学国際教育センター紀要』8、pp.69 - 80、一橋大学国際教育センター
- グエンティタイントウイ(2018a)「中国人日本語学習者による日本語オノマトペの使用実態と産出傾向—ベトナム人日本語学習者との比較—」『一橋日本語教育研究』第6号、一橋日本語教育研究会(印刷中)
- グエンティタイントウイ(2018b)「ベトナム人日本語学習者による日本語オノマトペの使用実態と産出傾向」『日本語／日本語教育研究』第9号、ココ出版(印刷中)
- 小池清治・河原修一(2005)『語彙探究法』朝倉書店
- 獅々見真由香(2016)「日本語の会話におけるオノマトペの基本語彙選定-『BTSによる多言語話し言葉コーパス』と『BTSJによる日本語話し言葉コーパス』を用いて」『日本語教育』165、pp.73 - 88、日本語教育学会
- 杉浦正利・岩崎良美(2003)「日本語学習者のための擬音語・擬態語学習用マルチメディア CALL教材の改善に向けて」『国際開発研究フォーラム』23、pp.1 - 20 名古屋大学大学院国際開発研究科
- 鈴木和子(1988)「象声詞のタイプと音声描写特長」『駒澤大学論集』27、pp.121 - 135、駒澤大学
- 砂岡和子(1990)「現代中国語のオノマトペ」『学習院大学言語共同研究所紀要』13、pp.83 - 96、学習院大学人文科学研究所
- 瀬戸口律子(1982)「日中両語における擬音語・擬態語について」『大東文化大学紀要人文科学』20、pp.81 - 97、大東文化大学
- 瀬戸口律子(1984)「擬音語・擬態語表現(日本語—中国語)について」『大東文化大学紀要人文科学』22、pp.1 - 11、大東文化大学

- 曹金波(2016)『日本語教育におけるオノマトペの研究 —その学習内容と指導プロセスの構築を中心に—』城西国際大学博士学位論文
- 玉村文郎(1989)「日本語の音象徴の特徴とその教育」『日本語教育』68、pp.1 - 11、日本語教育学会
- 田守育啓(2002)『オノマトペ 擬音・擬態語を楽しむ』岩波書店
- 田守育啓・ローレンススコウラップ(1999)『オノマトペ—形態と意味—』くろしお出版
- 張新力(2010)「日本語オノマトペの中国語訳の種類(社説・評論編)」『言語と文化』23、pp.35 - 54、愛知大学語学教育研究室
- 張麗群(1989)「中国人から見た日本語の擬音語と擬態語」『日本語教育』68、pp.128 - 130、日本語教育学会
- 陳志文(2007)「日本語教育におけるオノマトペの提出順序についての一提案—2005年現代雑誌200万字言語調査語彙表の考察から—」『2007年度財団法人交流協会日台交流センター日台研究支援報告書』、pp.1 - 17、財団法人交流協会
- 中石ゆうこ、佐治伸郎、今井むつみ、酒井弘(2011)「中国語を母語とする学習者は日本語のオノマトペをどの程度利用できるのか:アニメーションを用いた産出実験を中心として」『中国語話者のための日本語教育研究』、pp.42 - 58、日中言語文化出版社
- 中川正之(1997)「漢語の語形成」『日本語と中国語の対照研究論文集』、pp. 361-376、くろしお出版
- 西村由美(2009)「対話コーパスから見た日本語母語話者と学習者のオノマトペ使用の特徴—日本語教育におけるオノマトペ指導に向けての基礎的研究—」『言語コミュニケーション文化』、pp.97 - 111、関西学院大学大学院言語コミュニケーション文化学会
- 日本語と中国語対照研究会編(1978)『日本語・中国語対応表現用例集:2』、日本語と中国語対照研究会
- 野口宗親(1977)「中国語擬声語の特質について」『熊本大学教育学部紀要 人文科学』26、pp.15 - 24、熊本大学
- 野間秀樹(1998)「もっともオノマトペが豊富な語(特集 KOTOBA のオリンピック—19 競技による『ことばの祭典』)」『言語』27 - 5、pp.30 - 34、大修館書店
- 野間秀樹(2001)「オノマトペと音象徴」『言語』(特集 楽しいオノマトペの世界--擬音語・擬態語の質感を味わう)30 - 9、pp.12 - 18、大修館書店
- 羽佐田理恵(2005)「副詞の視点から見た感情を表す音象徴語—その分析過程から導かれた問題点への取り組み—」『副詞的表現をめぐる一対象研究』、pp.175 - 211、ひつじ書房
- 彭飛(2007)「ノンネティブから見た日本語のオノマトペの特徴」『日本語学』26 - 7、pp.48 - 56 明治書院
- 三上京子(2003)「上級教材に見られるオノマトペ—統語的特徴の分析と指導の観点—」『早稲田大学日本語教育研究』、pp.193 - 209、早稲田大学
- 三上京子(2007a)「日本語教材とオノマトペ」『日本語学』26 - 7、pp.36 - 46、明治書院

- 三上京子(2007b)『日本語オノマトペとその教育』早稲田大学大学院日本語教育研究科博士学位論文
- 吉永尚(2011)「中国語母語話者における心身表現上の母語干渉について」『園田学園女子大学論文集』45、pp.167 - 180、園田学園女子大学
- 吉永尚(2017)「心身の状況を表す擬態語の習得についての考察-中国語母語話者の作文データをもとに」『園田学園女子大学論文集』51、pp.93 - 103、園田学園女子大学
- 羅瓊瑜・杉浦正利(2001)「擬音語・擬態語のハイパーメディア教材の開発とその効果」『国際開発研究フォーラム』17、pp.29 - 37、名古屋大学大学院国際開発研究科
- 渡邊裕子(1997)「日本語教育におけるオノマトペの扱いについての一考察」『学校教育学研究』9、pp.23 - 31、兵庫教育大学 学校教育研究センター
- Đỗ Hữu Châu (1999)『Các bình diện của từ và từ tiếng Việt(語の各側面及びベトナム語)』ハノイ国家大学出版
- Hamano, Shooko Saito.1986. The Sound-Symbolic system of Japanese. PhD Thesis. Florida: University of Florida.
- Nguyễn Khắc Phi(編)(2014)『Ngữ văn lớp 8(中学校3年生の国語)』tập 1(第1冊), Nhà xuất bản giáo dục 教育出版社
- Hoàng Anh Thi (2005)「Về từ tượng thanh tượng hình trong tiếng Nhật(日本語の擬音語擬態語について)」『Tập chí Ngôn ngữ 言語学会誌』2005 - 8、pp.51 - 60、ベトナム言語研究所
- Nguyen Thi Thanh Thuy(2012)「初級日本語教育に取り入れるべきの擬音語擬態語の提案」『VNU Journal of Science, Foreign Languages』28、pp.287 - 293、ベトナム国家大学ハノイ校出版